第３章　調査の成果

第１節　地形と土層序（第３図）

今回の調査対象地の現地表面は西端のＡ地区で標高約11ｍ，東端のＧ３地区で標高約９ｍをはかり，東西方向で約２ｍの比高をもつ。西端から東端は約700ｍの距離を隔てており，巨視的にみれば調査対象地東端から東方へ約800ｍの位置を流れる古川にむかって緩やかに傾斜している地形である。調査対象地の中をながめると現地形でも若干の微起伏を認めることができ，この微起伏は埋没地形に起因するものであり，調査の結果からも埋没地形の起伏とほぼ一致することが確認できている。

調査対象地のほぼ中央のＤ３・Ｅ１地区の部分には自然河川が埋没しており，現地形でも一段低くなった大きな凹地がみられ，さらに周辺の地割りにも痕跡を残している。調査対象地はこの自然河川を境として大きく東西２つの微高地にわかれる。さらに西側の微高地についてはＣ地区に不安定な低湿地であったことを示す幅の広い緩やかな凹地が存在しており，この低湿地を境として２つに分けることができる。この３つの微高地には西から順に番号を付け，それぞれ第１微高地，第２微高地，第３微高地とし，以下この呼称を使用することとする。調査区との対応はＡ・Ｂ地区西半が第１微高地，Ｂ地区東半・Ｃ地区が低湿地，Ｄ１・２地区が第２微高地，Ｄ３・Ｅ１地区が自然河川，Ｅ２・Ｆ・Ｇ地区が第３微高地となる。地理的な地形区分からいえば，第２微高地は自然河川によって形成された自然堤防，低湿地は自然堤防の後方に広がる後背湿地となる。

地表面から地山までの基本的な層序は第１・第３微高地部分では３層で，上から第Ⅰ層暗灰色粘質土（現在の耕作土）・第Ⅱ層黄褐色粘質土（床土）・第Ⅲ層黄色粘土（地山）の順で堆積している。部分的に第Ⅱ層と第Ⅲ層の間に，わずかに遺物を含んだ灰褐色混細砂粘質土の包含層が堆積している。遺構は第Ⅲ層上面において検出している。各調査区で第Ⅲ層に下層確認のトレンチを設定して調査したが，遺物はまったく出土していない。第２微高地部分でも同様に第Ⅰ層・第Ⅱ層・第Ⅲ層の順で堆積しているが，第Ⅲ層に直径10～20cm程度の亜角礫・円礫が混在する。遺構を検出しているのは第Ⅲ層上面である。低湿地部分の層序は第Ⅱ層と第Ⅲ層の間に淡褐色～暗褐色混砂粘質土が堆積している。自然河川部分の層序については「第３章　調査の成果」の遺構・遺物のところで触れる。

遺構は第Ⅲ層上面で弥生時代～中世までのすべての遺構を検出しており，土層の堆積状況とあわせて後世の土地利用に伴う削平がかなり及んでいるものと推定される。

第２節　遺構・遺物

林・坊城遺跡では縄文時代晩期から中世にかけての遺構・遺物を検出している。

縄文時代晩期の遺構は自然河川のみであるが，多数の凸帯文土器とともに，木製農耕具が出土している。弥生時代後期の遺構は「円形周溝墓」と思われる周溝状遺構を検出している。また，古代・中世の掘立柱建物跡を検出している。全体に後世の削平がおよんでいるため，遺構の遺存状況は悪い。

以下，各時期の遺構・遺物について説明する。

１．縄文時代晩期の遺構・遺物

ＳＲ01（第16～93図）……縄文時代晩期～古墳時代

本遺跡のほぼ中央部分に位置するＤ３・Ｅ１地区にまたがって，自然河川（ＳＲ01）を検出した。第２微高地と第３微高地の間を流下するこの自然河川は，幅74～88ｍという広大な河川域を有しており，その内部で２本の流路を検出した。この自然河川の中央部には市道が存在しているため，その部分の発掘調査は行なっておらず，検出した流路以外にもまだ流路が存在する可能性もある。２本の流路のうちＤ３地区で検出した西側の流路をＳＲ01流路Ａ，Ｅ１地区で検出した東側の流路をＳＲ01流路Ｂと呼称し，以下の説明はこの呼称を使用することにする。

ＳＲ01流路Ａ（第17～84図）

流路Ａは，第２微高地の東側の縁辺部を南西から北東に流下するものである。幅約4.0～7.5ｍ，深さは最深部で1.2ｍをはかる。埋土は大きく４つに分けることができる。以下，層位についての説明を行なう。

上層……茶褐色粘質土

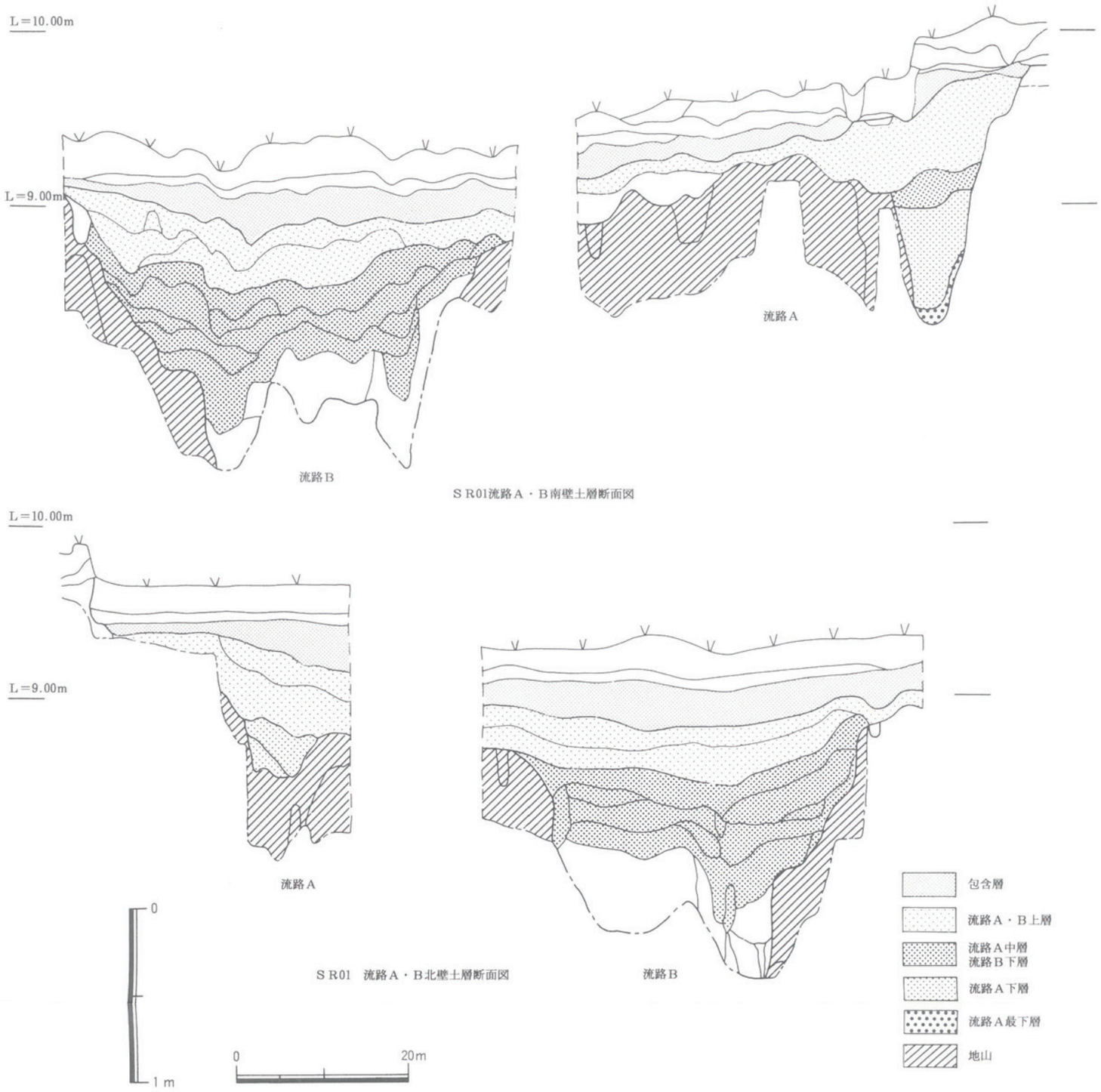
中層……黄褐色細砂・砂質土

下層……黒色粘土

最下層……黒色混砂粘質土

・最下層　流路Ａの基盤層である淡青灰色細砂の直上に位置する。流路Ａ南端で厚さ約７㎝をはかり，北に向うほど厚さを減じて途中でほぼ消滅している。縄文土器・石器・少量の自然遺物を含んでいる。所属時期は下層と同様に縄文時代晩期末葉と考えられる。

・下層　検出した流路Ａの南端で厚さ約60㎝をはかり，北へ向うほど厚さを減じて北端では厚さ約20㎝となる。部分的に黒色細砂・黒褐色細砂などをラミナ状に含んでいる。マンガン粒・鉄分の沈着がみられる。多量の縄文土器・石器・木器などを含んでいる。流木・植物遺存体などの自



第16図　ＳＲ01土層断面図（南北壁）

第17図　ＳＲ01流路Ａ遺物出土状況平面図Ａ

第18図　ＳＲ01流路Ａ遺物出土状況平面図Ｂ

然遺物の集積残存が顕著である。所属時期は縄文時代晩期末葉と考えられる。

・中層　厚さ約25cmをはかり，小亜角礫が混在する。鉄分の沈着が著しい。縄文土器・弥生前期土器・石器などを含んでいる。所属時期は弥生時代前期を中心とした時期が考えられる。

・上層　Ｄ３･Ｅ１地区にまたがって自然河川全体を覆うように分布する。Ｄ３地区で厚さ約10～40cmをはかる。弥生後期土器・古式土師器・須恵器・石器などを含んでいる。所属時期は弥生時代終末から古墳時代を中心とした時期が考えられる。

この自然河川流路Ａからは土器をはじめ多量の遺物が出土している。（第17・18図）遺物は大別した４つの層（最下層・下層・中層・上層）および包含層の順で，まとめて述べていく。

ＳＲ01流路Ａ最下層

１～59は最下層から出土したものである。（第19～24図）

１～28は深鉢，29～47は浅鉢，52～59は石器である。

１は縄文時代後期の深鉢の口縁部で，彦崎ＫＩ式と考えられる。

２は深鉢の肩部で，外面に連続する刺突文をめぐらせている。

３～27は口縁部に刻目凸帯文をめぐらせた深鉢である。破片が多く全体の器形がわかるものは少ないが体部に屈曲をもつもの（以下，屈曲型と呼称する）と屈曲をもたないもの（以下，砲弾型と呼称する）の２つの器形が認められる。また，口縁端部の形状・端部の刻目の有無・刻目凸帯を貼り付ける位置・刻目の形状などの組合せによって豊富なバリエーションをもつ。３は砲弾型の器形をもつものと考えられ，外面には炭化物が付着している。４は器高が低く，深鉢とするよりも刻目凸帯文を有した鉢である可能性が強い。13は口縁端部内面に沈線を１条施す。15は頸部にヘラ描き沈線文をもつ。

28は刻目凸帯の破片であるが，深鉢の胴部凸帯の可能性がある。

29～47は浅鉢である。

29・30は口縁部の内面を肥厚させ，内外面に丁寧なミガキを施した浅鉢である。29の口縁部内面には赤色顔料の痕跡が残る。

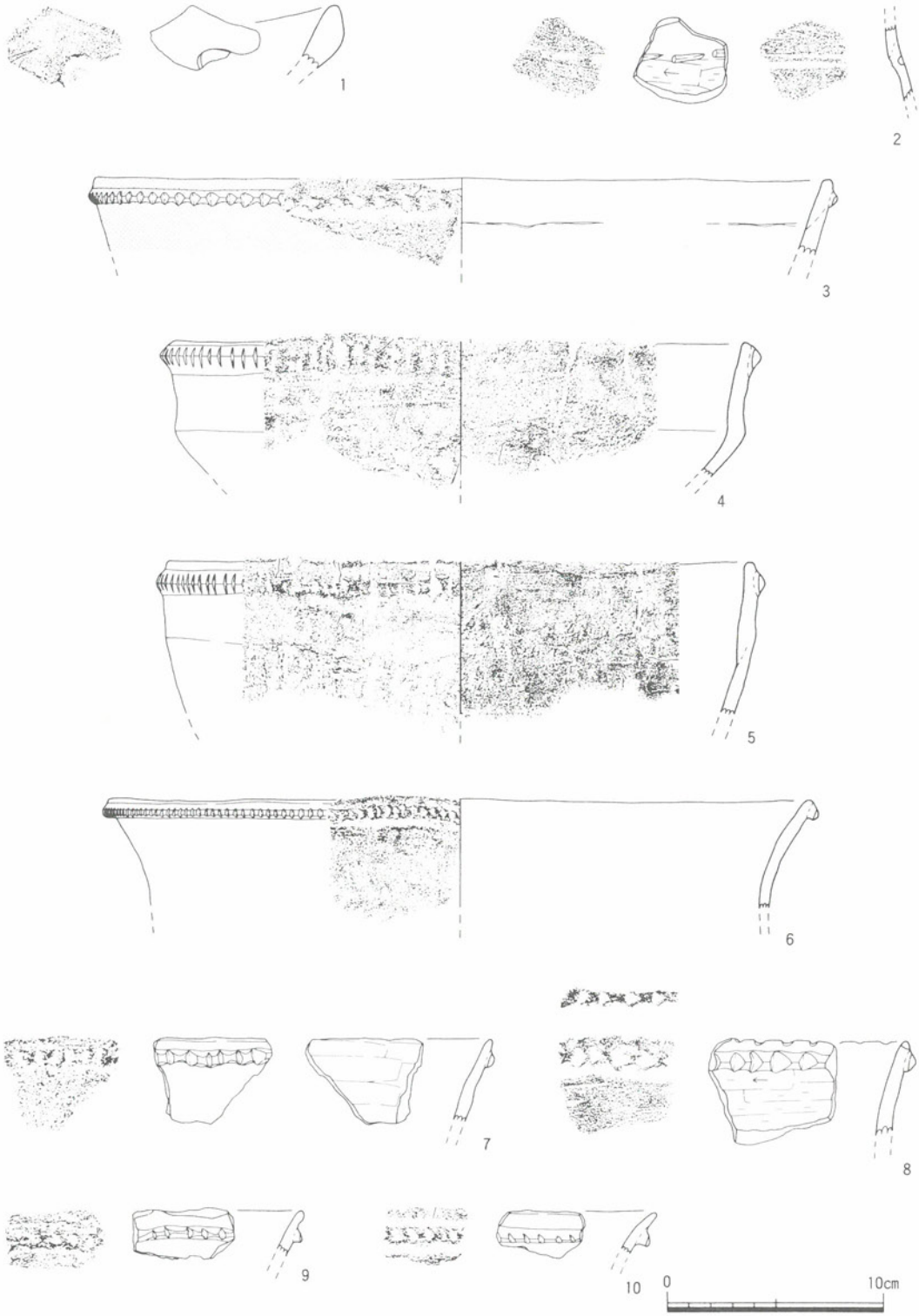
31・33は外反する頸部が短く屈曲するタイプで，口縁部内面と屈曲部内面にそれぞれ沈線を施す。内面は丁寧にミガキを施すが，外面の屈曲部以下は粗い擦過を施している。波状口縁の可能性がある。38はくの字に屈曲する長い頸部をもつ浅鉢の体部である。屈曲部外面には３条の沈線を施す。内外面は丁寧なミガキで仕上げられている。

39～46は椀・皿状を呈する浅鉢である。口縁部内面に沈線をもつもの（39～43）ともたないもの（44～46）がみられる。44は焼成前の穿孔がある。

47は内傾する長い頸部にわずかに外へ開く口縁部をもつ浅鉢である。内外面ともに丁寧に調整が施されており，壺の可能性もある。

第５表　ＳＲ01流路Ａ最下層出土遺物①観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量（cm）	調整 外面	調整 内面	凸帯 断面形	凸帯 形状	凸帯 位置	端部形	端部刻	内面沈	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	残存度
1	68	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	——	—	—	—	—	—	彦崎Ｋ１式	淡灰褐	淡灰褐	3m以下の砂粒	破片
2	68	深鉢	——	ナデ・擦過	ナデ	——	—	—	—	—	—	屈曲部　刺突文	淡茶褐	黒	1m以下の砂粒	破片
3	68	深鉢	（33.1）	ナデ・ナデ？	擦過のちナデ	三角	押	0.6	面	—	—	（外）炭化物付着	黒	暗茶褐	1～3m程度の砂粒	破片
4	68	深鉢	（26.0）	擦ナデ・擦過のちナデ・擦過	ナデ風擦過	三角	刺	0.1	丸	—	—	頸部の張は調整の為い	白褐	黒褐～茶褐	1～3m程度の砂粒	1／6
5	68	深鉢	（26.8）	擦ナデ・擦過のちナデ・擦過	粗いミガキ風擦過	三角	刺	0.2	面	—	—		黒	黒	1m程度の砂粒	1／4
6	68	深鉢	（32.2）	ナデ	ナデ	下三角	軽	0.1	面	—	—		黒～黒褐	黒～黒褐	2m以下の砂粒多い	1／8
7	68	深鉢	——	剥離のため不明	擦過	台形	押	0.4	面	—	—	磨滅・剥離	濁茶褐	濁茶褐	3m以下の砂粒	破片
8	68	深鉢	——	擦過	ナデ	三角	押	0.4	丸	○	—		濁白褐	濁白褐	1m以下の砂粒	破片
9	—	深鉢	——	ナデ・擦過	ナデ・擦過	下三角	軽	0.7	丸	—	—		淡褐	淡褐	1m以下の砂粒	破片
10	69	深鉢	——	ナデ	ナデ	下三角	軽	0.8	尖	—	—		濁灰褐	濁灰褐	3m以下の砂粒	破片



第19図　ＳＲ01流路Ａ最下層出土遺物①

48～50は浅鉢の底部と考えられる。いずれも平底である。

51は容器形をした異形土器である。外面にはヘラ描沈線で模様を描いている。口縁部は段を有しており盒子状を呈しているが，蓋の有無はわからない。底部にもヘラ描沈線文様が施されているが，磨滅が進んでいる。

52～59は石器である。

52は石錐である。片方の面に擦痕が明瞭に残っており，破損した石斧を転用して作られた可能性がある。

53は楔形石器である。

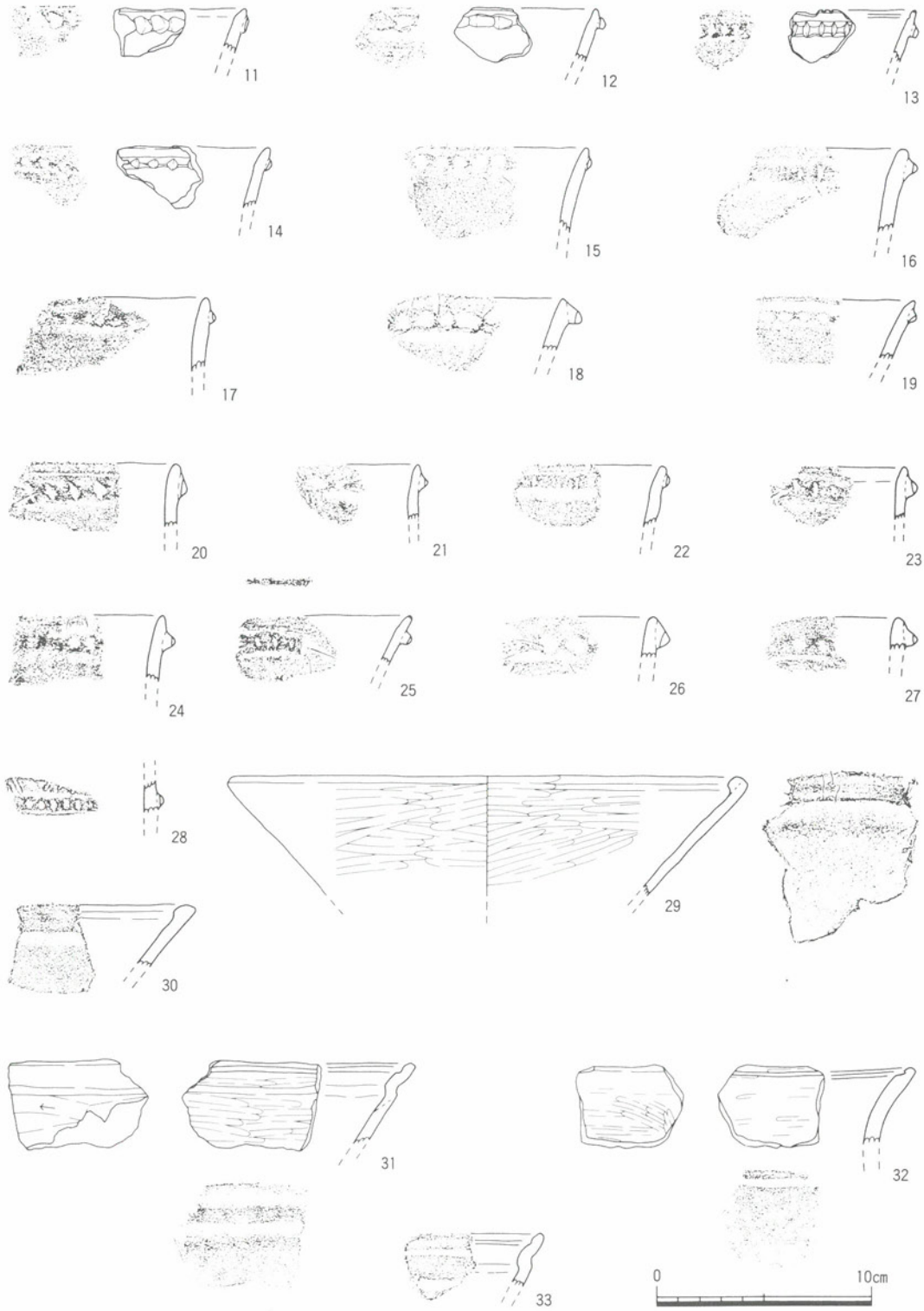
54～58は打製石斧である。54の刃部には擦痕が明瞭に残っている。55は基部・刃部を欠損している。両面に自然面が残る。片面の両端に若干の磨滅がみられる。56は刃部のみの破片であるが片面に擦痕が明瞭に残る。刃先は使用によってつぶれている。

59は磨石である。

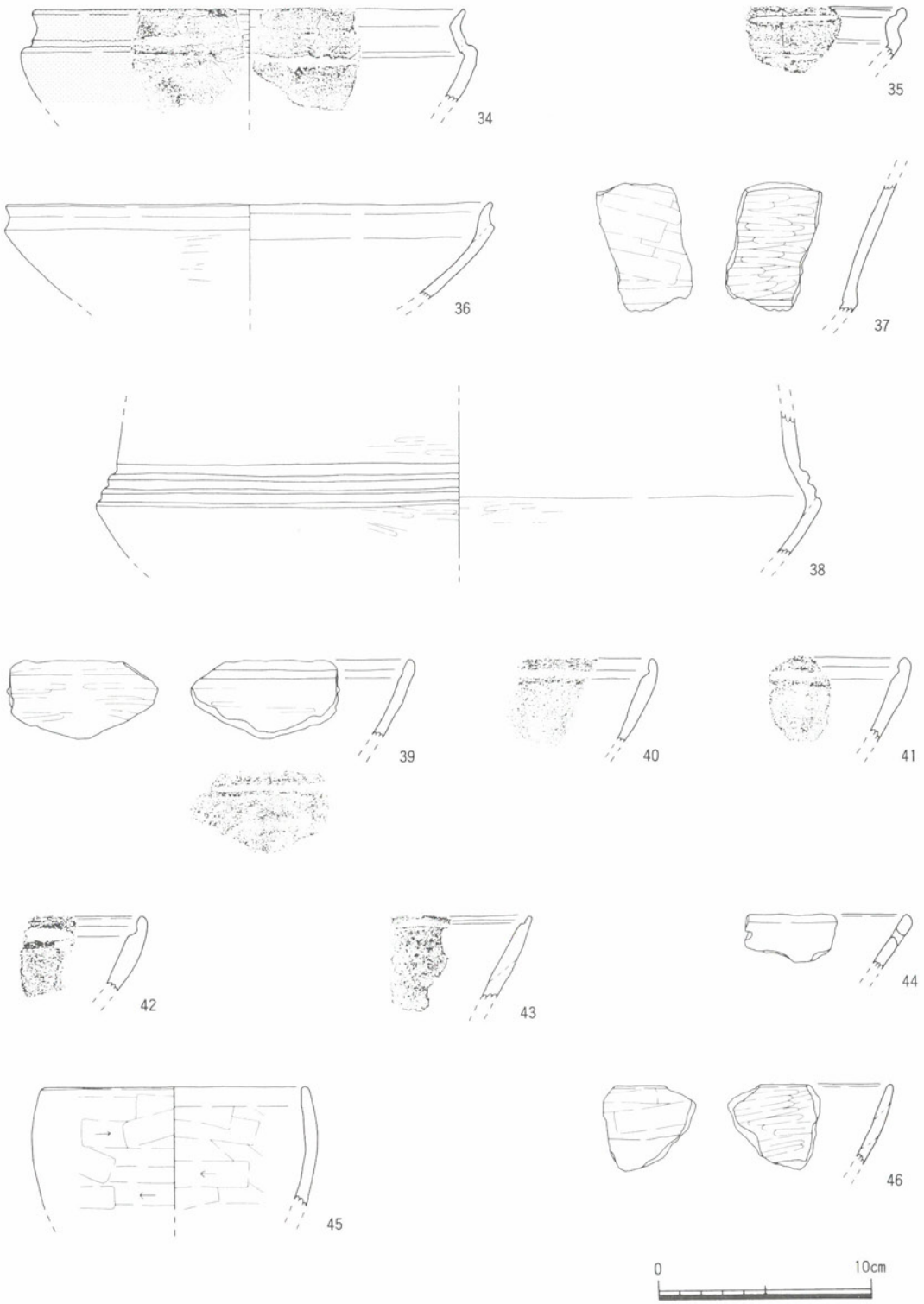
第６表　ＳＲ01流路Ａ最下層出土遺物②観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm)	調整 外面	調整 内面	凸帯 断面形	凸帯 施文	凸帯 位置	端部形	端部刻	内面沈	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	残存度
11	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	台形	押	0.3	尖	－	－		淡黒褐	淡黒褐	1m以下の砂粒	破片
12	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	台形	押	0.3	面	－	－		濁茶褐	濁茶褐	3m以下の砂粒	破片
13	69	深鉢	——	ナデ	ナデ	下三角	刺	0.5	面	○	○	内面沈線１条	濁灰茶褐	濁灰茶褐	3m以下の砂粒	破片
14	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	三角	軽	0.4	尖	－	－		濁茶褐	暗茶褐	2m以下の砂粒	破片
15	69	深鉢	——	ナデ	ナデ	三角	押	0.4	丸	－	－	頸部に文様	淡灰褐	淡灰褐	4m以下の砂粒	破片
16	—	深鉢	——	剥離のため不明	剥離のため不明	三角	軽	0.3	丸	－	－		茶褐	淡茶褐	5m以下の砂粒	破片
17	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	三角	軽	0.5	丸	－	－		淡黄褐	淡黄褐	2m以下の砂粒	破片
18	69	深鉢	——	ナデ	ナデ	下三角	押	0.1	尖	－	－		淡褐～黒	淡褐～黒	2m以下の砂粒	破片
19	69	深鉢	——	擦過のちナデ	ナデ？	三角	軽	0.3	尖	－	－		濁～淡黒	黒	1m程度の砂粒	破片
20	69	深鉢	——	ナデ	ナデ	三角	押	0.3	丸	－	－	端部は尖り気味	濁褐	暗茶褐	3m以下の砂粒	破片
21	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	三角	軽	0.4	尖	－	－		濁黄褐	濁黄褐	2m以下の砂粒	破片
22	—	深鉢	——	ナデ・弱いナデ・ナデ	ナデ・ナデ調整	台形	軽	0.2	丸	－	－		濁褐	濁黄褐	3m以下の砂粒	破片
23	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	三角	刺	0.4	尖	－	－	(外)炭化物付着	茶褐	淡茶褐	3m以下の砂粒	破片
24	—	深鉢	——	不明	不明	三角	軽	0.6	尖	－	－	(内)黒斑	淡褐	淡褐	1m以下の砂粒	破片
25	—	深鉢	——	ナデ	擦過	蒲鉾	軽	0.6	丸	○	－		淡茶褐	暗茶褐	2m以下の砂粒	破片
26	—	深鉢	——	ナデ？	ナデ？	三角	押	0.1	尖	－	－		淡褐	暗褐	2m以下の砂粒	破片
27	—	深鉢	——	不明	不明	三角	軽	0.3	尖	－	－		淡褐	淡褐	1m以下の砂粒	破片
28	69	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	三角	押	－	－	－	－	胴部凸帯	暗褐	濁褐	2m以下の砂粒	破片

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	調整 外面	調整 内面	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	残存度
29	69	縄文 浅鉢	(23.0)	——	——	横方向のミガキ	横方向のミガキ	(内)口縁部に赤彩の痕跡・口縁端部肥厚	濁褐	黒	3m以下の砂粒	1／12
30	69	縄文 浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	(内)口縁端部肥厚	淡茶灰	茶灰	2m以下の砂粒	破片
31	69	縄文 浅鉢	——	——	——	ナデ・擦過	横方向のミガキ	(内)沈線1条　赤彩口縁の可能性	暗灰茶褐	暗灰褐	2m以下の砂粒	破片
32	69	縄文 浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	(内)沈線1条　赤彩口縁の可能性	黒褐	黒褐	0.5m以下の砂粒	破片
33	—	縄文 浅鉢	——	——	——	ナデ・ケズリ風擦過	ナデ	(内)沈線1条　黒色顔料塗	濁灰褐	暗茶褐	1m以下の砂粒	破片



第20図　ＳＲ01流路Ａ最下層出土遺物②



第21図　ＳＲ01流路Ａ最下層出土遺物③

第7表　ＳＲ01流路Ａ最下層出土遺物③観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm)			調整		その他	色調		胎土	残存度
			口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
34	70	縄文　浅鉢	(20.0)	——	——	ミガキ・軽い擦過	ナデ	(外)屈曲部に沈線1条	黒褐	暗茶褐	4mm以下の砂粒	1／12
35	70	縄文　浅鉢	——	——	——	ナデ・擦過	ミガキ	(内)沈線1条	淡黒褐	淡黒褐	2mm以下の砂粒	破片
36	70	縄文　浅鉢	(22.0)	——	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明		暗茶褐	淡黒褐	2mm以下の砂粒	1／12
37	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ風擦過・ナデ	横方向のミガキ	屈曲部（内)沈線1条	淡黄褐	黒褐	1mm以下の砂粒	破片
38	71	縄文　浅鉢	——	——	——	横方向のミガキ	横方向のミガキ	屈曲部（外)沈線3条	黒～黒褐	淡黒褐	1mm以下の砂粒 [illegible]	1／8
39	71	縄文　浅鉢	——	——	——	横方向のミガキ	横方向のミガキ	(内)沈線1条	黒褐	黒褐	1mm以下の砂粒少し	破片
40	—	縄文　浅鉢	——	——	——	磨滅・剥離で不明	磨滅・剥離で不明	(内)沈線1条	濁茶灰	濁茶灰	2mm以下の砂粒多い	破片
41	71	縄文　浅鉢	——	——	——	剥離のため不明	ミガキ	(内)沈線1条	暗茶褐	暗茶褐	3mm以下の砂粒	破片
42	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ？・剥離	ナデ・ミガキ？	(内)沈線1条	暗茶褐	暗茶褐	3mm以下の砂粒	破片
43	—	縄文　浅鉢	——	——	——	擦過	ナデ	(内)沈線1条	淡黒茶褐	淡黒褐	2mm以下の砂粒	破片
44	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ・磨滅	ナデ	焼成前の穿孔	暗茶褐	暗茶褐	1mm以下の砂粒	破片
45	71	縄文　浅鉢	(12.0)	——	——	ナデ・擦過	ナデ・擦過		暗茶褐	濁橙褐	2mm以下の砂粒	1／8
46	—	縄文　浅鉢	——	——	——	擦過のちナデ	横方向のミガキ		濁灰褐	暗灰茶褐	2mm以下の砂粒	破片

第8表　ＳＲ01流路Ａ最下層出土遺物④観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm)			調整		その他	色調		胎土	残存度
			口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
47	70	縄文　浅鉢	(23.4)	——	——	ナデ	横方向のミガキ	(内)沈線1条(外)沈線1条・炭化物付着 浅鉢[illegible]	黒	淡黒褐	3mm以下の砂粒少し	1／10
48	70	縄文　底部	——	10.0	——	指押さえのち擦過 (底)擦過	磨滅のため不明	浅鉢・平底	淡黄褐	淡黄褐	2mm以下の砂粒	1／4
49	—	縄文　底部	——	(7.0)	——	指押さえ・ミガキ (底)擦過	ミガキ	浅鉢か壺？・平底	淡橙褐	淡灰茶褐	2mm以下の砂粒	1／4
50	70	縄文　底部	——	6.8	——	擦過？(底)擦過？	剥離（ナデ？）	浅鉢・平底	濁灰褐	濁灰褐	2mm以下の砂粒	完存

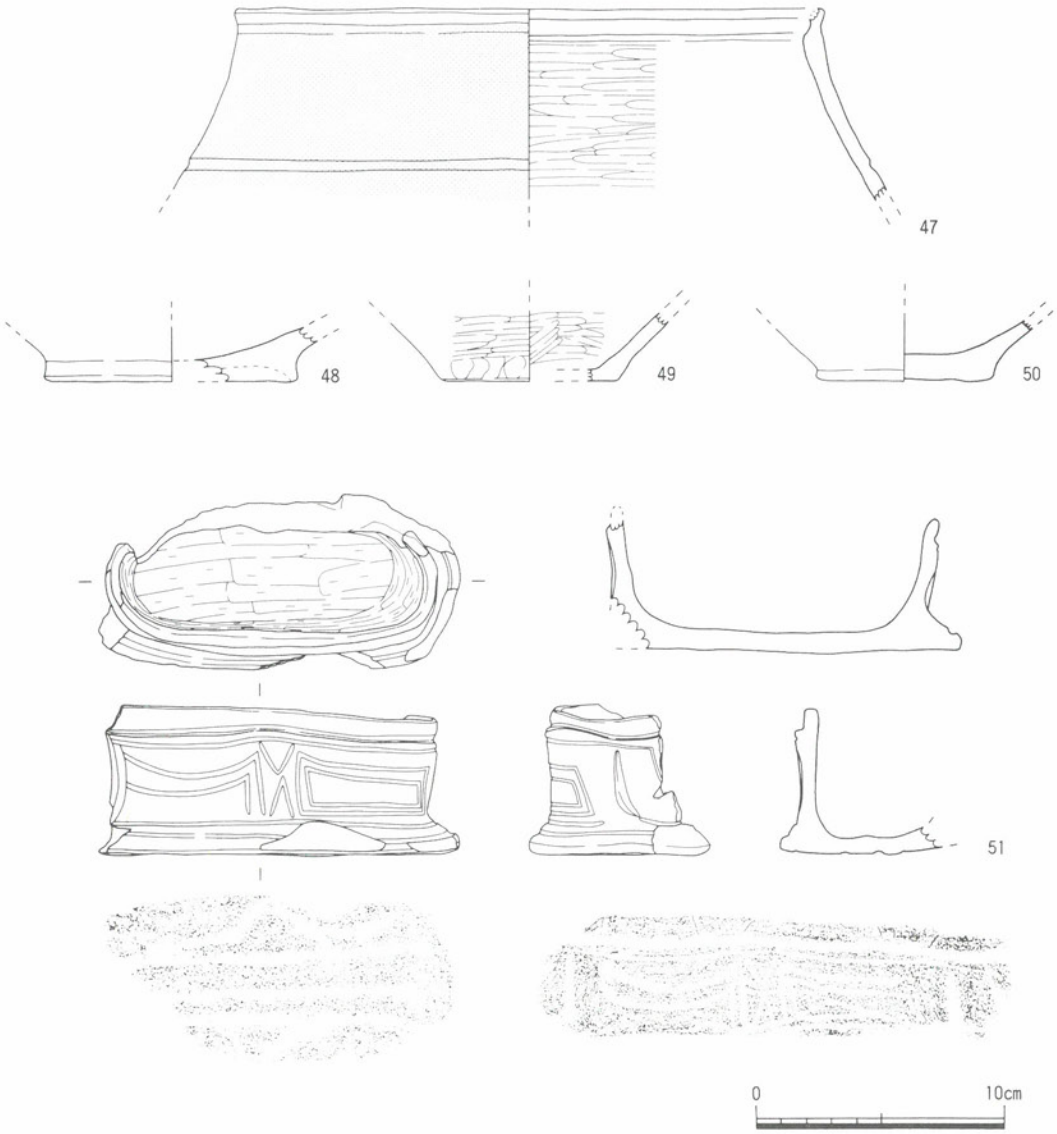
遺物番号	写真図版	器種	法量(cm)			調整		その他	色調		胎土	残存度
			口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
51	72	獸巽形土器	12.5×4.5以上	14.0×6.7以上	6.1	ナデ？	擦過	(外・底)ヘラ描沈線文	濁褐	濁褐	2mm以下の砂粒	2／3

第9表　ＳＲ01流路Ａ最下層出土遺物⑤観察表

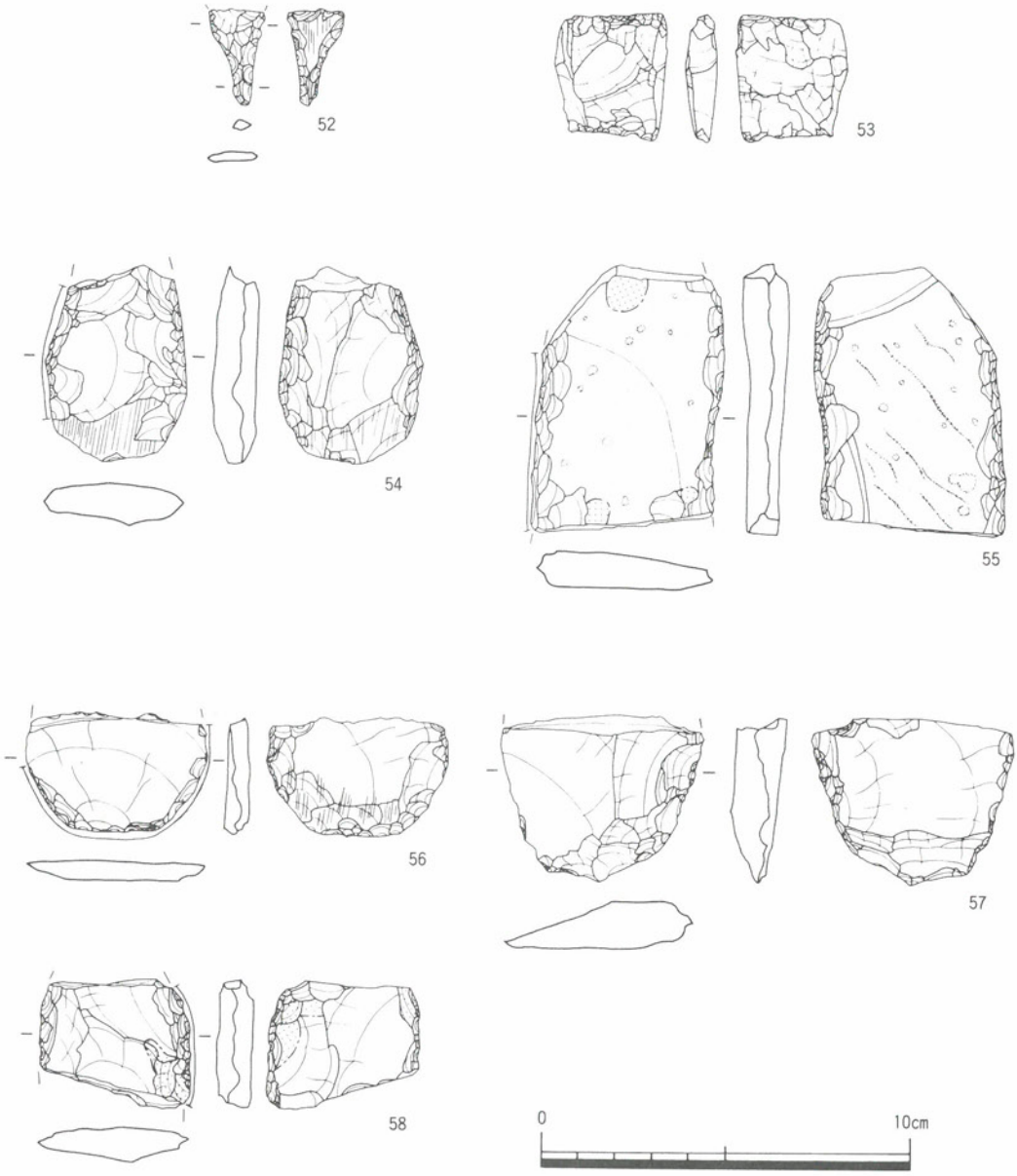
遺物番号	写真図版	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	備考
52	73	石錐	2．6	1．5	0．3	1．2	サヌカイト	未製品　片面に擦痕が明瞭に残り転用の可能性あり
53	73	楔形石器	3．5	3．0	0．9	10．6	サヌカイト	楔形石器の素材
54	73	打製石斧	5．4	3．9	1．1	29．0	サヌカイト	基部を欠損する　両面の刃先に磨滅・削痕が明瞭に残る
55	—	打製石斧	7．3	5．2	1．0	65．7	サヌカイト	基部・刃部を欠損　両面に自然面が残る
56	73	打製石斧	3．2	4．9	0．5	14．7	サヌカイト	刃部のみ残存　刃部は片面に磨滅・削痕が明瞭に残る　刃先はつぶれる
57	73	打製石斧	4．5	5．5	1．3	33．3	サヌカイト	上半を欠損
58	73	打製石斧	3．5	4．0	0．9	18．5	サヌカイト	基部・刃部を欠損　両側面はつぶれている

第10表　ＳＲ01流路Ａ最下層出土遺物⑥観察表

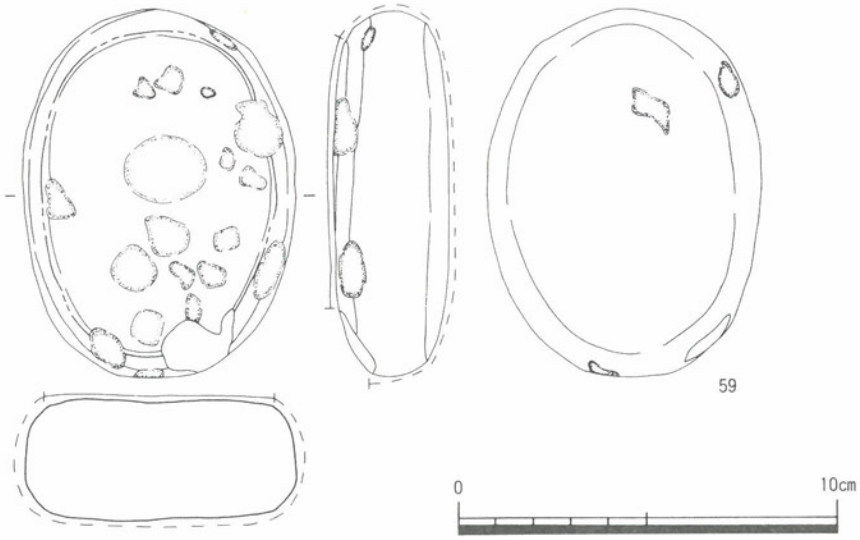
遺物番号	写真図版	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	備考
59	—	磨石	9．9	7．2	3．2	428．0	緑色片岩	全体に磨滅



第22図　ＳＲ01流路Ａ最下層出土遺物④



第23図　ＳＲ01流路Ａ最下層出土遺物⑤



第24図　ＳＲ01流路Ａ最下層出土遺物⑥

ＳＲ01流路Ａ下層

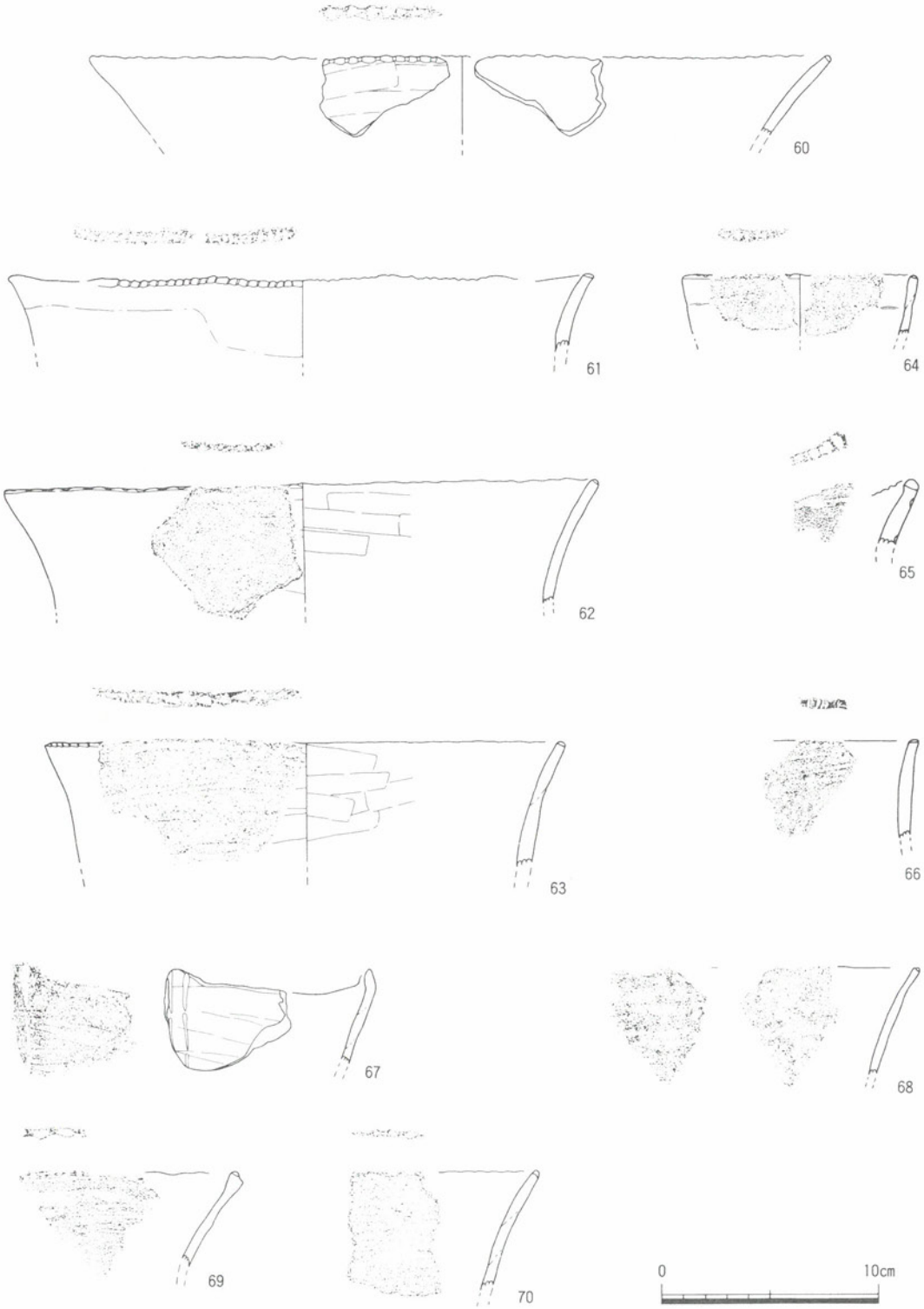
60～567は下層から出土した遺物である。（第25～72図）

60～261は深鉢，262～413は浅鉢，414～459は壺，517～553は石器，554～567は木器である。

60～63・65～81・92は刻目凸帯文を施さない屈曲型の深鉢の口縁である。口縁端部の面取りを施すものと端部を丸く仕上げるものはほぼ半々の割合を示す。また，ほとんどのものが口縁端部に刻目を施している。外面の調整は擦過が多くみられるが，条痕風の擦過も認められ，わりと粗雑な感じを受けるが，内面の調整はほとんどがナデで仕上げている。65・67は波状口縁で，65は外面に縦方向に垂下する刺突文を施している。67は波状口縁に小さな凸起をもっており，凸起部

第11表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物①観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量（cm）	調整 外面	調整 内面	凸帯 断面形	凸帯 施文法	凸帯 位置	端部形	端部刻	内面沈	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	残存度
60	74	深鉢	(34.2)	擦過	ナデ	—	—	—	面	○	−		暗茶褐	暗茶褐	1m以下の砂粒	1／16
61	—	深鉢	(27.0)	軽い擦過のちナデ	ナデ	—	—	—	面	○	−	量やかな波状口縁?	淡褐	黒褐	2m以下の砂粒	1／8
62	—	深鉢	(27.4)	軽い擦過	ナデ風擦過	—	—	—	丸	○	−		茶褐	黒褐	1～3m程度の砂粒	1／12
63	74	深鉢	(24.0)	条痕風擦過	ナデ風擦過	—	—	—	面	○	−		暗茶褐	暗茶褐	1m以下の砂粒	1／8
64	—	深鉢	(10.6)	ナデ風擦過	ナデ風擦過	—	—	—	丸	○	−	小型深鉢　内傾接合	暗茶褐	黒褐	1～2m程度の砂粒	1／8
65	74	深鉢	—	丁寧なナデ	ナデ	—	—	—	面	○	−	波状口縁（外）垂下する刺突文	暗茶褐～黒褐	暗茶褐～黒褐	1m以下の砂粒	破片
66	—	深鉢	—	条痕風擦過	ナデ	—	—	—	面	○	−	瘤型刻目は外面調整の原体と同じ?	淡黒褐	淡黒褐	1～5m程度の砂粒	破片
67	74	深鉢	—	ナデ・擦過	ナデ	—	—	—	面	−	−	凸起（外）垂下する刺突文2列	灰黒褐	濁褐	3m以下の砂粒	破片
68	—	深鉢	—	ナデ・（ケズリ風擦過）	ナデ・擦過	—	—	—	丸	○	−		褐	黒褐	1～2m程度の砂粒	破片
69	74	深鉢	—	擦過	擦過	—	—	—	丸	○	−		灰～濁茶褐	黒	2m以下の砂粒	破片
70	—	深鉢	—	条痕風擦過	ナデ	—	—	—	丸	○	−	内傾接合	茶褐	黒褐	1～2m程度の砂粒	破片



第25図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物①

分から外面に縦方向に垂下する２条の断続する沈線を施している。73は水平口縁であるが，外面に縦方向の爪形文を施している。92は肩部に小さな段をもつ。丁寧に仕上げられており，外面の頸部はナデ・ミガキを施したのち，浅く細いヘラ描き沈線文を描いている。胴部の外面には炭化物が付着している。

64は刻目凸帯文を施さない砲弾型の小型の深鉢である。

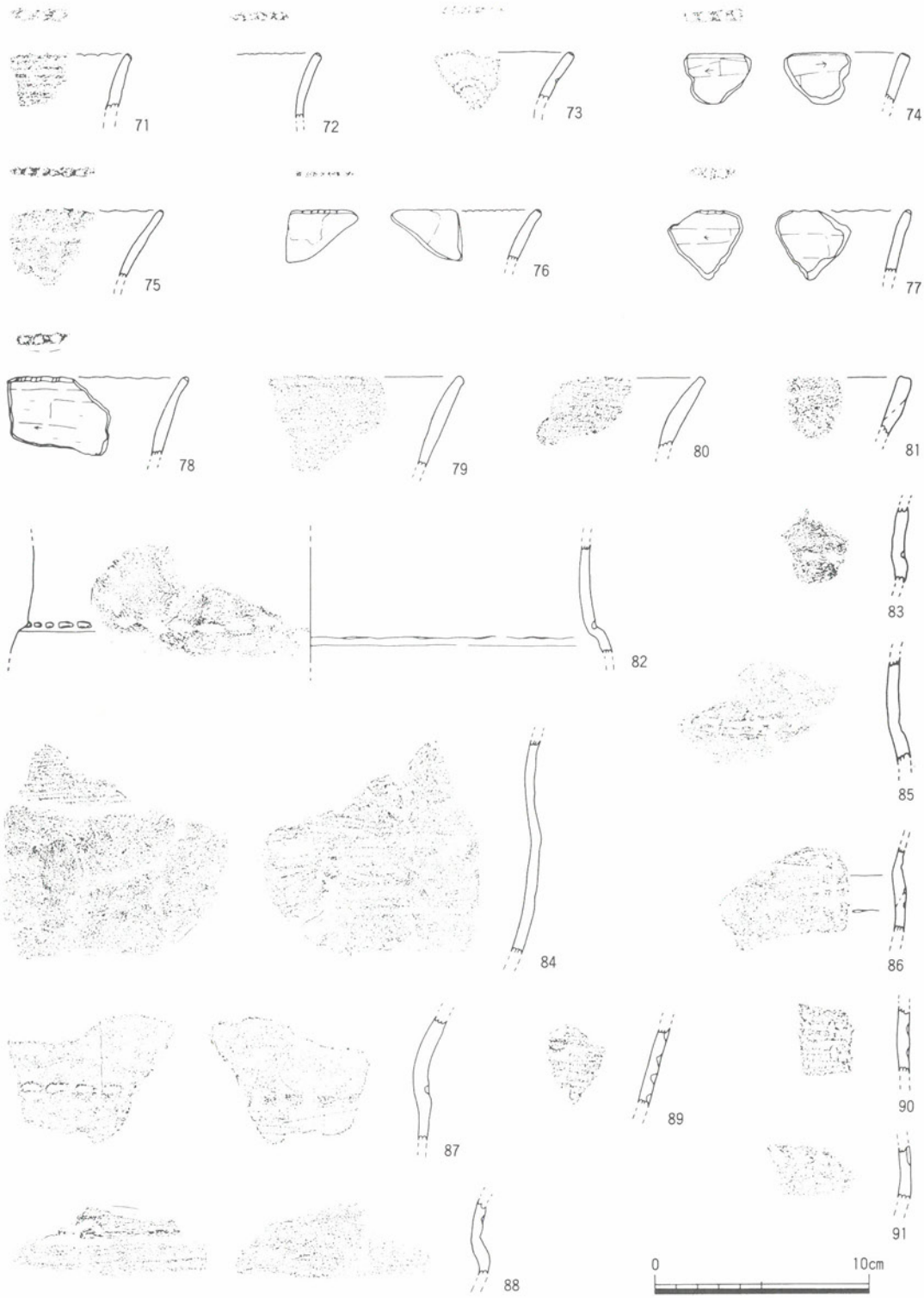
82～91は屈曲型の深鉢の体部である。82・83・85・87は肩部に刺突文をめぐらせている。82は頸部に縦方向の爪形文を施している。84は肩部に沈線状の段をもつ。86は肩部に沈線１条をめぐらせている。88・89は縦方向に垂下する爪形文を施した頸部の破片である。

93～236は刻目凸帯文をめぐらした深鉢の口縁である。最下層と同様に屈曲型と砲弾型の２種類の器形が認められる。

101・102・104・109～122・124～129・132～134・136・138～140・143・145・147・149・152～154・156～159・161～163・165・166・168・169・171・173・176～178・180・183・185・188～191・193・195・196・198～204・207～209・214～236は屈曲型の深鉢の口縁である。肩部を境として肩部以上（頸部）を丁寧にナデ調整し，肩部以下（胴部以下）を粗く擦過調整するものが多い。101は屈曲の度合いが緩やかになっているが，肩部を境として異なる調整を施している。外面に炭化物が付着する。104は口縁端部に刻目をもち，屈曲の度合いが緩やかになっているが肩部に沈線を１条めぐらしている。内面の調整はハケ目風の擦過を施している。109は砲弾型

第12表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物②観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量（cm）	調整 外面	調整 内面	凸帯 断面形	凸帯 高さ	凸帯 位置	端部形	端部刻	内面沈	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	残存度
71	—	深鉢	——	条痕（風擦過）		——	—	—	面	○	—		濁褐	濁黄褐	1～2㎜程度の砂粒	破片
72	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	——	—	—	丸	○	—		白灰～黒	黒	1㎜以下の砂粒	破片
73	74	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	——	—	—	面	○	—	(外)垂下する爪形文	濁褐	黒	3㎜以下の砂粒	破片
74	—	深鉢	——	擦過	擦過	——	—	—	面	○	—		黒褐	黒褐	1㎜以下の砂粒	破片
75	—	深鉢	——	ナデ風擦過	ナデ	——	—	—	面	○	—		暗茶褐	暗茶褐	1～3㎜程度の砂粒	破片
76	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	——	—	—	面	○	—		白褐	白褐	2㎜程度の砂粒	破片
77	—	深鉢	——	擦過	擦過	——	—	—	丸	○	—		暗茶褐	暗茶褐	1㎜以下の砂粒	破片
78	—	深鉢	——	擦過	ナデ	——	—	—	丸	○	—		暗茶褐	暗茶褐	1㎜以下の砂粒	破片
79	—	深鉢	——	（ナデ？）	ナデ・擦過	——	—	—	丸	離	—		暗褐	黒	2㎜以下の砂粒	破片
80	—	深鉢	——	条痕風擦過	ナデ	——	—	—	面	—	—		淡黒	濁褐	1㎜以下の砂粒	破片
81	—	深鉢	——	擦過	ナデ	——	—	—	面	—	—		濁褐	濁褐	1㎜程度の砂粒	破片
82	74	深鉢	——	ナデ	ナデ	——	—	—	—	—	—	屈曲型（外)刺突文 縦の爪形文	茶褐	暗灰茶褐	3㎜以下の砂粒	1／8
83	74	深鉢	——	ナデ・擦過？	ナデ・擦過	——	—	—	—	—	—	屈曲型（外)刺突文	淡黄褐	淡黒褐	3㎜以下の砂粒	破片
84	—	深鉢	——	条痕風擦過・ナデ	丁寧なナデ・条痕風擦過	——	—	—	—	—	—	屈曲型（外)沈線状の段	淡黒	暗茶褐	1㎜以下の砂粒	破片
85	74	深鉢	——	ナデ・擦過	ナデ	——	—	—	—	—	—	屈曲型（外)刺突文	濁茶褐	暗茶褐	2㎜以下の砂粒	破片
86	74	深鉢	——	ナデ風擦過	ナデ・粗いハケ目風擦過	——	—	—	—	—	—	屈曲型(外)沈線1条・炭化物付着	暗灰茶褐	濁灰褐	3㎜以下の砂粒	破片
87	74	深鉢	——	ナデ・擦過	ナデ風擦過・ハケ目風擦過	——	—	—	—	—	—	屈曲型（外)刺突文	濁黄褐	黒	2㎜以下の砂粒	破片
88	74	深鉢	——	擦過	擦過	——	—	—	—	—	—	屈曲型（外)段・垂下する爪形文	暗茶褐	黒褐	1㎜以下の砂粒	破片
89	74	深鉢	——	擦過	ナデ	——	—	—	—	—	—	頸部（外)垂下する爪形文	暗灰褐	黒	1㎜以下の砂粒	破片
90	74	深鉢	——	条痕風擦過	ナデ	——	—	—	—	—	—	頸部（外)垂下する爪形文	白褐	暗茶褐	2㎜以下の砂粒	破片
91	74	深鉢	——	ケズリ風擦過	指ナデ	——	—	—	—	—	—	屈曲型（外)C字爪形文	淡茶褐	淡茶褐	3㎜以下の砂粒	破片



第26図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物②

の胴部から屈曲して大きく外反する口縁部をもつ器形をしており，口縁端部に刻目をもつ。肩部には沈線状の段を有し，外面には炭化物が付着する。111は肩部に沈線を１条めぐらした深鉢で，磨滅のため凸帯上の刻目は確認できないが，刻目をもたない凸帯の可能性もある。113は肩部に弱い稜をもち，頸部にヘラ描沈線で文様を描いている。118は頸部の屈曲の強い深鉢で，凸帯上の刻目に対応するように口縁端部外面に刻目を施している。120は頸部が内傾する深鉢で，粗雑な作りをしている。外面に炭化物が付着する。器高が低く鉢の可能性がある。121も頸部が内傾する深鉢である。126・129は頸部が外反する深鉢で，口縁端部外面に刻目を施している。外面に炭化物が付着している。216～219は口縁部内面に沈線を１条めぐらす深鉢の口縁部である。いずれも口縁端部に刻目を施しており，219は波状口縁である。220～236は頸部にヘラ描沈線で文様を描いた深鉢である。220・222・223・226・227は調整に使用した工具の木口部分を使って文様を描いた可能性が強い。233は砲弾型の深鉢になる可能性があるが，頸部に文様をもつ深鉢がすべて屈曲型の深鉢であることは注目される。

237～261は屈曲型の深鉢の肩部・頸部である。肩部には沈線をめぐらすもの（238・243～251），弱い稜を境に調整が異なるもの（237・240・241），凸帯をめぐらすもの（239）がある。

第13表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物③観察表

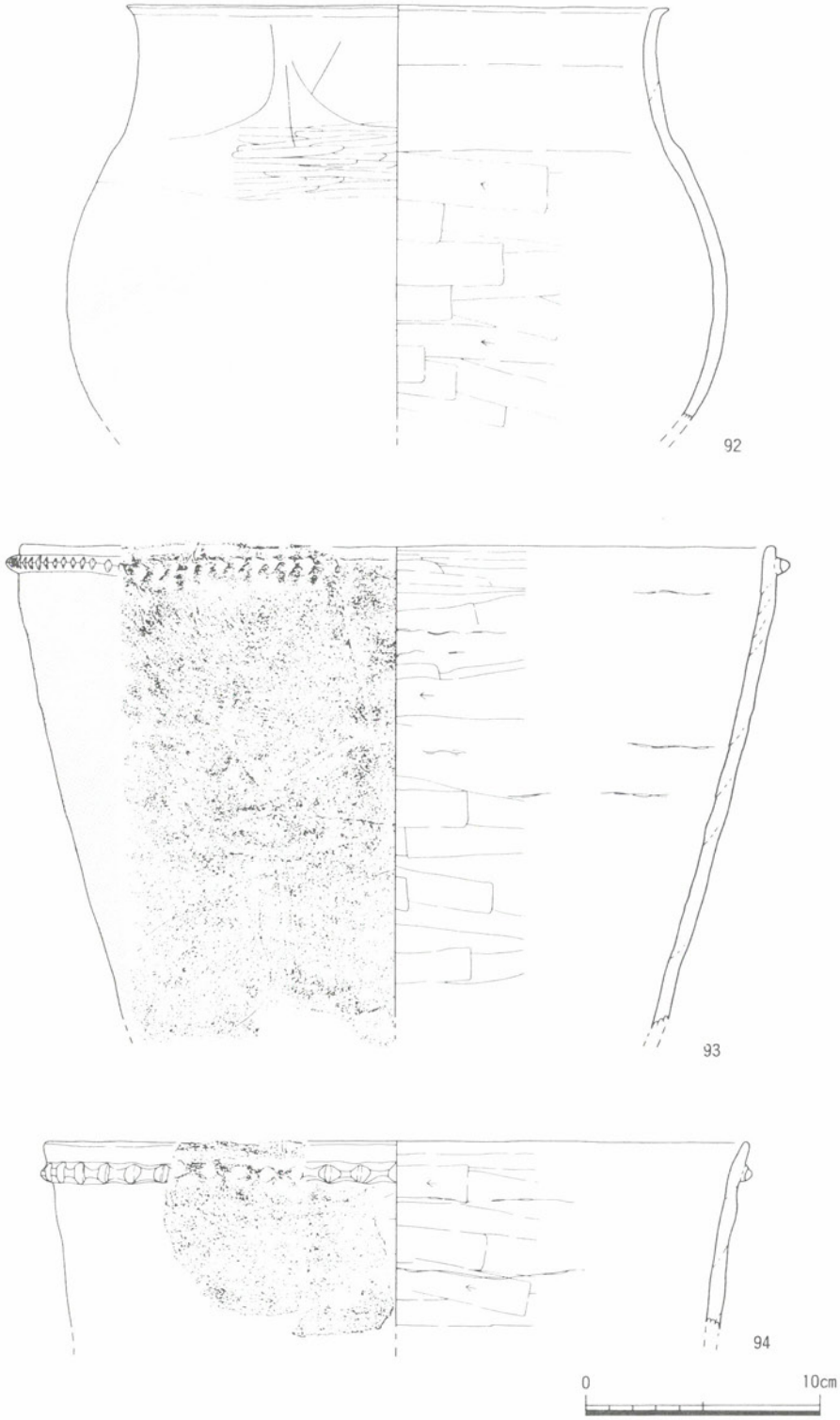
遺物番号	写真図版	器種	法量（cm）	調整 外面	調整 内面	凸帯 断面形	凸帯 施文	凸帯 位置	端部形	端部刻	内面沈	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	残存度
92	75	深鉢	23.0	ナデ・ミガキのち丁寧なナデ・ミガキ	ナデ・丁寧なナデ・擦過	—		—		–	–	(外)頸部にヘラ描文・炭化物付着	黒褐	暗灰褐	1mm以下の砂粒少し	1／4
93	75	深鉢	31.4	横ナデ・ハケ目風擦過・ケズリ風擦過	ナデ風擦過	三角	押	0.4	面		–	(外)炭化物付着 内傾接合	暗茶褐	淡茶褐	1～3mm程度の砂粒	1／4
94	76	深鉢	(30.0)	ナデ・擦過	擦過	三角	押	0.3	尖	–	–	(内)炭化物付着	濁黄褐	淡黒褐	4mm以下の砂粒	1／5

第14表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物④観察表

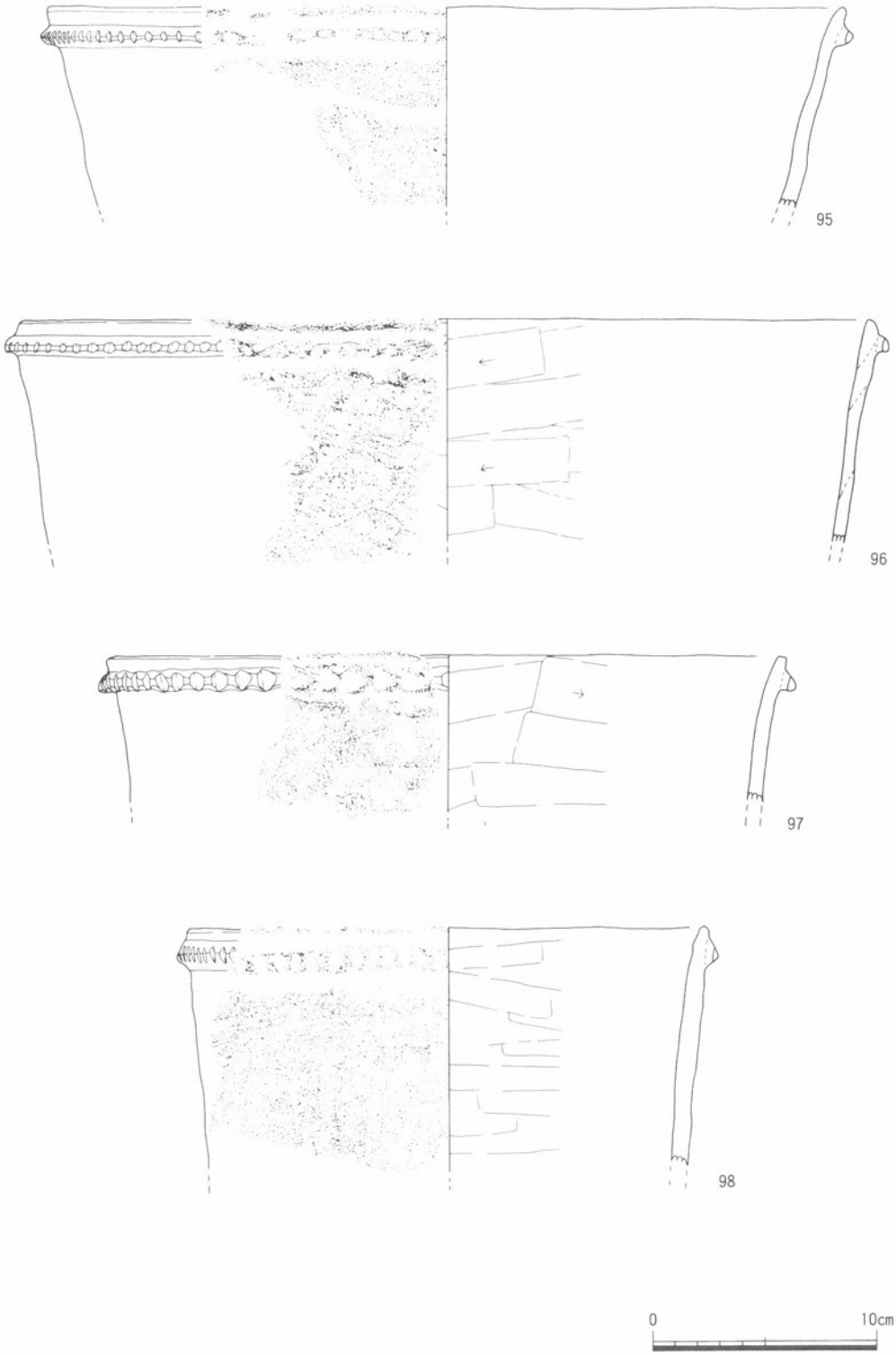
遺物番号	写真図版	器種	法量（cm）	調整 外面	調整 内面	凸帯 断面形	凸帯 施文	凸帯 位置	端部形	端部刻	内面沈	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	残存度
95	79	深鉢	35.2	磨滅のため不明	磨滅のため不明	三角	刺	0.7	面	–	–		濁褐	淡褐	1～2mm程度の砂粒	1／4
96	76	深鉢	(37.4)	ナデ・ケズリ風擦過	ハケ目風擦過	三角	押	0.4	面		–		暗茶褐	淡黒褐	4mm以下の砂粒	1／14
97	76	深鉢	(30.2)	ナデ	ナデ風擦過	下三角	押	0.4	面	–	–		淡灰茶褐	淡黒褐	3mm以下の砂粒	1／12
98	76	深鉢	(22.8)	ナデ・擦過(ヨコのちタテ)	ナデ・条痕風擦過のちナデ	三角	刺	0.6	丸	–	–		橙褐～暗褐	橙褐～暗褐	3mm以下の砂粒	1／6

第15表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑤観察表

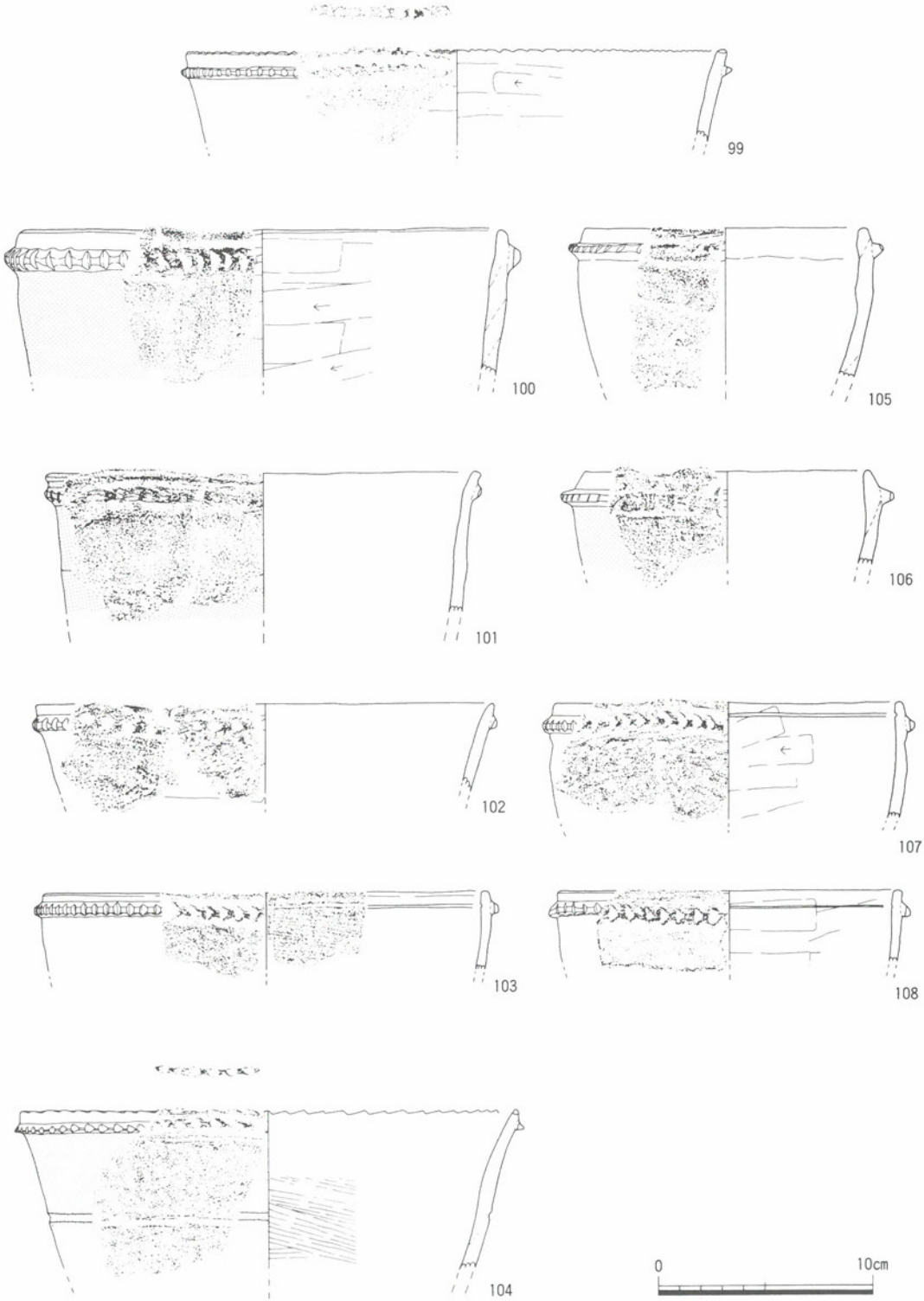
遺物番号	写真図版	器種	法量（cm）	調整 外面	調整 内面	凸帯 断面形	凸帯 施文	凸帯 位置	端部形	端部刻	内面沈	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	残存度
99	77	深鉢	(24.8)	擦過	擦過	上三角	軽	0.6	面	○	–		黒	黒褐	1mm以下の砂粒	1／12
100	77	深鉢	(22.4)	ナデ	ナデ風擦過	台形	刺	0.7	丸	–	–	(外)炭化物付着	黒褐	暗茶褐	2mm以下の砂粒	1／10
101	77	深鉢	(20.0)	ナデ・ケズリ風擦過	擦過のちナデ	三角	押	0・4	面	–	–	(外)炭化物付着	黒褐	灰茶褐	1～2mm程度の砂粒	1／6
102	—	深鉢	(21.0)	擦過	磨滅のため不明	台形	押	0.5	尖	–	–		淡灰茶褐	濁黄茶褐	3mm以下の砂粒	1／8
103	77	深鉢	(20.4)	ナデ・擦過(ケズリ風?)	ハケメ風擦過	台形	押	0.4	面	–	○		黒褐～暗茶褐	黒褐	1mm程度の砂粒少し 雲母	1／12
104	77	深鉢	(23.0)	ナデないし擦過	ナデ・ハケ目風擦過	下三角	押	0.5	尖	○	–	(外)炭化物付着・沈線1条	暗茶褐～黒褐	暗茶褐～黒褐	1～2mm程度の砂粒	1／16
105	77	深鉢	(13.0)	軽い擦過	ナデ	上三角	軽	0.7	面	–	–	(外)炭化物付着	淡黒褐	暗灰茶褐	2mm以下の砂粒	1／16
106	77	深鉢	(13.0)	ナデ	ナデ	三角	軽	0.8	尖	–	–	(外)炭化物付着	黒褐	暗灰茶褐	1mm以下の砂粒	1／12
107	77	深鉢	(16.0)	ナデ・擦過	ナデ風擦過	三角	押	0.6	面	–	○		暗茶褐～黒褐	暗茶褐～黒褐	1mm以下の砂粒	1／6
108	77	深鉢	(15.7)	ナデ・擦過のちナデ	ナデ・ナデ風擦過	下三角	押	0.5	丸	–	–		濁褐	濁褐	1～2mm程度の砂粒	1／8



第27図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物③



第28図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物④



第29図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑤

239は一応胴部凸帯としたが，口縁端部を欠損した口縁部凸帯の可能性もある。

93～100・103・105～108・123・124・130・131・135・137・141・142・144・148・150・151・155・160・164・167・170・172・174・175・179・181・182・184・186・187・192・194・197・205・206・210～213は砲弾型の深鉢である。93は口縁部から胴部までの破片である。外面の凸帯下に横方向のハケ目風擦過，その下を縦方向のケズリ風擦過調整している。内面は横方向のナデ風擦過で仕上げている。外面には炭化物が付着している。粘土紐の接合は内傾接合である。94・96・98なども外面の凸帯下を横方向の擦過調整し，その下を縦方向の擦過調整している。103・107・108は口縁部内面に沈線を１条めぐらせている。砲弾型の深鉢の口縁端部の形状はほとんどが丸く仕上げられているか尖っており，口縁端部に刻目を施さないものが大半を占める。口縁端部に刻目をもつものは99・137・184・186・211・212・213とわずかである。

第16表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑥観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm)	調整 外面	調整 内面	凸帯 断面形	凸帯 施文法	凸帯 位置	端部形	端部刻	内面沈	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	残存度
109	77	深鉢	(28.0)	条痕風のケズリ	横ナデ・(ナデ風)擦過のちナデ	三角	刺	0.5	丸	○	—	(外)炭化物付着・沈線状の段	黒褐	暗茶褐	4mm以下の砂粒	1／6
110	—	深鉢	24.6	磨滅のため不明	磨滅のため不明	三角	押	0.6	丸	—	—	(外)凸帯部に沈線1条	淡黄褐	淡黄褐	1～4mm程度の砂粒	1／4
111	78	深鉢	(18.4)	ナデ・ケズリ風擦過	ナデ	下三角	磨滅	0.2	丸	—	—	(外)凸帯部に沈線1条・刻目直線	暗茶褐	暗茶褐	1～3mmの砂粒	1／6

第17表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑦観察表

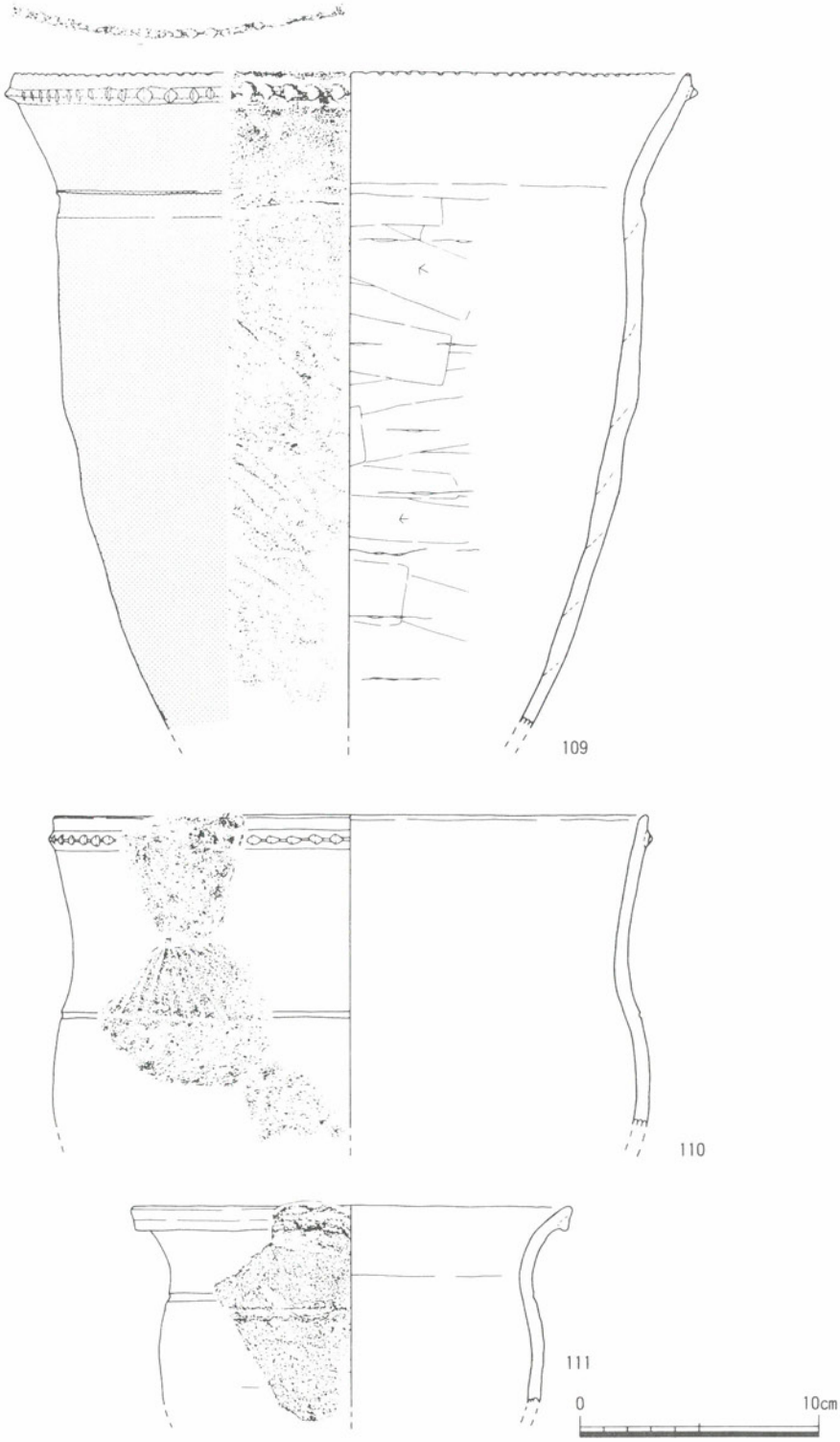
遺物番号	写真図版	器種	法量(cm)	調整 外面	調整 内面	凸帯 断面形	凸帯 施文法	凸帯 位置	端部形	端部刻	内面沈	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	残存度
112	78	深鉢	32.6	横ナデ・ナデ風擦過・ケズリ風擦過	ナデ風擦過	三角	押	0.7	面	—	—	凸帯部の地は調整の違い	黒	黒	1～3mm程度の砂粒	1／3
113	78	深鉢	(31.4)	擦過	擦過・ナデ	下三角	押	0.4	丸	—	—	(外)凸帯部にヘラ描文・黒斑	暗褐	暗褐	2mm以下の砂粒	1／5
114	—	深鉢	(31.0)	ナデ・軽い擦過	ナデ	三角	刺	0.5	面	—	—	内傾接合	茶褐	暗茶褐	1～5mm程度の砂粒	1／6
115	78	深鉢	24.5	磨滅のため不明	磨滅のため不明	三角	軽	0.2	丸	—	—	黒斑　磨滅が進む	濁褐	濁褐	1～4mm程度の砂粒	1／2

第18表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑧観察表

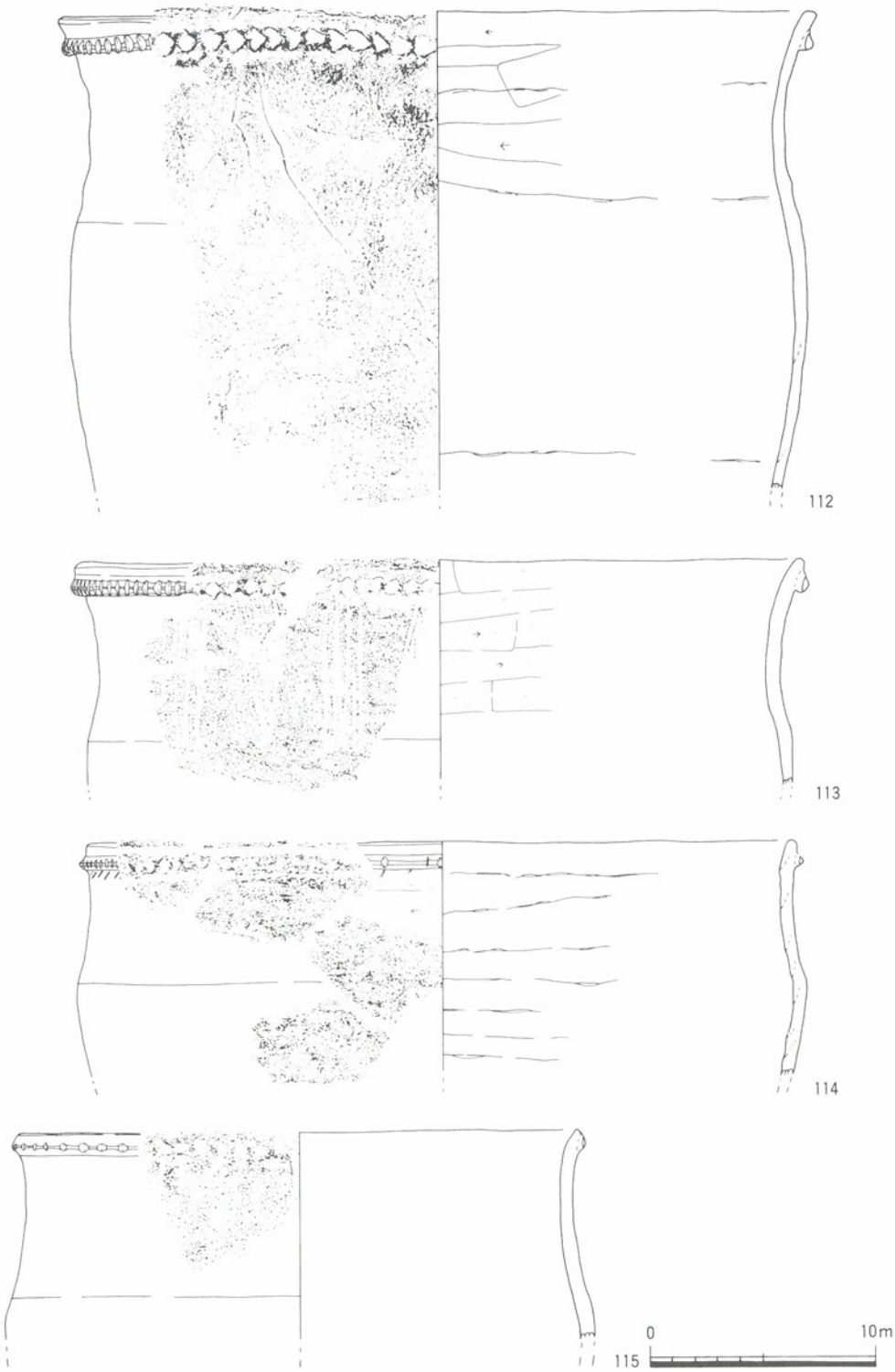
遺物番号	写真図版	器種	法量(cm)	調整 外面	調整 内面	凸帯 断面形	凸帯 施文法	凸帯 位置	端部形	端部刻	内面沈	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	残存度
116	79	深鉢	(25.4)	ナデ風擦過・擦過	ナデ風擦過	下三角	軽	0.2	丸	—	—	(外)炭化物付着	黒	暗褐	5mm以下の砂粒	1／6
117	79	深鉢	21.0	ナデ・擦過	擦過のちナデ	下三角	押	0.3	尖	—	—	(外)炭化物付着	黒	暗茶褐	3mm以下の砂粒	1／2
118	79	深鉢	24.0	ナデ・ナデ風擦過	ナデ・擦過	下三角	刺	0.5	尖	—	—		淡褐	暗茶褐	1～3mm程度の砂粒	1／4
119	80	深鉢	(42.0)	ナデ・ナデ風擦過	ナデ風擦過	上三角	押	0.9	面	—	—		暗茶褐	濁黄茶褐	4mm以下の砂粒	1／10

第19表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑨観察表

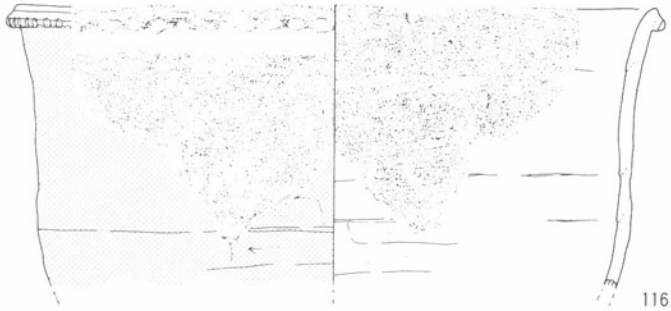
遺物番号	写真図版	器種	法量(cm)	調整 外面	調整 内面	凸帯 断面形	凸帯 施文法	凸帯 位置	端部形	端部刻	内面沈	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	残存度
120	80	深鉢	23.3	横ナデ・ナデ風擦過	ナデ風擦過	上三角	刺	0.4	尖	—	—	(外)部分的に炭化物付着	黒褐～暗黄褐	暗茶褐	1～3mm以下の砂粒	1／3
121	80	深鉢	(24.0)	ナデ風擦過	指押さえのち粗いナデ風擦過	三角	刺	0.2	丸	—	—		暗褐	暗褐	2mm以下の砂粒	1／12
122	80	深鉢	(31.7)	擦過	ナデ	三角	軽	0.6	尖	—	—	磨滅が進む	淡～暗褐	淡～暗褐	2mm以下の砂粒	1／12
123	80	深鉢	(30.0)	ナデ・擦過のちナデ	ナデ	台形	押	0.6	丸	—	—		暗茶褐	暗黄茶褐	3mm以下の砂粒	1／12
124	80	深鉢	(34.0)	擦過	ナデ	蒲鉾	押	0.5	面	—	—		淡茶褐	淡茶褐	3mm以下の砂粒	1／16
125	80	深鉢	(35.2)	ナデ・粗いナデ・擦過のちナデ	ナデ・粗いナデ	上三角	軽	0.6	丸	—	—	刻目は粗めの小V字	淡茶褐	淡茶褐	3mm以下の砂粒	1／10

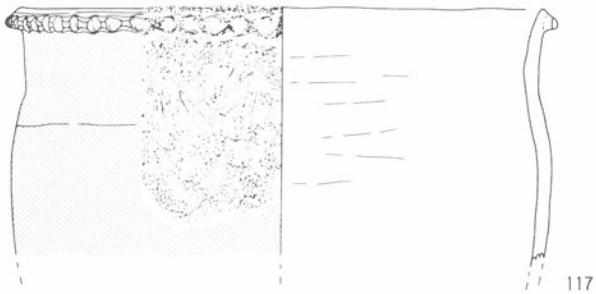


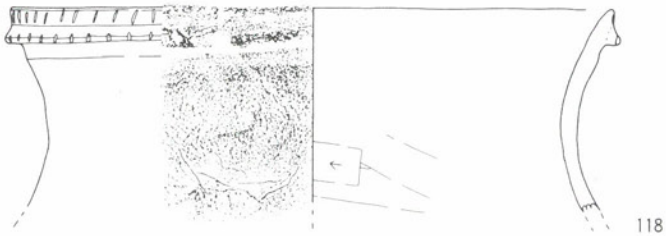
第30図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑥

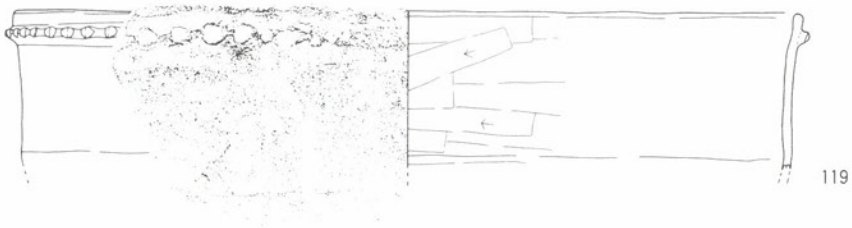


第31図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑦

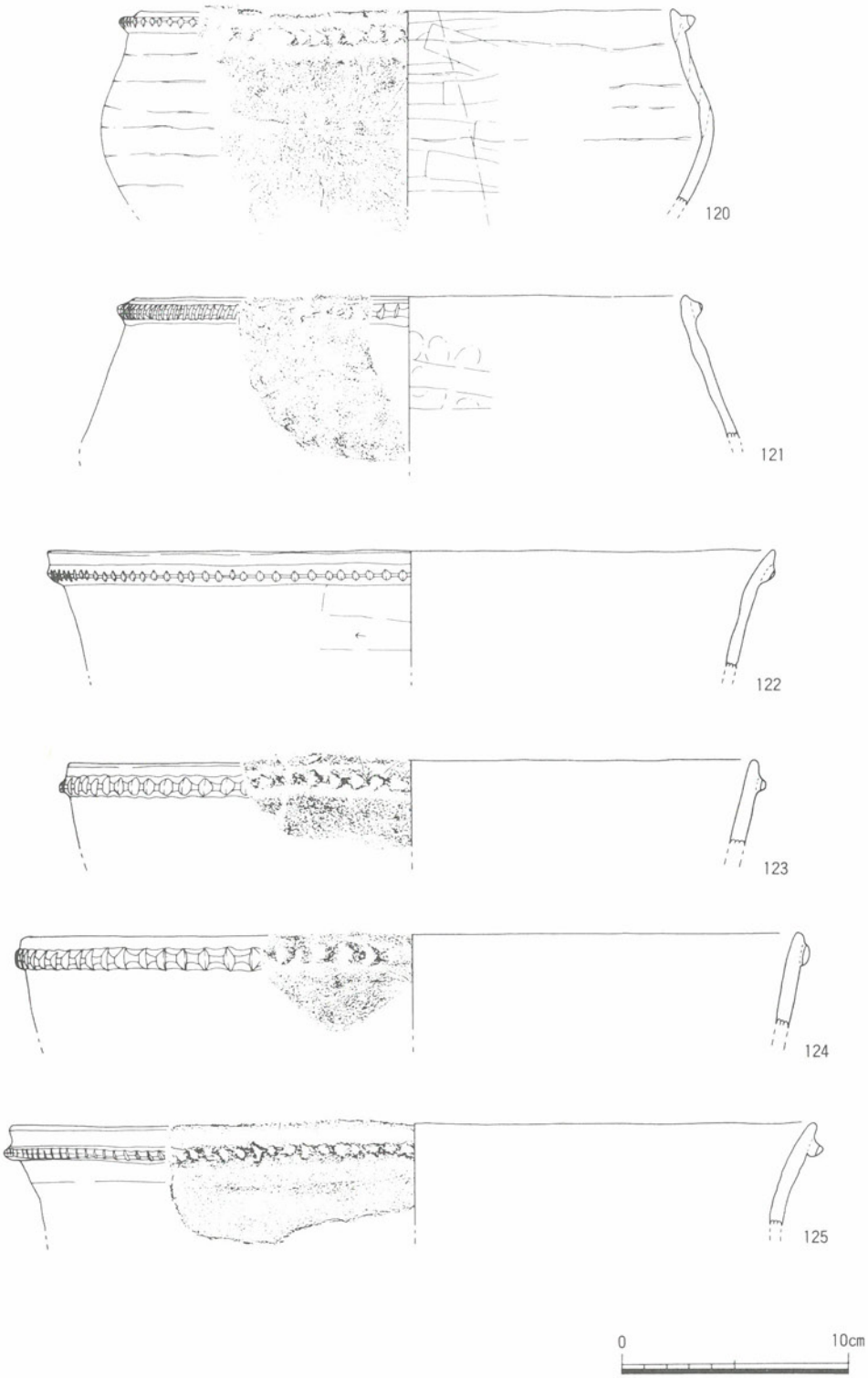




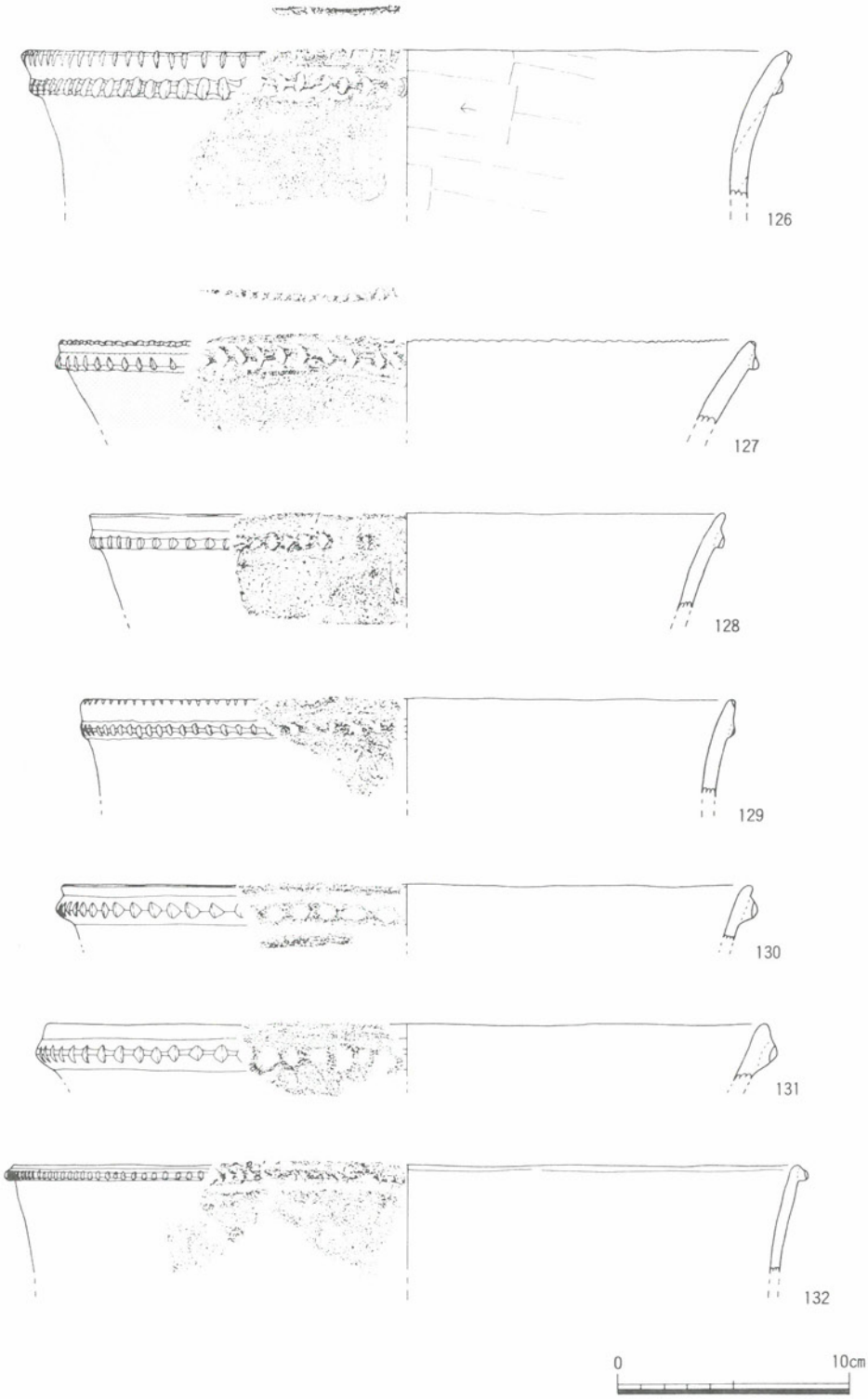




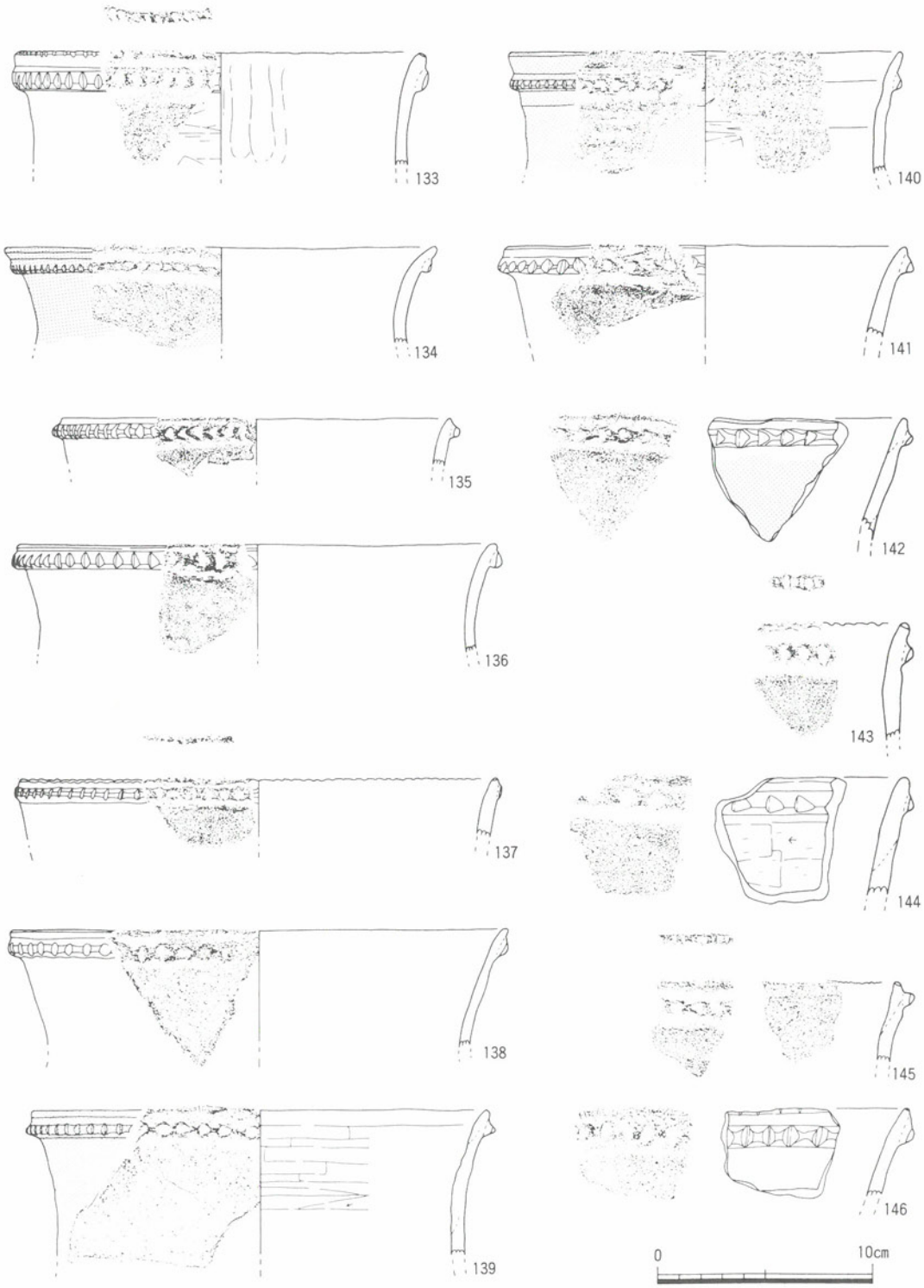
第32図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑧



第33図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑨



第34図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑩



第35図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑪

第20表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑩観察表

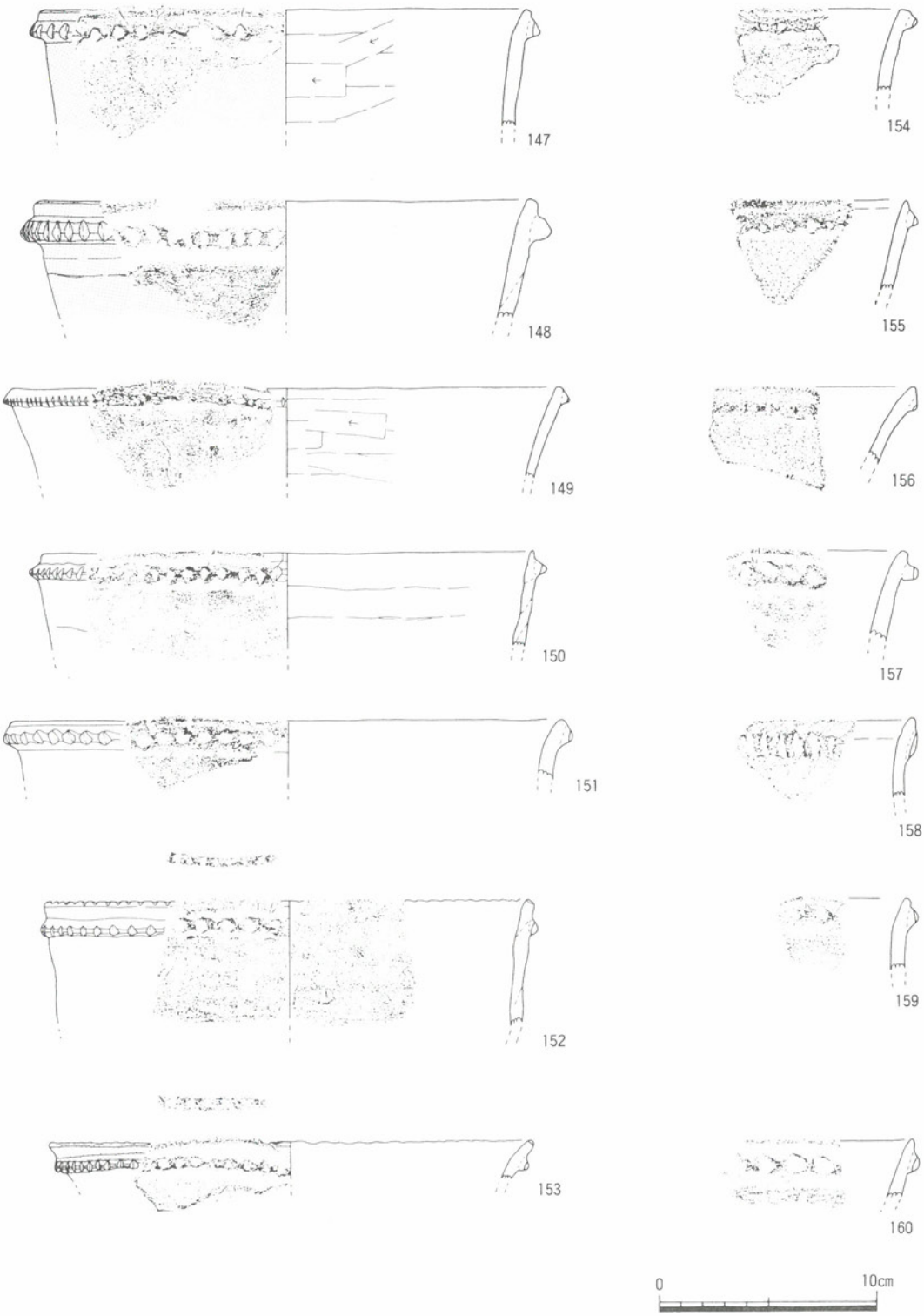
遺物番号	写真図版	器種	法量 (cm)	調整		凸帯			端部形	端部刻	内面沈	その他	色調		胎土	残存度
				外面	内面	断面形	施文法	位置					外面	内面		
126	80	深鉢	(33.0)		ナデ風擦過	三角	刺	0.9	面	○	－	(外)炭化物付着	黒軽	茶褐	1～4㎜の砂粒	1／14
127	80	深鉢	(29.6)	ナデ	ナデ	三角	刺	0.4	尖	○	－	(外)炭化物付着	黒褐	茶褐	1㎜以下の砂粒	1／10
128	—	深鉢	(27.0)	擦過？	ナデ	下三角	押	0.5	丸	－	－		白褐	白褐	1～4㎜程度の砂粒	1／10
129	—	深鉢	(27.8)	剥離のため不明	ナデ	三角	軽	0.9	丸	○	－		暗茶褐	濁褐	2㎜以下の砂粒	破片
130	—	深鉢	29.4	磨滅のため不明	磨滅のため不明	三角	刺	0.4	丸	－	－		濁褐	濁褐	3㎜以下の砂粒	1／2
131	—	深鉢	(30.8)	磨滅のため不明	磨滅のため不明	三角	押	0.6	尖	－	－		濁褐	濁褐	1～2㎜程度の砂粒	破片
132	—	深鉢	(33.8)	ナデ	ナデ	下三角	軽	0.0	尖	－	－		濁茶褐	濁茶褐	1～4㎜程度の砂粒	1／12

第21表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑪観察表

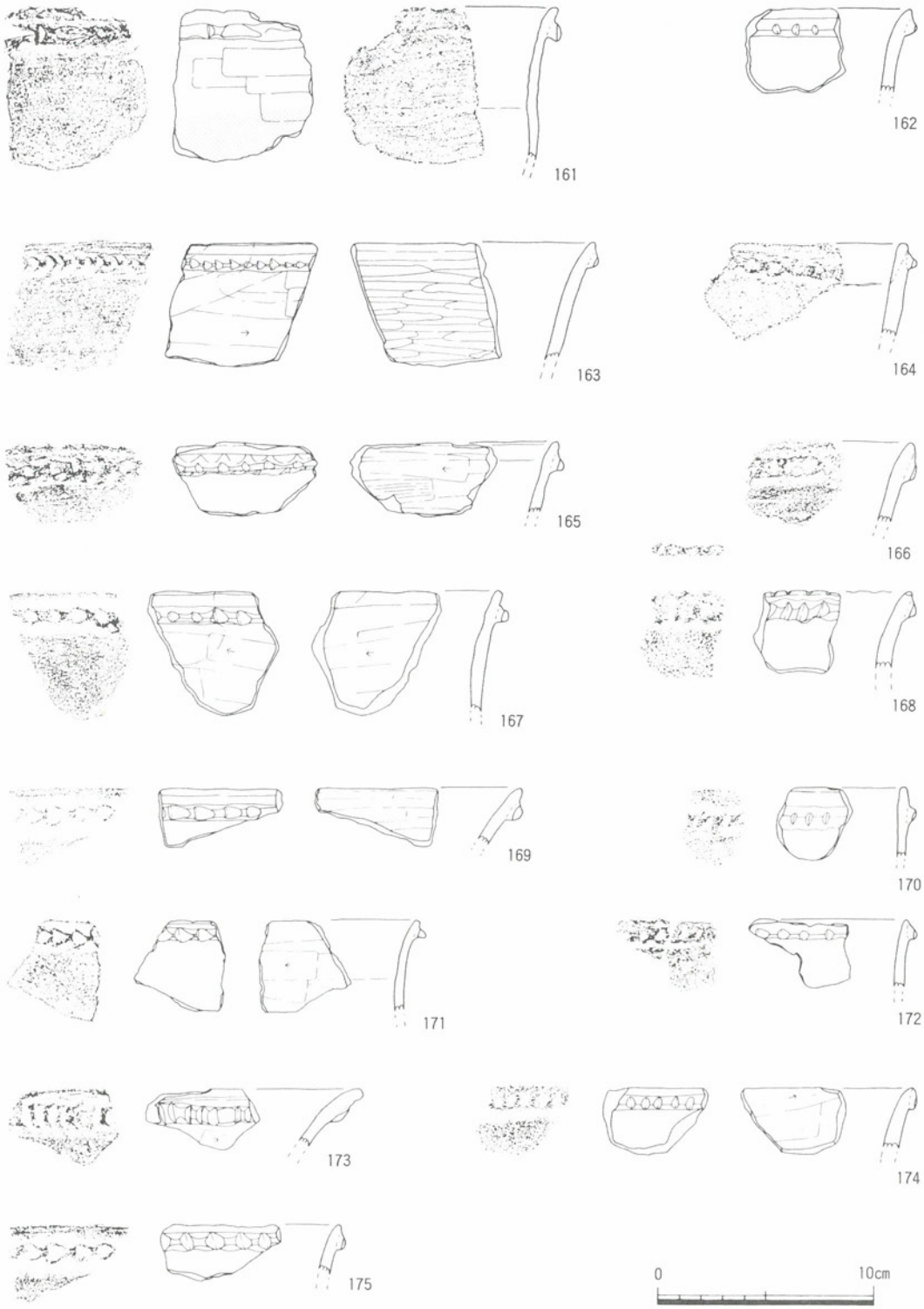
遺物番号	写真図版	器種	法量 (cm)	調整		凸帯			端部形	端部刻	内面沈	その他	色調		胎土	残存度
				外面	内面	断面形	施文法	位置					外面	内面		
133	81	深鉢	(18.5)	擦過	指ナデのち横ナデ	台形	刺	0.5	丸	○	－		白褐～暗茶褐	黒褐	1～4㎜程度の砂粒	1／12
134	81	深鉢	(19.8)	擦過	ナデ	下三角	軽	0.4	丸	－	－	(外)炭化物付着	暗褐	濁褐	2㎜以下の砂粒	1／6
135	—	深鉢	(20.0)	ナデ	ナデ	下三角	押	0.3	尖	－	－		黒褐	暗灰茶褐	1㎜以下の砂粒	1／15
136	81	深鉢	(22.0)	ナデ	ナデ	下三角	刺	0.2	丸	－	－		濁褐	淡褐	1～5㎜程度の砂粒	1／16
137	—	深鉢	(22.0)	ナデ	ナデ	台形	刺	0.3	丸	○	－		暗茶褐	暗橙褐	1～2㎜程度の砂粒	1／12
138	—	深鉢	(23.0)	磨滅（擦過？）	ナデ・（擦過？）	三角	押	0.4	尖	－	－		濁灰褐	濁茶褐	1～6㎜程度の砂粒	1／10
139	81	深鉢	(21.0)	ナデ・ナデ風擦過	ナデ・ミガキ風擦過	三角	押	0.4	丸	－	－	(外)炭化物付着	淡黄褐	濁褐	1～2㎜程度の砂粒	1／6
140	—	深鉢	(18.0)	ナデ	指押さえのちハケ目風擦過	台形	軽	0.9	丸	－	－	(外)炭化物付着	暗茶褐	暗茶褐	1㎜以下の砂粒	1／10
141	—	深鉢	(18.4)	ナデ	ナデ	下三角	軽	0.2	尖	－	－		暗茶褐	淡茶褐	1～3㎜程度の砂粒	破片
142	—	深鉢	——	ナデ	剥離のため不明	三角	押	0.4	丸	－	－	(外)炭化物付着	茶褐	暗黄褐	1～3㎜程度の砂粒	破片
143	—	深鉢	——	強いナデ・擦過	ナデ	三角	刺	0.6	丸	○	－		淡～暗褐	黒	2㎜以下の砂粒	破片
144	81	深鉢	——	ナデ・擦過	ナデ	三角	押	0.5	面	－	－		淡褐	淡褐	3㎜程度の砂粒	破片
145	—	深鉢	——	ナデ	ハケ目風擦過	上三角	軽	0.5	尖	○	－	(外)炭化物付着	黒	暗茶褐	1㎜以下の砂粒	破片
146	—	深鉢	——	擦過	ナデ	三角	刺	0.1	丸	○	－	端部の刻目は磨滅	淡灰褐	淡灰褐	1～3㎜程度の砂粒	破片

第22表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑫観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量 (cm)	調整		凸帯			端形	端刻	内沈	その他	色調		胎土	残存度
				外面	内面	断面形	施文法	位置					外面	内面		
147	81	深鉢	(22.6)	炭化物で不明	ナデ風擦過	三角	押	0.5	尖	－	－	(外)炭化物付着	黒	暗茶褐	2㎜以下の砂粒	1／7
148	—	深鉢	22.2	擦過	ナデ風擦過	蒲鉾	押	0.6	面	－	－	(外)炭化物付着	黒	淡黒	1～3㎜程度の砂粒	1／4
149	81	深鉢	(25.1)	擦過のちナデ	ナデ・ミガキ風擦過	下三角	軽	0.0	丸	－	－		暗茶褐	黒褐	3㎜以下の砂粒	1／10
150	—	深鉢	(22.4)	ナデ	ナデ	三角	刺	0.5	尖	－	－	(外)黒斑	濁黄褐	濁黄褐	1～3㎜程度の砂粒	1／8
151	—	深鉢	(25.0)	ナデ？	ナデ	三角	押	0.1	丸	－	－		暗灰褐	淡灰褐	2㎜以下の砂粒	1／10
152	—	深鉢	(22.4)	ナデ・ナデ風擦過・擦過	ナデ・ナデ風擦過	三角	押	0.8	面	○	－	内傾接合	暗褐	暗茶褐	1～2㎜程度の砂粒	1／12
153	—	深鉢	(22.0)	ナデ	ナデ	下三角	軽	0.6	丸	○	－	(外)炭化物付着	橙褐	淡褐	2㎜以下の砂粒	破片
154	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	上三角	軽	0.2	面	－	－		濁茶褐	濁茶褐	1～3㎜程度の砂粒	破片
155	—	深鉢	——	ナデ・擦過	ナデ	下三角	押	0.4	尖	－	－		濁橙褐	淡褐	1～3㎜程度の砂粒	破片
156	—	深鉢	——	剥離のため不明	剥離のため不明	三角	軽	0.4	尖	－	－		淡黄褐	淡黄褐	1～3㎜程度の砂粒	破片
157	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	台形	刺	0.4	面	－	－		淡褐	淡褐	2㎜以下の砂粒	破片
158	81	深鉢	——	ナデ	ナデ	三角	刺	0.4	丸	－	－	扁平な凸帯	濁黄褐	濁黄褐	1～3㎜程度の砂粒	破片
159	—	深鉢	——	ナデ・擦過	ナデ	三角	刺	0.3	丸	－	－		淡黄褐	淡黄褐	3㎜以下の砂粒	破片
160	81	深鉢	——	条痕風擦過	磨滅のため不明	台形	刺	0.3	丸	－	－		淡橙白褐	淡橙白褐	1㎜以下の砂粒	破片



第36図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑫



第37図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑬

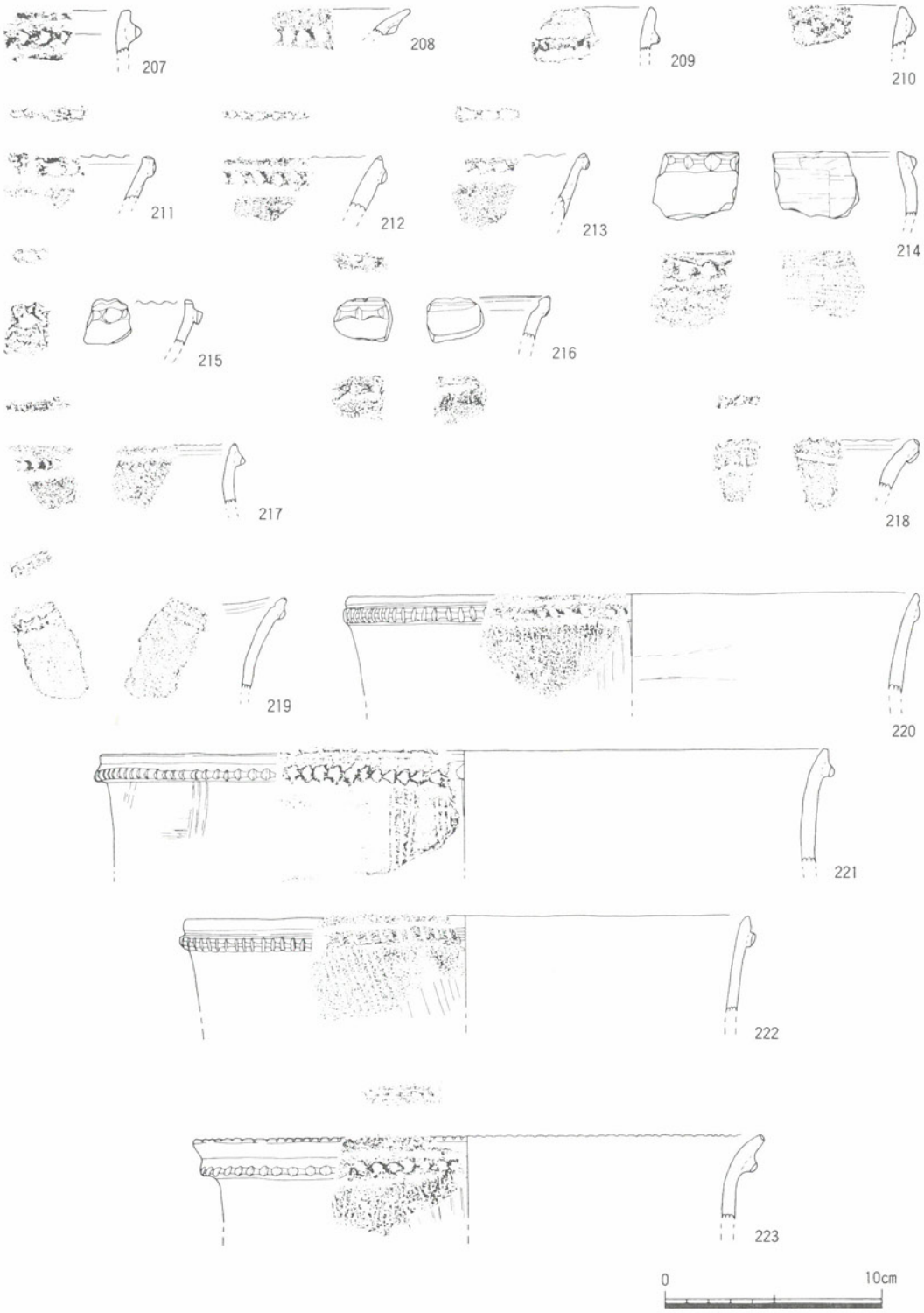
第38図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑭

第23表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑬観察表

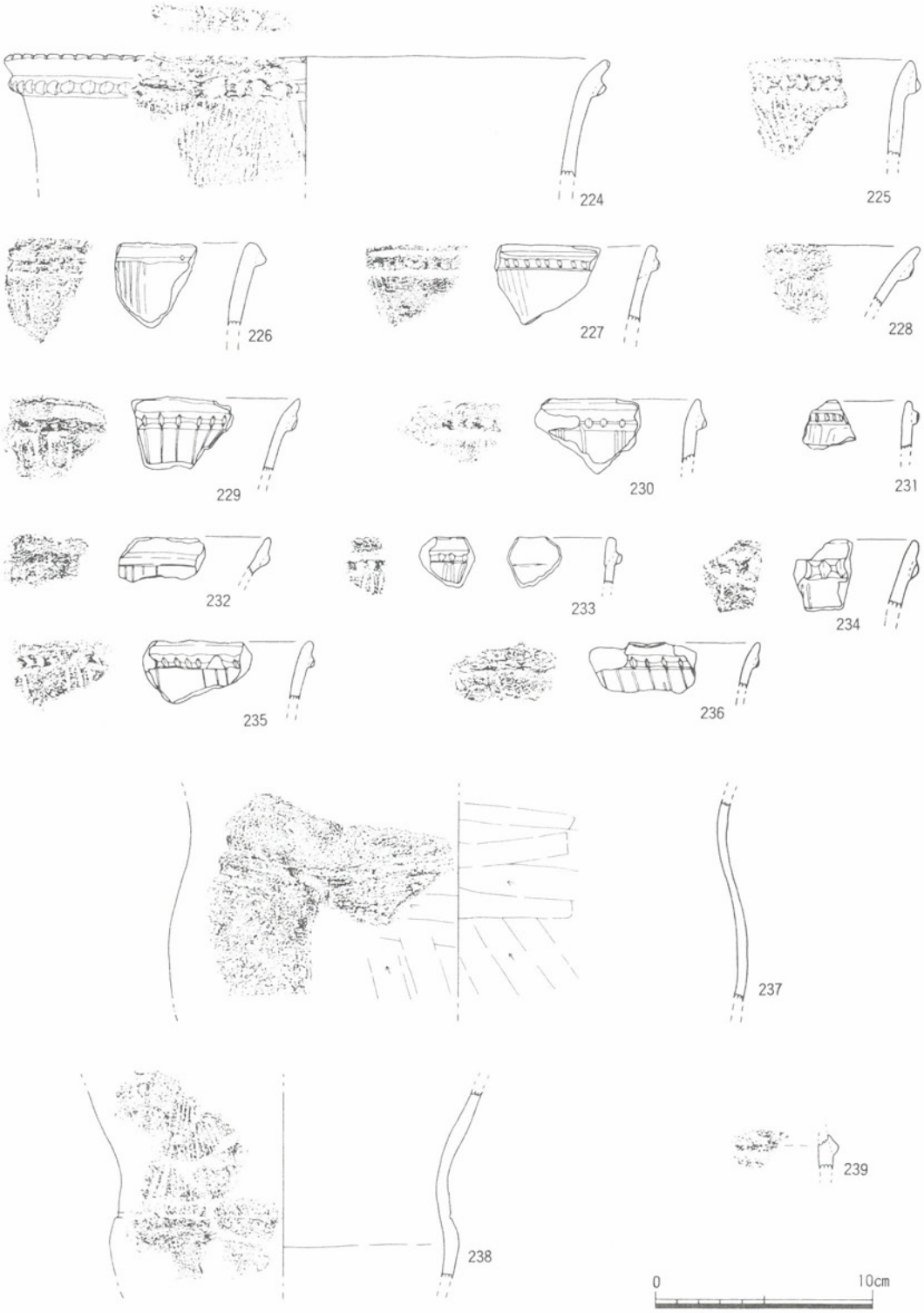
遺物番号	写真図版	器種	法量（cm）	調整 外面	調整 内面	凸帯 断面形	凸帯 施文	凸帯 位置	端形	端刻	内沈	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	残存度
161	—	深鉢	——	ナデ・ナデ風擦過	条痕風擦過	台形	押	0.6	丸	○	—	(外)炭化物付着	濁褐	淡黄褐	2m以下の砂粒	破片
162	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	三角	軽	0.3	尖	—	—	刷目が顕著	暗褐	暗褐	1～2m程度の砂粒	破片
163	82	深鉢	——	ナデ・ナデ風擦過	ナデ・粗いミガキ	三角	押	0.5	尖	—	—	(外)黒斑	濁茶褐	暗茶褐	1～5m程度の砂粒	破片
164	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	三角	刺	0.4	面	—	—	(外)炭化物付着	暗茶褐	暗茶褐	1～3m程度の砂粒	破片
165	—	深鉢	——	ナデ	ハケ目風擦過	三角	軽	0.4	丸	—	—		淡黄茶褐	黄茶褐	1～5m程度の砂粒	破片
166	—	深鉢	——	ナデ？・擦過	ナデ？	台形	刺	0.7	丸	—	—	磨滅が進む	淡黄褐	淡黄褐	4m以下の砂粒	破片
167	82	深鉢	——	横ナデ・擦過(ナデ?)	ナデ風擦過	台形	押	0.6	面	—	—	(外)炭化物付着	淡褐～黒	淡褐～黒	2m以下の砂粒	破片
168	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	三角	押	0.3	丸	○	—	磨滅が進む	濁黄灰褐	濁黄灰褐	3m以下の砂粒	破片
169	82	深鉢	——	ナデ	ミガキ風擦過	三角	押	0.6	丸	—	—		濁褐	濁褐	2m以下の砂粒	破片
170	—	深鉢	——	軽い擦過	軽い擦過	上三角	軽	0.8	丸	—	—		濁褐	濁褐	1～7m程度の砂粒	破片
171	—	深鉢	——	ナデ	ナデ・ナデ風擦過	三角	押	0.2	面	—	—	(外)黒色物質塗布	黒	黒褐	1～2m以下の砂粒	破片
172	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	下三角	押	0.2	尖	—	—		茶褐	茶褐	1～3m以下の砂粒	破片
173	82	深鉢	——	擦過のちナデ	ナデ	蒲鉾	押	0.6	面	—	—	凸帯は扁平	暗茶褐	淡褐	1～4m程度の砂粒	破片
174	—	深鉢	——	ナデ？	擦過	下三角	軽	0.0	尖	—	—		暗褐	淡褐	2m以下の砂粒	破片
175	—	深鉢	——	剥離	剥離	下三角	押	0.3	尖	—	—		濁橙褐	濁橙褐	3m以下の砂粒	破片

第24表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑭観察表

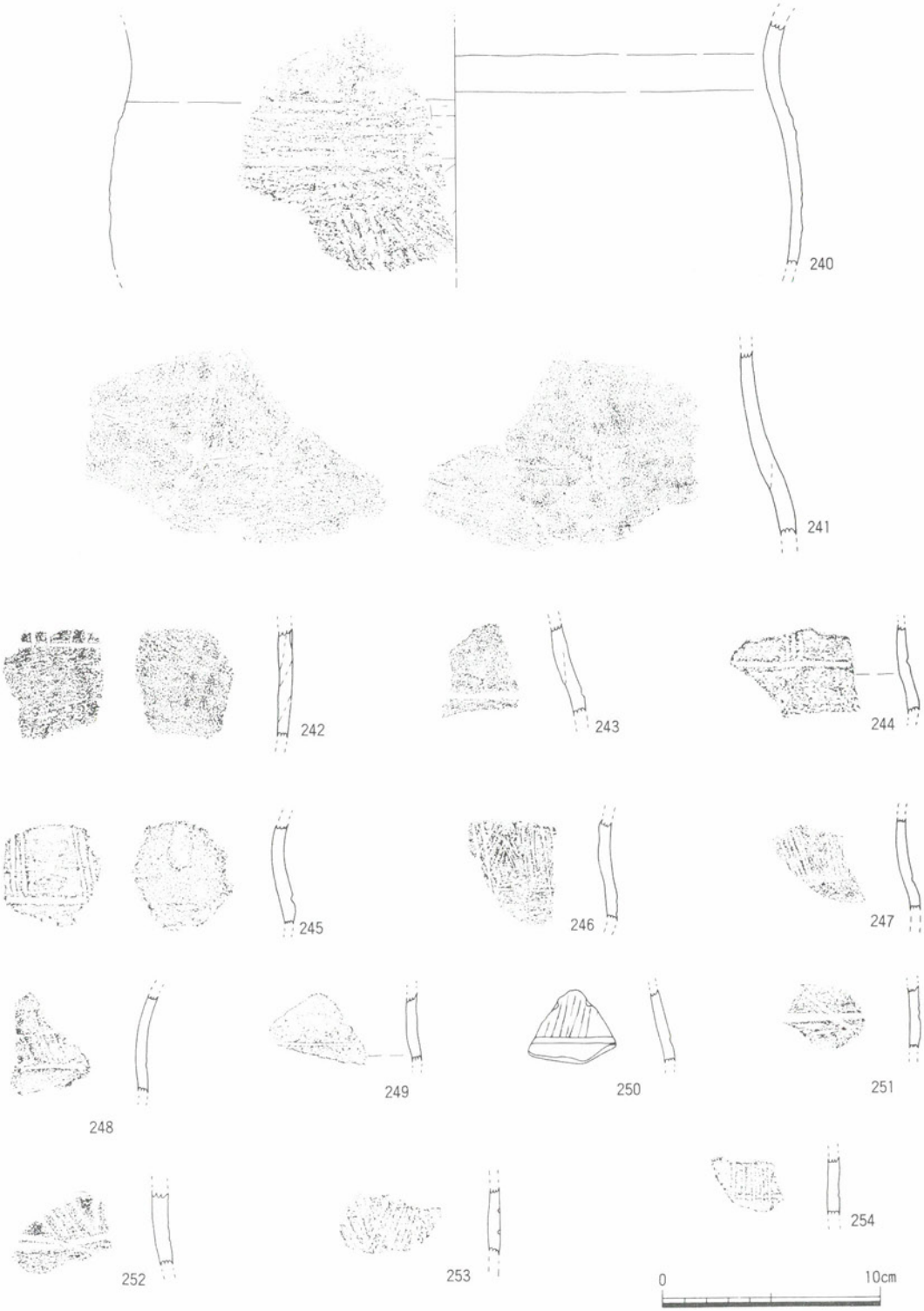
遺物番号	写真図版	器種	法量（cm）	調整 外面	調整 内面	凸帯 断面形	凸帯 施文	凸帯 位置	端形	端刻	内沈	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	残存度
176	—	深鉢	——	ナデ	擦過	下三角	押	0.3	面	—	—		淡茶灰	淡黒褐	1m以下の砂粒	破片
177	—	深鉢	——	擦過	ナデ	蒲鉾	押	0.9	尖	—	—	刷目は器面調整と同じ工具による	淡黒褐	淡黒褐	3m以下の砂粒	破片
178	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	三角	刺	0.7	面	—	—		黒褐	淡茶褐	1m以下の砂粒	破片
179	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	下三角	軽	0.7	尖	—	—	(外)炭化物付着	淡黄褐	淡黒褐	1m以下の砂粒	破片
180	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	台形	押	0.2	丸	○	—		濁灰褐	濁灰褐	1m以下の砂粒	破片
181	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	下三角	押	0.1	丸	—	—		暗橙褐	暗橙褐	1m以下の砂粒	破片
182	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	台形	押	0.8	丸	—	—		濁褐	濁褐	1m程度の砂粒	破片
183	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	三角	押	0.5	面	—	—		暗茶褐	暗茶褐	1～3m程度の砂粒	破片
184	—	深鉢	——	擦過	ナデ	三角	刺	0.4	尖	○	—	(外)炭化物付着	淡茶褐	淡茶褐	1～3m程度の砂粒	破片
185	—	深鉢	——	擦過	磨滅のため不明	台形	刺	1.6	丸	○	—	器面の剥みはほとんど顕著	灰茶褐	淡橙褐	3m以下の砂粒	破片
186	—	深鉢	——	擦過？	ナデ	上三角	軽	0.4	丸	○	—	(外)炭化物付着	暗褐	暗褐	2m以下の砂粒	破片
187	—	深鉢	——	擦過？	磨滅（ナデ？）	三角	刺	0.3	丸	—	—		淡褐	淡褐	1～4m程度の砂粒	破片
188	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	三角	押	0.5	面	—	—	刷目は横位の小D字	淡黄褐	淡黄褐	2m程度の砂粒	破片
189	—	深鉢	——	ナデ	ナデ・指押さえのちナデ・ナデ	三角	押	0.5	尖	—	—		濁灰褐	淡灰褐	1～3m程度の砂粒	破片
190	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	下三角	刺	0.4	丸	—	—	(外)炭化物付着	灰黒褐	黒褐	1～3m程度の砂粒	破片
191	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	三角	軽	0.5	尖	—	—	磨滅が著しい	白褐	白褐	1m以下の砂粒	破片
192	—	深鉢	——	擦過？	磨滅のため不明	三角	軽	0.2	尖	—	—	磨滅が著しい	淡橙褐	淡橙褐	3m以下の砂粒	破片
193	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	三角	軽	0.8	尖	—	—	磨滅が著しい	黄褐	黄褐	1～3m程度の砂粒	破片
194	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	三角	軽	0.0	面	—	—		暗褐	暗褐	3m以下の砂粒	破片
195	—	深鉢	——	擦過	擦過	台形	軽	0.5	尖	—	—	磨滅が著しい	暗灰褐	黒褐	1m程度の砂粒	破片
196	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	台形	押	0.5	丸	—	—		暗褐	暗褐	2m程度の砂粒	破片
197	—	深鉢	——	擦過	ナデ	三角	軽	0.1	丸	—	—	磨滅が進む	黄褐～黒褐	黄褐～黒褐	1m以下の砂粒	破片
198	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	下三角	押	0.3	尖	—	—		暗褐	暗褐	2m以下の砂粒	破片
199	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	三角	軽	0.3	尖	—	—		淡黄褐	淡黄褐	1～6m程度の砂粒	破片
200	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	蒲鉾	刺	0.6	丸	—	—	磨滅が著しい	淡灰褐	淡灰褐	4m以下の砂粒	破片
201	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	三角	軽	0.7	面	—	—		乳白	乳白	2m以下の砂粒	破片
202	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	蒲鉾	押	0.8	丸	—	—		濁黄褐	濁黄褐	2m程度の砂粒	破片
203	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	蒲鉾	刺	0.8	面	—	—	磨滅が著しい	黒褐	暗茶褐	1m程度の砂粒	破片
204	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	蒲鉾	刺	0.6	面	—	—		明褐	淡褐	1m以下の砂粒	破片
205	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	三角	軽	0.4	尖	—	—		淡褐	黒	1m以下の砂粒	破片
206	—	深鉢	——	擦過？	ナデ	台形	軽	0.4	丸	—	—		淡黄褐	淡黒褐	1～5m程度の砂粒	破片



第39図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑮



第40図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑯



第41図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑰

第25表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑮観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm)	調整 外面	調整 内面	凸帯 断面形	凸帯 施文法	凸帯 位置	端部形	端部刻	内面沈	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	残存度
207	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	三角	刺	0.5	面	—	—		暗茶褐	暗茶褐	1～3㎜程度の砂粒	破片
208	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	三角	軽	0.7	尖	—	—	磨滅が著しい	濁褐	淡褐	1㎜以下の砂粒	破片
209	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	下三角	軽	1.0	尖	—	—		淡褐	淡褐	1～3㎜程度の砂粒	破片
210	—	深鉢	——	擦過？	ナデ	三角	刺	0.3	丸	—	—		淡橙褐	黒褐	2㎜以下の砂粒	破片
211	—	深鉢	——	擦過	ナデ	蒲鉾	軽	0.1	面	○	—		暗褐	暗褐	2㎜以下の砂粒	破片
212	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	下三角	押	0.6	尖	○	—	(外)炭化物付着	黒	暗褐	1㎜程度の砂粒	破片
213	—	深鉢	——	擦過	ナデ	下三角	軽	0.0	面	○	—	磨滅が進む	暗褐	暗褐	2㎜程度の砂粒	破片
214	—	深鉢	——	剥離のため不明	粗いハケ目風擦過	三角	押	0.1	尖	—	—	刻目は軽めのD字	暗茶褐	黒褐～暗茶褐	1～2㎜程度の砂粒	破片
215	—	深鉢	——	擦過	ナデ	台形	押	0.3	面	○	—		濁茶褐	濁茶褐	4㎜以下の砂粒	破片
216	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	台形	軽	0.4	尖	○	○	扁平な凸帯	淡茶褐	淡茶褐	1㎜以下の砂粒	破片
217	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	下三角	軽	0.4	丸	○	○	口縁端部は尖り気味の丸	暗褐	暗褐	1㎜程度の砂粒	破片
218	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	台形	刺	0.3	丸	○	○	口縁部凸帯の磨滅が著しい	暗茶褐	暗茶褐	3㎜程度の砂粒	破片
219	—	深鉢	——	ナデ	磨滅・ナデ風擦過	台形	刺	0.4	丸	○	○	波状口縁 (外)炭化物付着	濁茶褐	濁茶褐	2㎜程度の砂粒	破片
220	82	深鉢	(26.0)	磨滅のため不明	ナデ	蒲鉾	軽	0.4	丸	—	—	(外)頸部にヘラ描文	濁灰褐	濁灰褐	4㎜程度の砂粒	1／12
221	—	深鉢	(33.0)	ナデ・擦過	ナデ？	下三角	押	0.5	面	—	—	(外)頸部にヘラ描文	黒褐～暗茶褐	濁褐	1～3㎜程度の砂粒	1／8
222	—	深鉢	(26.0)	条痕風擦過	ナデ？	蒲鉾	軽	0.5	丸	—	—	(外)頸部に文様	黒褐	淡茶褐	4㎜以下の砂粒	1／12
223	82	深鉢	(27.0)	ナデ風擦過？	ナデ	三角	軽	0.7	丸	○	—	(外)頸部に文様	濁白褐	黒褐	5㎜以下の砂粒	1／12

第26表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑯観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm)	調整 外面	調整 内面	凸帯 断面形	凸帯 施文法	凸帯 位置	端部形	端部刻	内面沈	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	残存度
224	82	深鉢	(28.0)	ナデ風擦過？	ナデ	上三角	押	0.7	丸	○	—	(外)頸部に文様	濁黄褐	黒褐	3㎜以下の砂粒	1／12
225	82	深鉢	——	ナデ風擦過	粗い擦過	下三角	刺	0.3	丸	—	—	(外)頸部にヘラ描文	淡褐	暗褐	1～4㎜程度の砂粒多い	破片
226	—	深鉢	——	剥離のため不明	剥離のため不明	三角	軽	0.2	面	—	—	(外)頸部にヘラ描文	淡褐	淡茶褐	1～4㎜程度の砂粒	破片
227	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	蒲鉾	軽	0.3	丸	—	—	(外)頸部に櫛小口による文様	淡褐	灰茶褐	1～4㎜以下の砂粒	破片
228	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	三角	軽	0.6	尖	—	—	(外)頸部にヘラ描文 凸帯が磨滅	淡灰茶褐	淡灰茶褐	3㎜以下の砂粒	破片
229	—	深鉢	——	ナデ	磨滅のため不明	三角	軽	0.6	尖	—	—	(外)頸部にヘラ描文	淡黄褐	灰白褐	1～3㎜程度の砂粒	破片
230	—	深鉢	——	擦過？	ナデ	三角	軽	0.5	面	—	—	(外)頸部にヘラ描文	暗茶褐	暗茶褐	1㎜程度の砂粒	破片
231	—	深鉢	——	擦過？	ナデ	台形	軽	0.4	丸	—	—	(外)頸部に文様	淡黄褐	淡黒褐	1～4㎜程度の砂粒	破片
232	—	深鉢	——	擦過？	ナデ？	三角	軽	0.6	尖	—	—	(外)頸部に文様	暗茶褐	暗茶褐	3㎜以下の砂粒	破片
233	—	深鉢	——	擦過？	ナデ	台形	軽	0.4	面	—	—	(外)頸部に文様	暗褐	淡褐	1㎜程度の砂粒	破片
234	—	深鉢	——	擦過？	ナデ？	三角	押	0.7	丸	—	—		淡茶褐	淡茶褐	2㎜以下の砂粒	破片
235	—	深鉢	——	擦過？	ナデ	三角	押	0.5	丸	—	—	(外)頸部に文様	濁黄褐	淡褐	3㎜以下の砂粒	破片
236	—	深鉢	——	擦過？	ナデ？	下三角	軽	0.5	尖	—	—	端部磨滅 (外)頸部に文様	淡黄褐	淡黄褐	3㎜以下の砂粒	破片
237	83	深鉢	——	ナデ・粗いケズリ風擦過	擦過のちナデ	——	—	—	—	—	—	頸部の境は調整の違い	暗茶褐	淡黒褐	1㎜以下の砂粒	1／6
238	83	深鉢	——	磨滅のため不明	剥離のため不明	——	—	—	—	—	—	(外)屈曲部に沈線1条・頸部文様	暗黄茶褐	暗黄茶褐	3㎜以下の砂粒	1／6
239	—	深鉢	——	磨滅	ナデ	——	—	—	—	—	—	頸部凸帯?	濁褐	濁褐	1～4㎜程度の砂粒	破片

第27表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑰観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm)	調整 外面	調整 内面	凸帯 断面形	凸帯 施文法	凸帯 位置	端部形	端部刻	内面沈	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	残存度
240	—	深鉢	——	ナデ・ケズリ風擦過	ナデ	——	—	—	—	—	—	頸部の境は調整の違い	黒褐～暗黄褐	暗茶褐	2㎜以下の砂粒	1／8
241	—	深鉢	——	ナデ・擦過	ナデ・擦過	——	—	—	—	—	—	頸部の境は調整の違い	黒	濁黄褐	2㎜以下の砂粒	破片
242	—	深鉢	——	ケズリ風擦過	擦過	——	—	—	—	—	—	屈曲部に沈線? 沈線直上に文様	濁黄褐	濁黄褐	1㎜以下の砂粒	破片
243	—	深鉢	——	擦過	擦過のちナデ・擦過	——	—	—	—	—	—	(外)屈曲部に沈線1条・炭化物	暗茶褐	暗褐	1㎜程度の砂粒	破片
244	—	深鉢	——	擦過	擦過	——	—	—	—	—	—	(外)屈曲部に沈線1条・頸部文様	暗茶褐	濁褐	5㎜以下の砂粒	破片
245	—	深鉢	——	ナデ風擦過	ナデ	——	—	—	—	—	—	(外)屈曲部に沈線1条・頸部文様	黄褐	黄褐	3㎜以下の砂粒	破片
246	83	深鉢	——	ナデ・ケズリ風擦過	ナデ	——	—	—	—	—	—	(外)屈曲部に沈線1条・頸部文様	暗茶褐	暗茶褐	2㎜程度の砂粒	破片
247	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	——	—	—	—	—	—	(外)屈曲部に沈線1条・頸部文様	暗褐	暗灰褐	2㎜以下の砂粒	破片
248	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	——	—	—	—	—	—	(外)屈曲部に沈線1条・頸部文様	濁黄褐	淡黒褐	5㎜程度の砂粒	破片

249	—	深鉢	——	炭化物で不明	ナデ風擦過	——	—	—	—	—	—	(外)屈曲部に沈線1条・炭化物	黒褐	淡黒褐	4mm以下の砂粒	破片
250	—	深鉢	——	磨滅・ナデ	ナデ	——	—	—	—	—	—	(外)屈曲部に沈線1条・縄目文様	淡黄褐	暗茶褐	2mm以下の砂粒	破片
251	—	深鉢	——	擦過	ナデ	——	—	—	—	—	—	(外)屈曲部に沈線1条・縄目文様	濁茶褐	濁茶褐	2mm以下の砂粒	破片
252	83	深鉢	——	擦過	ナデ風擦過	——	—	—	—	—	—	(外)頸部にヘラ描文	淡褐	暗褐	2mm以下の砂粒	破片
253	83	深鉢	——	磨滅のため不明	剥離のため不明	——	—	—	—	—	—	(外)頸部にヘラ描文	暗灰茶褐	暗灰茶褐	3mm以下の砂粒	破片
254	—	深鉢	——	磨滅のため不明	ナデ？	——	—	—	—	—	—	(外)頸部にヘラ描文	濁黄褐	暗灰茶	3mm以下の砂粒	破片

262～413は浅鉢である。

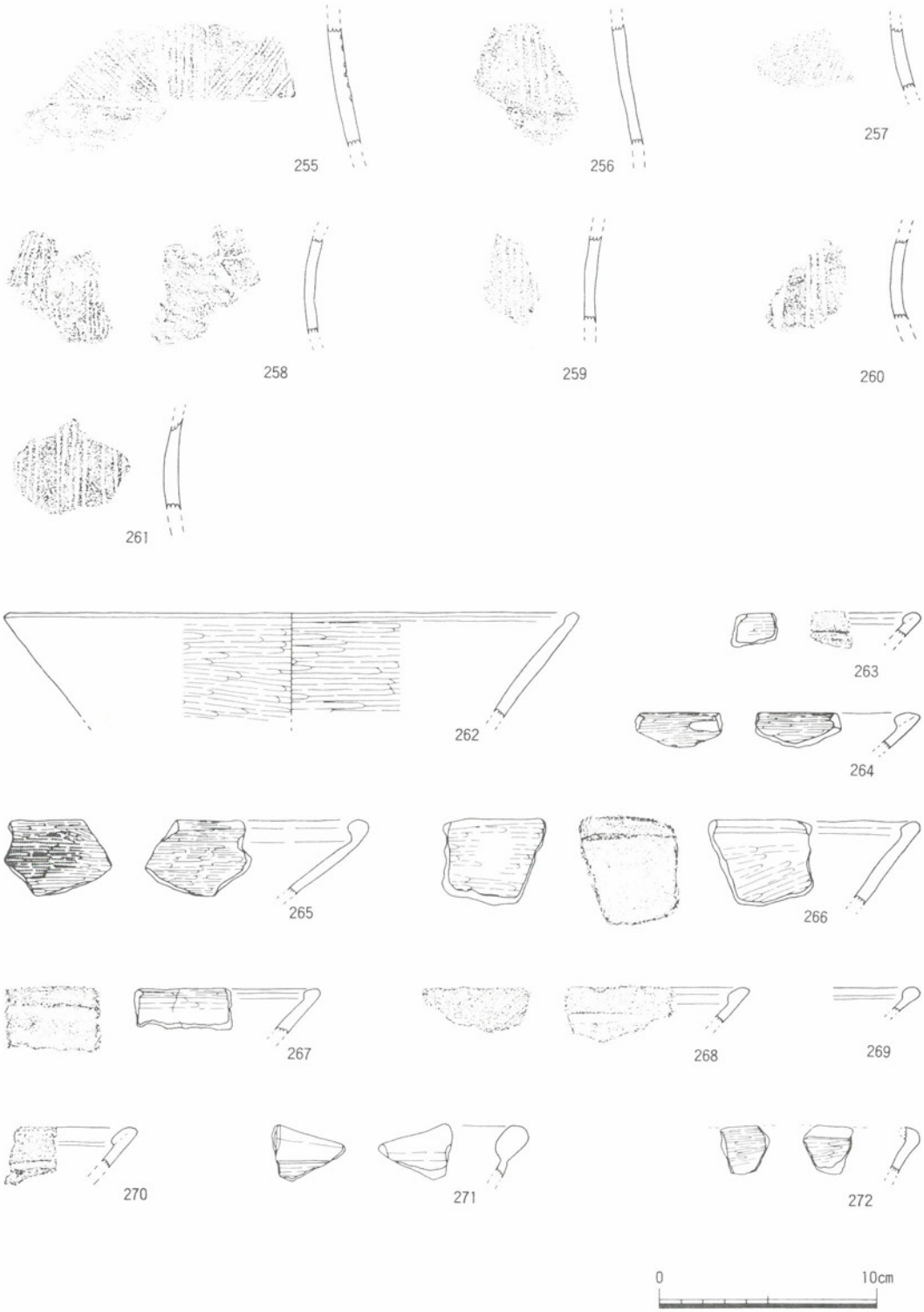
262～272は口縁端部の内面が肥厚する浅鉢である。いずれも内面・外面ともに丁寧な横方向のミガキ調整を施している。265は黒色磨研浅鉢で，外面に赤色顔料が遺存している。271はリボン状凸起の破片である。272は黒色磨研系の浅鉢で，口縁部の凸起が剥離したものと思われる。273～280は器形が屈曲せず椀形を呈する波状口縁の浅鉢である。273は口縁部は大きな波頂部と小さな波頂部が交互に連続する波状口縁浅鉢である。内面と外面の上半部は横方向のミガキ調整が施されているが，外面下半部はナデ風擦過である。外面には炭化物が付着している。275は黒色磨研浅鉢の波頂部の破片であるが，内外面ともにミガキが施され273と同様の器形を呈すると思われる。276は黒色磨研浅鉢の波頂部破片であるが，波頂部に一対の刻みが施されている。277・278も波頂部の破片であるが，内面に277は沈線１条，278は沈線２条が施されている。

281～307は屈曲する肩部をもち口頸部が外反する波状口縁の浅鉢である。282・283は内面に沈線１条を施した波頂部である。285は黒色磨研系浅鉢の波頂部で内面に沈線１条を施す。287は黒色磨研系浅鉢の波頂部で，内面に２条の沈線を施し波頂部に一対の刻みを施す。293は波頂部に３個の刻目を施している。296は黒色磨研方形浅鉢の波頂部である。内外面ともに丁寧なミガキ

第28表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑱観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm)	調整 外面	調整 内面	凸帯 断面形	凸帯 施文法	凸帯 位置	端部形	端部刻	内面沈	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	残存度
255	83	深鉢	——	ナデ・擦過	ナデ風擦過	——	—	—	—	—	—	(外)屈曲部に沈線1条・縄目文様	濁褐	淡黒褐	4mm以下の砂粒	破片
256	—	深鉢	——	ナデ・擦過	ナデ？	——	—	—	—	—	—	(外)頸部にヘラ描文	茶褐	濁褐	2mm以下の砂粒	破片
257	—	深鉢	——	ナデ	ナデ風擦過	——	—	—	—	—	—	(外)頸部にヘラ描文	濁褐	淡黒	3mm以下の砂粒	破片
258	—	深鉢	——	磨滅（ナデ？）	磨滅（ナデ？）	——	—	—	—	—	—	(外)頸部にヘラ描文	淡茶褐	淡黒褐	1mm程度の砂粒	破片
259	—	深鉢	——	磨滅のため不明	ナデ？	——	—	—	—	—	—	(外)頸部にヘラ描文	暗灰茶褐	暗灰茶褐	3mm以下の砂粒	破片
260	—	深鉢	——	剥離のため不明	剥離のため不明	——	—	—	—	—	—	(外)頸部にヘラ描文	濁茶褐	濁茶褐	5mm以下の砂粒	破片
261	—	深鉢	——	磨滅のため不明	ナデ？	——	—	—	—	—	—	(外)頸部にヘラ描文	濁茶褐	濁黄褐	2mm以下の砂粒	破片

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	調整 内面	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	遺存度
262	84	縄文　浅鉢	(26.0)	——	——	ナデ・ミガキ	ナデ・段・ミガキ	端部面取り	暗褐	暗褐	1～2mm程度の砂粒	1／12
263	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ケズリ	ケズリ		淡灰褐	淡灰褐	1mm以下の砂粒	破片
264	84	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	端部内面肥厚	淡褐	淡灰褐	1～2mm程度の砂粒	破片
265	84	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	黒色磨研・端部内面肥厚・外面に赤色顔料が遺存	黒褐	黒褐	1mm以下の砂粒	破片
266	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	端部内面肥厚	淡茶褐	淡茶褐	1～2mm程度の砂粒	破片
267	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ナデ	ミガキ	端部内面肥厚	濁茶褐	濁茶褐	1～3mm程度の砂粒	破片
268	84	縄文　浅鉢	——	——	——	磨滅のため不明	ミガキ	端部内面肥厚	濁灰褐	濁茶褐	1mm程度の砂粒	破片
269	—	縄文　浅鉢	——	——	——	磨滅	磨滅	端部内面肥厚	濁褐	濁～淡褐	1mm程度の砂粒	破片
270	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	端部内面肥厚	淡黄褐	淡黄褐	1～2mm程度の砂粒	破片
271	84	縄文　浅鉢	——	——	——	ナデ	ナデ・ミガキ	リボン状凸起	灰褐～黒褐	灰褐～黒褐	1mm程度の砂粒	破片
272	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	黒色磨研系・凸起の剥離した口縁部か？	黒	黒	1mm程度の砂粒	破片



第42図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑱

調整が施されている。298～306は波状口縁の可能性が強い浅鉢の口縁部である。頸部の屈曲が緩やかになっており，内面をみると屈曲の強い浅鉢では段を有していたものが屈曲部の退化にともなって沈線に変化していることがわかる。307は黒色磨研方形浅鉢である。内外面ともに丁寧な横方向のミガキ調整が施されており，口縁部内面には沈線が１条施されている。

308～318は屈曲する肩部から口頸部が内傾する浅鉢である。黒色磨研および黒色磨研系のものが多く認められる。308は口縁部内面と肩部外面にそれぞれ１条の沈線をめぐらせている。調整は内外面ともに横方向のミガキ調整である。312・314はともに頸部外面に２条の沈線をめぐらせている。313は口縁外面が肥厚している。

319～323は屈曲する肩部から外反する口頸部が短い浅鉢である。内外面ともにミガキ調整のものが多い。312は短い口頸部に焼成前の穿孔がみられる。

324～334は屈曲する肩部から外反する口頸部が長い浅鉢である。内外面ともにミガキ調整のものが多く，黒色磨研系のものも認められる。いずれも口縁部の内面に１条の沈線をめぐらせている。

335～350は屈曲する肩部の破片である。いずれも外反する口頸部を有するものと思われるが，口頸部の長短については口頸部を欠損するため判断できない。調整は内面がミガキ調整であるのに対し，外面は擦過調整のものが多い。黒色磨研系のものも認められる。

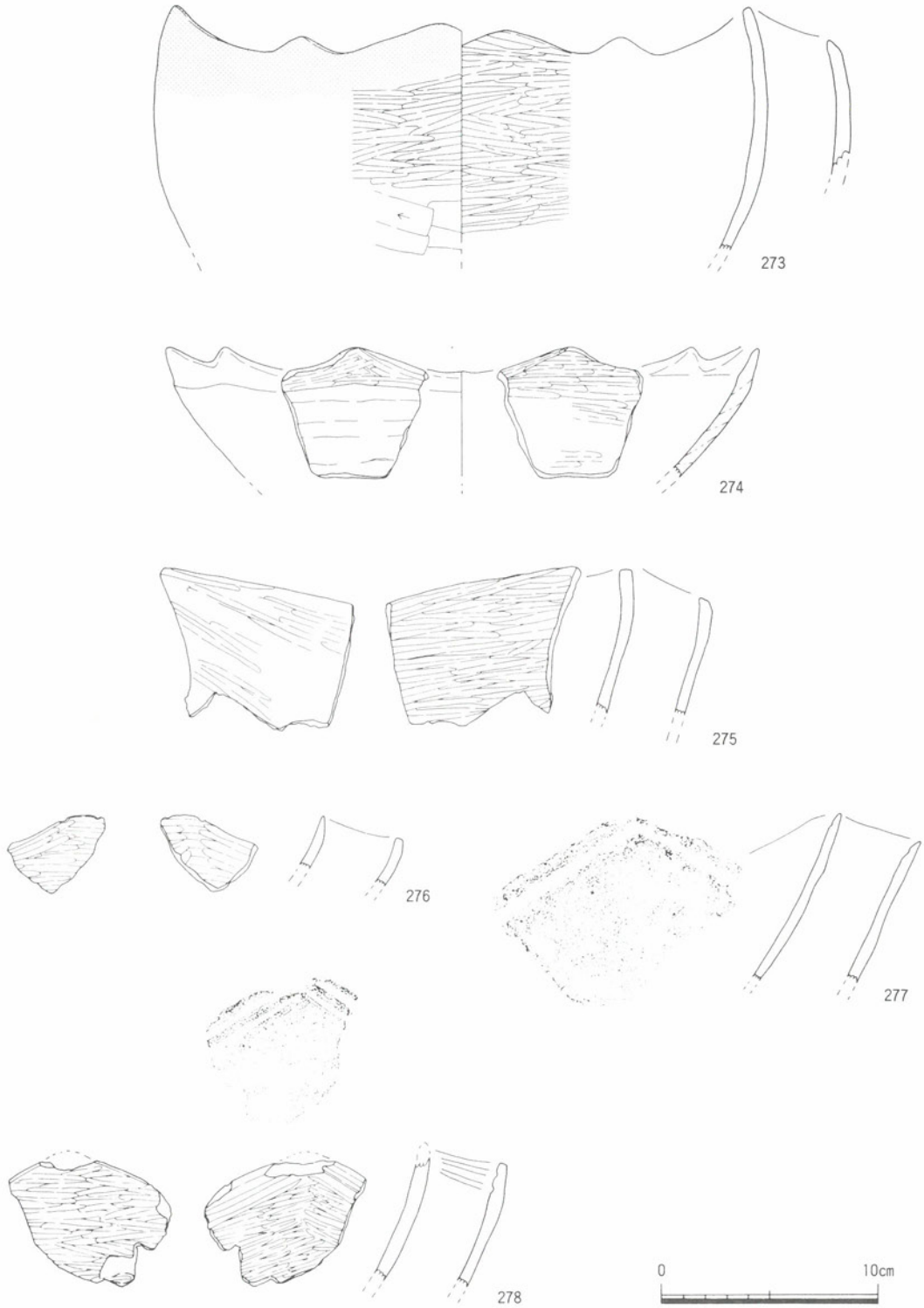
351～356は椀・皿形の器形を呈する浅鉢のうち，口縁部内面に２条の沈線をめぐらせるものである。調整は内外面ともにナデ・ミガキが中心で，比較的丁寧な仕上げをしている。黒色磨研系のものも多い。

357～386は椀・皿形の器形を呈する浅鉢のうち，口縁部内面に１条の沈線をめぐらせるものである。調整は内外面ともにナデ・ミガキが中心であるが，擦過調整のものも見受けられる。黒色磨研系のものも認められる。367は口縁部内面に赤色顔料が遺存している。367は口縁内面の沈線直下に，焼成前の穿孔が施されている。

387～408は椀・皿形の器形を呈する浅鉢のうち，口縁部内面に沈線をもたないものである。調整は内外面ともにナデ・ミガキが中心であるが，擦過調整のものもみられる。黒色磨研のものも多く，比較的丁寧な仕上げのものが多い。

第29表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑲観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	その他	色調 外面	内面	胎土	遺存度
273	84	縄文 浅鉢	26.8	——	——	ミガキ・ナデ風擦過	ミガキ・擦過	波状口縁（外）炭化物付着	暗茶褐	淡黒褐	1～2mm程度の砂粒	1／4
274	—	縄文 浅鉢	(27.4)	——	——	ミガキ・ナデ風擦過	ミガキ	波状口縁	淡灰茶褐	淡灰茶褐	1～2mm程度の砂粒	1／12
275	—	縄文 浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	波状口縁・黒色磨研	淡黒褐	淡黒褐	5mm以下の砂粒少し	破片
276	—	縄文 浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	波状口縁・黒色磨研・波頂部付近に孔	黒褐	黒褐	1mm以下の砂粒	破片
277	85	縄文 浅鉢	——	——	——	磨滅	磨滅	波状口縁・内面沈線１条	暗茶褐	暗茶褐	3mm以下の砂粒	1／8
278	85	縄文 浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	波状口縁・黒色磨研・内面沈線２条	灰黒褐	灰黒褐	1mm程度の砂粒少し	破片



第43図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑲

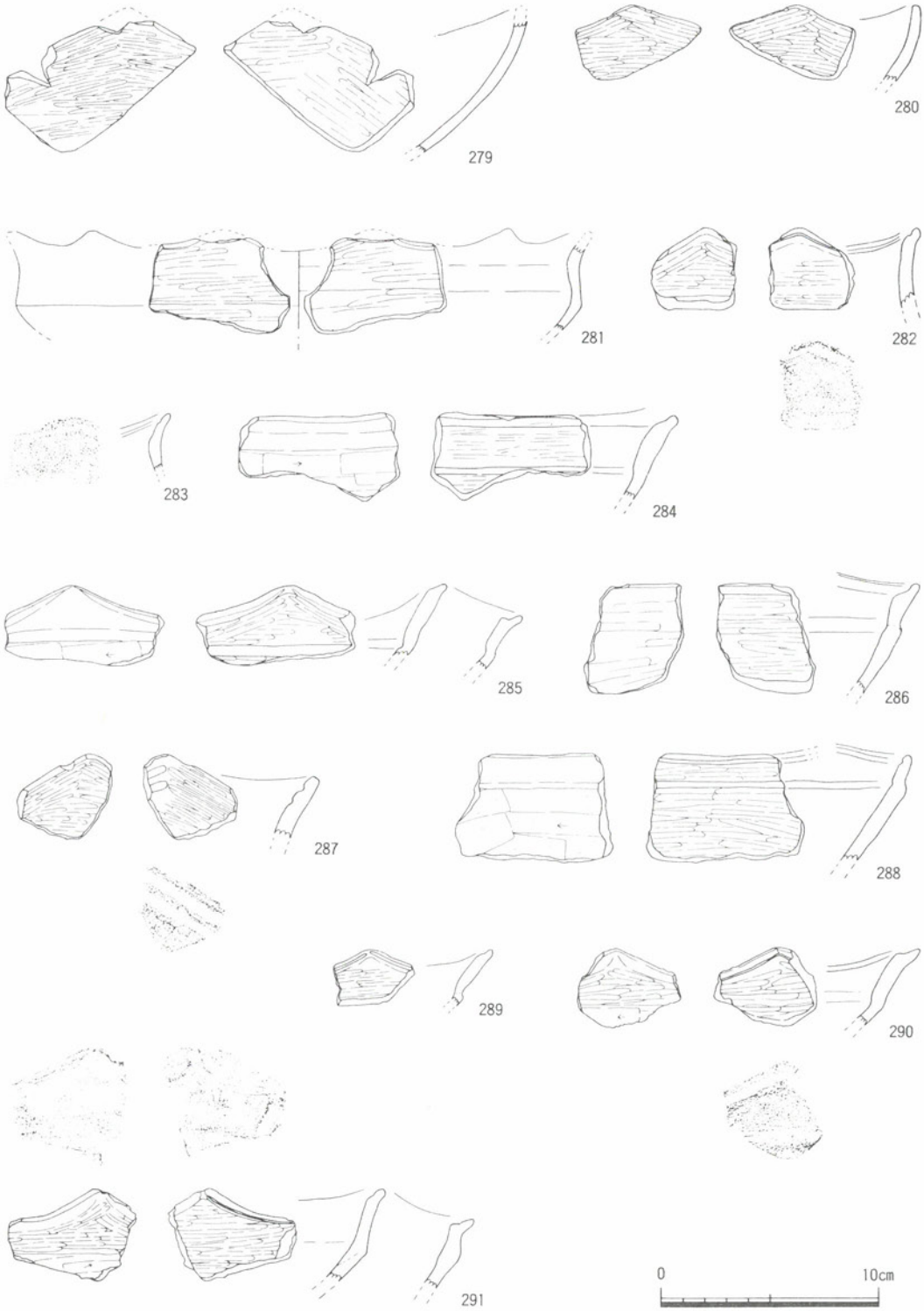
409～413は屈曲する肩部から長い口頸部が内傾ないし内彎する浅鉢である。409は直線的に長い口頸部から口縁端部が短く外傾する器形を呈しており，肩部外面に細い１条の沈線をめぐらせている。調整は内外面ともに横方向のミガキで仕上げられている。肩部やや上とやや下に計２個の穿孔がみられる。穿孔部には黒色物質が塗布されており，補修孔の可能性も残る。410は409と同様な口頸部であるが，口縁部やや下に穿孔がなされている。411・412は肩部の破片であるが，いずれも肩部外面に細い沈線を１条めぐらせている。412は孔が穿たれている。

第30表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑳観察表

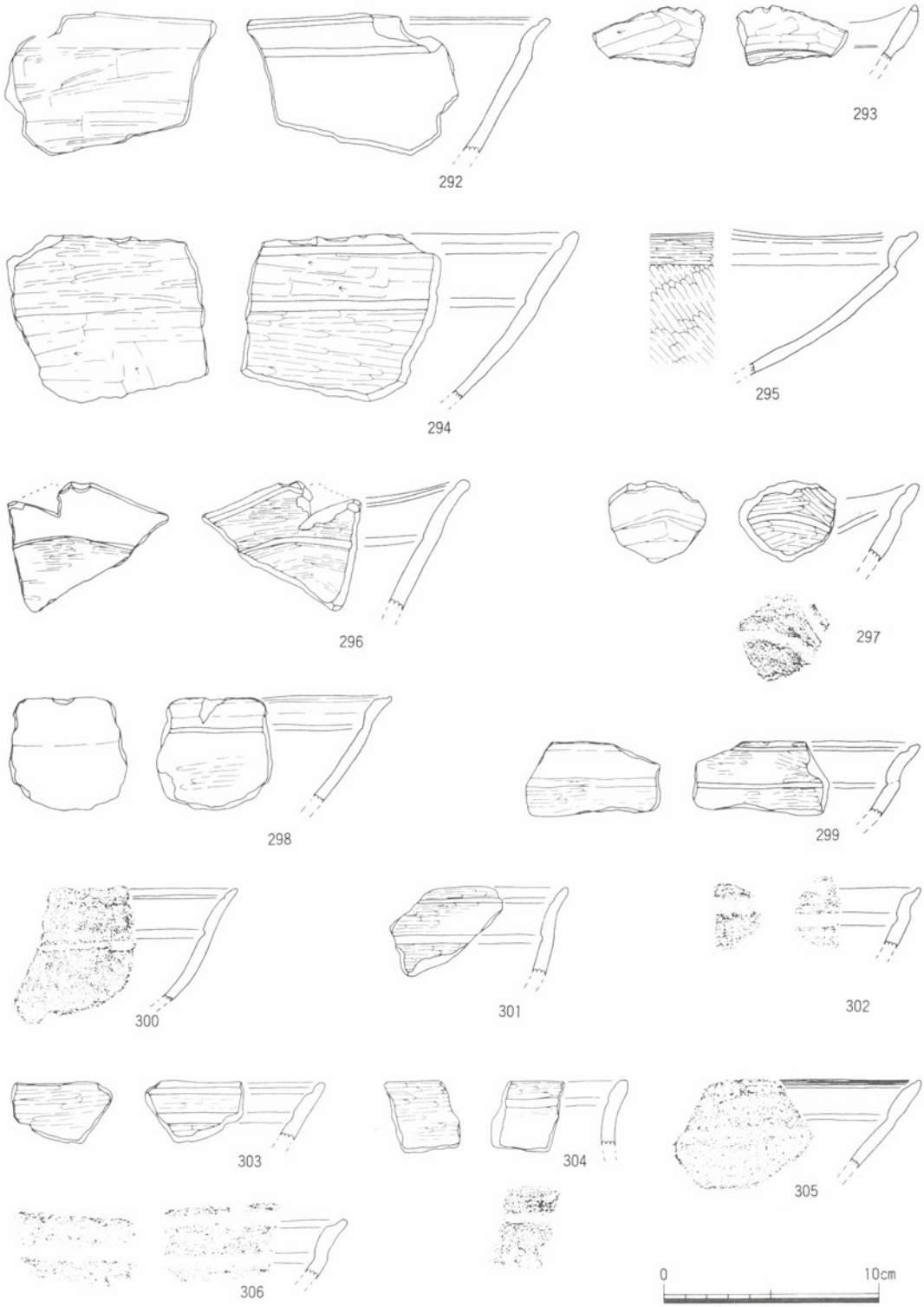
遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	その他	色調 外面	内面	胎土	遺存度
279	—	縄文　浅鉢	—	—	—	ミガキ	ミガキ	波状口縁・黒色磨研	黒	黒	1～2m程度の砂粒少し	破片
280	85	縄文　浅鉢	—	—	—	ミガキ	ミガキ	波状口縁	淡灰茶褐	淡灰茶褐	1m以下の砂粒少し	破片
281	—	縄文　浅鉢	(26.8)	—	—	ミガキ	ミガキ	波状口縁・黒色磨研系	黒	黒	1m以下の砂粒少し	破片
282	—	縄文　浅鉢	—	—	—	ミガキ	ミガキ	波状口縁・黒色磨研系・内面沈線1条	暗茶褐	暗茶褐	1m以下の砂粒少し	破片
283	—	縄文　浅鉢	—	—	—	ミガキ（ナデ？）	擦過	波状口縁・内面沈線１条	暗茶褐	黒	1m以下の砂粒	破片
284	85	縄文　浅鉢	—	—	—	ナデ・擦過	ミガキ	波状口縁・黒色磨研系・内面沈線1条	淡黄褐	黒褐	1～3m程度の砂粒	破片
285	85	縄文　浅鉢	—	—	—	丁寧なナデ・擦過	ミガキ	波状口縁・黒色磨研系・内面沈線1条	淡黒褐	灰褐	2m以下の砂粒	1／6
286	85	縄文　浅鉢	—	—	—	粗いミガキ	粗いミガキ・ミガキ	波状口縁・内面沈線１条	濁褐	暗褐	1～5m程度の砂粒	破片
287	85	縄文　浅鉢	—	—	—	ミガキ	ミガキ	波状口縁・黒色磨研系・内面沈線2条・波頂部付近に刻み	黒茶褐	黒	1m程度の砂粒少し	破片
288	85	縄文　浅鉢	—	—	—	丁寧なナデ・ケズリ風擦過	ミガキ	波状口縁・黒色磨研系・内面沈線1条	暗茶褐	黒褐	1～4m程度の砂粒少し	破片
289	85	縄文　浅鉢	—	—	—	丁寧なナデ	ミガキ	波状口縁・内面沈線１条	濁茶褐	濁茶褐	3m程度の砂粒	破片
290	85	縄文　浅鉢	—	—	—	ミガキ・擦過	ミガキ	波状口縁・黒色磨研系・内面沈線1条	暗茶褐	淡黒褐	2m程度の砂粒少し	破片
291	85	縄文　浅鉢	—	—	—	ミガキ・ミガキ風擦過	ミガキ	波状口縁・黒色磨研系・内面沈線1条	暗褐	濁褐	2m程度の砂粒少し	破片

第31表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㉑観察表

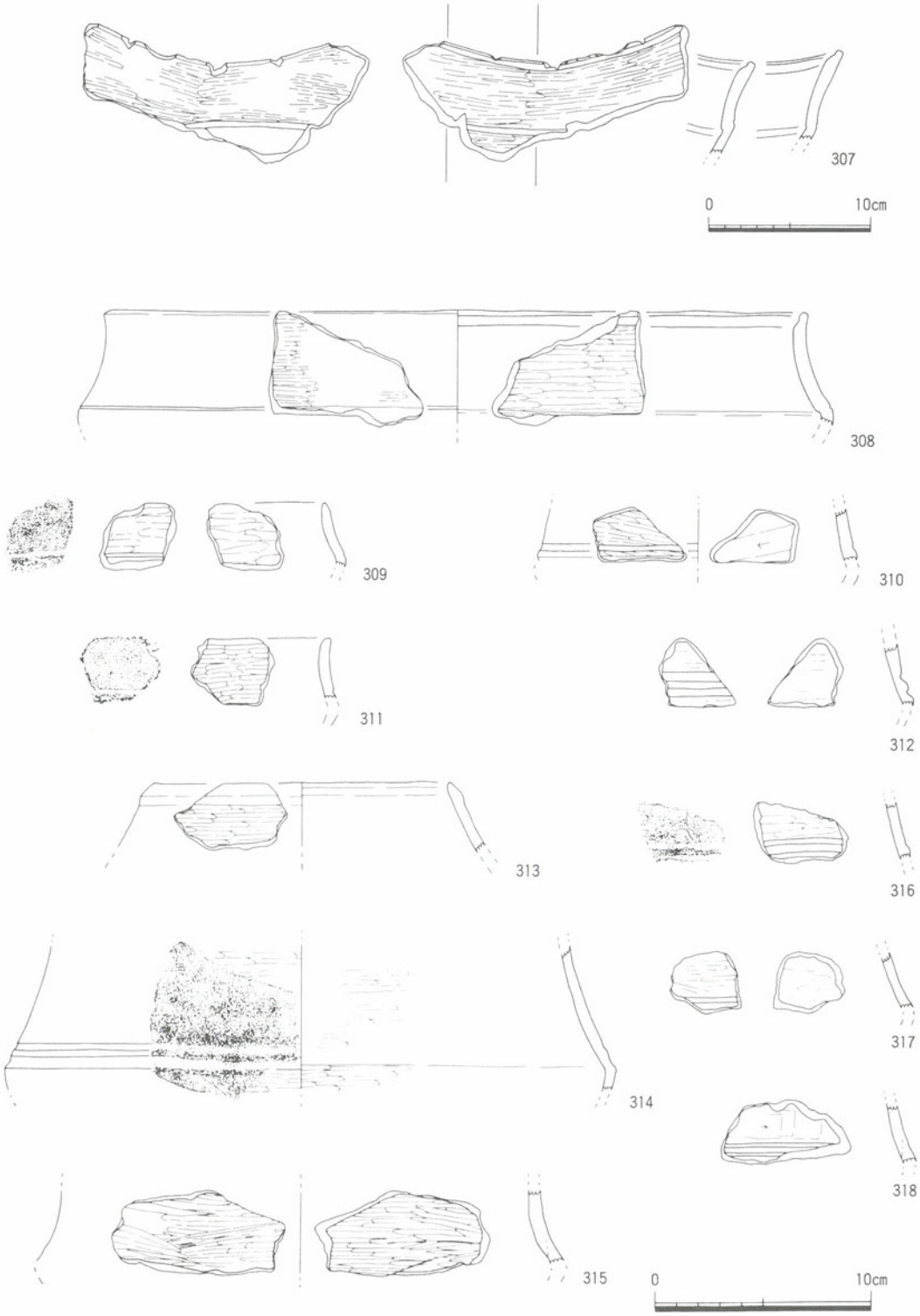
遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	その他	色調 外面	内面	胎土	遺存度
292	86	縄文　浅鉢	—	—	—	ナデ・擦過	剥離（ミガキ）	波状口縁・内面沈線1条	暗褐	濁褐	3m以下の砂粒	破片
293	—	縄文　浅鉢	—	—	—	ミガキ風擦過	ミガキ風擦過	波状口縁・波頂部付近に刻み	暗茶褐	暗茶褐	2m程度の砂粒	破片
294	86	縄文　浅鉢	—	—	—	ミガキ・ケズリ風擦過	粗いミガキ風擦過・ミガキ	波状口縁・黒色磨研系・内面沈線1条	暗褐	暗褐	2m以下の砂粒	破片
295	86	縄文　浅鉢	—	—	—	ナデ・ミガキ・ケズリ	ナデ・ミガキ	波状口縁・黒色磨研系・内面沈線1条	黒褐	黒褐	1m程度の雲母少し	破片
296	86	縄文　浅鉢	—	—	—	ナデ・ミガキ	ミガキ	波状口縁・黒色磨研・波頂部付近に刻み・(内)沈線1条	黒	黒	1m以下の砂粒少し	破片
297	86	縄文　浅鉢	—	—	—	ナデ？・擦過	ミガキ	波状口縁・黒色磨研・波頂部付近に刻み・(内)沈線1条	黒	暗茶褐	2m以下の砂粒	破片
298	—	縄文　浅鉢	—	—	—	磨滅のため不明	ミガキ	波状口縁の可能性・(内)沈線1条	暗茶褐	暗茶褐	4m以下の砂粒	破片
299	87	縄文　浅鉢	—	—	—	ミガキ・ナデ・ミガキ	ミガキ	波状口縁・黒色磨研・(内)沈線1条	黒褐	黒褐	1m程度の砂粒	破片
300	—	縄文　浅鉢	—	—	—	剥離・擦過	ミガキ	波状口縁・(内)沈線1条	暗茶褐	濁黄褐	1～3m以下の砂粒	破片
301	—	縄文　浅鉢	—	—	—	ナデ？	ミガキ？	波状口縁・断面が逆心・(内)沈線1条	暗茶褐	褐	1～4m程度の砂粒	破片
302	—	縄文　浅鉢	—	—	—	磨滅のため不明	ミガキ	波状口縁の可能性・(内)沈線1条	暗褐	暗褐	1～3m程度の砂粒	破片
303	87	縄文　浅鉢	—	—	—	ミガキ	ミガキ	波状口縁・黒色磨研・(内)沈線1条	黒	黒	1m程度の砂粒	破片
304	—	縄文　浅鉢	—	—	—	ミガキ	ミガキ	波状口縁の可能性・黒色磨研系・(内)沈線1条	暗灰茶褐	暗灰茶褐	3m程度の砂粒	破片
305	—	縄文　浅鉢	—	—	—	磨滅のため不明	磨滅のため不明	波状口縁の可能性・(内)沈線1条	濁黄褐	濁黄褐	2～5m程度の砂粒	破片
306	87	縄文　浅鉢	—	—	—	磨滅のため不明	ナデ？・ミガキ？	波状口縁の可能性・(内)沈線1条	淡黄褐	淡黄褐	1～4m程度の砂粒	破片



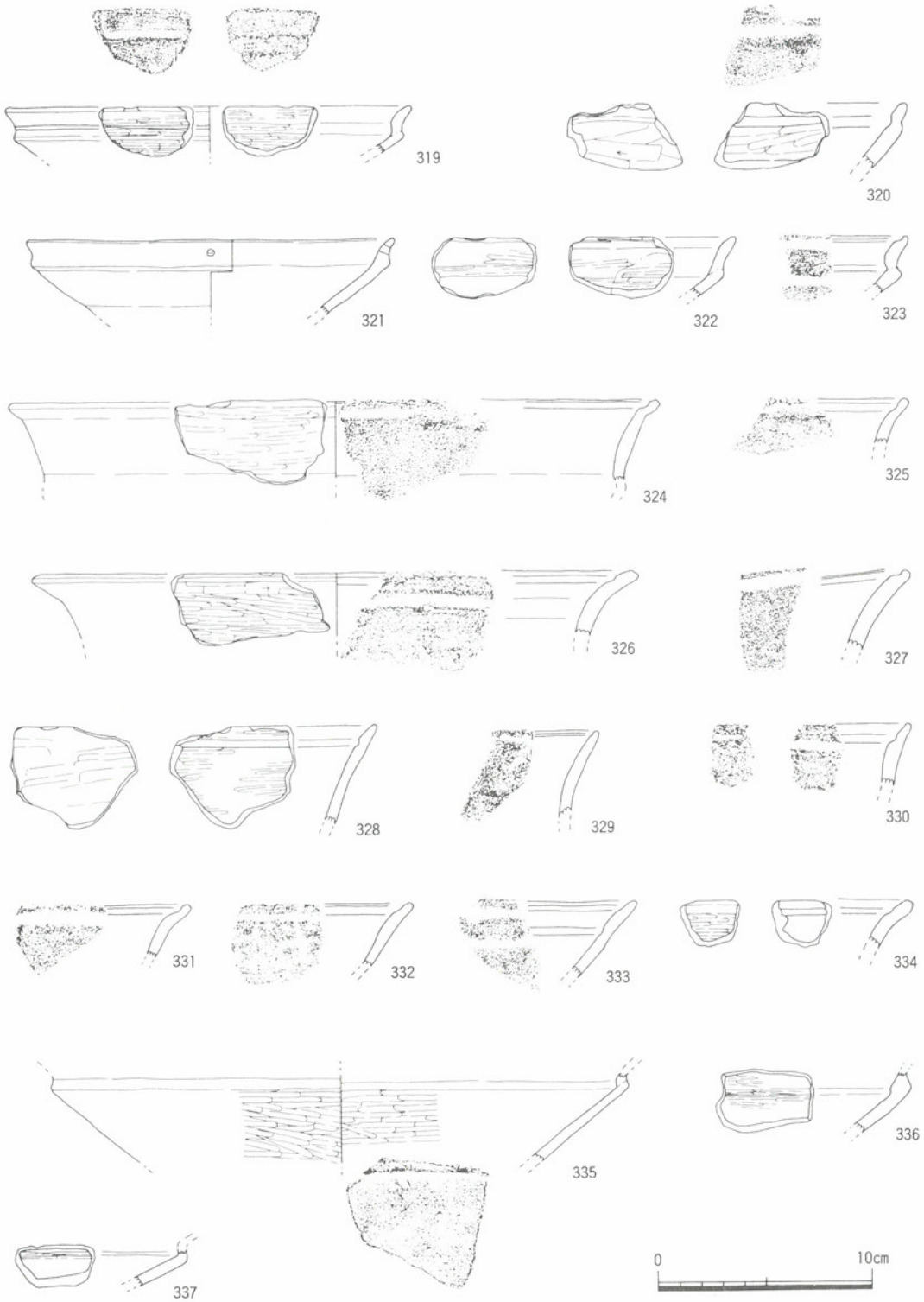
第44図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物⑳



第45図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㉑



第46図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㉒



第47図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㉓

第32表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㉒観察表

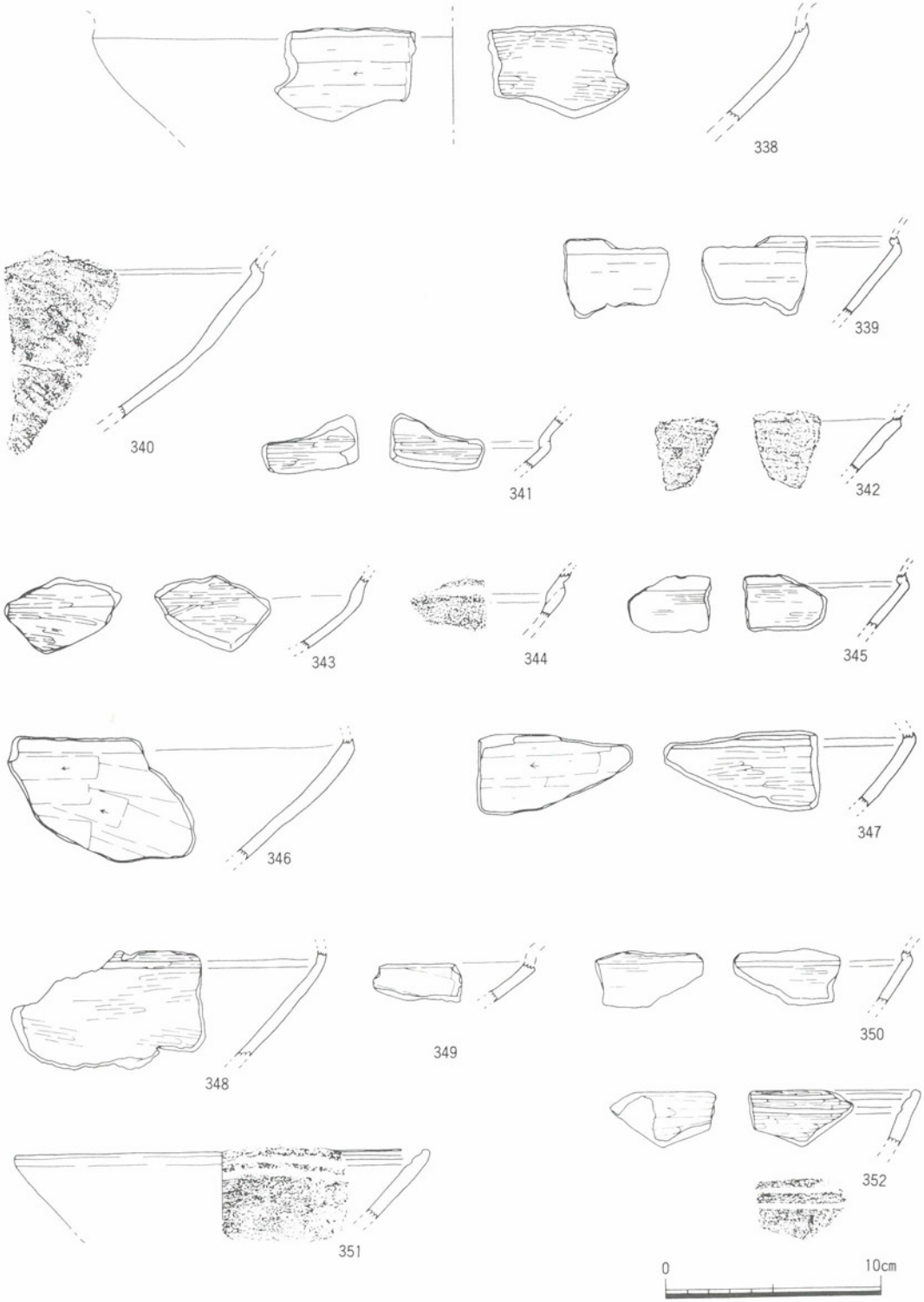
遺物番号	写真図版	器種	法量(cm)			調整		その他	色調		胎土	遺存度
			口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
307	87	縄文　浅鉢	——	——	——	磨滅のため不明	ミガキ	方形浅鉢・黒色磨研・(内)沈線1条	黒	黒	1mm以下の砂粒	1／4
308	88	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	黒色磨研系・(内)沈線1条・(外)屈曲部に沈線1条	暗茶褐	淡黒褐	2mm程度の砂粒	破片
309	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	黒色磨研系・(外)屈曲部に沈線1条	暗灰茶褐	暗灰茶褐	3mm程度の砂粒	破片
310	88	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ	ナデ風擦過	屈曲部・黒色磨研系・(外)屈曲部に沈線2条以上	暗黒褐	暗茶褐	1mm以下の砂粒	破片
311	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	(外)屈曲部に沈線1条	暗茶褐	濁黄褐	1～4mm程度の砂粒	破片
312	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	屈曲部・黒色磨研・(外)屈曲部に沈線2条以上	黒褐	黒褐	1mm以下の砂粒少し	破片
313	88	縄文　浅鉢	(13.6)	——	——	ナデ・ミガキ	丁寧なナデ	(外)端部肥厚	灰茶褐	灰茶褐	1mm程度の砂粒	破片
314	88	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	屈曲部・黒色磨研・(外)屈曲部に沈線2条以上	暗茶褐	淡黒褐	1mm以下の砂粒	1／12
315	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	屈曲部	濁黄褐	濁黄褐	1～3mm程度の砂粒	破片
316	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	屈曲部・黒色磨研系・(外)屈曲部に沈線2条以上	淡黒褐	淡茶褐	1mm以下の砂粒	破片
317	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	屈曲部・黒色磨研・(外)屈曲部に沈線2条以上	黒褐	黒褐	2mm以下の砂粒	破片
318	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ風擦過	ナデ	屈曲部・(外)屈曲部に沈線2条以上	淡黒褐	濁茶褐	2mm以下の砂粒	破片

第33表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㉓観察表

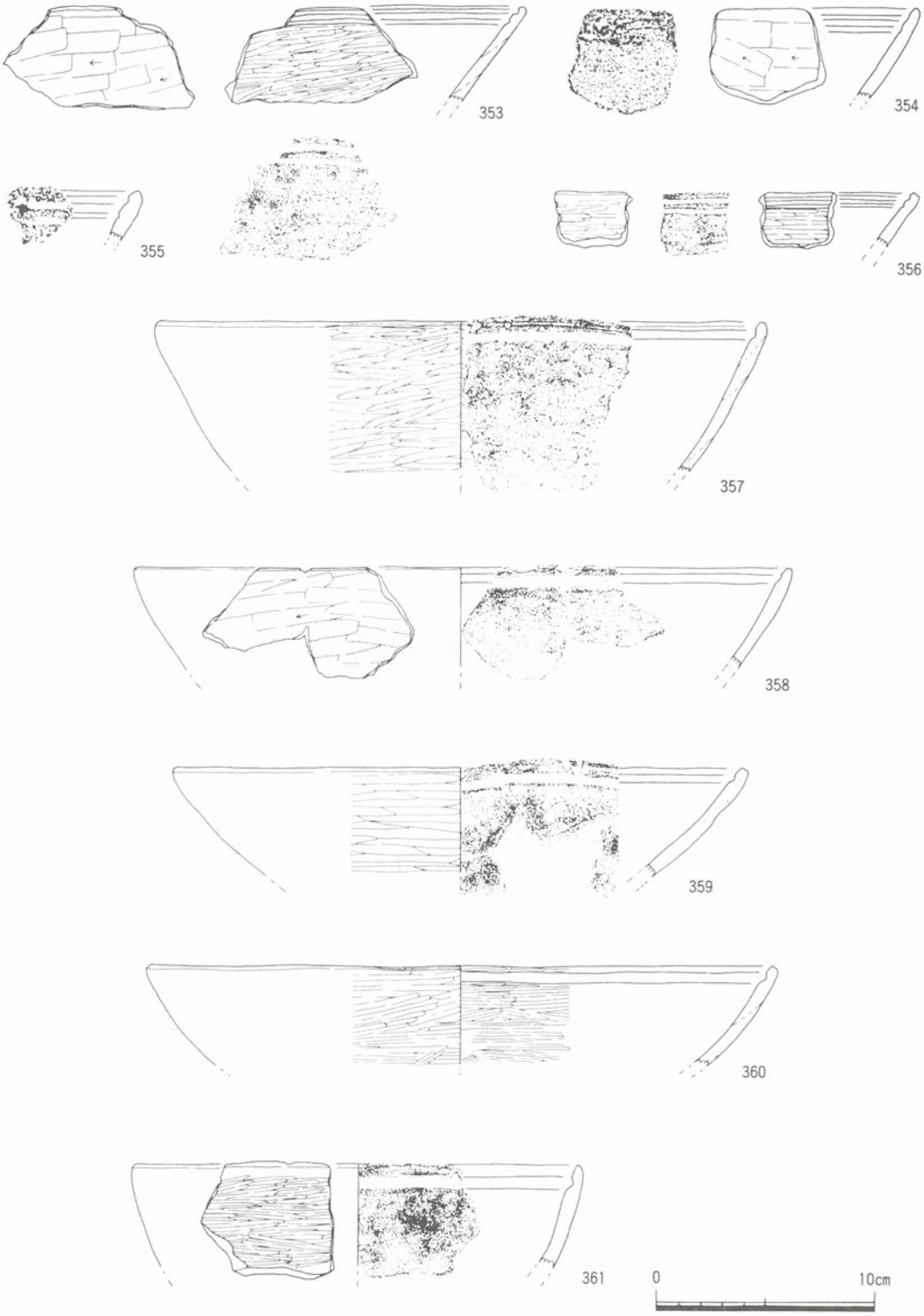
遺物番号	写真図版	器種	法量(cm)			調整		その他	色調		胎土	遺存度
			口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
319	89	縄文　浅鉢	(18.8)	——	——	ミガキ	ミガキ		暗茶褐	暗茶褐	1mm以下の砂粒	破片
320	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ナデ・ケズリ風擦過	ミガキ	黒色磨研系	濁茶褐	淡黒褐	1mm程度の砂粒	破片
321	89	縄文　浅鉢	17.0	——	——	ナデ	ナデ	焼成前の穿孔	黒褐	黒褐	1～4mm程度の砂粒	1／4
322	89	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ・擦過	ミガキ	磨滅が進む	黒褐	黒褐	1mm以下の砂粒	破片
323	89	縄文　浅鉢	——	——	——	丁寧なナデ	ミガキ	黒色磨研系・波状口縁の可能性・(内)沈線1条	淡黒褐	淡黒褐	1mm以下の砂粒	破片
324	89	縄文　浅鉢	(30.0)	——	——	ミガキ	磨滅（ミガキ？）	(内)沈線１条	暗茶褐	暗茶褐	1mm程度の砂粒	1／12
325	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ？	ミガキ？	磨滅が進む・(内)沈線１条	淡茶褐	淡茶褐	1mm程度の砂粒	破片
326	89	縄文　浅鉢	(27.6)	——	——	ナデ・ミガキ	ナデ	(内)沈線１条	黒褐	黒褐	1～2mm程度の砂粒	1／12
327	—	縄文　浅鉢	——	——	——	磨滅（ミガキ？）	磨滅（ミガキ？）	磨滅が進む・(内)沈線１条	濁褐	濁褐	1mm以下の砂粒	破片
328	—	縄文　浅鉢	——	——	——	粗いミガキ	ミガキ	剥離が進む・(内)沈線１条	濁褐	暗褐	2mm以下の砂粒	破片
329	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ナデ風擦過	擦過	磨滅が進む・(内)沈線１条	暗茶褐	暗茶褐	2mm以下の砂粒	破片
330	—	縄文　浅鉢	——	——	——	磨滅のため不明	ミガキ	(内)沈線１条	淡黄褐	淡黒褐	1～4mm程度の砂粒	破片
331	—	縄文　浅鉢	——	——	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	(内)沈線１条	橙褐	黒	4mm以下の砂粒	破片
332	—	縄文　浅鉢	——	——	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	(内)沈線１条	赤褐	赤褐	1～5mm程度の砂粒	破片
333	—	縄文　浅鉢	——	——	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	(内)沈線２条	暗褐	淡黒	1mm程度の砂粒	破片
334	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ	磨滅のため不明	(内)沈線１条	黒褐	淡灰褐	1～2mm程度の砂粒	破片
335	90	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	屈曲部・黒色磨研系	暗黄褐	黒褐	1～3mm程度の砂粒	1／12
336	—	縄文　浅鉢	——	——	——	擦過	ミガキ	屈曲部・黒色磨研系	暗茶褐	黒	1mm程度の砂粒	破片
337	—	縄文　浅鉢	——	——	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	屈曲部・黒色磨研系	濁茶褐	黒	1mm以下の砂粒	破片

第34表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㉔観察表

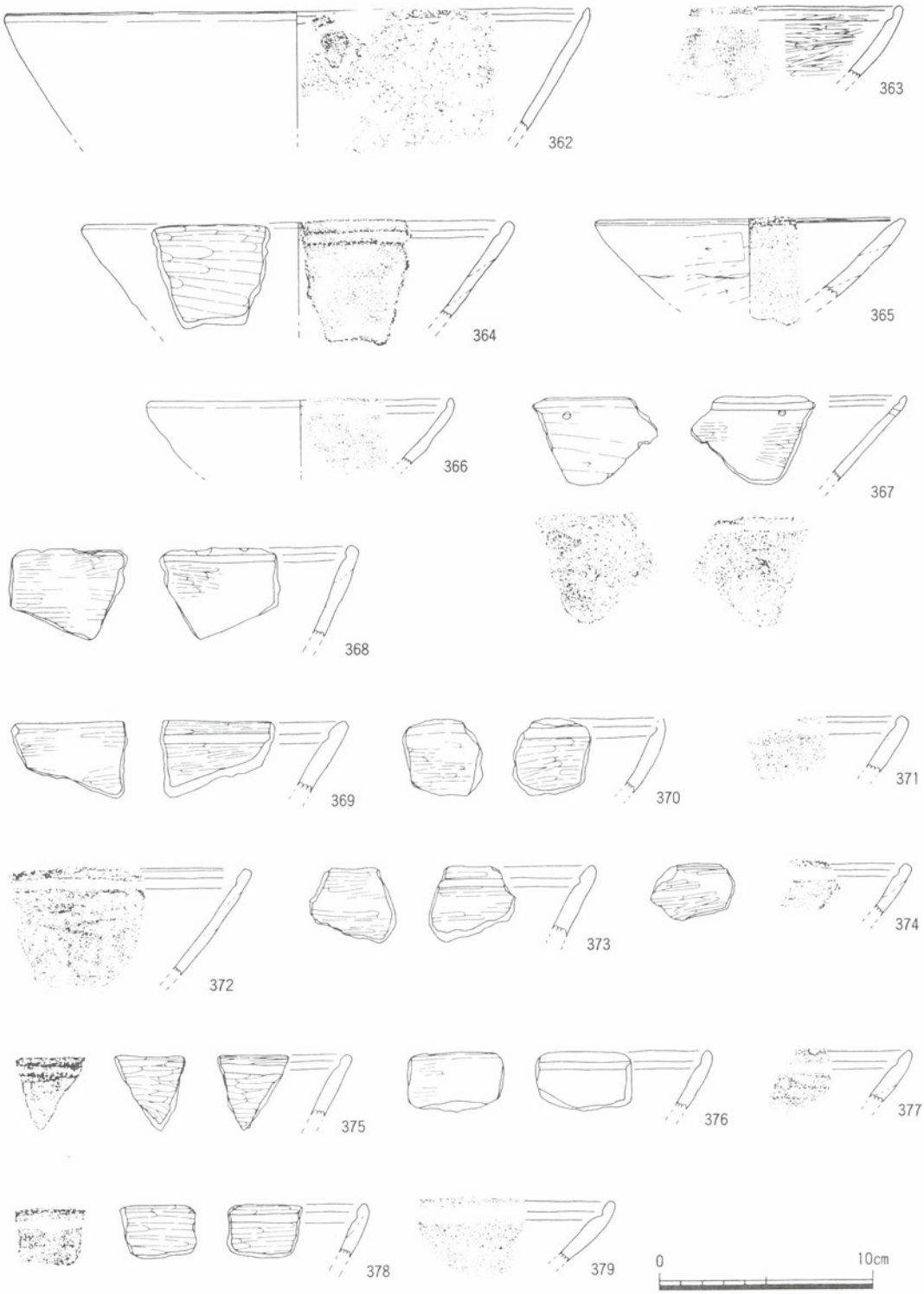
遺物番号	写真図版	器種	法量(cm)			調整		その他	色調		胎土	遺存度
			口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
338	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ケズリ風擦過	粗いミガキ	屈曲部	暗茶褐	暗茶褐	2mm以下の砂粒	1／16
339	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	屈曲部	濁褐	濁褐	1～2mm程度の砂粒	破片
340	—	縄文　浅鉢	——	——	——	擦過のちミガキ・粗いミガキ	ミガキ	屈曲部	淡黒褐	暗茶灰	1mm以下の砂粒	破片
341	90	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	屈曲部・黒色磨研系	黒	黒	1mm以下の砂粒	破片
342	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	屈曲部	淡黒褐	茶褐	2mm以下の砂粒	破片
343	90	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	屈曲部・黒色磨研系	濁褐	黒	1mm以下の砂粒	破片
344	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ナデ？・擦過	ナデ	屈曲部	濁黄褐	暗灰褐	1mm以下の砂粒	破片
345	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	屈曲部	濁茶褐	濁茶褐	1～3mm程度の砂粒	破片
346	—	縄文　浅鉢	——	——	——	擦過	ナデ	屈曲部	濁茶褐	濁黄褐	2mm以下の砂粒	破片
347	—	縄文　浅鉢	——	——	——	擦過	ナデ・ミガキ	屈曲部・黒色磨研系	暗茶褐	淡黒	1mm以下の砂粒	破片
348	90	縄文　浅鉢	——	——	——	ナデ風擦過	ミガキ	屈曲部	黒褐	濁茶褐	2mm以下の砂粒	破片
349	—	縄文　浅鉢	——	——	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	屈曲部・(外)黒斑	濁褐	淡褐	1mm以下の砂粒	破片
350	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	屈曲部	暗茶褐	暗茶褐	1mm程度の砂粒	破片
351	90	縄文　浅鉢	(19.0)	——	——	擦過	ミガキ風擦過	(内)沈線２条	淡灰茶褐	淡灰茶褐	4mm以下の砂粒	1／8
352	90	縄文　浅鉢	(14.2)	——	——	ミガキ	ミガキ	(内)沈線２条	暗茶褐	淡茶褐	1～2mm程度の砂粒	破片



第48図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㉔



第49図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㉕



第50図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㉖

第35表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㉕観察表

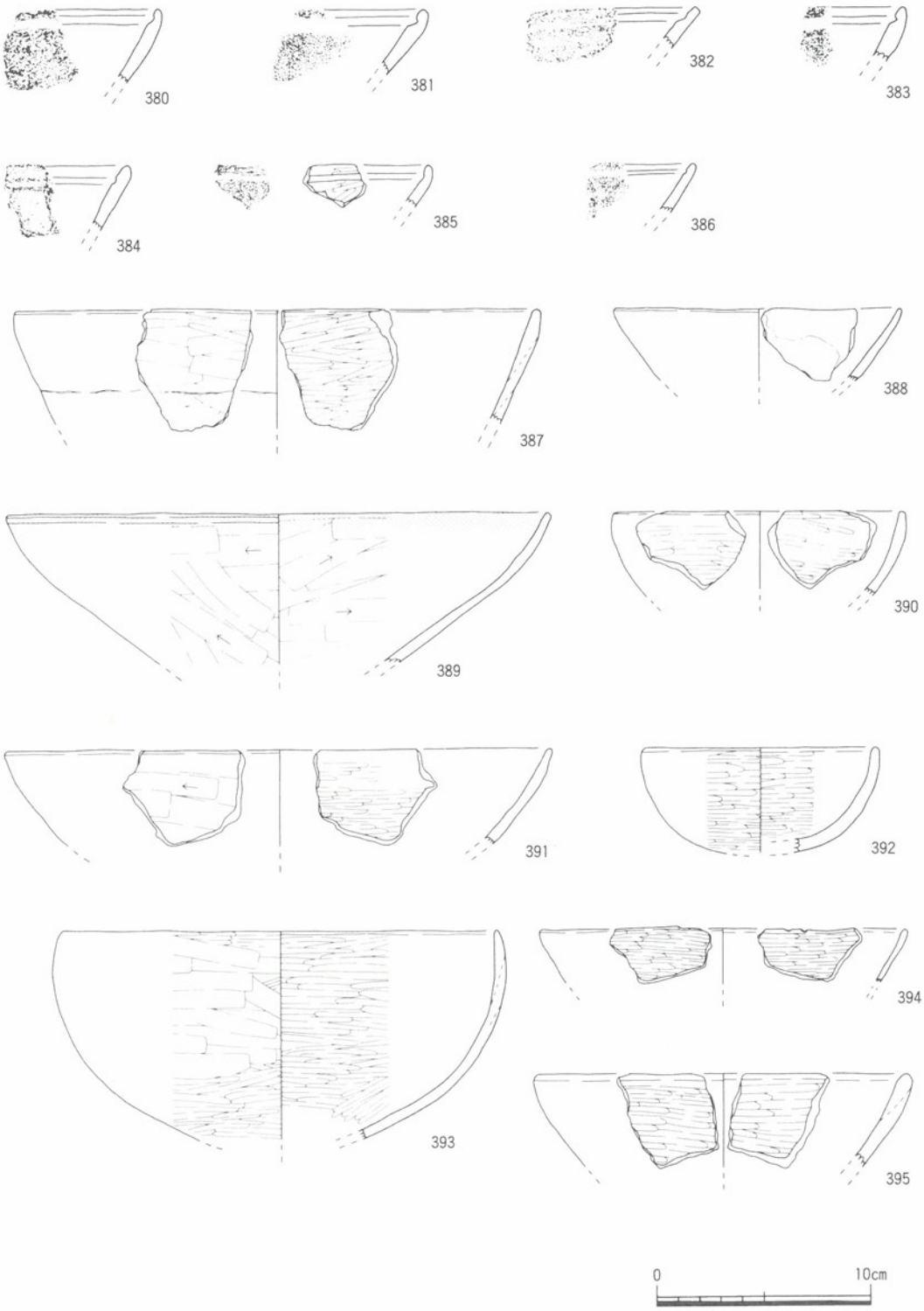
遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	その他	色調 外面	内面	胎土	遺存度
353	90	縄文 浅鉢	——	——	——	ナデ・擦過	ナデ・ミガキ	黒色磨研系・(内)沈線２条	淡黒褐	淡黒褐	5mm以下の砂粒	破片
354	—	縄文 浅鉢	——	——	——	ナデ・ミガキ風擦過	ナデ	磨滅が進む・(内)沈線２条	黒褐	淡褐	1～5mm以下の砂粒	破片
355	—	縄文 浅鉢	——	——	——	ナデ	ナデ	磨滅が進む・(内)沈線２条	黒褐	淡褐	1～4mm以下の砂粒	破片
356	90	縄文 浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	黒色磨研系・(内)沈線２条	淡黒褐	淡黒褐	3mm以下の砂粒	破片
357	91	縄文 浅鉢	(28.0)	——	——	ミガキ	ミガキ	黒色磨研・(内)沈線１条	黒褐	黒褐	3mm程度の砂粒	１／８
358	—	縄文 浅鉢	(29.6)	——	——	ナデ・ナデ風擦過	ナデ・ミガキ	(内)沈線１条	黒褐	淡茶褐	2mm以下の砂粒	１／10
359	—	縄文 浅鉢	(26.0)	——	——	ナデ・ミガキ	ミガキ	黒色磨研・(内)沈線１条	黒褐	黒褐	2mm程度の砂粒	１／４
360	91	縄文 浅鉢	(28.5)	——	——	ミガキ	ミガキのち軽いナデ	黒色磨研 (内)沈線1条・赤色顔料が遺存	黒褐	黒褐	1～2mm程度の砂粒少し	１／４
361	—	縄文 浅鉢	(20.2)	——	——	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	黒色磨研・(内)沈線１条	淡黒褐	淡黒褐	2mm以下の砂粒	１／12

第36表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㉖観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	その他	色調 外面	内面	胎土	遺存度
362	—	縄文 浅鉢	(27.2)	——	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	(内)沈線１条	淡灰褐	淡灰褐	3mm以下の砂粒	１／10
363	91	縄文 浅鉢	——	——	——	ナデ・ナデ風擦過	ナデ・ミガキ	黒色磨研系・(内)沈線1条	淡黒褐	淡黒褐	2mm以下の砂粒少し	破片
364	—	縄文 浅鉢	(20.0)	——	——	ミガキ	ミガキ	(内)沈線１条	暗茶褐	暗茶褐	1～3mm程度の砂粒	１／12
365	—	縄文 浅鉢	(14.2)	——	——	ナデ・擦過	ナデ	(内)沈線１条	黒褐	黒褐	1～4mm程度の砂粒	１／10
366	—	縄文 浅鉢	(14.0)	——	——	ナデ	ナデ	(内)沈線１条	濁茶褐	濁茶褐	1mm以下の砂粒	１／12
367	91	縄文 浅鉢	——	——	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	焼成前の穿孔 (内)沈線１条	黒褐	黒褐	2mm以下の砂粒	破片
368	—	縄文 浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	黒色磨研系・(内)沈線１条	暗茶褐	暗茶褐	1～4mm程度の砂粒	破片
369	—	縄文 浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	(内)沈線１条	淡黒	淡黒	1mm以下の砂粒	破片
370	—	縄文 浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	(内)沈線１条	黒褐	黒褐	1～4mm程度の砂粒	破片
371	—	縄文 浅鉢	——	——	——	ナデ・擦過	ナデ・ミガキ	(内)沈線１条	濁褐	濁褐	1mm以下の砂粒	破片
372	91	縄文 浅鉢	——	——	——	ナデ・粗いミガキ	ナデ・粗いミガキ	(内)沈線１条	暗茶褐	暗茶褐	1～3mm程度の砂粒	破片
373	91	縄文 浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	(内)沈線１条	黒	黒	1mm以下の砂粒	破片
374	—	縄文 浅鉢	——	——	——	ナデ・粗いミガキ	ナデ・ミガキ風擦過	黒色磨研系・(内)沈線１条	淡黒褐	淡黒褐	1mm以下の砂粒少し	破片
375	—	縄文 浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	黒色磨研・(内)沈線１条	黒	黒	1～3mm程度の砂粒少し	破片
376	—	縄文 浅鉢	——	——	——	ミガキ？	ナデ	磨滅が著しい (内)沈線１条	黒茶褐	黒茶褐	2mm程度の砂粒	破片
377	—	縄文 浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	黒色磨研系・(内)沈線１条	黒褐	黒褐	1mm程度の砂粒	破片
378	—	縄文 浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	(内)沈線１条	暗灰茶褐	暗灰茶褐	2mm以下の砂粒	破片
379	—	縄文 浅鉢	——	——	——	剥離のため不明	剥離のため不明	(内)沈線１条	濁褐	淡褐	3mm以下の砂粒	破片

第37表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㉗観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	その他	色調 外面	内面	胎土	遺存度
380	—	縄文 浅鉢	——	——	——	剥離のため不明	ミガキ	(内)沈線１条	淡灰褐	淡灰褐	2mm以下の砂粒	破片
381	—	縄文 浅鉢	——	——	——	擦過	ナデ	(内)沈線１条	暗褐	淡黒褐	2mm以下の砂粒	破片
382	—	縄文 浅鉢	——	——	——	剥離のため不明	ミガキ	(内)沈線１条	暗茶褐	暗茶褐	1～4mm程度の砂粒	破片
383	—	縄文 浅鉢	——	——	——	ミガキ？	ミガキ？	磨滅が進む (内)沈線１条	黒褐	黒	2mm以下の砂粒	破片
384	—	縄文 浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	(内)沈線１条	暗茶褐	暗茶褐	2mm以下の砂粒	破片
385	—	縄文 浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	(内)沈線１条	暗灰褐	淡黒褐	2mm以下の砂粒	破片
386	—	縄文 浅鉢	——	——	——	ナデ	ナデ	(内)沈線１条	暗褐～黒褐	暗褐～黒褐	2mm以下の砂粒	破片
387	92	縄文 浅鉢	(24.0)	——	——	ナデ・粗いナデ風擦過	ナデ・ミガキ	黒色磨研系	淡黒褐	淡黒褐	2mm以下の砂粒	１／12
388	—	縄文 浅鉢	(12.8)	——	——	ナデ	ミガキ	(内)黒斑	濁黄褐	濁黄褐	1～2mm程度の砂粒	破片
389	92	縄文 浅鉢	25.0	——	——	ナデ・粗いミガキ風擦過	ナデ・粗いミガキ風擦過	黒色磨研系・(内・外)口縁端部に炭化物付着	暗茶褐	暗茶褐	2mm以下の砂粒	１／４
390	—	縄文 浅鉢	(13.4)	——	——	ミガキ	ミガキ	黒色磨研	黒	黒	1mm程度の砂粒	１／８
391	—	縄文 浅鉢	(25.0)	——	——	ナデ・擦過	ナデ・ミガキ		暗茶褐	茶褐	1～3mm程度の砂粒	１／16
392	—	縄文 浅鉢	10.6	——	——	ミガキ	ミガキ	黒色磨研	黒	黒	1mm程度の砂粒	１／４
393	—	縄文 浅鉢	20.0	——	——	ミガキのち粗いミガキ風擦過・ミガキ	ミガキ	黒色磨研	淡黒褐	淡黒褐	1mm程度の砂粒少し	１／３
394	—	縄文 浅鉢	(16.8)	——	——	ミガキ	ミガキ	黒色磨研	黒褐	黒褐	1～3mm程度の砂粒	１／12
395	—	縄文 浅鉢	(17.2)	——	——	ミガキ	ミガキ		暗茶褐	淡茶褐	1～3mm程度の砂粒	１／10



第51図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㉗

第38表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㉘観察表

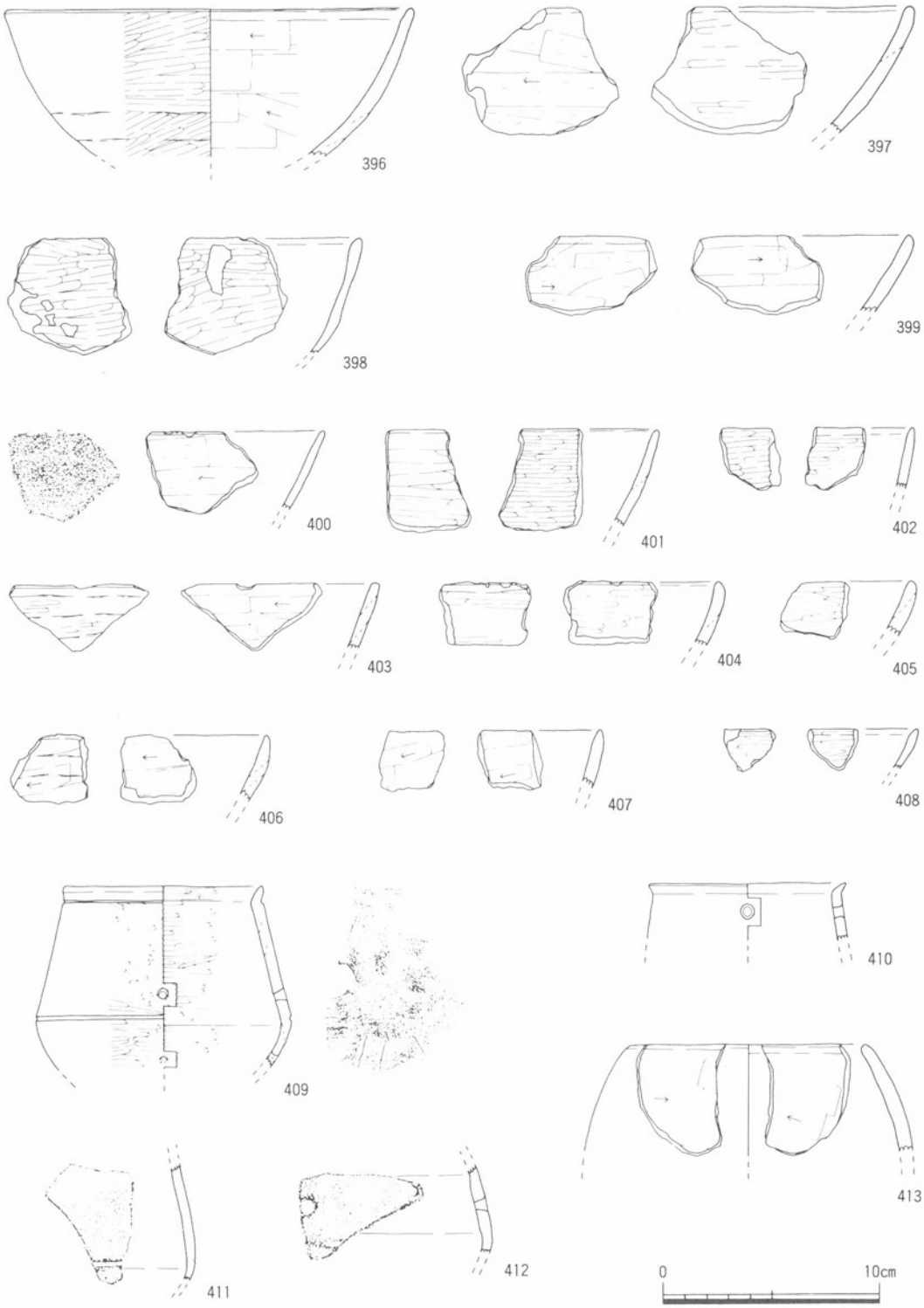
遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	その他	色調 外面	内面	胎土	遺存度
396	93	縄文　浅鉢	——	——	——	ナデ・ミガキ	ナデ・ナデ風擦過	黒色磨研系	黒褐	黒褐	1～2㎜程度の砂粒	1／4
397	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ風擦過	ミガキ	内傾接合	暗茶褐	暗茶褐	1～5㎜程度の砂粒	破片
398	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ	ナデ・ミガキ	黒色磨研系	黒褐	黒褐	1～3㎜程度の砂粒	破片
399	93	縄文　浅鉢	——	——	——	擦過	擦過のちナデ		濁褐	濁褐	1～3㎜程度の砂粒	破片
400	—	縄文　浅鉢	——	——	——	擦過	丁寧なナデ		暗茶褐	黒褐	1～4㎜程度の砂粒	破片
401	93	縄文　浅鉢	——	——	——	粗いミガキ	細かいミガキ	黒色磨研・内傾接合	黒	黒	1㎜程度の砂粒	破片
402	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ		淡灰褐	暗茶褐	1㎜程度の砂粒	破片
403	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ナデ・部分的にミガキ	ナデ・ナデ風擦過	内傾接合	暗茶褐	淡黒褐	2㎜以下の砂粒	破片
404	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ナデ・ミガキ	ミガキ		灰茶褐	灰茶褐	1～2㎜程度の砂粒	破片
405	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ナデ・擦過	ナデ・ミガキ	内傾接合	暗褐	暗褐	2㎜以下の砂粒	破片
406	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ナデ風擦過	ミガキ風擦過	内傾接合	暗茶褐	淡褐	2㎜程度の砂粒	破片
407	—	縄文　浅鉢	——	——	——	擦過	擦過	磨滅が進む	暗灰褐	暗灰褐	2㎜以下の砂粒	破片
408	—	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	黒色磨研系	黒褐	黒褐	2㎜以下の砂粒	破片
409	93	縄文　浅鉢	(9.1)	——	——	ミガキ	ミガキ	黒色磨研・穿孔2箇所・壺?・(外)屈曲部に沈線1条	黒褐	黒褐	1㎜以下の砂粒少し	1／5
410	93	縄文　浅鉢	(9.0)	——	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	焼成前の穿孔・壺？	淡茶	淡茶	1～2㎜程度の砂粒	1／6
411	93	縄文　浅鉢	——	——	——	ミガキ	ミガキ	(外)屈曲部に沈線１条・壺？	淡茶褐	淡黒褐	1㎜以下の砂粒	破片
412	93	縄文　浅鉢	——	——	——	磨滅のため不明	ミガキ	(外)屈曲部に沈線１条・壺？	暗茶褐	暗茶褐	1㎜程度の砂粒	破片
413	—	縄文　浅鉢	(10.6)	——	——	ナデ・ケズリ風擦過	ナデ・擦過	壺？	黒褐	灰茶褐	3㎜以下の砂粒	破片

第39表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㉙観察表

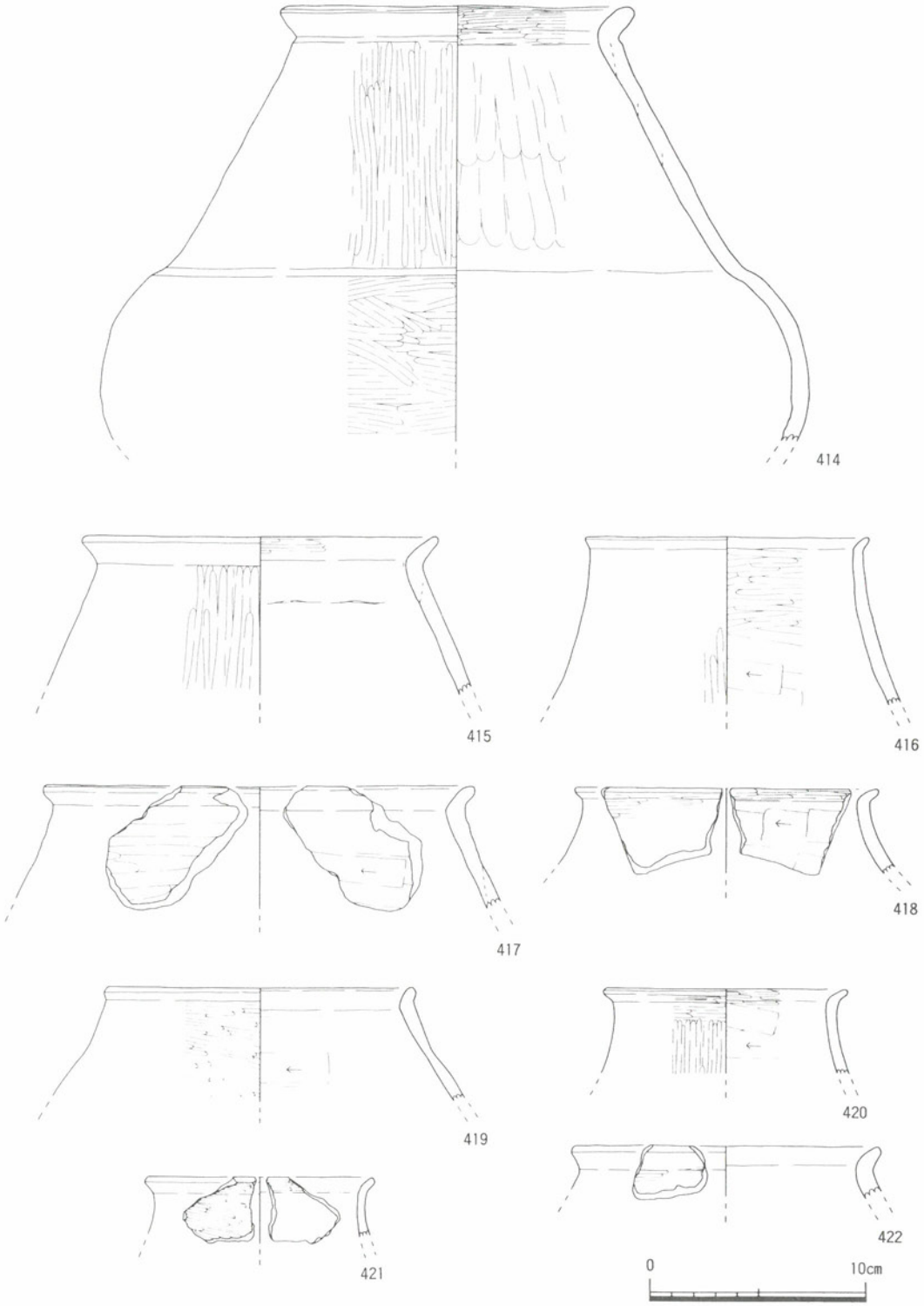
遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	その他	色調 外面	内面	胎土	遺存度
414	101	縄文　壺	15.2	——	——	ヨコナデ・タテミガキ・ヨコミガキ	ヨコミガキ・指ナデ・ナデ	(外)頸胴の境に沈線１条	暗褐	暗褐	1～5㎜程度の砂粒	1／2
415	95	縄文　壺	(16.4)	——	——	タテミガキ	ヨコミガキ・磨滅?	(内)磨滅が著しい	淡茶褐	淡茶褐	3㎜以下の砂粒	1／6
416	95	縄文　壺	13.0	——	——	磨滅(タテミガキ?)	ナデ・ヨコミガキ・ナデ風擦過	黒色磨研壺	暗褐	暗褐	1㎜以下の砂粒少し	1／4
417	94	縄文　壺	19.8	——	——	丁寧なナデ・ヨコミガキ	丁寧なナデ・ナデ風擦過	黒色磨研壺	黒	濁褐	1～4㎜程度の砂粒少し	1／2
418	94	縄文　壺	(14.0)	——	——	ヨコミガキ	ナデ風擦過	外面全体と内面口縁部に赤色顔料が遺存	淡黒褐	淡黒褐	1～2㎜程度の砂粒	1／8
419	94	縄文　壺	(14.1)	——	——	ナデ・ヨコミガキ	ナデ・ナデ風擦過		暗茶褐	暗茶褐	1～4㎜程度の砂粒	1／6
420	94	縄文　壺	11.0	——	——	ヨコミガキ・タテミガキ	ヨコミガキ・ナデ風擦過	黒色磨研壺	黒褐	黒褐	1～3㎜程度の砂粒	1／2
421	94	縄文　壺	(20.4)	——	——	ヨコミガキ	ヨコミガキ・丁寧なナデ	黒色磨研壺 (外)口縁部付近に赤色顔料が遺存	黒	黒	1㎜程度の砂粒	1／5
422	—	縄文　壺	(14.0)	——	——	ヨコミガキ	磨滅のため不明		濁褐～黒褐	濁褐～黒褐	1㎜以下の砂粒	破片

第40表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㉚観察表

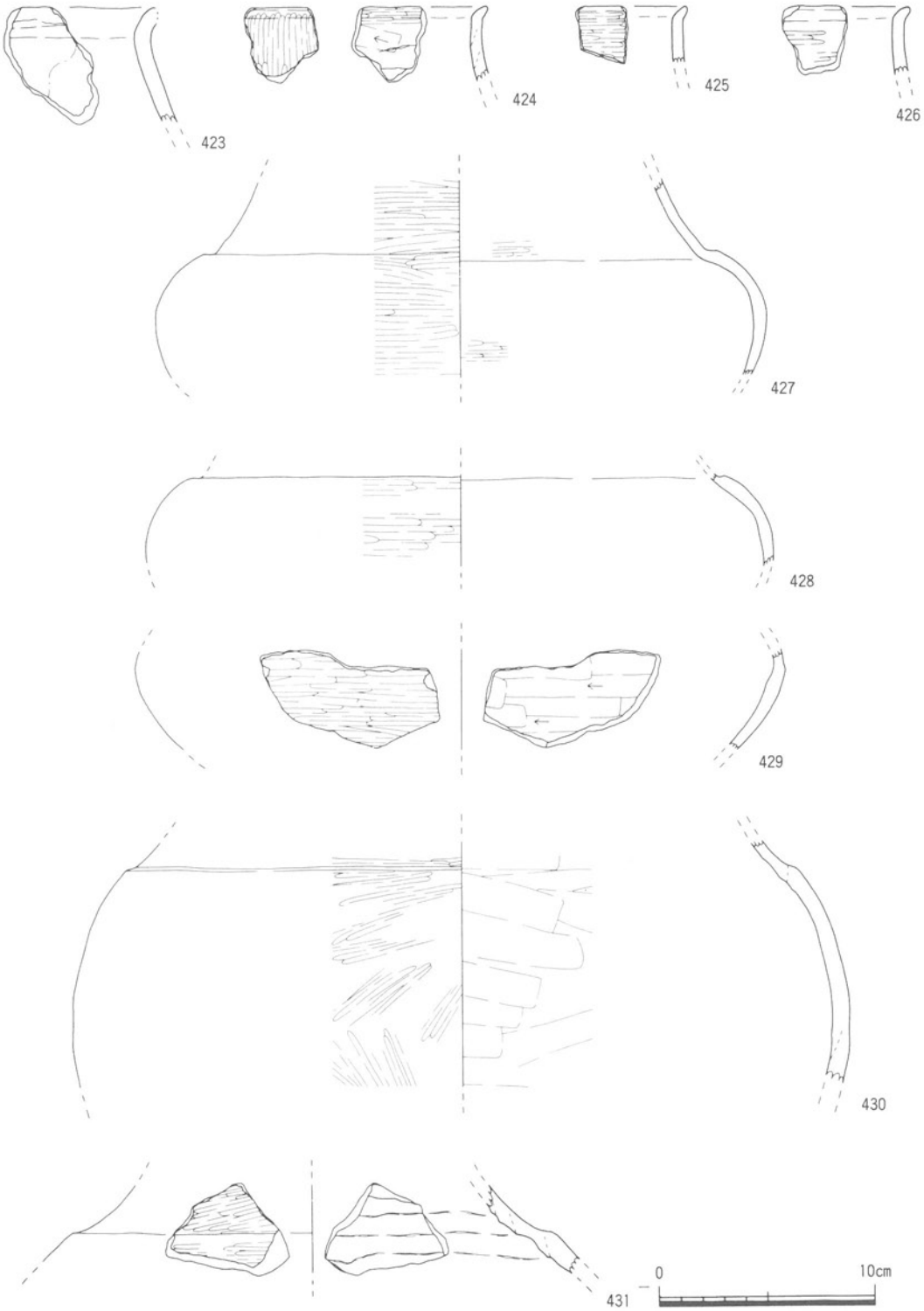
遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	その他	色調 外面	内面	胎土	遺存度
423	95	縄文　壺	——	——	——	丁寧なナデ	ナデ	(外)黒斑	淡茶褐	淡茶褐	2㎜以下の砂粒	破片
424	95	縄文　壺	——	——	——	タテミガキ	ヨコミガキ・ナデ風擦過	黒色磨研系	淡黒褐	淡黒褐	2㎜程度の砂粒	破片
425	—	縄文　壺	——	——	——	ヨコミガキ	剥離のため不明	黒色磨研系	暗褐	暗褐	1㎜程度の砂粒少し	破片
426	95	縄文　壺	——	——	——	ヨコミガキ	ミガキ？	黒色磨研系	暗褐	暗褐	1㎜程度の砂粒少し	破片
427	96	縄文　壺	——	——	——	ヨコミガキ	ミガキ？	肩部・黒色磨研・頸胴の境に沈線1条	黒褐	淡褐	1～3㎜程度の砂粒	1／6
428	95	縄文　壺	——	——	——	ヨコミガキ	ナデ	肩部・黒色磨研・頸胴の境に沈線1条	淡黒褐	淡灰褐	1～2㎜程度の砂粒	1／3
429	—	縄文　壺	——	——	——	ヨコミガキ	ナデ風擦過	胴部下半・頸胴の境に沈線1条	茶褐	茶褐	1～3㎜程度の砂粒	破片
430	96	縄文　壺	——	——	——	ヨコミガキ	ナデ風擦過	肩部・黒色磨研・頸胴の境に沈線1条	黒褐	淡黒褐	1㎜以下の砂粒	1／4
431	—	縄文　壺	——	——	——	ヨコミガキ	ナデ	肩部・頸胴の境に沈・(内)粘土紐接合痕が顕著に残る	淡褐	淡褐	1～4㎜程度の砂粒	破片



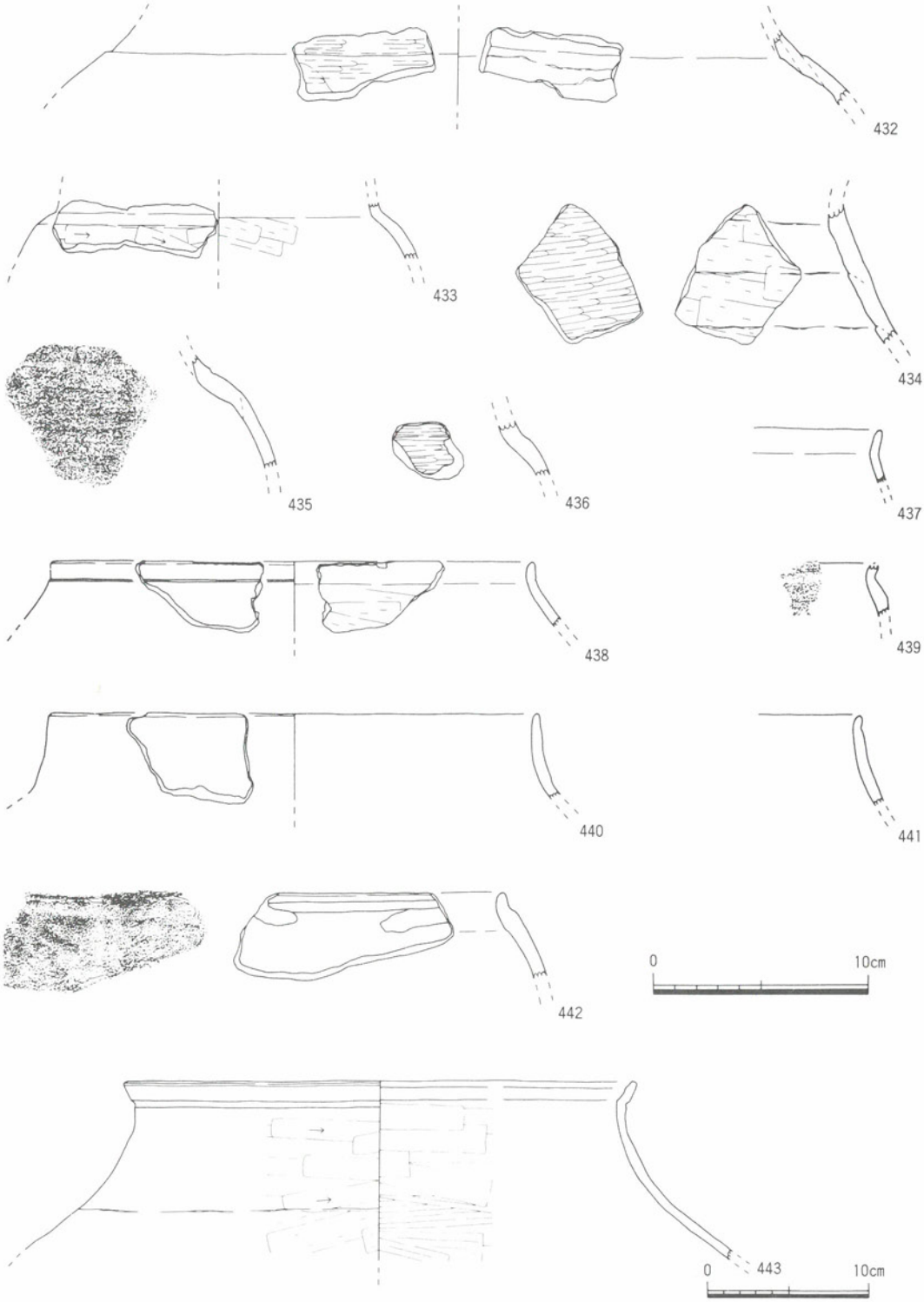
第52図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㉘



第53図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㉙



第54図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㉚



第55図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㉛

414～426は内傾する長い頸部から短く外反する口縁部を有する壺である。412は肩部が大きく張り出しており，長い頸部との間には小さな段を有している。このタイプの口頸部の壺は大きく張り出す肩を持つことがわかる。器面の調整であるが，外面の頸部は縦方向のミガキ，肩部は横・斜め方向のミガキ，内面の口縁部は横方向のミガキ，頸部は指ナデ，肩部は丁寧なナデ調整で仕上げている。416・417・420は黒色磨研壺である。いずれもミガキによって丁寧に仕上げられている。418は外面の口頸部と内面の口縁部に赤色顔料が遺存している。412は黒色磨研壺であるが，外面の口縁部に赤色顔料が遺存している。

427～436は壺の肩部である。先述したように414のような内傾する長い頸部に短く外反する口縁部をもつ壺の肩部であろう。427は大きく張り出した肩部から沈線状の段を境に内傾する頸部がのびる。調整は内外面ともにミガキである。427・428は黒色磨研壺の肩部である。430も黒色磨研壺の肩部であるが，あまり肩が張らず球形の胴部を呈している。

437～442は口縁部が短く直立する壺である。肩部は張らないと思われる。調整は内外面ともにナデ・ミガキが中心で丁寧である。いずれも破片が小さいため，浅鉢の口縁部の可能性もある。440は刻目凸帯のつかない屈曲型の深鉢の口縁部の可能性がある。

443～452は内傾する頸部から短く外反する口縁部を有しているが，比較的頸部の内傾が強い壺である。調整は内外面ともにナデ・ミガキが中心に施されており，丁寧に仕上げられている。一応壺に分類したが，形態としては浅鉢の一部と区別がつきにくく，調整も特徴的なものはなく区別がつきにくい。今回の報告では，壺の影響を受けて浅鉢が変化した「浅鉢変容壺」として壺と理解しておく。443は弧を描きながら長くのびる頸部に短く外反する口縁部を有する壺である。口縁内面と口縁屈曲部の外面に沈線が1条ずつめぐらされている。調整は外面が丁寧なナデと擦過，内面がミガキ風の擦過である。445～447・450は口縁の内面に1条の沈線をめぐらせている。448は頸部の内傾が比較的直立に近く緩やかである。口縁屈曲部外面と肩部外面に沈線がめぐら

第41表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㉛観察表

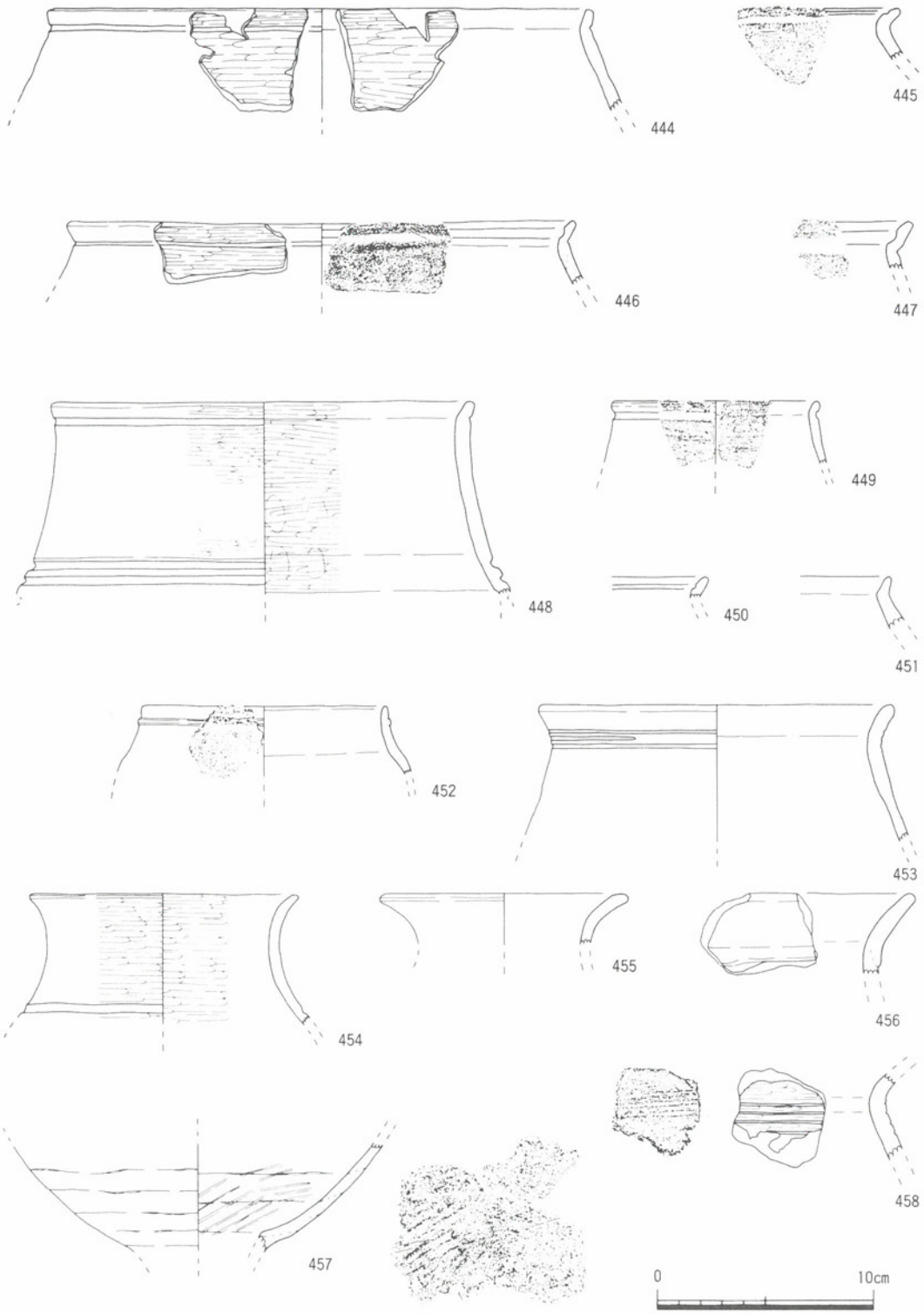
遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	調整 外面	調整 内面	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	遺存度
432	97	縄文　壺	――	――	――	ヨコミガキ	ナデ	頸部・肩部の接合・(外)黒斑	淡茶褐	淡茶褐	1～2mm程度の砂粒	破片
433	97	縄文　壺	――	――	――	ナデ・ケズリ風擦過	ナデ・ナデ風擦過	頸部・肩部の接合	灰褐	灰褐	1mm以下の砂粒	破片
434	―	縄文　壺	――	――	――	ヨコミガキ	ケズリ風擦過	頸部・外傾接合？	淡褐	淡褐	1～5mm程度の砂粒多い	破片
435	―	縄文　壺	――	――	――	ナデ・ケズリ風擦過	ナデ	肩部	黒褐～暗黒褐	暗茶褐	2mm以下の砂粒	1／8
436	―	縄文　壺	――	――	――	ヨコミガキ	ナデ・擦過	肩部	淡茶褐	淡茶褐	3mm以下の砂粒	破片
437	―	縄文　壺	――	――	――	磨滅のため不明	磨滅のため不明	浅鉢口縁の可能性	灰茶褐	灰茶褐	2mm以下の砂粒	破片
438	97	縄文　壺	(22.0)	――	――	ナデ・ヨコミガキ？	ナデ・擦過？	浅鉢口縁の可能性	淡褐	淡黒褐	1～3mm程度の砂粒	破片
439	―	縄文　壺	――	――	――	ナデ	磨滅のため不明	口縁端部を欠損	白褐	黒	1mm程度の砂粒	破片
440	―	縄文　壺	(22.4)	――	――	丁寧なナデ	ナデ	浅鉢口縁の可能性	淡灰褐	灰褐	1mm程度の砂粒	破片
441	―	縄文　壺	――	――	――	磨滅のため不明	磨滅のため不明	浅鉢口縁の可能性	黒褐	黒褐	1mm程度の砂粒	破片
442	97	縄文　壺	――	――	――	磨滅のため不明	磨滅のため不明	(外)端部付近に沈線1条	淡茶褐	淡茶褐	2mm程度の砂粒	破片
443	98	縄文　壺	(30.8)	――	――	ナデ・丁寧なナデ・擦過	ミガキ風擦過	浅鉢変容壺　(外)黒斑	暗茶褐	褐	1～4mm程度の砂粒	1／6

されている。調整は内外面ともに横方向のミガキで仕上げられている。452は直立気味に内傾する口頸部を有する壺である。口縁部に凸帯をめぐらせている。凸帯の磨滅が著しいが，刻目は施されていないようである。

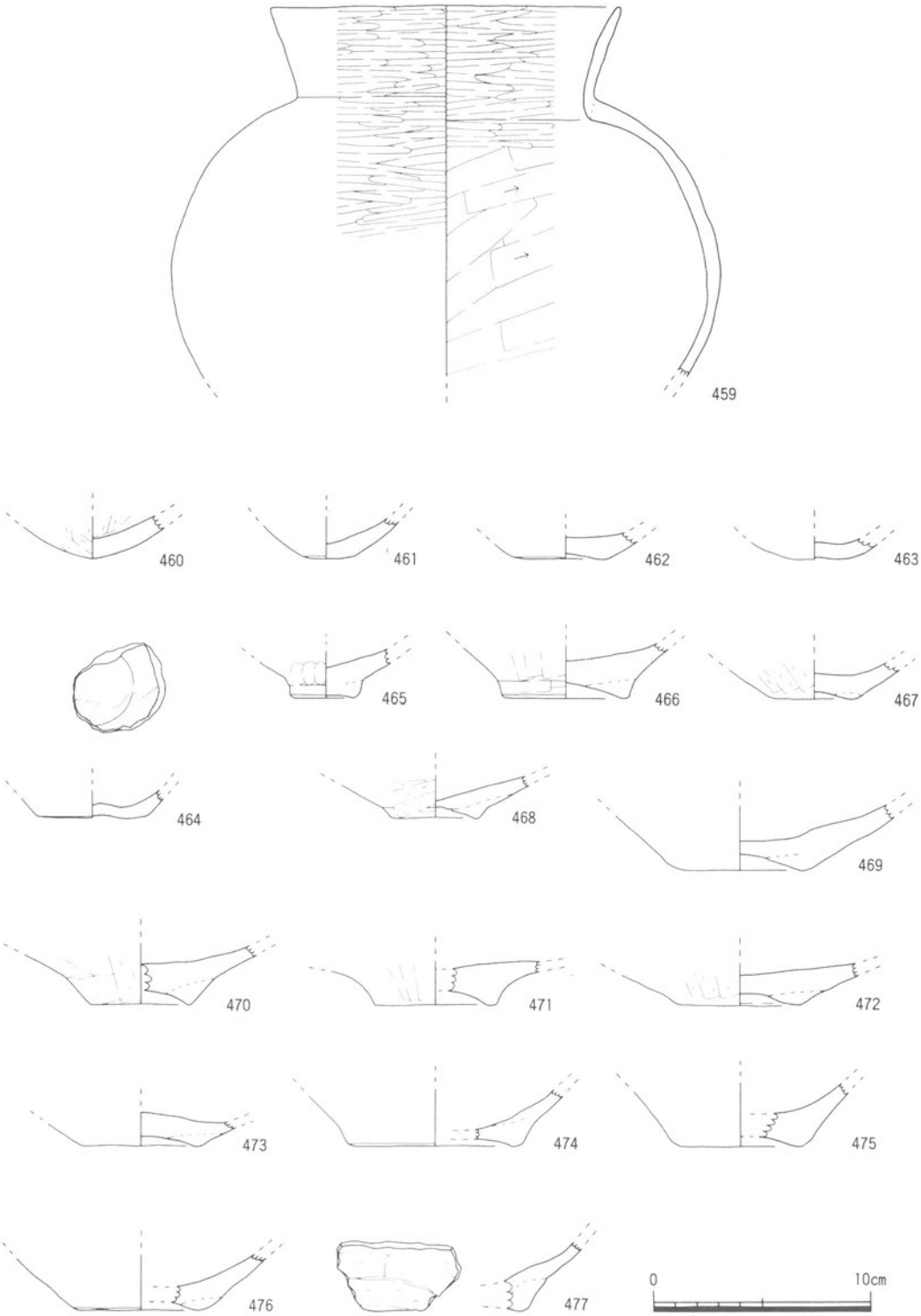
453～459は頸部から大きく外反する口縁部を有する壺である。453は頸部外面に３条の沈線をめぐらせている。454は頸部外面に沈線を１条めぐらせている。調整は内外面ともに横方向のミガキである。456は頸部に段を有している。457は鉢の胴部と考えたが，壺の肩部の可能性もある。粘土紐接合痕の残る比較的粗雑な作りである。459は球形の胴部に外傾する直線的な口頸部がのびる黒色磨研の壺である。調整は外面が横方向のミガキ，内面の口縁部が横方向のミガキ，胴部がミガキ風擦過である。

第42表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㉜観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	調整 外面	調整 内面	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	遺存度
444	99	縄文　壺	(24.5)	——	——	ヨコミガキ	ヨコミガキ	(外)端部付近に沈線１条	黒褐	黒褐	1～2㎜程度の砂粒	破片
445	99	縄文　壺	——	——	——	ナデ	ナデ	(内)口縁端部に沈線１条	淡灰褐	淡灰褐	3㎜程度の砂粒	破片
446	99	縄文　壺	(23.2)	——	——	ヨコミガキ	ヨコミガキ	黒色磨研・(内)口縁端部に沈線１条	黒褐	暗灰褐	1㎜程度の砂粒	破片
447	—	縄文　壺	——	——	——	ヨコナデ	ミガキ	黒色磨研・(内)口縁端部に沈線１条	淡黒褐	淡黒褐	1㎜以下の砂粒	破片
448	99	縄文　壺	(19.4)	——	——	ナデ・ヨコミガキ	ナデ・ヨコミガキ・所々デのちミガキ	黒色磨研・(外)屈曲部に沈線２条	黒	淡黒褐	1㎜以下の砂粒	１／６
449	99	縄文　壺	(9.4)	——	——	ヨコミガキ	ヨコミガキ	黒色磨研・(外)口縁部下に沈線１条	黒褐	黒褐	1㎜程度の砂粒少し	１／12
450	—	縄文　壺	——	——	——	ミガキ	ミガキ	黒色磨研・成形口縁の可能性・(内)端部に沈線１条	暗褐	暗褐	1㎜程度の砂粒少し	破片
451	—	縄文　壺	——	——	——	剥離（ナデ？）	ナデ	成形口縁の可能性	黒茶褐	黒茶褐	1㎜程度の砂粒	破片
452	99	縄文　壺	(11.3)	——	——	丁寧なナデ・ミガキ	丁寧なナデ	(外)口縁下に凸帯	黒	黒	3㎜以下の砂粒	１／12
453	100	縄文　壺	(16.2)	——	——	ナデ・ミガキ？	ナデ	(外)口縁下に沈線数条・重ねの可能性	暗褐	暗褐	1～4㎜程度の砂粒	１／８
454	100	縄文　壺	(12.2)	——	——	ヨコミガキ	ヨコミガキ	黒色磨研・(外)頸部に沈線１条	黒褐	淡黒褐	1～3㎜程度の砂粒	１／３
455	—	縄文　壺	(11.4)	——	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	混入の可能性	黄白	黄白	1～6㎜程度の砂粒多い	１／６
456	—	縄文　壺	——	——	——	ミガキ	ナデ？	磨滅が進む・口縁下に段	白褐	白褐	1～3㎜程度の砂粒	破片
457	100	縄文　鉢？	——	——	——	粗いナデ	貝殻条痕風	頸部下径・壺の可能性・粘土紐接合痕が明瞭に残る	濁黄褐	濁黄褐	2㎜程度の砂粒多い	１／５
458	100	縄文　壺	——	——	——	ヨコミガキ	ナデ？	頸部・(外)口縁下に沈線４条・重ね目の可能性	淡黄褐	淡黄褐	1～4㎜程度の砂粒多い	破片



第56図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㉜



第57図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㉝

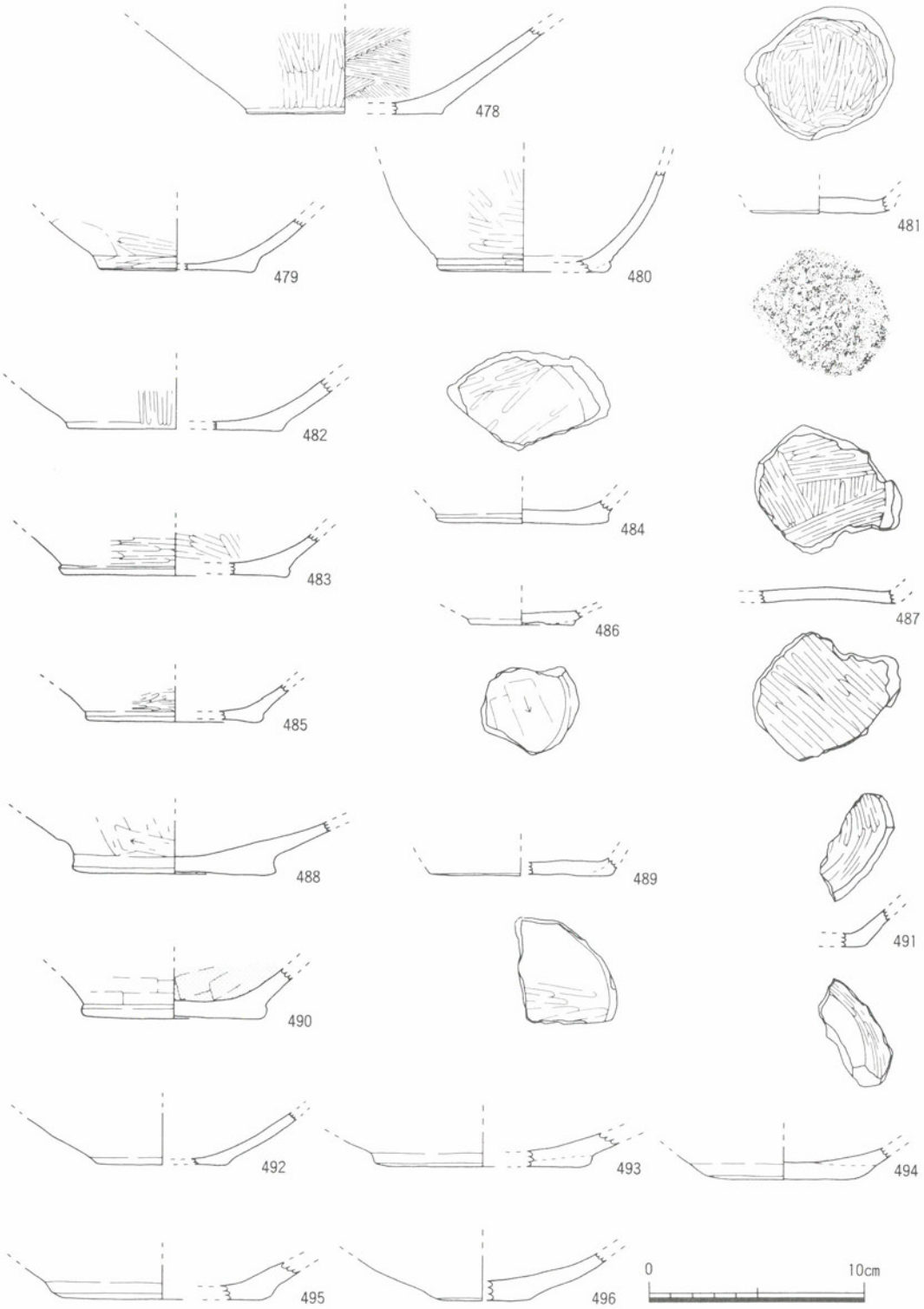
460～516は底部である。

460～470・473～477・490・497～500・502・508・510～516は深鉢の底部である。460・461は丸底である。丸底はこの２点だけしか出土していない。462～477は深鉢の凹底である。462・463は小さな平坦面をもち，その中央をわずかに凹めている程度で丸底と凹底の中間形態のような感じである。深鉢の凹底の調整は外面が粗めの擦過，内面がナデあるいは擦過，底面が擦過ないし板木口によるカキトリを施しているものが多い。490・497～500・502・508・510～516は深鉢の平底である。

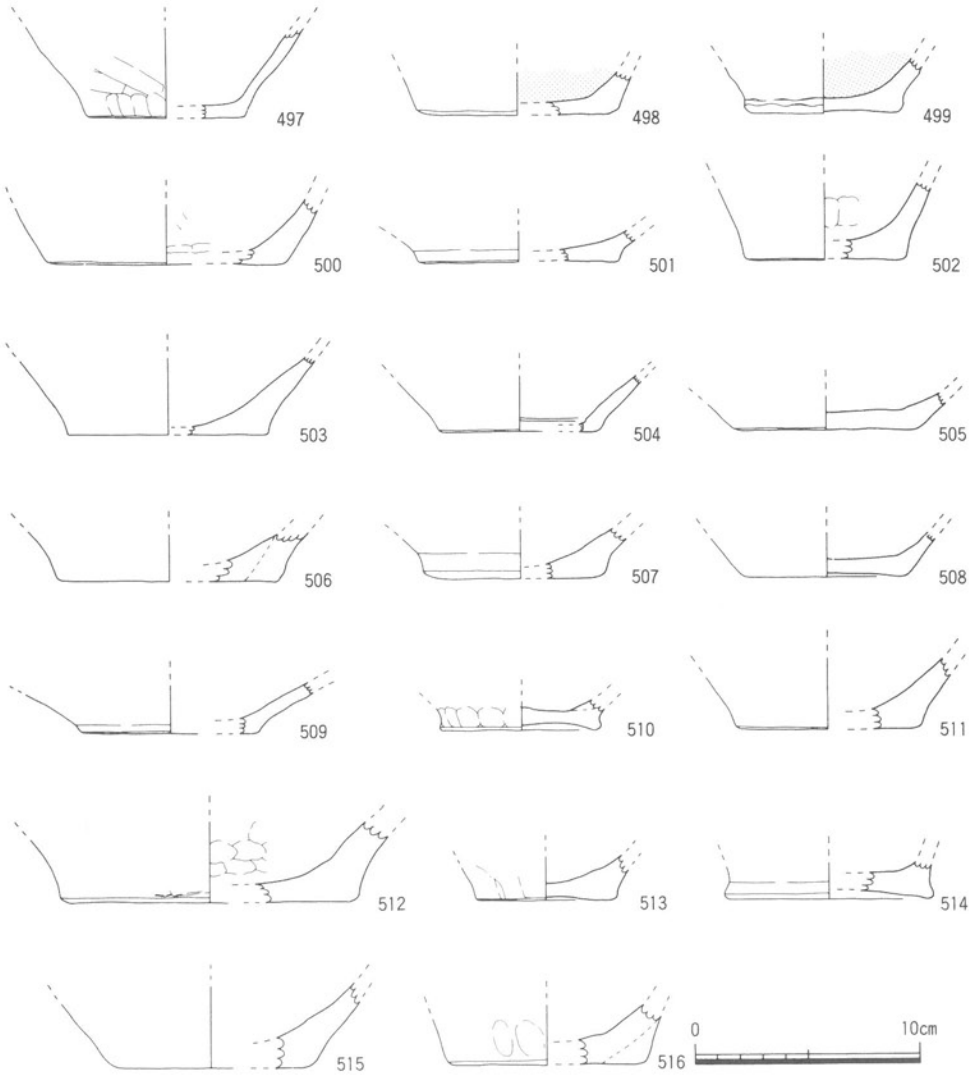
471・472・478～489・491～496・501・503～507・509は浅鉢ないし壺の底部である。底部破片だけでは浅鉢と壺の区別が困難であることから一括した。口縁部破片の比率から類推しても，壺の底部の数は少なく，浅鉢の底部が圧倒的に多いと考えられる。487は黒色磨研，478・480・483・484・491は黒色磨研系であり，490・498・499は内面に炭化物が付着している。488は器壁胎土中にヨシのような植物遺存体を含んでいる。

第43表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㉝観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	その他	色調 外面	内面	胎土	遺存度
459	100	縄文　壺	16.0	——	——	ヨコミガキ	ヨコミガキ・粗いミガキ風擦過	黒色磨研・半島に系譜？	暗灰褐	黒褐	3mm以下の砂粒少し	１／２
460	102	縄文　底部	——	——	——	擦過	擦過	深鉢・丸底	濁茶褐	暗褐	2mm程度の砂粒	破片
461	—	縄文　底部	——	(1.9)	——	ナデ？	磨滅のため不明	深鉢・丸底・小さな平坦面をもつ	濁褐	黄茶褐	1～4mm程度の砂粒	破片
462	—	縄文　底部	——	3.8	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	深鉢・凹底	橙褐	淡灰褐	1mm以下の砂粒	１／２
463	102	縄文　底部	——	2.8	——	磨滅のため不明	擦過？	深鉢・凹底・(外)指で押さえて回転させる	淡橙褐	淡橙褐	3mm以下の砂粒	１／１
464	—	縄文　底部	——	4.9	——	ナデ	ナデ	深鉢・凹底・(内)少し回転・炭化物付着	暗褐～黒褐	暗褐～黒褐	1mm以下の砂粒	１／２
465	102	縄文　底部	——	3.2	——	指押さえのちナデ・擦過	擦過	深鉢？・凹底	濁黄褐	暗褐	1～3mm程度の砂粒	１／１
466	102	縄文　底部	——	5.8	——	擦過・ナデ？	ナデ？	深鉢・凹底・磨滅が進む	淡茶褐	淡茶褐	1～4mm程度の砂粒	１／２
467	—	縄文　底部	——	3.8	——	ケズリ風擦過・ナデ	ナデ？	深鉢・凹底	濁黄褐	淡茶褐	1～3mm程度の砂粒	１／２
468	—	縄文　底部	——	4.0	——	ケズリ・ナデ	磨滅のため不明	深鉢・凹底	濁褐	暗褐	1～2mm程度の砂粒	１／２
469	102	縄文　底部	——	6.2	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	深鉢・凹底	濁黄褐	淡黒褐	5mm程度の砂粒	１／１
470	—	縄文　底部	——	4.4	——	擦過・ナデ・擦過	ナデ	深鉢・凹底	濁褐	淡褐	2mm程度の砂粒	１／２
471	—	縄文　底部	——	5.6	——	擦過・ナデ？	ナデ	浅鉢？・凹底	濁黄褐	灰茶褐	3mm程度の砂粒	１／２
472	—	縄文　底部	——	5.6	——	ケズリ風擦過	ナデ？	浅鉢？・凹底	濁黄褐	濁黄褐	1mm以下の砂粒	１／２
473	—	縄文　底部	——	5.2	——	ナデ？・擦過	磨滅のため不明	深鉢・凹底	暗褐	暗褐	2mm以下の砂粒	１／１
474	—	縄文　底部	——	8.0	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	深鉢・凹底	白褐	白褐	2mm以下の砂粒	１／４
475	—	縄文　底部	——	5.6	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	深鉢・凹底	淡黄褐	淡黄褐	3mm以下の砂粒	１／３
476	—	縄文　底部	——	5.7	——	ケズリ風擦過	ナデ？	深鉢・凹底	濁橙褐	淡黒褐	1mm以下の砂粒	１／２
477	—	縄文　底部	——	(5.7)	——	擦過	ナデ風擦過？	深鉢・凹底	濁褐	黒	2mm以下の砂粒	破片



第58図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㉞



第59図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㉟

第44表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㉞観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	その他	色調 外面	内面	胎土	遺存度
478	—	縄文　底部	——	13.1	——	ミガキ・ナデ	ミガキ	浅鉢・平底・黒色磨研系	黒	濁褐	1㎜以下の砂粒	1／4
479	—	縄文　底部	——	7.2	——	ミガキ・擦過	丁寧なミガキ	浅鉢・平底・(外)黒斑	暗灰褐	暗茶褐	1㎜以下の砂粒	1／4
480	—	縄文　底部	——	7.9	——	粗いミガキ	剥離のため不明	浅鉢・平底・黒色磨研系	黒	黒	3㎜程度の砂粒	1／4
481	—	縄文　底部	——	6.2	——	擦過	ミガキ	浅鉢・平底・(外)爪のような圧痕が残る	濁橙褐	淡茶褐	1～3㎜程度の砂粒	1／1
482	—	縄文　底部	——	10.0	——	タテミガキ・擦過	磨滅のため不明	浅鉢・平底	淡茶褐	淡黒褐	2㎜以下の砂粒	1／4
483	—	縄文　底部	——	10.4	——	ミガキ・ナデ	ミガキ	浅鉢・平底・黒色磨研系	淡黄褐	暗茶褐	2㎜以下の砂粒	1／4
484	—	縄文　底部	——	6.2	——	ナデ・擦過	ミガキ	浅鉢・平底・黒色磨研系	淡白褐	黒	1～7㎜程度の砂粒	1／3
485	—	縄文　底部	——	7.9	——	ミガキ？・擦過	磨滅のため不明	浅鉢・平底	淡黒褐	暗茶褐	1～3㎜以下の砂粒	1／4
486	—	縄文　底部	——	4.8	——	擦過	ナデ	浅鉢・平底	淡橙褐	淡橙褐	4㎜以下の砂粒	1／2
487	—	縄文　底部	——	——	——	ミガキ	ミガキ	浅鉢・平底・黒色磨研	黒	濁褐	1～4㎜程度	破片
488	—	縄文　底部	——	9.4	——	ヘラケズリ・ナデ	ヘラケズリ	浅鉢・平底・植物繊維体を器壁に含む	淡褐	暗黒褐	2㎜以下の砂粒	3／4
489	—	縄文　底部	——	8.4	——	ミガキ	磨滅のため不明	浅鉢・平底	淡橙褐	濁黄褐	3㎜以下の砂粒	1／4
490	—	縄文　底部	——	8.8	——	擦過・ナデ・擦過	ナデ風擦過	深鉢・平底・(内)炭化物付着	濁黄褐	黒	1～3㎜以下の砂粒	1／1
491	—	縄文　底部	——	(7.6)	——	ミガキ	ミガキ	浅鉢・平底・黒色磨研系	黒茶褐	黒茶褐	1㎜以下の砂粒	1／6
492	—	縄文　底部	——	(6.2)	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	浅鉢・平底	黄褐	濁褐	1～2㎜程度の砂粒	破片
493	—	縄文　底部	——	(10.0)	——	擦過	ミガキ？	浅鉢・平底	橙褐	黒褐	1～5㎜程度の砂粒	1／8
494	—	縄文　底部	——	7.0	——	ナデ・軽い擦過	ミガキ	浅鉢・平底	白褐	暗茶褐	1～3㎜程度の砂粒	1／3
495	—	縄文　底部	——	(10.2)	——	ナデ？	ミガキ	浅鉢・平底	橙褐	淡黒褐	3㎜以下の砂粒	1／6
496	—	縄文　底部	——	4.0	——	ミガキ？	ミガキ？	浅鉢・平底	濁黄褐	濁黄褐	2㎜以下の砂粒	1／4

第45表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㉟観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	その他	色調 外面	内面	胎土	遺存度
497	—	縄文　底部	——	7.0	——	ナデ風擦過・指押さえ・ナデ？	磨滅のため不明	深鉢・平底	灰茶褐	暗橙褐	3㎜以下の砂粒	1／4
498	—	縄文　底部	——	8.8	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	深鉢・平底・(内)炭化物付着	淡橙褐	黒	3㎜以下の砂粒	1／4
499	102	縄文　底部	——	7.0	——	ナデ？・ミガキ？	不明	深鉢・平底・(内)炭化物付着	淡灰褐	黒褐	4㎜以下の砂粒	1／2
500	—	縄文　底部	——	(10.4)	——	磨滅のため不明	ヘラケズリ	深鉢？・平底	明褐	暗褐	1㎜以下の砂粒	1／6
501	—	縄文　底部	——	9.0	——	磨滅のため不明	ナデ	浅鉢・平底	淡橙褐	淡灰褐	3㎜以下の砂粒	1／3
502	—	縄文　底部	——	6.8	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	深鉢・平底・(内)黒斑	明白褐	黒茶褐	2㎜以下の砂粒	1／4
503	102	縄文　底部	——	8.8	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	浅鉢・平底	淡褐	濁褐	5㎜以下の砂粒	1／3
504	—	縄文　底部	——	7.2	——	剥離のため不明	磨滅のため不明	浅鉢・平底	淡灰褐	淡灰褐	2㎜程度の砂粒	1／4
505	—	縄文　底部	——	8.2	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	浅鉢・平底	濁褐	黒	2㎜以下の砂粒	1／4
506	—	縄文　底部	——	(9.6)	——	ナデ	磨滅のため不明	浅鉢？・平底	淡褐	淡褐	4㎜以下の砂粒	1／6
507	—	縄文　底部	——	8.0	——	ミガキ・ナデ	ミガキ	浅鉢？・平底	濁黄褐	濁黄褐	1～4㎜以下の砂粒	1／4
508	102	縄文　底部	——	7.1	——	ミガキ	ナデ	深鉢・平底	濁黄褐	濁黄褐	5㎜以下の砂粒	1／1
509	—	縄文　底部	——	8.0	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	浅鉢・平底	淡白褐	淡白褐	5㎜以下の砂粒	1／4
510	102	縄文　底部	——	7.0	——	指押さえ・擦過のちナデ	ナデ	深鉢？・平底	濁黄褐	暗灰褐	2㎜以下の砂粒	3／4
511	—	縄文　底部	——	8.2	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	深鉢・平底	淡茶褐	淡茶褐	1～3㎜以下の砂粒	1／4
512	—	縄文　底部	——	13.1	——	擦過・ケズリのちナデ	指ナデ	深鉢・平底	濁褐	濁褐	1㎜以下の砂粒	1／4
513	102	縄文　底部	——	6.2	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	深鉢・平底	淡褐	淡褐	3㎜以下の砂粒	1／1
514	—	縄文　底部	——	9.2	——	ナデ？・擦過	磨滅のため不明	深鉢・平底	淡黄褐	淡黒褐	1～2㎜程度の砂粒	1／3
515	—	縄文　底部	——	7.2	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	深鉢・平底	黄褐	淡黒褐	1～4㎜程度の砂粒	1／3
516	—	縄文　底部	——	8.6	——	指押さえ	ナデ？	深鉢・平底	橙褐	淡黒褐	6㎜以下の砂粒	1／4

517～553は石器である。517～528はサヌカイト製の石鏃である。平基式の無茎鏃がほとんどである。528は尖基鏃である。

529～531はサヌカイト製の石錐である。529・530はともに錐部先端を欠損しているが，どちらも頭部は素材の剥片の形状をとどめている。531は錐部の先端が磨滅している。

532はサヌカイト製の楔形石器である。

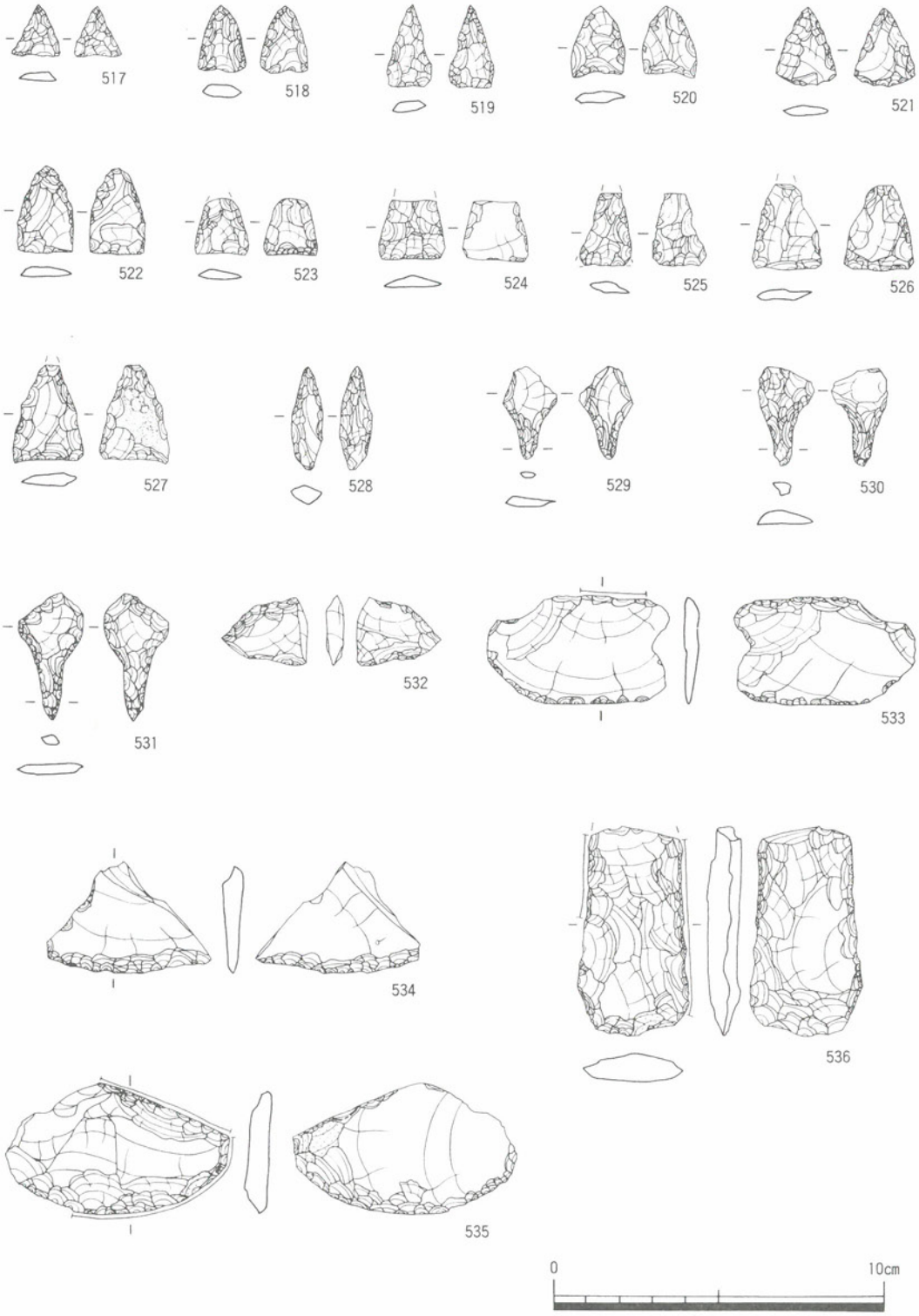
533～535はサヌカイト製のスクレイパーである。533は短辺の一方が抉り状を呈している。

536～549は打製石斧である。536は完形で両側縁を敲打している。537は基部を欠損しているが片側縁に敲打が認められ，片面に磨滅が認められる。539は片側縁に敲打が認められ，刃部両面が磨滅している。わずかながら縦方向の削痕も認められる。540は完形で片側面に敲打が認められ，刃部片面に縦方向の削痕が残る。541は基部を欠損するが両側縁に敲打が認められ，刃部は両面とも磨滅している。わずかに縦方向の削痕が残る。544は基部を欠損しているが両側縁に敲打が認められ，刃部片面が磨滅している。片面のほぼ中央付近にも小範囲の磨滅が認められる。547は基部を欠損している。刃部の片面に磨滅が認められ，片側面の中央付近に削痕が残る。548は頭部の破片であるが片面に自然面を残し，同じ面の刃部に縦方向の削痕・磨滅が認められる。材質であるが，542が結晶片岩，546が安山岩で，それ以外はすべてサヌカイトである。

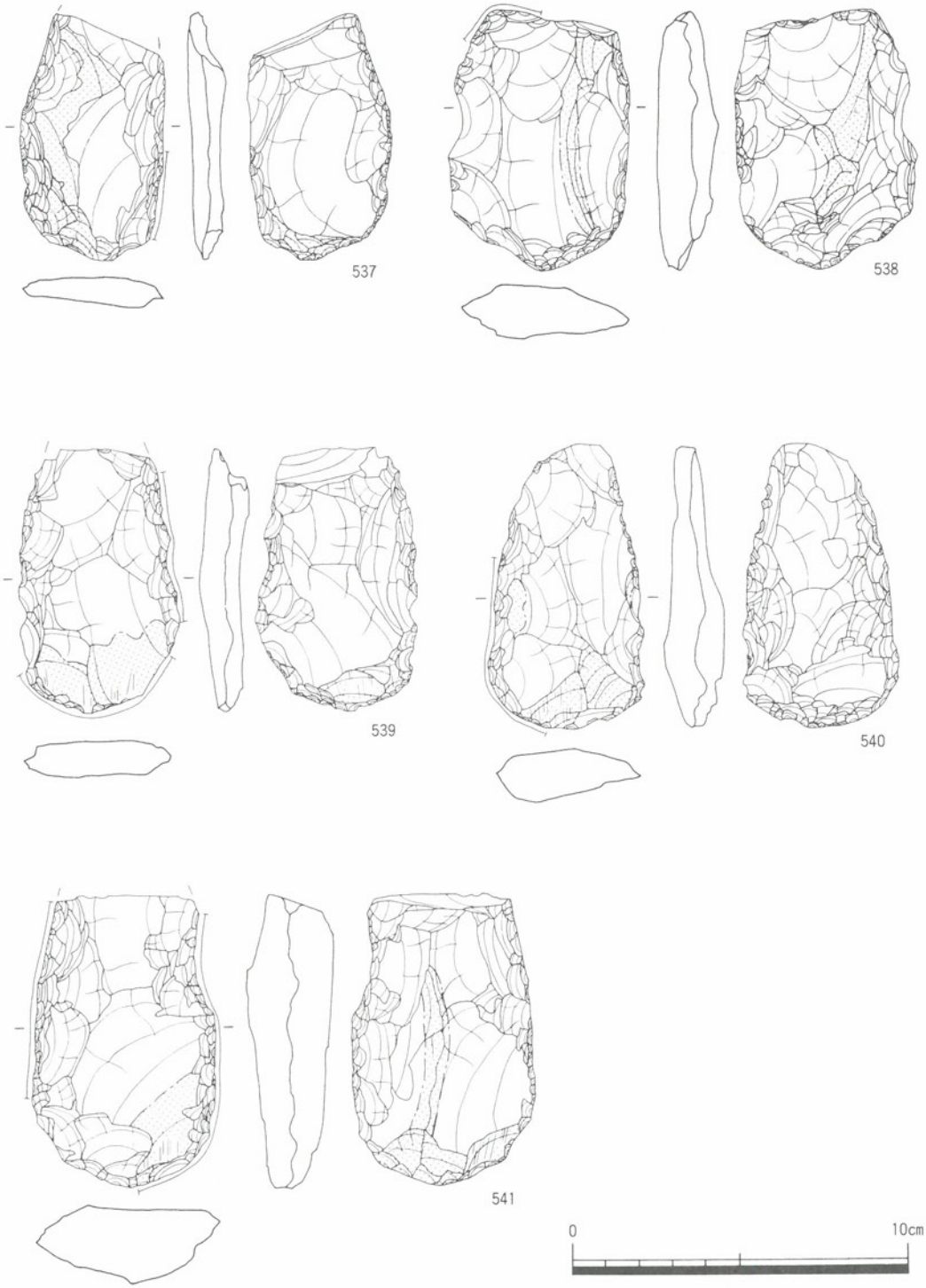
550は緑色片岩製の磨製石斧の基部である。太型蛤刃石斧の基部である。

第46表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㊱観察表

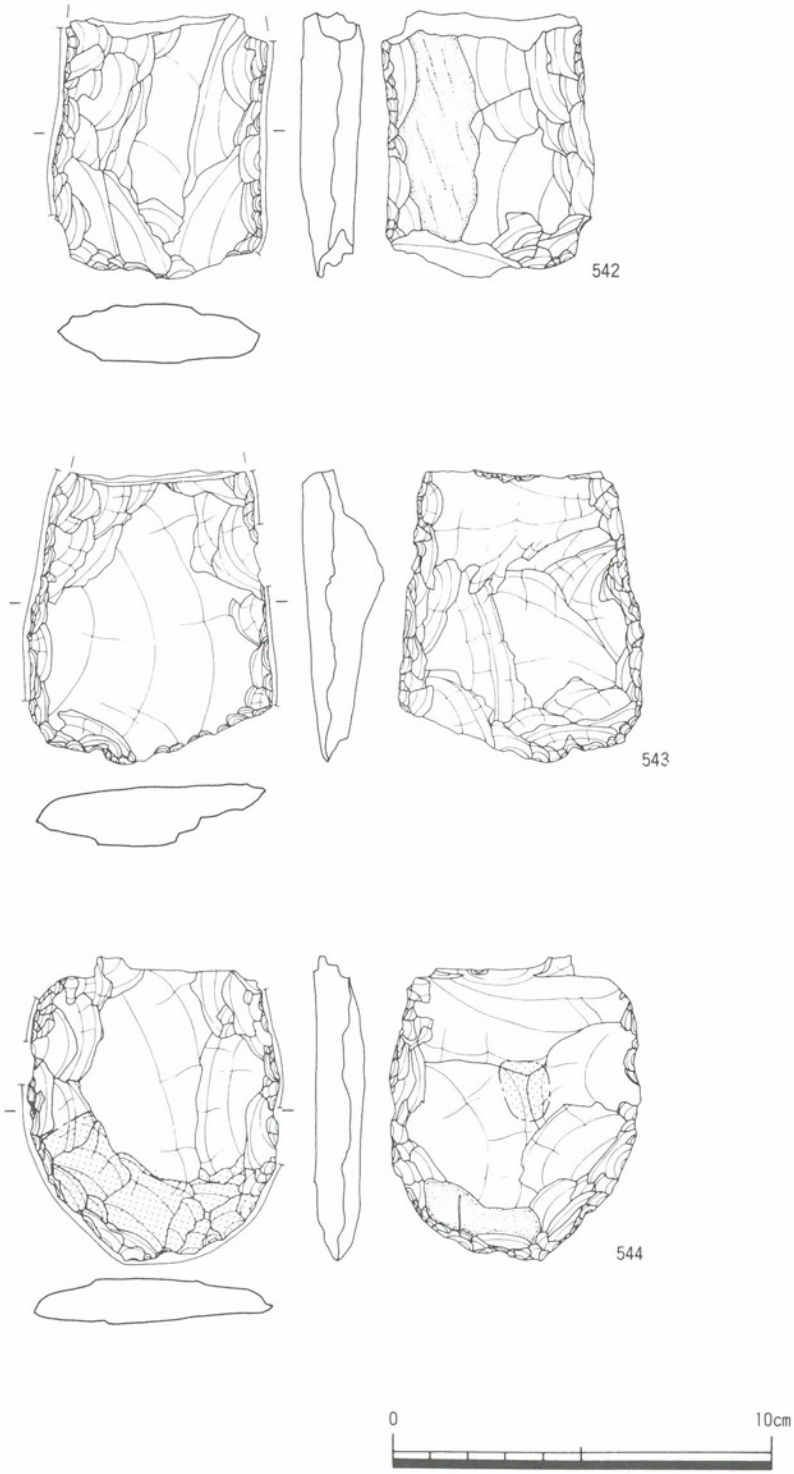
遺物番号	写真図版	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	備考
517	103	石鏃	1．6	1．5	0．3	0．4	サヌカイト	平基式
518	103	石鏃	2．0	1．4	0．4	1．1	サヌカイト	平基式
519	103	石鏃	2．5	1．4	0．3	1．1	サヌカイト	平基式
520	103	石鏃	2．2	1．6	0．4	1．2	サヌカイト	平基式
521	103	石鏃	2．4	1．8	0．3	1．2	サヌカイト	平基式　基部がやや丸く突出気味
522	103	石鏃	2．7	1．7	0．3	1．8	サヌカイト	平基式
523	—	石鏃	1．8	1．7	0．3	1．0	サヌカイト	平基式　先端部を欠損
524	—	石鏃	1．8	2．0	0．4	1．6	サヌカイト	平基式　先端部を欠損　片面は打面調整が施されていない
525	—	石鏃	2．2	1．6	0．4	1．0	サヌカイト	平基式　先端部・基部の一部を欠損
526	—	石鏃	2．6	2．1	0．4	2．0	サヌカイト	平基式　先端部を欠損
527	103	石鏃	3．0	2．1	0．4	2．9	サヌカイト	平基式　先端部を欠損
528	103	石鏃	3．2	1．0	0．6	1．7	サヌカイト	尖基式
529	103	石錐	2．8	1．6	0．3	1．3	サヌカイト	錐部下半を欠損　頭部は素材の剥片の形状を留める
530	103	石錐	3．0	1．7	0．4	2．3	サヌカイト	錐部先端を欠損　頭部は素材の剥片の形状を留める
531	103	石錐	3．9	2．0	0．3	2．4	サヌカイト	錐部先端に磨滅がみられる　頭部は縁辺を調整している
532	104	楔形石器	2．7	2．1	0．5	3．3	サヌカイト	
533	—	スクレイパー	5．6	3．3	0．5	9．4	サヌカイト	短辺の一方が抉り状を呈する
534	104	スクレイパー	5．0	3．4	0．7	9．1	サヌカイト	
535	104	スクレイパー	6．8	4．0	0．7	24．0	サヌカイト	若干の敲打痕？あり
536	104	打製石斧	6．4	3．4	0．8	23．6	サヌカイト	両側辺に敲打痕あり



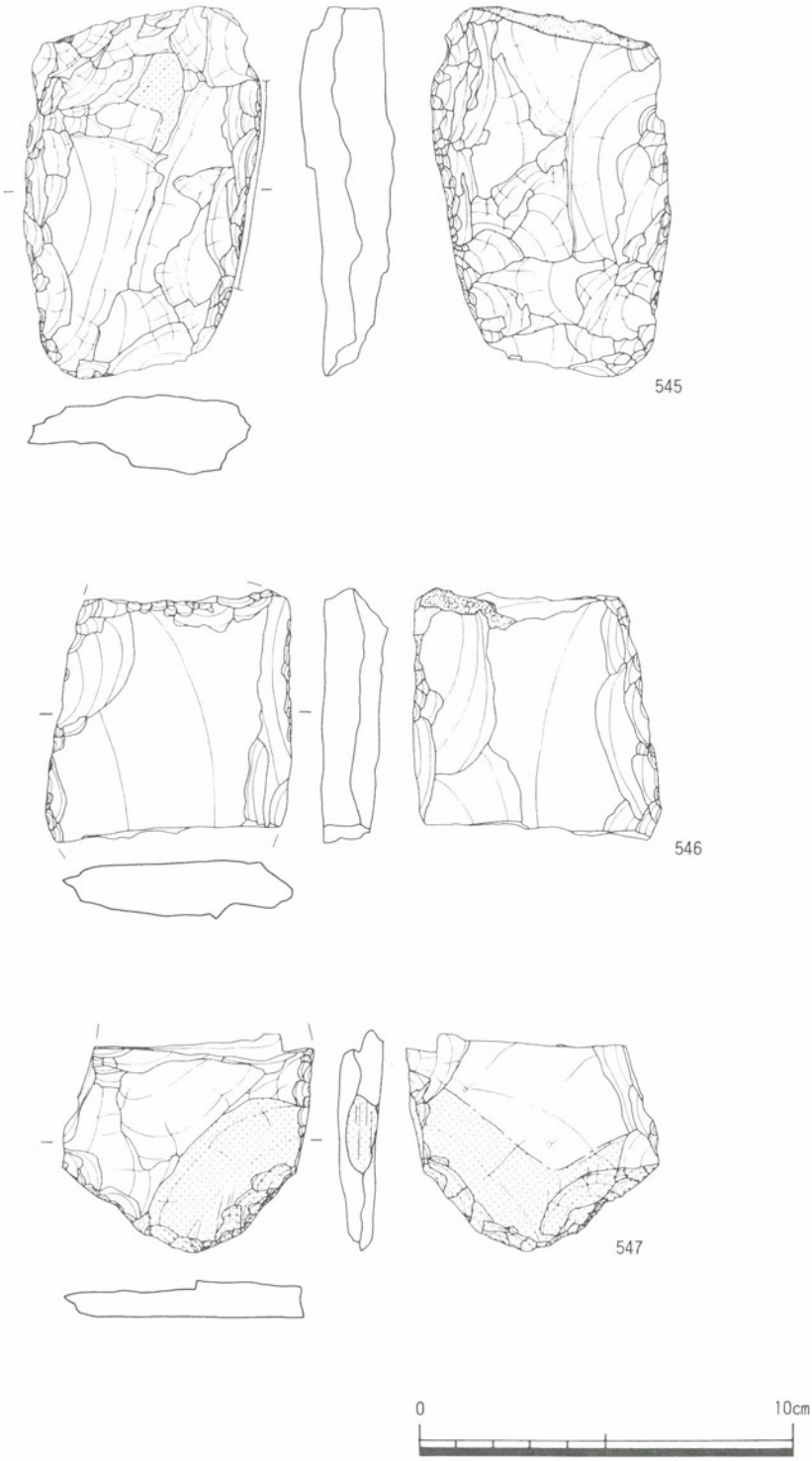
第60図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㊱



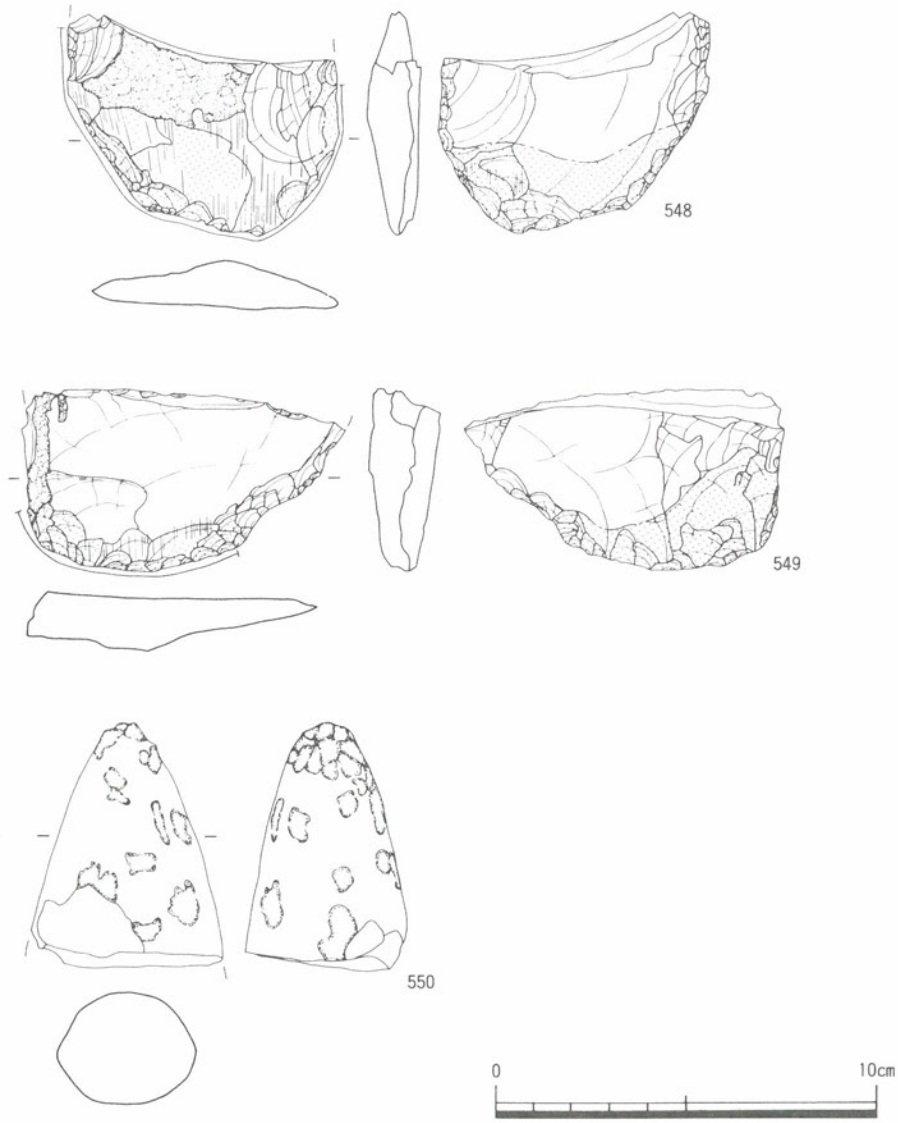
第61図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㊲



第62図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㊳



第63図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㊴



第64図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㊵

第47表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㊲観察表

遺物番号	写真図版	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	備考
537	106	打製石斧	7．4	4．0	0．9	37．0	サヌカイト	基部を欠損　右側辺に敲打痕あり　片面に磨滅がみられる
538	106	打製石斧	7．9	5．4	1．6	78．6	サヌカイト	基部の一部に敲打痕あり
539	106	打製石斧	7．9	4．8	1．1	55．7	サヌカイト	右側辺に敲打痕あり　刃部両面に磨滅がみられる
540	105	打製石斧	8．5	4．7	1．4	64．6	サヌカイト	左側辺に敲打痕あり　片面刃部に磨滅・削痕がみられる
541	105	打製石斧	7．4	4．0	0．9	37．0	サヌカイト	基部を欠損　両側辺に敲打痕あり　両面刃部に磨滅・削痕がみられる

第48表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㊳観察表

遺物番号	写真図版	器　種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	材　質	備　　考
542	106	打製石斧	7．1	5．5	1．6	99．7	結晶片岩	基部と頭部を欠損　片面に自然面が残る　両側辺に敲打痕あり
543	106	打製石斧	7．8	6．5	1．6	96．4	サヌカイト	基部を欠損　両側辺に敲打痕あり
544	106	打製石斧	8．1	6．6	1．2	89．8	サヌカイト	基部を欠損　両側辺に敲打痕あり　片面刃部付近に自然面が残る

第49表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㊴観察表

遺物番号	写真図版	器　種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	材　質	備　　考
545	107	打製石斧	10．0	6．3	2．1	164．9	サヌカイト	基部を欠損　右側辺に敲打痕あり
546	—	打製石斧	6．8	6．5	1．6	105．4	安山岩	頭部を欠損　基部の一部に自然面が残る
547	107	打製石斧	5．9	6．3	1．0	51．2	サヌカイト	基部を欠損　片面に磨滅がみられる

第50表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㊵観察表

遺物番号	写真図版	器　種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	材　質	備　　考
548	107	打製石斧	5．9	7．1	1．3	52．0	サヌカイト	頭部のみ残存　片面に自然面が残る　刃部両面に磨滅・削痕がみられる
549	107	打製石斧	8．5	4．9	1．4	71．9	サヌカイト	頭部のみ残存　刃部両面に磨滅・削痕がみられる
550	109	磨製石斧	6．5	5．0	3．0	149．1	緑色片岩	基部のみ残存　敲打痕が若干残る

第51表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㊶観察表

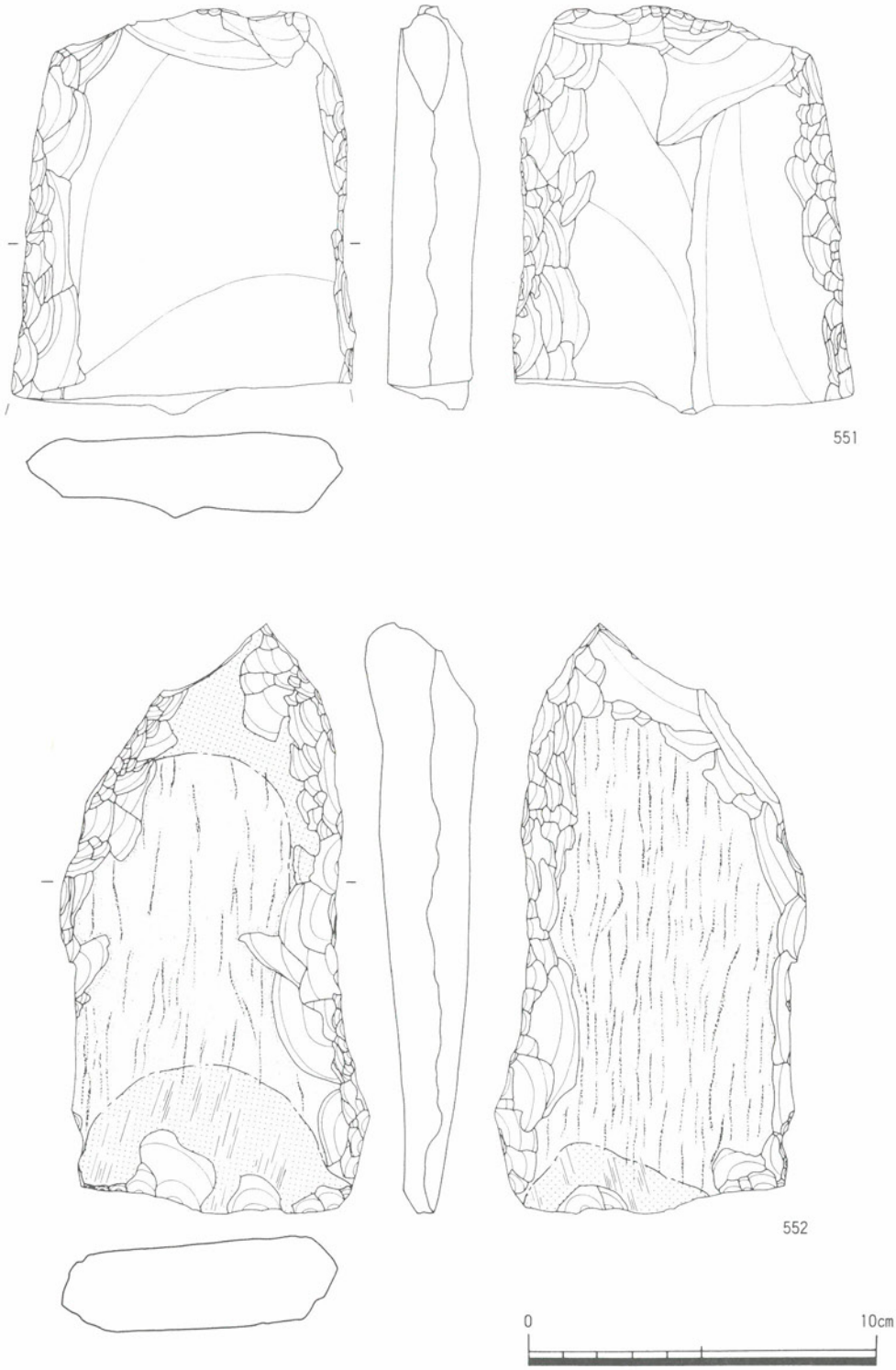
遺物番号	写真図版	器　種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	材　質	備　　考
551	108	打製石鍬	11．8	9．0	2．3	408．3	安山岩	頭部を欠損
552	108	打製石鍬	17．2	9．0	2．5	496．3		刃部両面に磨滅・削痕がみられる

第52表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㊷観察表

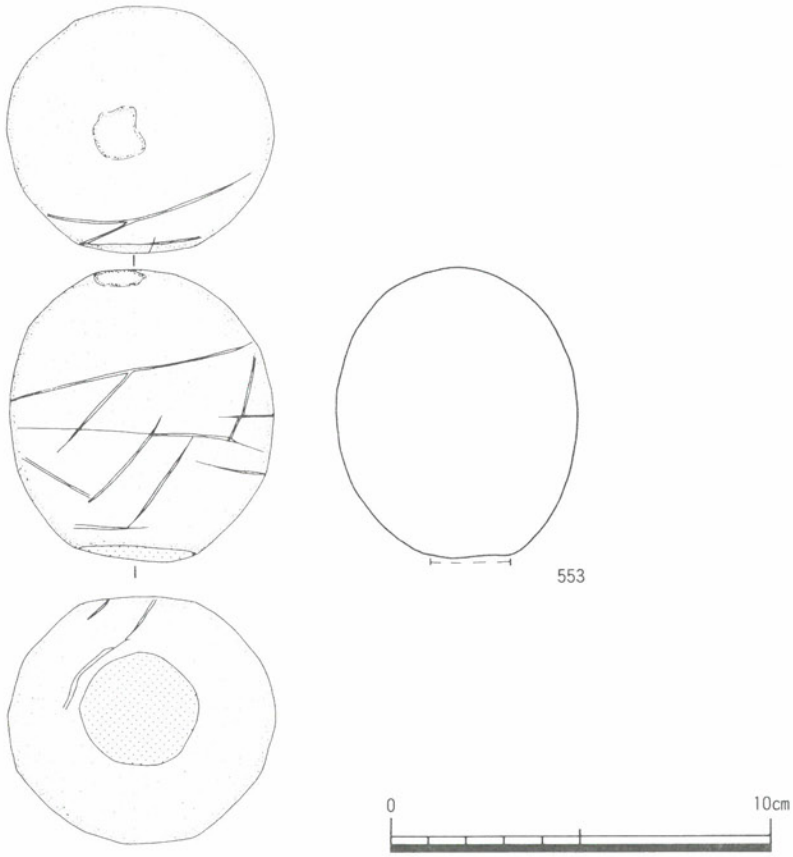
遺物番号	写真図版	器　種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	材　質	備　　考
553	109	磨石	7．7	6．9	6．4	508．5		底に磨滅した小さな平坦面をもつ　文様を線刻する？

551・552は打製石鍬である。551は頭部を欠損している。両側縁に敲打が認められ，材質は安山岩である。552はほぼ完形で，刃部両面と基部の片面に磨滅が認められる。両側縁には敲打痕が残る。

553は磨石である。球形をしているが小さな平坦面をもっており，その面がとくによく磨滅している。磨石の中央部に線刻を施したような細い溝が数条残る。



第65図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㊶



第66図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㊷

554～567は木器である。

554は刃部先端付近を一部欠損しているが，ほぼ完形の諸手鍬である。材質はアカガシ亜属と推定され，木取りは柾目取りである。全長38.6cmをはかる。断面が台形を呈する方形隆起から両側に刃部がのびている。方形隆起の幅が刃部の幅よりも大きいため，全体としてはプロペラ形を呈している。側面からみると，全体に緩やかに彎曲しており，外側に隆起部が突出する形態をしている。隆起の中央部に円形の柄孔が穿孔されている。柄を装着した姿は現在のツルハシと同じ姿を呈するものと思われる。

555はほぼ半分を欠損する鍬である。材質はアガカシ亜属で，木取りは柾目取りと思われる。中央部付近になだらかに隆起する円形隆起が作りだされている。柄孔は円形である。裏面には加工痕が部分的にみられ，頭部の先端付近が炭化している。

556・557は鍬の刃部先端付近と考えられるものである。材質は556がアカガシ亜属で，557はクヌギ類似種である。木取りは556・557ともに柾目取りと思われる。どちらも裏面が炭化している。

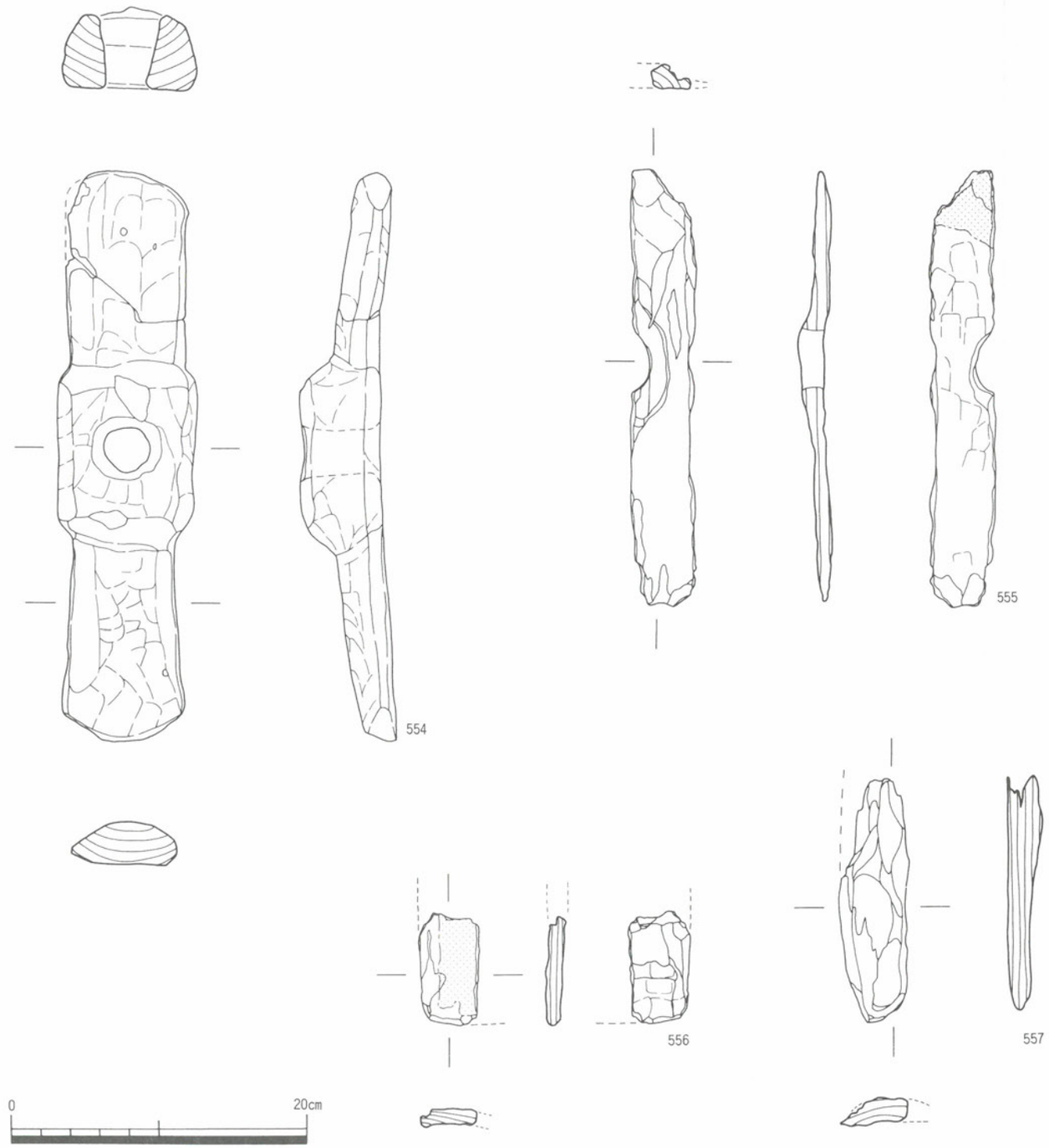
558は一方の短側辺を一部欠損しているが，ほぼ完形のえぶりである。材質はアカガシ亜属と推定され，木取りは板目取りである。本体ほぼ中央部分に方形隆起を作りだしているが，柄孔はまだ穿孔されておらず，製作途中の未製品である。未製品であるため諸手鍬に仕上げる可能性もあるが，木取りなどから考えてもえぶりの方が適切と判断している。短側辺方向の断面をみると緩やかに彎曲しており，外側に方形隆起が突出している。全体に薄く削られており，かなり完成品に近い段階であるものと思われる。

559・560は全体の形がボートのオールのような形状を呈する柄付半截木製品である。559の材質はアカガシ亜属と推定され，芯除材の一木造りである。柄の先端を欠損しているが，ほぼ完形である。断面が蒲鉾形を呈する身の片面は，割り取られたままの状態をしており，製作途中の未製品と考えられる。残存長で97.0cmをはかる。560も559と同様に材質はアカガシ亜属と推定され，芯除材の一木造りである。こちらも蒲鉾型を呈する身の片面が，割り取られたままの状態をしており，製作途中の未製品である。ほぼ完形で全長89.6cmをはかる。559・560の柄付半截木製品はいずれも製作途中の未製品であり，さらに加工・調整が施されて，後述する小型鋤状木製品になる可能性が高い。

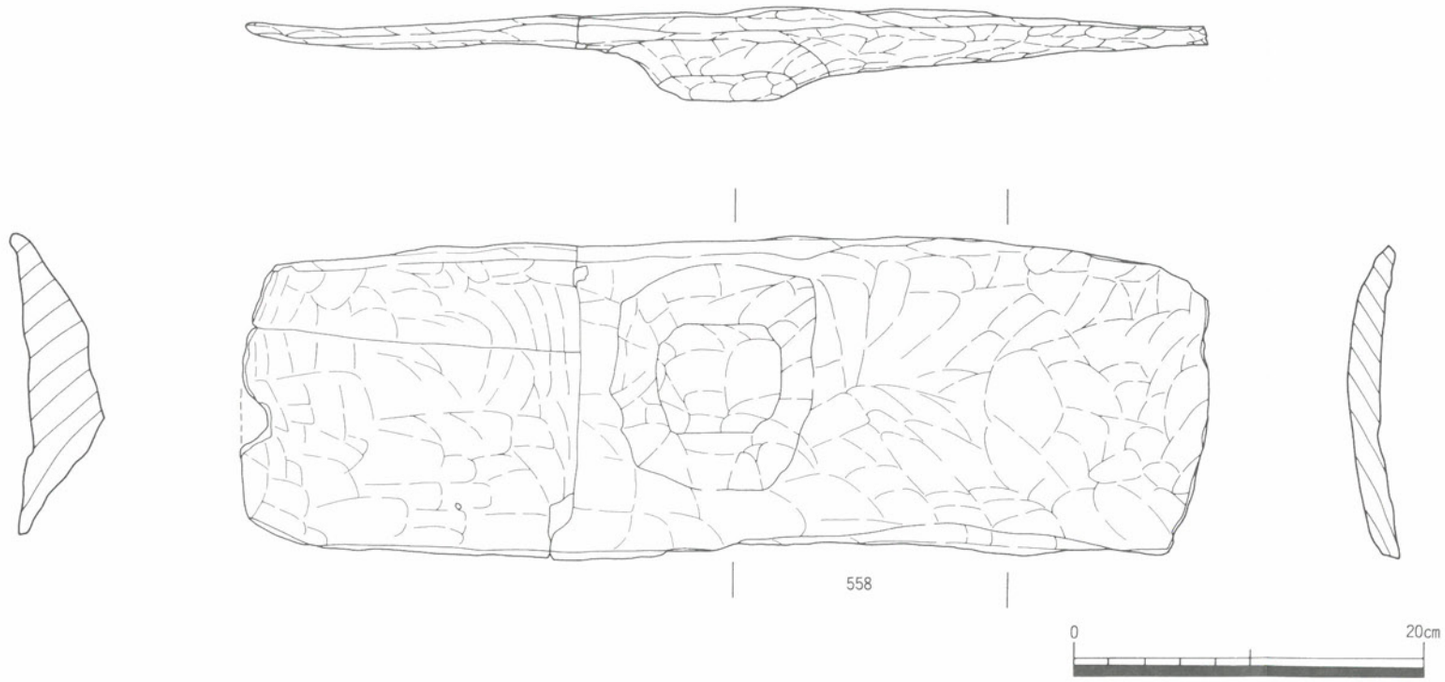
561～564は全体の形がスプーンのような形状を呈する小型鋤状木製品である。561は材質がアカガシ亜属と推定され，芯除材の一木造りである。身の先端を欠損しており，身の破損が著しいが丁寧に調整が施されている。全長は72.8cmをはかる。562は材質がアカガシ亜属と推定され，芯除材の一木造りである。身の先端と柄の先端を欠損している。身はわずかに先端を欠損するが丁寧に調整が施されており，側面観は先端がわずかに反っている。残存長は68.4cmをはかる。563は材質がアカガシ亜属と推定され，芯除材の一木造りである。身の先端と柄の先端を欠損してい

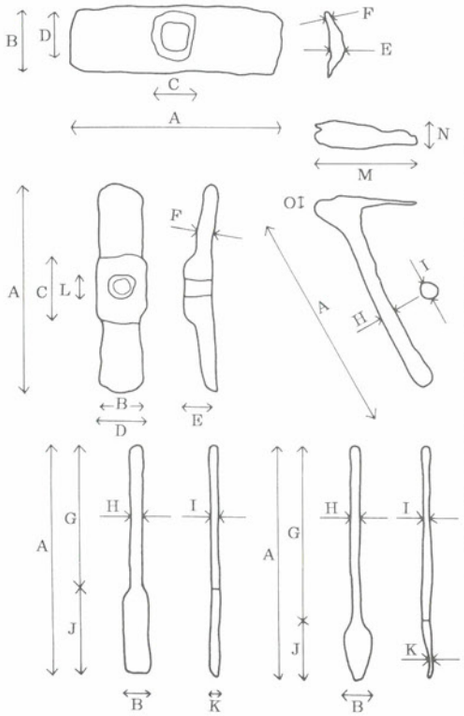
る。身には加工痕が部分的に残る。全体に丁寧に加工・調整が施されており，残存長は58.6cmをはかる。564は材質がアカガシ亜属と推定され，芯除材の一木造りである。今回の調査で出土した小型鋤状木製品4点の中で最も遺存状態が悪く，身の先端を欠損している。身の裏面が炭化している。残存長で69.0cmをはかる。これら4点の小型鋤状木製品は，全長に対して身の長さ・幅が小さく，鋤というには身部が小さすぎる。また，現在でも東南アジアで焼畑農耕に使用されている掘り棒とは形態が異なっている。現段階では類似する資料も少ないため，土を起こす起耕具として使用された可能性を提起するにとどめ，今後の類例の増加に期待したい。

565～567は柄である。565は鍬の柄であり，アカガシ亜属の芯持材を利用している。途中で破損しており，残存長は65.8cmをはかる。566はアオキ類似種の芯持材を利用した柄である。567は木の又部を使用した石斧の柄である。カヤ類似種の芯持材を利用している。石斧を取り付ける台部の破損が著しい。柄の先端の欠損している部分あたりが炭化している。



第67図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㊸



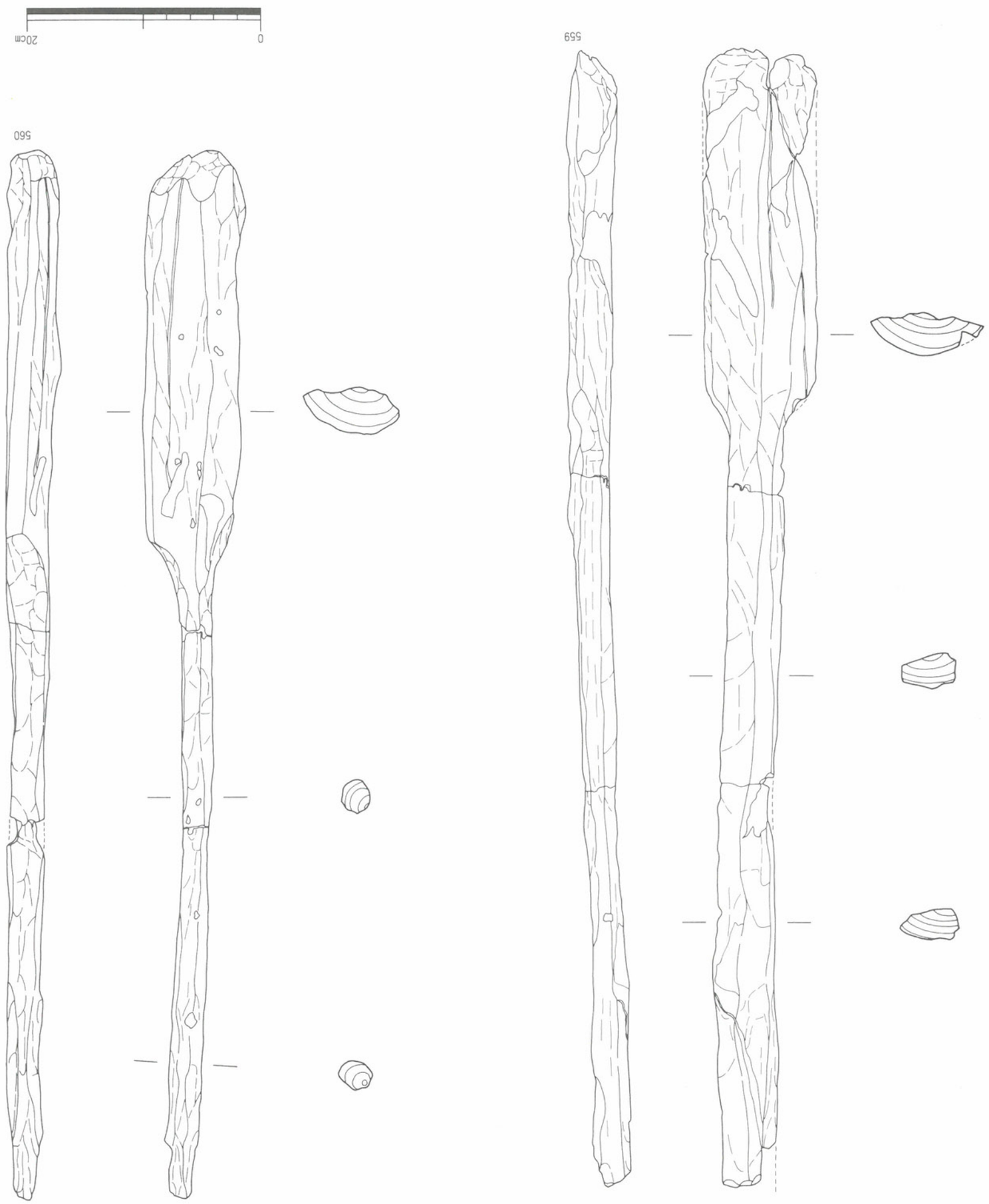


第68図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㊹

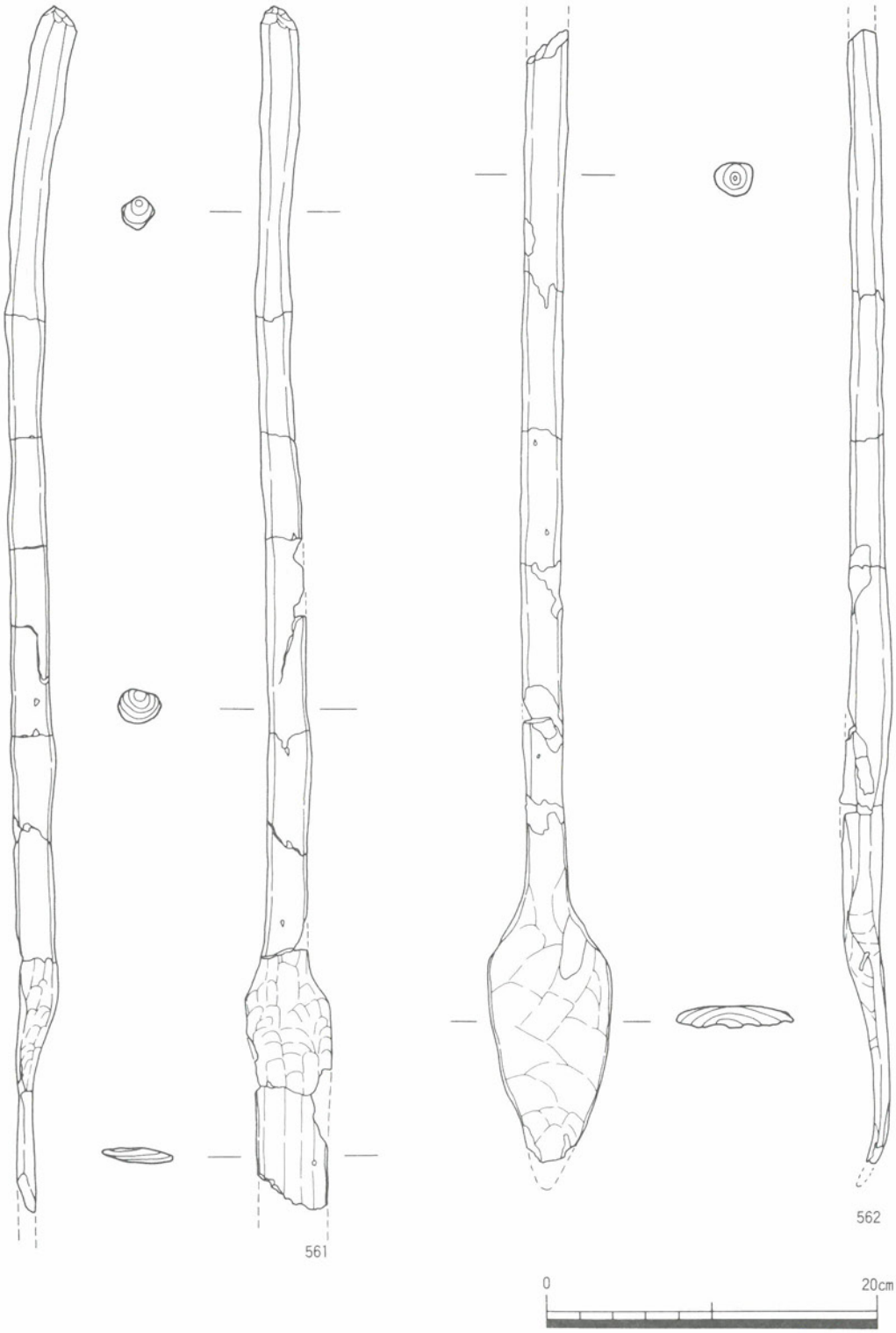
第53表　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㊸～㊽観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量（cm） A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	木取	樹種	備考
554	111	諸手鍬	38.6	8.3	12.8	9.4	5.6	2.9	—	—	—	—	—	3.0	—	—	—	柾目	（アカガシ亜属?）	縁ほぼ完存
555	111	鍬	29.4	4.4	8.6	2.6	1.8	1.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	柾目？	アカガシ亜属	1/2を欠損・裏面先端が深化
556	—	鍬？	7.6	4.2	—	—	—	1.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	柾目？	アカガシ亜属	刃部先端のみ残存・裏面が深化
557	111	鍬？	18.5	4.5	—	—	—	1.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	柾目？	クヌギ類似種	刃部先端のみ残存・裏面が深化
558	112	えぶり	55.2	17.8	11.1	12.8	4.1	1.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	板目	（アカガシ亜属?）	末製品・柄孔は未穿孔
559	112	柄付半截	97.0	9.6	—	—	—	—	65.0	5.1	3.2	32.0	3.8	—	—	—	—	芯除	（アカガシ亜属?）	末製品・身の裏面は未加工
560	112	柄付半截	89.6	8.4	—	—	—	—	53.6	3.6	3.2	36.0	4.1	—	—	—	—	芯除	（アカガシ亜属?）	末製品・身の裏面は未加工
561	113	小型鋤状	72.8	4.9	—	—	—	—	58.2	3.7	3.6	14.6	1.1	—	—	—	—	芯除	（アカガシ亜属?）	先端を欠損
562	113	小型鋤状	68.4	7.4	—	—	—	—	52.9	2.5	2.6	15.5	1.4	—	—	—	—	芯除	（アカガシ亜属?）	先端をわずかに欠損・柄端を欠損
563	114	小型鋤状	58.6	8.6	—	—	—	—	44.3	2.3	2.5	14.3	1.1	—	—	—	—	芯除	（アカガシ亜属?）	先端・柄端を欠損
564	114	小型鋤状	69.0	6.8	—	—	—	—	57.8	2.4	2.5	11.2	1.6	—	—	—	—	芯除	（アカガシ亜属?）	身の裏面が深化・被損が著しい
565	114	柄	65.8	—	—	—	—	—	—	3.2	2.6	—	—	—	—	—	—	芯持	アカガシ亜属	
566	114	柄	29.7	—	—	—	—	—	—	2.3	1.9	—	—	—	—	—	—	芯除	アオキ類似種	
567	114	石斧柄	34.4	—	—	—	—	—	—	2.5	2.2	—	—	—	16.4	4.1	3.9	芯持	カヤ類似種	台部の被損が著しい

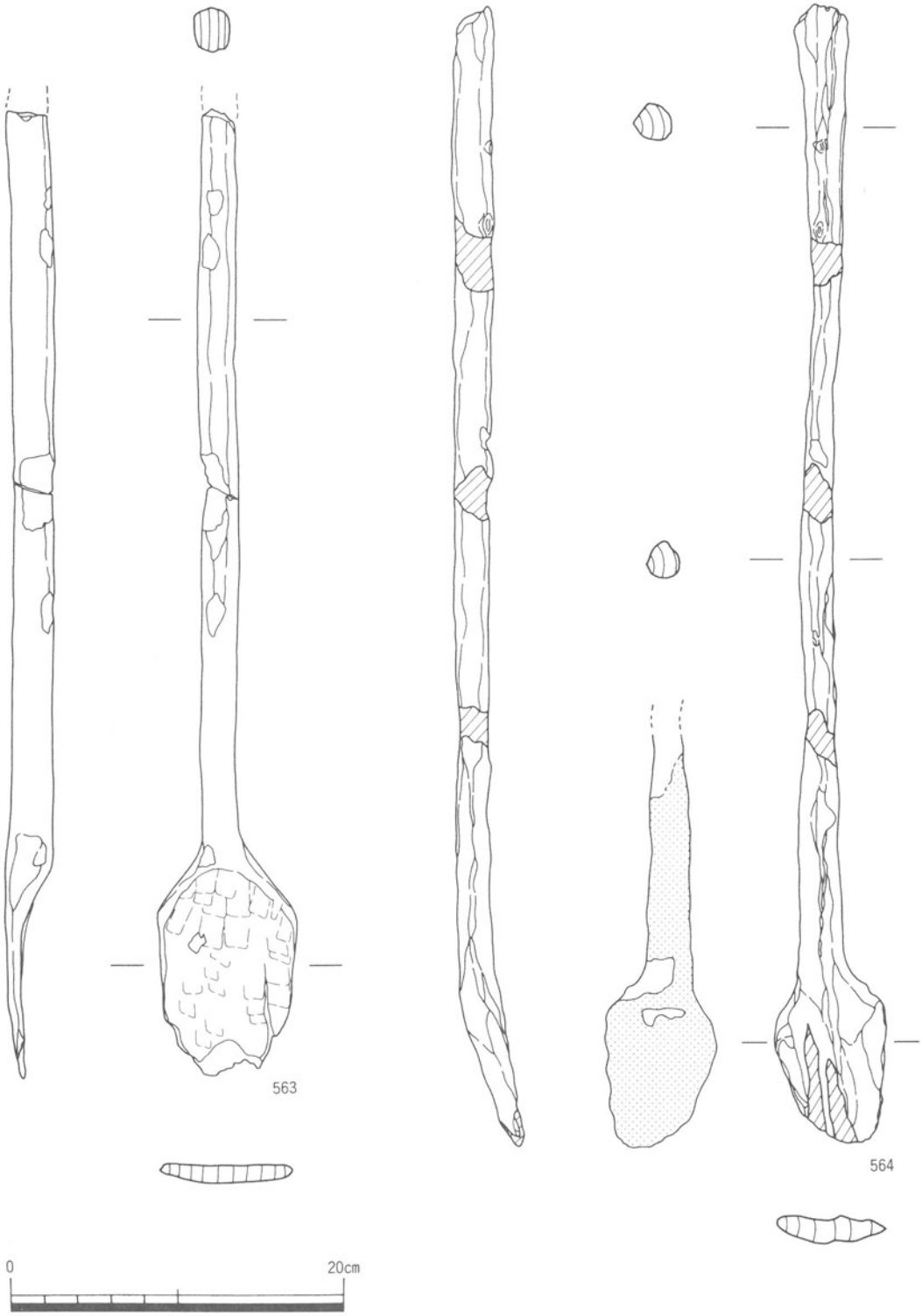
※数字はすべて残存している長さである。
※アルファベットはそれぞれ次の長さを表す。
　A全長・B幅・C隆起長・D隆起幅・E隆起厚・F刃部厚・G柄長・H柄厚1・I柄厚2・J身長・K身厚・L孔径・M台部長・N台部幅・O台部厚
※樹種の（　）は肉眼観察による樹種である。



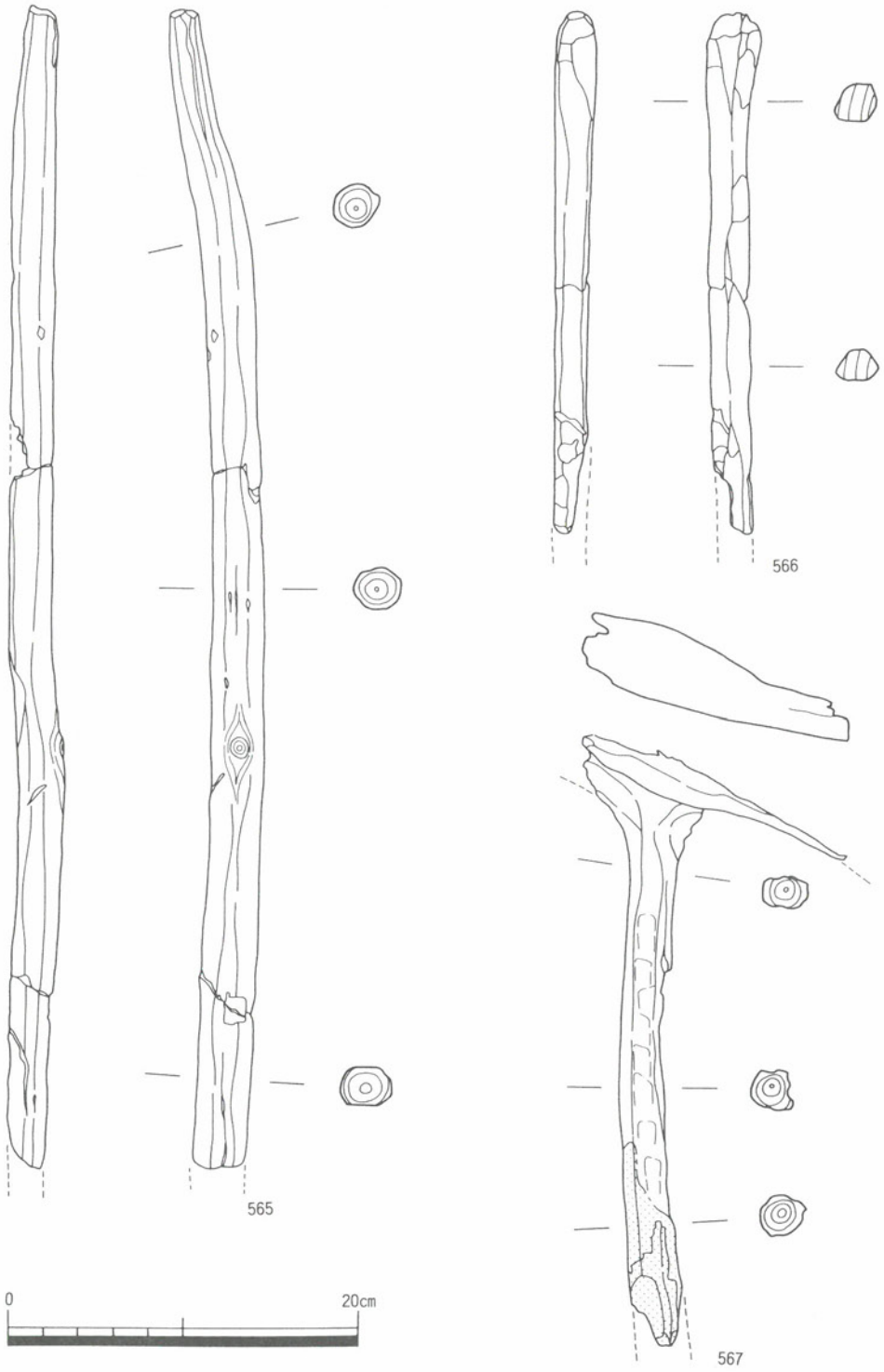
第69図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物④



第70図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㊻



第71図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㊼



第72図　ＳＲ01流路Ａ下層出土遺物㊽

ＳＲ01流路Ａ中層

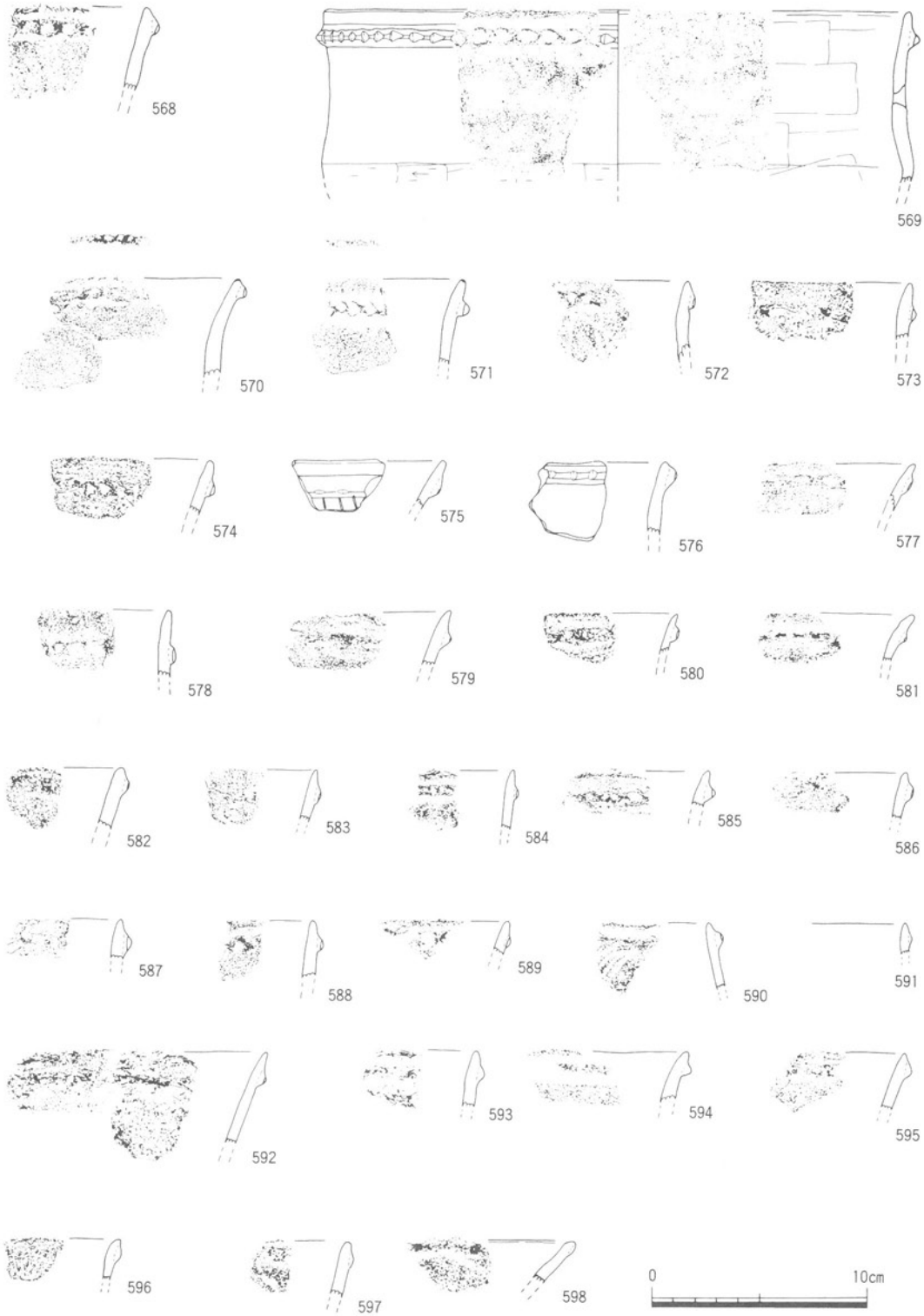
568～700は中層から出土した遺物である。（第73～79図）

568～615は縄文土器深鉢，616～620は縄文土器浅鉢，621～626は縄文土器底部，627～633は弥生土器壺，634～646は弥生土器底部，647～700は石器である。

569～573・575～579・581・585・590～592・594・595・598～603・605・607は屈曲型の深鉢である。569は口縁部から肩部の破片で，頸部に補修孔であろうか穿孔が施されている。調整は外面の頸部が丁寧なナデ風擦過，胴部がケズリで，内面は粗いミガキ風擦過である。頸部と胴部の境は稜をなし，調整もここで異なる。570・571は磨滅が著しいが，口縁端部に刻目が施されている。中層出土の深鉢で，口縁端部に刻目を施したものはこの２点だけであり，端部に刻目をもたないものが圧倒的に多い。571・575・577・578・590・602は頸部に沈線で文様を施している。頸部に沈線で文様を施しているものはすべて屈曲型の深鉢であり，下層と同じ状況を呈している。591・595・598は無刻目凸帯の可能性がある。

第54表　ＳＲ01流路Ａ中層出土遺物①観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量（cm）	調整 外面	調整 内面	凸帯 断面形	凸帯 刻文性	凸帯 位置	端部形	端部刻	内面沈	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	残存度
568	115	深鉢	——	ナデ・ナデ	ナデ	下三角	刺	0.3	丸	—	—		白褐	暗茶褐	2㎜以下の砂粒	破片
569	115	深鉢	(26.8)	ナデ・ナデ風擦過・ケズリ	ナデ・粗いミガキ風擦過	三角	押	0.6	丸	—	—	頸部に穿孔・頸胴の境は調整の違い	暗褐～褐	淡褐	1～4㎜程度の砂粒	1／8
570	115	深鉢	——	ナデ	ナデあるいは擦過	台形	刺	0.2	丸	○	—	磨滅が進む	黒褐	暗褐	2㎜以下の砂粒	破片
571	115	深鉢	——	丁寧なナデ	ナデ風擦過	蒲鉾	押	0.8	丸	○	—	口縁端部は尖り気味の丸	黒褐	黒褐	2㎜以下の砂粒	破片
572	115	深鉢	——	ナデ？	ナデ？	台形	押	0.4	尖	—	—	磨滅が進む・（外）頸部に沈線文	淡褐	淡褐	1～2㎜以下の砂粒	破片
573	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	三角	刺	0.8	丸	—	—	凸帯がほとんど剥離・磨滅が進む	黒茶	黒茶	1～4㎜程度の砂粒	破片
574	—	深鉢	——	ナデ？	ナデ？	台形	刺	0.8	丸	—	—	磨滅が進む	濁黄褐	濁黄褐	1～3㎜程度の砂粒	破片
575	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	三角	軽	0.6	丸	—	—	磨滅が進む・（外）頸部に沈線文	濁褐	濁褐	2㎜以下の砂粒	破片
576	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	三角	軽	0.1	丸	—	—	磨滅が著しい	白褐	白褐	2㎜以下の砂粒	破片
577	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	蒲鉾	軽	0.5	尖	—	—	磨滅が進む・（外）頸部に沈線文	淡灰茶褐	淡灰茶褐	3㎜程度の砂粒	破片
578	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	台形	刺	1.7	丸	—	—	（外）頸部にヘラ描文	淡褐	淡褐	1～3㎜程度の砂粒	破片
579	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	三角	軽	0.8	尖	—	—	磨滅が著しい	淡褐	淡褐	4㎜以下の砂粒	破片
580	—	深鉢	——	ナデ	磨滅のため不明	台形	軽	0.5	尖	—	—	磨滅が進む	濁褐	黄褐	1～2㎜以下の砂粒	破片
581	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	三角	軽	0.7	丸	—	—	磨滅が著しい	淡黄褐	淡黄褐	1～3㎜以下の砂粒	破片
582	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	台形	？	0.3	丸	—	—	磨滅が著しく刻目が不明	淡褐	淡褐	3㎜以下の砂粒	破片
583	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	三角	軽	0.7	尖	—	—	磨滅が著しい	暗茶褐	暗茶褐	2㎜以下の砂粒	破片
584	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	台形	軽	0.7	尖	—	—		淡褐	淡褐	1～3㎜以下の砂粒	破片
585	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	三角	軽	0.5	丸	—	—	磨滅が進む	淡灰茶褐	淡灰茶褐	2㎜以下の砂粒	破片
586	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	三角	軽	0.4	丸	—	—	磨滅が著しい	淡灰茶褐	淡灰茶褐	1㎜以下の砂粒	破片
587	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	三角	押	0.6	尖	—	—	磨滅が著しい	淡褐	淡褐	1㎜以下の砂粒	破片
588	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	台形	押	0.6	丸	—	—	磨滅が著しい	淡茶褐	黒褐	3㎜以下の砂粒	破片
589	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	三角	刺	0.5	丸	—	—	磨滅が著しい	濁茶褐	濁黒褐	1～5㎜程度の砂粒	破片
590	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	三角	軽	0.5	尖	—	—	（外）頸部にヘラ描文	暗褐	暗褐	1～2㎜程度の砂粒	破片
591	—	深鉢	——	ナデ？	ナデ	三角	？	0.4	丸	—	—	無刻目凸帯？・磨滅が著しい	淡赤茶褐	淡赤茶褐	1～2㎜程度の砂粒	破片
592	—	深鉢	——	ナデ	ナデ・軽い擦過	三角	軽	0.7	丸	—	—	磨滅が進む	淡黄褐	淡黄褐	1～3㎜以下の砂粒	破片
593	—	深鉢	——	ナデ？	磨滅のため不明	三角	？	0.5	丸	？	—	磨滅が著しく刻目不明	淡黄褐	黒	1～3㎜以下の砂粒	破片
594	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	三角	？	0.4	丸	—	—	磨滅が著しく刻目不明	濁褐	淡褐	3㎜以下の砂粒	破片
595	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	三角	？	0.3	尖	—	—	無刻目凸帯？・磨滅が著しい	淡灰褐	淡灰褐	1㎜程度の砂粒	破片
596	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	三角	軽	0.2	尖	—	—	磨滅が著しい	茶褐	茶褐	1～3㎜程度の砂粒	破片
597	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	三角	？	0.3	面	—	—	磨滅が著しく刻目不明	淡灰白褐	淡灰白褐	1㎜以下の砂粒	破片
598	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	蒲鉾	？	0.1	尖	—	—	無刻目凸帯？・磨滅が著しい	淡褐	暗褐	1～2㎜程度の砂粒	破片



第73図　ＳＲ01流路Ａ中層出土遺物①

568・574・580・582～584・586～589・593・596・597・604・606は砲弾型の深鉢である。いずれも小破片であり，全体の器形のわかるものはない。

608～615は深鉢の肩部・頸部の破片である。608は屈曲型深鉢の肩部で，頸部と胴部の境は稜をなしている。調整は外面の頸部が丁寧なナデ，胴部が擦過，内面は粗めの擦過である。609は屈曲型深鉢の肩部で，頸部と胴部の境に沈線を1条めぐらせている。頸部にはヘラ描沈線で文様を施している。610～615は頸部の破片で，外面にヘラ描沈線による文様を施している。これらは屈曲型深鉢の頸部と考えられる。

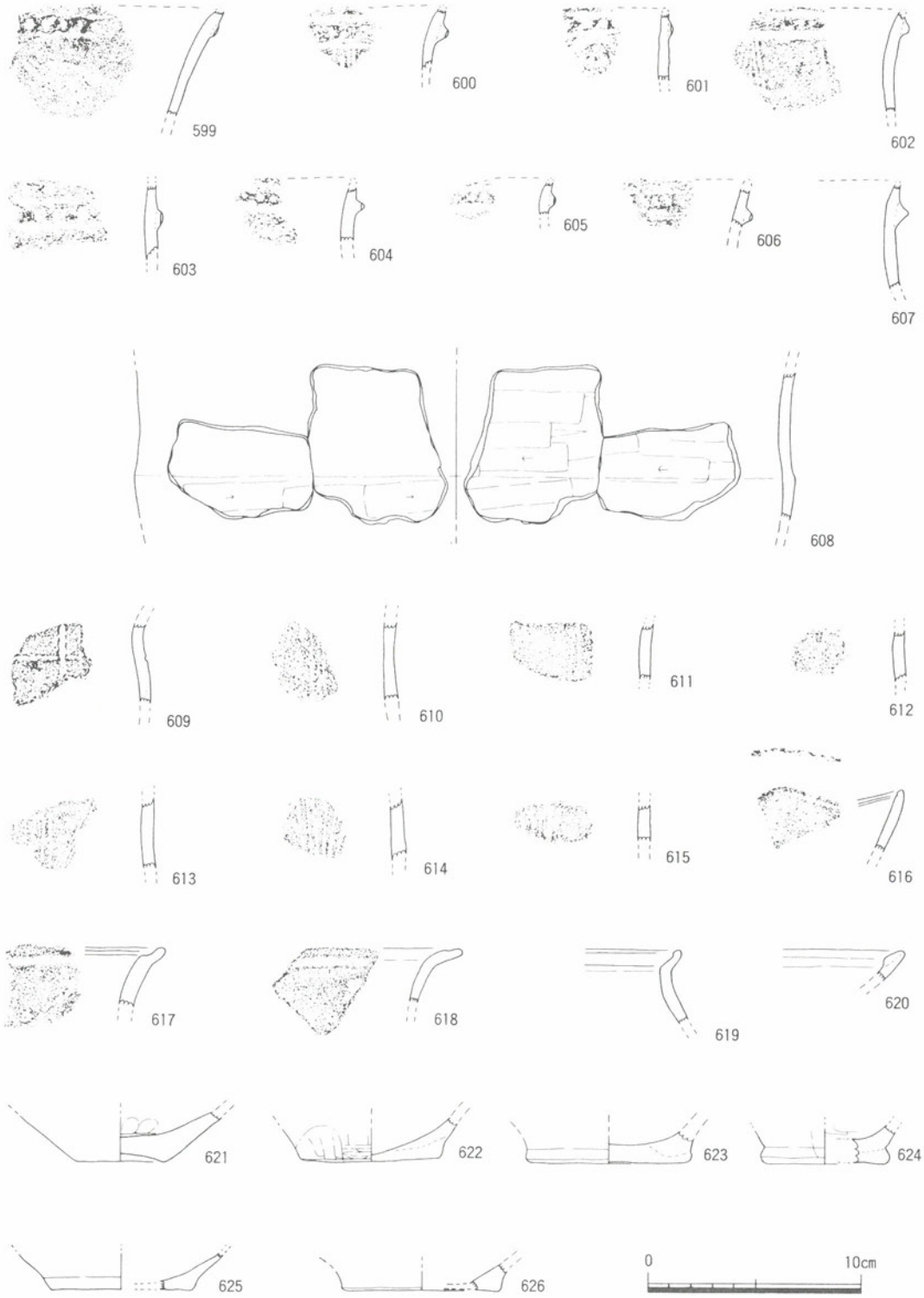
616～620は浅鉢の口縁部の破片である。616は波状口縁浅鉢の波頂部で破片である。波頂部に刻目を施し，口縁部内面には沈線を1条めぐらせている。617・618は外反する口頸部が長い浅鉢である。いずれも口縁部内面に沈線を1条めぐらせている。617は波状口縁になる可能性がある。

619は口頸部が内傾し口縁部が短く外へ屈曲する浅鉢である。口縁部内面に沈線を1条めぐらせている。小破片のため浅鉢に含めたが，「浅鉢変容壺」の可能性がある。620は口縁部内面が肥

第55表　ＳＲ01流路Ａ中層出土遺物②観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm)	調整		凸帯			端部形	端部刻	内面沈	その他	色調		胎土	残存度
				外面	内面	断面形	刻み	位置					外面	内面		
599	115	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	台形	刺	—	—	—	—	口縁端部を欠損	暗灰茶褐	暗灰茶褐	4mm以下の砂粒	破片
600	—	深鉢	——	ナデ	ナデ	台形	刺	—	—	—	—	口縁端部を欠損	黄褐	黄褐	1～3mm程度の砂粒	破片
601	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	蒲鉾	押	—	—	—	—	口縁端部を欠損	淡黄褐	淡黄褐	1～3mm程度の砂粒	破片
602	115	深鉢	——	ナデ	磨滅のため不明	三角	—	—	—	—	—	口縁端部を欠損・(外)頸部文様	茶褐	黒褐	1～5mm程度の砂粒	破片
603	115	深鉢	——	ナデ	擦過	三角	軽	—	—	—	—	口縁端部を欠損	黒褐	黒褐	1～3mm程度の砂粒	破片
604	—	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	三角	押	—	—	—	—	口縁端部を欠損・磨滅が著しい	淡褐	淡褐	2mm以下の砂粒	破片
605	—	深鉢	——	磨滅のため不明	ナデ？	台形	刺	—	—	—	—	口縁端部を欠損・磨滅が著しい	濁褐	濁褐	1mm以下の砂粒	破片
606	115	深鉢	——	ナデ	剥離のため不明	台形	刺	—	—	—	—	口縁端部を欠損・剥離が進む	淡褐	淡褐	1mm以下の砂粒	破片
607	—	深鉢	——	ナデ？	磨滅のため不明	三角	？	—	—	—	—	口縁端部を欠損・磨滅が著しい	淡褐	淡褐	1～5mm以下の砂粒	破片
608	115	深鉢	——	擦過のち丁寧なナデ・擦過	擦過のちナデ	——	—	—	—	—	—	屈曲型・頸胴の境は調整の違い	暗褐	暗褐	4mm以下の砂粒	1／8
609	116	深鉢	——	擦過	ナデ？	——	—	—	—	—	—	屈曲型・(外)沈線1条・頸部文様	濁黄褐	濁黄褐	1～3mm以下の砂粒	破片
610	116	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	——	—	—	—	—	—	頸部・(外)ヘラ描文	淡茶褐	淡茶褐	2mm以下の砂粒	破片
611	116	深鉢	——	磨滅のため不明	擦過	——	—	—	—	—	—	頸部・(外)ヘラ描文	黒	濁褐	1～2mm以下の砂粒	破片
612	116	深鉢	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	——	—	—	—	—	—	頸部・(外)ヘラ描文	暗褐	暗褐	2mm以下の砂粒	破片
613	116	深鉢	——	磨滅のため不明	ナデ？	——	—	—	—	—	—	頸部・(外)ヘラ描文	黄褐	黄褐	1～3mm程度の砂粒	破片
614	116	深鉢	——	擦過？	ナデ	——	—	—	—	—	—	頸部・(外)ヘラ描文	暗褐	暗褐	1mm以下の砂粒	破片
615	116	深鉢	——	ナデ？	ナデ	——	—	—	—	—	—	頸部・(外)ヘラ描文	淡褐	淡褐	1mm以下の砂粒	破片

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm)			調整		その他	色調		胎土	残存度
			径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
616	—	縄文　浅鉢	—	——	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	波状口縁・波頂部に刻目・(内)沈線1条	淡灰褐	淡灰褐	2mm以下の砂粒少し	破片
617	—	縄文　浅鉢	—	——	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	波状口縁の可能性・(内)沈線1条	灰茶褐	灰茶褐	2mm以下の砂粒	破片
618	—	縄文　浅鉢	—	——	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	(内)沈線1条	灰褐	灰褐	1～3mm以下の砂粒	破片
619	—	縄文　浅鉢	—	——	——	磨滅のため不明	ナデ？	波状口縁の可能性・(内)沈線1条	淡黄褐	淡灰褐	1～4mm程度の砂粒	破片
620	—	縄文　浅鉢	—	——	——	ヨコナデ	ヨコナデ	(内)端部肥厚	濁白褐	橙褐	1mm以下の砂粒	破片
621	116	縄文　底部	—	4.0	——	剥離のため不明	指ナデ	深鉢・凹底・剥離が進む	淡黄褐	黒茶褐	1mm以下の砂粒	2／3
622	116	縄文　底部	—	6.5	——	擦過のちミガキ・指押さえのちナデ	ナデ	深鉢？・平底・(外)黒斑	淡褐	淡褐	1～6mm程度の砂粒	1／2
623	—	縄文　底部	—	(7.6)	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	浅鉢・平底・磨滅が進む	濁橙褐	濁褐	1～4mm程度の砂粒	1／4
624	—	縄文　底部	—	(5.6)	——	ナデ	擦過	浅鉢・平底	濁褐	暗褐	2mm以下の砂粒	1／4
625	—	縄文　底部	—	(6.4)	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	浅鉢・平底・磨滅が進む	淡茶褐	淡茶褐	2mm以下の砂粒	1／4
626	—	縄文　底部	—	(7.4)	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	深鉢？・平底・磨滅が進む	橙褐	黒褐	1～2mm程度の砂粒	1／4



第74図　ＳＲ01流路Ａ中層出土遺物②

厚する浅鉢である。

621～626は縄文土器の底部である。621・622・626は深鉢の底部である。621は凹底，622・626は平底である。いずれも磨滅が著しい。623～625は浅鉢あるいは壺の底部である。いずれも平底である。

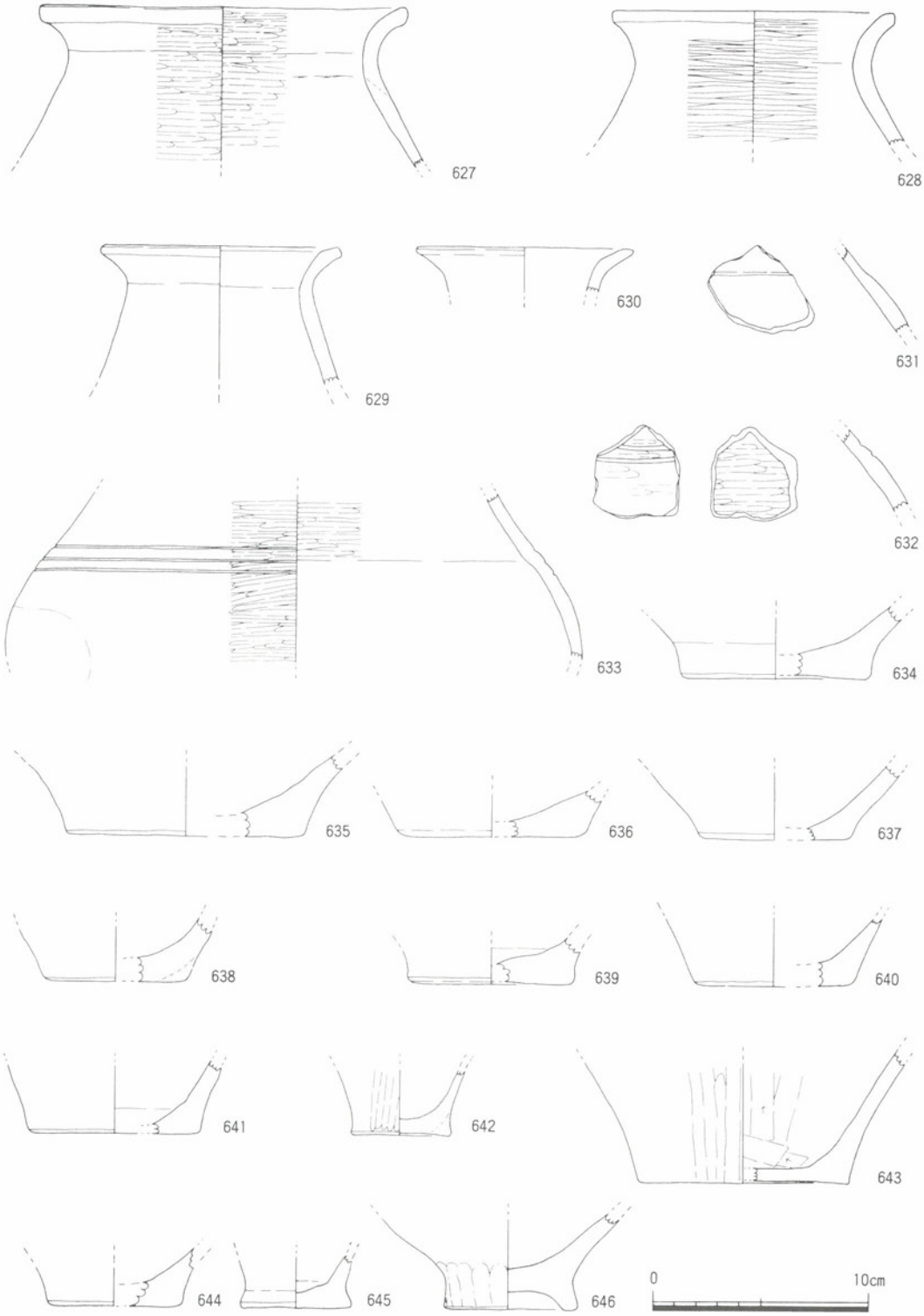
627～633は弥生土器の壺である。627～630は壺の口縁部で，内外面ともに丁寧な調整が施されている。631～633は壺の肩部である。631は肩部に段を有している。632・633はいずれも肩部にヘラ描き沈線を３条めぐらせており，横方向の丁寧なヘラミガキ調整を施している。633の外面には黒斑がみられる。

634～646は弥生土器の底部である。634～637は壺の底部，638～645は甕の底部，646は鉢の底部と思われる。いずれも磨滅・剝離が進んでいる。

これらの弥生土器は胎土中に石英・長石粒を多く含んでおり，色調や形態から弥生時代前期の所産として位置付けられるものである。

第56表　ＳＲ01流路Ａ中層出土遺物③観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	調整 外面	調整 内面	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	残存度
627	116	弥生　壺	16.6	——	——	ヨコナデ・ミガキ	ヨコナデ・ミガキ	(内)粘土紐接合痕	淡黄褐	淡黄褐	3㎜以下の石英・長石	1／4
628	116	弥生　壺	(13.0)	——	——	ヨコナデ・ミガキ	ヨコナデ・ミガキ		淡灰褐	淡灰褐	2㎜程度の石英・長石多い	1／8
629	116	弥生　壺	10.6	——	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	磨滅・剝離が進む	淡褐	暗灰褐	3㎜程度の石英・長石多い	1／3
630	—	弥生　壺	(10.0)	——	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	磨滅が進む	淡褐	淡褐	2㎜程度の石英・長石多い	1／8
631	—	弥生　壺	——	——	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	肩部・磨滅が進む・(外)段	淡褐	淡褐	2㎜程度の石英・長石多い	破片
632	—	弥生　壺	——	——	——	ミガキ	ミガキ	肩部・(外)ヘラ描沈線２条	白褐	白褐	2㎜程度の石英・長石多い	破片
633	116	弥生　壺	——	——	——	ミガキ	ミガキ・ナデ	頸部・(外)黒斑・ヘラ描沈線3条・沒?	淡褐	淡褐	3㎜程度の石英・長石多い	1／8
634	—	弥生　底部	——	8.6	——	ナデ・板ナデ	ナデ	壺・磨滅が進む	濁黄褐	濁灰褐	5㎜程度の石英・長石多い	1／2
635	—	弥生　底部	——	(11.0)	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	壺・磨滅が著しい	淡褐	淡黒褐	1㎜程度の石英・長石多い	1／6
636	—	弥生　底部	——	7.8	——	磨滅のため不明	板ナデ?	壺?・磨滅が進む	赤褐	茶褐	4㎜程度の石英・長石多い	1／3
637	—	弥生　底部	——	(6.8)	——	磨滅のため不明	ナデ?	壺?・磨滅が進む	淡橙褐	淡灰褐	4㎜程度の石英・長石多い	1／6
638	—	弥生　底部	——	6.1	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	甕?・磨滅が著しい	濁褐	淡褐	3㎜程度の石英・長石多い	1／3
639	—	弥生　底部	——	7.6	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	甕?・磨滅が著しい	橙褐	橙褐	5㎜程度の石英・長石多い	1／4
640	—	弥生　底部	——	7.2	——	磨滅のため不明	ナデ?	甕・磨滅が著しい	灰褐	灰褐	3㎜程度の石英・長石多い	1／4
641	—	弥生　底部	——	7.1	——	磨滅のため不明	板ナデ?	甕・磨滅が著しい	淡褐	淡褐	3㎜程度の石英・長石多い	1／4
642	—	弥生　底部	——	4.5	——	タテハケメ・指ナデ?	ナデ	甕?	灰白褐～黒褐	淡黄褐	5㎜程度の石英・長石	1／1
643	—	弥生　底部	——	9.6	——	粗いナデ・板ナデ	板ナデ	甕	淡灰褐	淡灰褐	4㎜以下の石英・長石多い	1／2
644	—	弥生　底部	——	5.8	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	甕	淡橙褐	淡橙褐	5㎜程度の石英・長石多い	1／4
645	—	弥生　底部	——	(5.0)	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	甕・磨滅が著しい	淡黒褐	淡黒褐	1㎜以下の石英・長石少し	1／5
646	116	弥生　底部	——	6.2	——	指押さえ・指ナデ	磨滅のため不明	鉢?・(内)磨滅が著しい	灰茶褐	淡赤褐	3㎜以下の石英・長石多い	1／1



第75図　ＳＲ01流路Ａ中層出土遺物③

647～700は石器である。

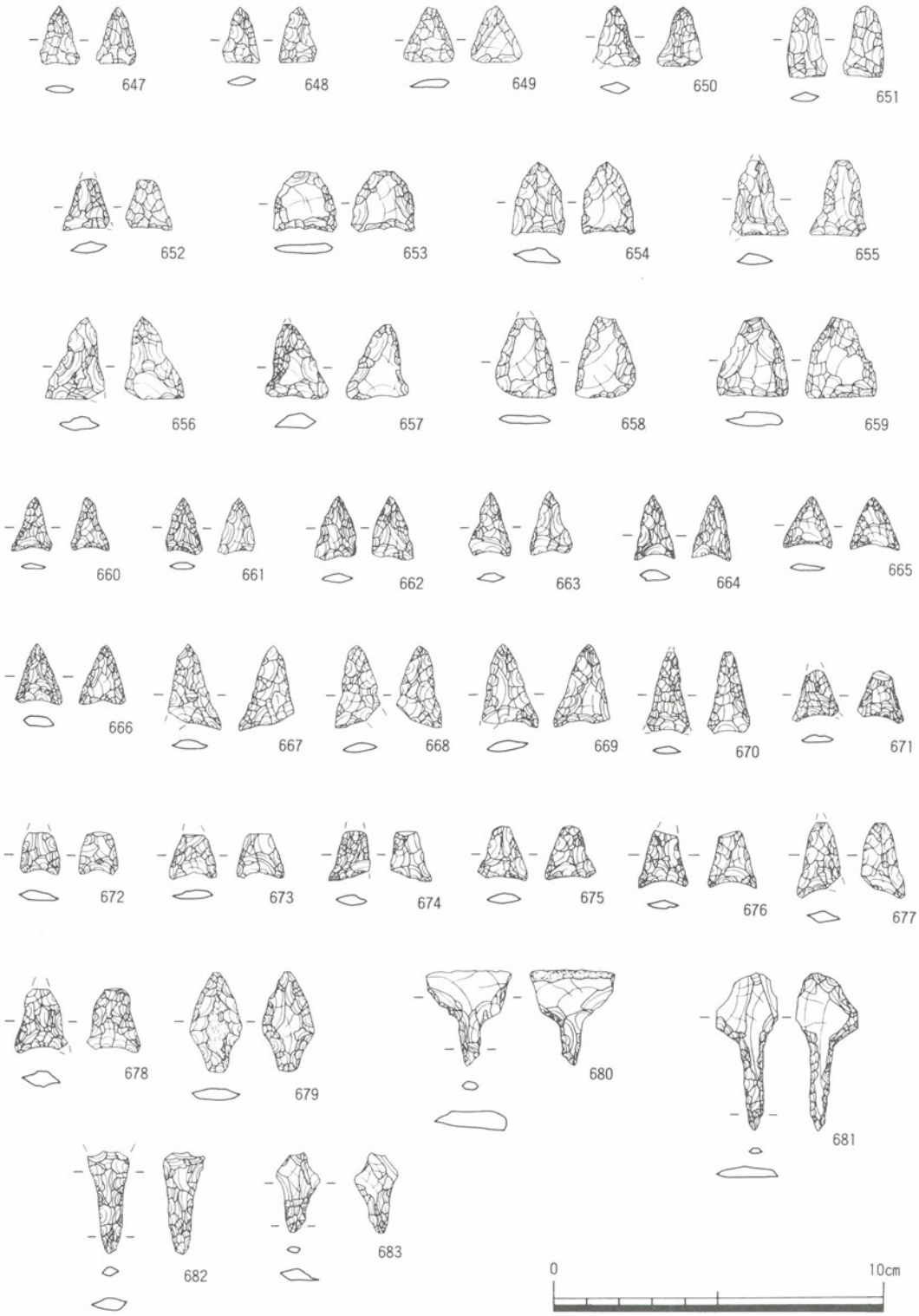
647～679はサヌカイト製の石鏃である。ほとんどのものが無茎の平基式の石鏃であるが，基部がわずかに凹み気味のものも若干見受けられる。679は中層出土の石鏃のうち唯一の有茎の凸基式の石鏃である。

680～683はサヌカイト製の石錐である。680・681はいずれも頭部に素材の剥片の形状をとどめている。680は錐部を破損したのちも，再加工して石錐として使用していたことがうかがえる。683は頭部と錐部を破損しているが，残存する錐部先端の状況から加工し直して再利用したことがわかる。682は錐部のみが残存している。

684は楔形石器である。片面に横方向の削痕が明瞭に残っており，石斧の破損したものを再加

第57表　ＳＲ01流路Ａ中層出土遺物④観察表

遺物番号	写真図版	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	備考
647	117	石鏃	1．8	1．2	0．2	0．5	サヌカイト	平基式　基部の一部を欠損
648	117	石鏃	1．7	1．1	0．3	0．4	サヌカイト	平基式
649	117	石鏃	1．7	1．5	0．3	0．6	サヌカイト	平基式
650	117	石鏃	1．9	1．3	0．4	0．6	サヌカイト	平基式　基部の一部を欠損
651	—	石鏃	2．2	1．2	0．3	1．1	サヌカイト	平基式　風化が著しい
652	—	石鏃	1．5	1．4	0．3	0．6	サヌカイト	平基式　先端・基部の一部を欠損
653	—	石鏃	1．8	2．0	0．3	1．5	サヌカイト	平基式　先端が丸い
654	117	石鏃	2．2	1．7	0．4	1．3	サヌカイト	平基式
655	117	石鏃	2．3	1．7	0．4	1．2	サヌカイト	平基式　基部の一部を欠損
656	117	石鏃	2．5	1．8	0．4	1．5	サヌカイト	平基式　基部の一部を欠損
657	—	石鏃	2．2	1．9	0．4	1．5	サヌカイト	平基式
658	117	石鏃	2．5	1．8	0．2	1．4	サヌカイト	平基式　先端と基部の一部を欠損
659	117	石鏃	2．4	2．2	0．4	2．6	サヌカイト	平基式　先端を欠損
660	118	石鏃	1．6	1．2	0．2	0．3	サヌカイト	平基式
661	118	石鏃	1．7	1．1	0．2	0．4	サヌカイト	平基式　基部の一部を欠損
662	118	石鏃	2．0	1．2	0．3	0．6	サヌカイト	平基式
663	118	石鏃	1．9	1．3	0．3	0．5	サヌカイト	平基式　基部の一部を欠損
664	118	石鏃	2．0	1．2	0．3	0．6	サヌカイト	平基式
665	118	石鏃	1．6	1．5	0．2	0．4	サヌカイト	平基式
666	118	石鏃	1．9	1．5	0．3	0．6	サヌカイト	平基式
667	—	石鏃	2．6	1．6	0．3	0．8	サヌカイト	平基式　基部の一部を欠損
668	—	石鏃	2．5	1．4	0．3	0．8	サヌカイト	平基式　基部の一部を欠損
669	118	石鏃	2．5	1．7	0．4	1．1	サヌカイト	平基式　基部の一部を欠損
670	118	石鏃	2．5	1．3	0．3	0．7	サヌカイト	平基式　先端と基部の一部を欠損
671	—	石鏃	1．6	1．4	0．4	0．5	サヌカイト	平基式　先端と基部の一部を欠損
672	—	石鏃	1．3	1．2	0．3	0．5	サヌカイト	平基式　先端と基部の一部を欠損
673	—	石鏃	1．4	1．4	0．3	0．5	サヌカイト	平基式　先端を欠損
674	—	石鏃	1．5	1．2	0．3	0．5	サヌカイト	平基式　先端と基部の一部を欠損
675	—	石鏃	1．7	1．5	0．3	0．6	サヌカイト	平基式　先端と基部の一部を欠損
676	—	石鏃	1．8	1．5	0．3	0．6	サヌカイト	平基式　先端と基部の一部を欠損
677	—	石鏃	2．3	1．4	0．4	0．8	サヌカイト	平基式　先端と基部の一部を欠損
678	—	石鏃	2．0	1．7	0．5	1．0	サヌカイト	平基式　先端と基部の一部を欠損
679	118	石鏃	3．1	1．6	0．4	2．6	サヌカイト	尖基式
680	118	石錐	2．9	2．6	0．6	3．3	サヌカイト	頭部は素材の剥片の形状を留める
681	118	石錐	4．9	1．9	0．4	2．5	サヌカイト	頭部は素材の剥片の形状を留める
682	118	石錐	3．2	1．3	0．4	1．5	サヌカイト	錐部のみ残存
683	—	石錐	2．5	1．3	0．4	1．1	サヌカイト	



第76図　ＳＲ01流路Ａ中層出土遺物④

工して楔形石器として使用したものらしい。材質はサヌカイトである。

685はサヌカイト製のスクレイパーである。縁辺部には細かな調整が施されているが，一部には敲打が認められることから，打製石斧の破損したものを再利用した可能性もある。

686はサヌカイト製の打製石庖丁である。約半分を欠損するものと思われるが，短側縁には抉りが作りだされている。縁辺部には調整が施されている。

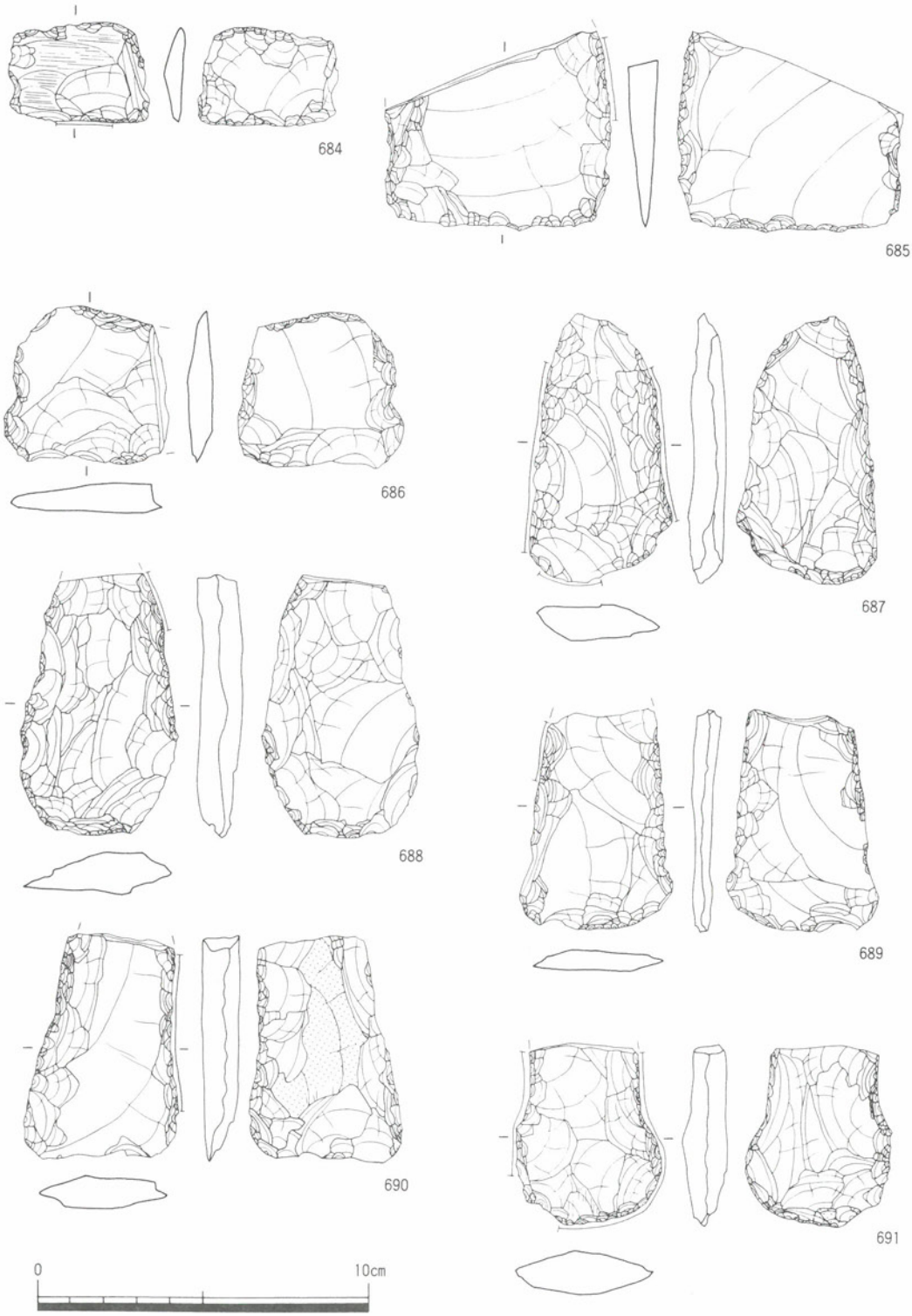
687～698はサヌカイト製の打製石斧である。687はほぼ完形で，両側縁は敲打されている。688は基部を欠損するが，片側縁の一部が敲打されている。689は基部を欠損するが片側縁の一部が敲打されている。全体は長方形を呈するが，かなり扁平でいわゆる打製穂摘具の可能性もある。690は基部を欠損しているが，片側縁が敲打されている。片面に広く磨滅が残る部分がみられる。691は基部を欠損するが，両側縁は敲打されている。刃部の片面に削痕が残っており，刃部の先端は使用によってつぶれている。694は刃部付近の破片である。両側縁は敲打されている。両面に削痕が明瞭に残る。695も刃部の破片である。片面が磨滅している。698は完形の打製石斧である。側縁の一部が敲打されている。片面が広く磨滅しており，斜め方向の削痕が明瞭に残っている。他の打製石斧に認められる削痕とは方向を異にしており，698は他の石斧とは異なる使われかたをしたことがわかる。

699は磨製の柱状片刃石斧である。材質は緑泥片岩で，先端をわずかに欠損している。

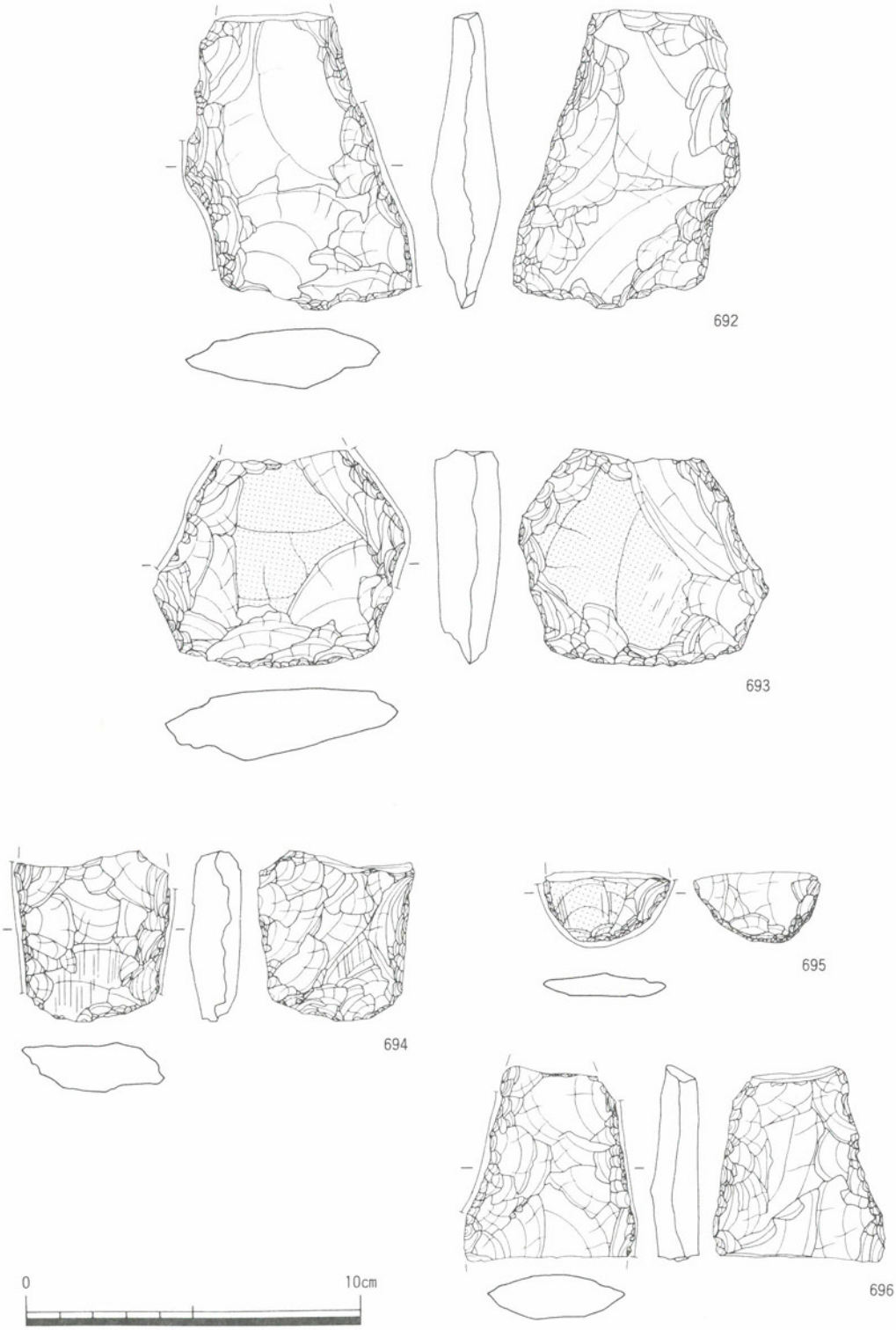
700は大型の打製石鍬の基部である。両側縁は敲打されている。材質は安山岩である。

第58表　ＳＲ01流路Ａ中層出土遺物⑤観察表

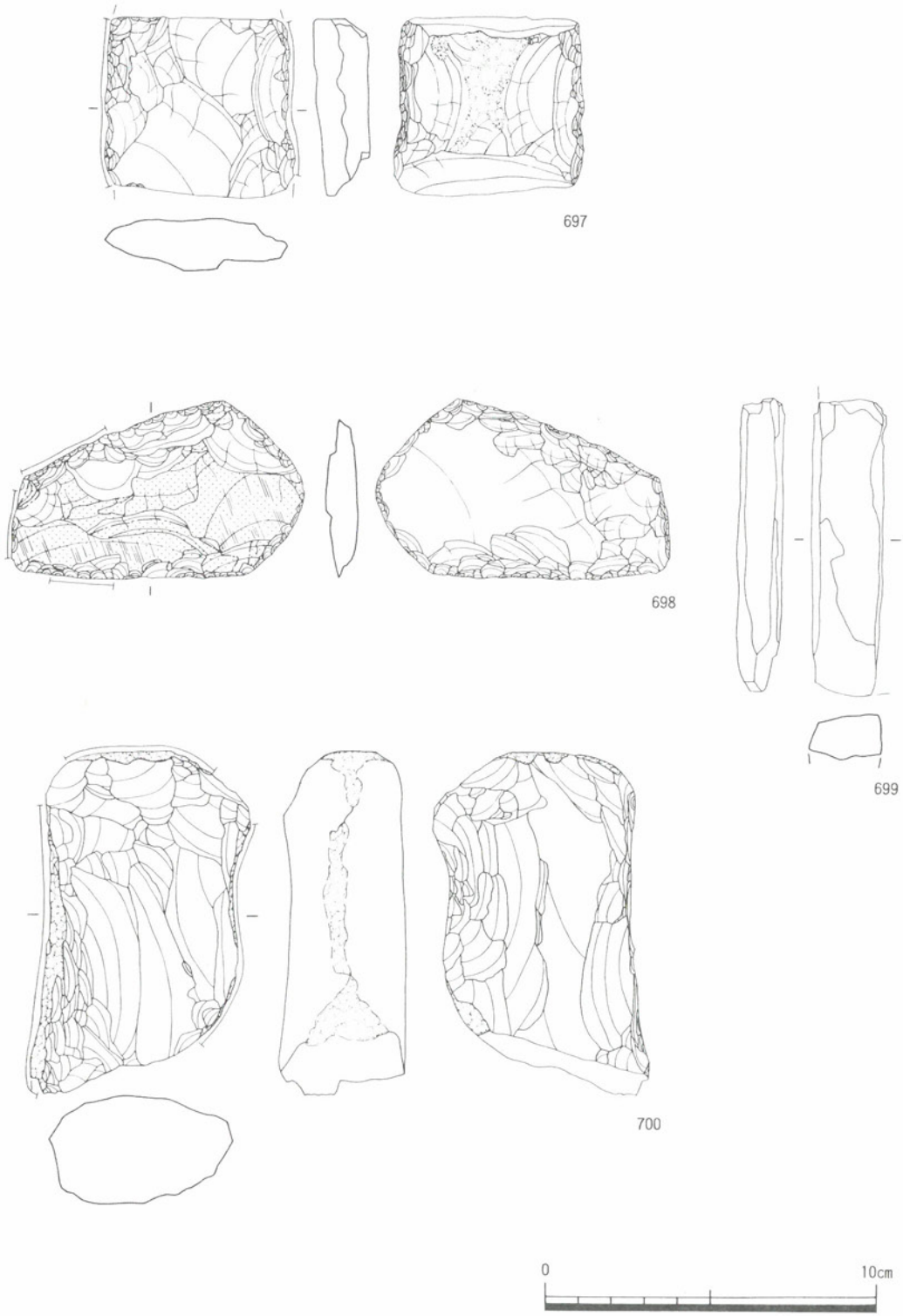
遺物番号	写真図版	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	備考
684	119	楔形石器	4．3	4．0	0．6	11．2	サヌカイト	楔形石器の素材　片面に削痕が明瞭にみられる　石斧破片の転用か？
685	119	スクレイパー	6．7	6．2	0．9	44．9	サヌカイト	
686	119	打製石庖丁	4．8	5．0	0．9	29．7	サヌカイト	1／2を欠損　短側面の一方に抉りがみられる
687	120	打製石斧	8．2	4．3	1．1	46．6	サヌカイト	両側辺に敲打痕あり
688	120	打製石斧	8．0	4．8	1．2	56．2	サヌカイト	基部を欠損
689	—	打製石斧	6．8	4．6	0．6	25．0	サヌカイト	基部を欠損　両側辺に敲打痕あり
690	121	打製石斧	6．9	4．6	1．0	42．6	サヌカイト	基部を欠損　右側辺に敲打痕あり　片面に磨滅がみられる
691	121	打製石斧	5．6	4．4	1．3	35．5	サヌカイト	基部を欠損　両側辺に敲打痕あり　刃部片面に磨滅・削痕がみられる



第77図　ＳＲ01流路Ａ中層出土遺物⑤



第78図　ＳＲ01流路Ａ中層出土遺物⑥



第79図　ＳＲ01流路Ａ中層出土遺物⑦

第59表　ＳＲ01流路Ａ中層出土遺物⑥観察表

遺物番号	写真図版	器　種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	材　質	備　　考
692	122	打製石斧	９．０	６．８	１．２	１０９．７	サヌカイト	いびつな形状　両側辺に敲打痕あり
693	122	打製石斧	６．６	７．６	２．１	１１７．１	サヌカイト	基部を欠損　両側辺に敲打痕あり 両面に磨滅がみられる
694	122	打製石斧	５．２	４．７	１．５	４４．１	サヌカイト	基部を欠損　両側辺に敲打痕あり　刃部両面に磨滅・削痕がみられる
695	122	打製石斧	２．１	３．８	０．７	６．８	サヌカイト	頭部のみ残存　片面に磨滅がみられる
696	—	打製石斧	５．９	５．１	１．３	５７．０	サヌカイト	基部と頭部を欠損　両側辺に敲打痕あり

第60表　ＳＲ01流路Ａ中層出土遺物⑦観察表

遺物番号	写真図版	器　種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	材　質	備　　考
697	—	打製石斧	５．５	５．７	１．６	７５．０	サヌカイト	頭部を欠損　両側辺に敲打痕あり 楔形石器素材の可能性
698	122	打製石斧	５．５	８．９	１．０	５７．４	サヌカイト	片面に磨滅・削痕がみられる　側辺に敲打痕あり
699	122	柱状片刃石斧	９．１	２．２	１．３	５７．９	緑泥片岩	
700	122	打製石鍬	１０．５	６．６	３．３	３５９．０	安山岩	基部のみ残存　両側辺に敲打痕あり

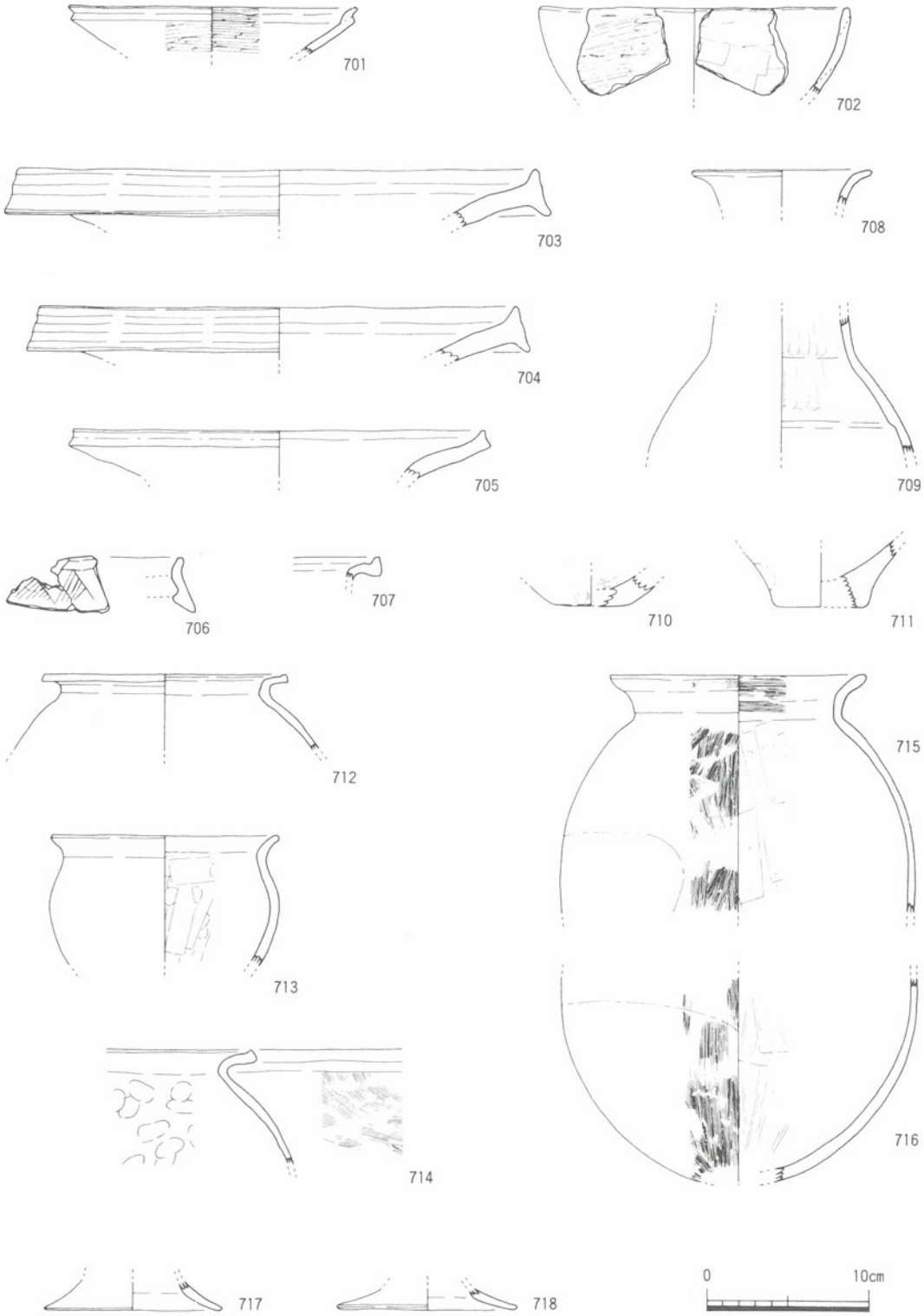
ＳＲ01流路Ａ上層

701～739は上層から出土した遺物である。（第80～82図）

701・702は縄文土器，703～725は弥生土器・土師器，726～730は須恵器，731～739は石器である。

第61表　ＳＲ01流路Ａ上層出土遺物①観察表

遺物番号	写真図版	器　種	法　量(cm)			調　整		その他	色　調		胎　土	残存度
			口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
701	—	縄文　浅鉢	(18.0)	——	——	ナデ・ミガキ	ミガキ	黒色磨研系	淡褐	黒	1～2mm程度の砂粒	1／8
702	—	縄文　浅鉢	(18.8)	——	——	ミガキ	ミガキ風擦過	黒色磨研	黒	黒	1～3mm程度の砂粒少し	1／12
703	—	弥生　壺	(31.7)	——	——	ヨコナデ	ヨコナデ	端部拡張・退化した凹線・磨滅が著しい	濁褐	濁褐	2mm以下の石英・長石・雲母	1／8
704	—	弥生　壺	(29.4)	——	——	ヨコナデ	ヨコナデ	磨滅が進む・端部拡張・退化した凹線	濁茶褐	濁褐	1mm以下の石英・長石・雲母・角閃石	1／6
705	—	弥生　壺	25.0	——	——	ナデ	磨滅のため不明	磨滅が著しい・端部に退化した凹線	淡茶褐	淡茶褐	2mm以下の石英・長石・雲母・角閃石	1／4
706	123	弥生　壺？	——	——	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	磨滅が進む・端部拡張・(外)鋸歯文・黒斑	黄褐	黄褐	1～4mm程度の石英・長石	破片
707	—	弥生　壺	——	——	——	ナデ	ナデ？	磨滅が進む・端部肥厚	淡褐	淡褐	1～2mm程度の長石	破片
708	—	弥生　壺	(11.0)	——	——	ナデ	ナデ		淡白褐	淡白褐	1mm程度の石英・長石少し	1／6
709	—	弥生　壺	——	——	——	ナデ	指ナデ	頸～肩部・磨滅が進む	黄褐	黄褐	1～5mm程度の石英・長石	1／4
710	—	弥生　底部	——	4.6	——	ミガキ・ナデ	ヘラケズリ	磨滅が進む	淡白褐	淡白褐	2mm以下の石英・長石	1／2
711	—	弥生　底部	——	(5.4)	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	磨滅が著しい・(外)黒斑	淡橙褐	淡橙褐	1～5mm程度の石英・長石	1／5
712	123	弥生　甕	(14.8)	——	——	磨滅のため不明	剥離のため不明	剥離が進む	茶褐	茶褐	2mm以下の石英・長石・雲母・角閃石	1／5
713	123	弥生　甕	(13.5)	——	——	ヨコナデ	横ナデ・指押さえのち横ナデ	剥離が進む・鉢？	暗褐～淡黄褐	淡黄褐	1～3mm程度の石英・長石	3／4
714	123	弥生　甕	——	——	——	ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ・指押さえ		濁黄褐	濁黄褐	1mm程度の石英・長石・雲母・角閃石	破片
715	124	土師器　甕	15.6	——	——	ハケのち横ナデ・ハケ	ヘラケズリ	口縁～胴上部・(外)黒斑・炭化物付着	黄褐	黄褐	1～5mm程度の石英・長石	1／3
716	—	土師器　甕	——	——	——	ハケ	ヘラケズリ	胴下部・(外)黒斑・715と同一個体	黄褐	黄褐	1～5mm程度の石英・長石	1／3
717	—	弥生　高杯	——	(10.7)	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	脚部・磨滅が進む	淡褐	淡褐	1～3mm程度の石英・長石	1／6
718	—	弥生　高杯	——	10.6	——	剥離のため不明	剥離のため不明	脚部・剥離が著しい	淡橙褐	淡橙褐	1mm以下の石英・長石・雲母	1／4



第80図　ＳＲ01流路Ａ上層出土遺物①

701は屈曲する肩部をもち口頸部が外反する黒色磨研系の浅鉢である。外面はナデ・横方向のミガキ調整，内面は横方向のミガキ調整で仕上げている。702は椀形の黒色磨研浅鉢である。外面の調整は横方向のミガキ，内面はミガキ風擦過である。

703・704は口縁端部を上下に拡張し，拡張した端面に退化した凹線を施した壺あるいは器台の口縁部である。705は壺の口縁部で，口縁端部をわずかに上方へ拡張している。706は上下に拡張した端面に鋸歯文を施している。709は長頸壺の肩部である。調整は内外面ともにナデである。709は長頸壺の肩部で，調整は内外面ともにナデで仕上げている。

712～716は甕である。715・716は直接接合しなかったため，図面は分けて掲載しているが同一個体である。球形の胴部から大きく外へ開く口縁部をもつ。外面の調整はハケ，内面はヘラケズリである。外面に黒斑がみられる。形態からみて，この甕は古墳時代初頭の古式土師器である。

717～721は高杯である。719・720は杯部で，いずれも口縁端部に広めの面をもち，口縁部外面に緩い凹線を施している。721は脚部であるが，端部を拡張し外面に沈線を1条めぐらせている。

717・718は途中で屈曲する脚部の下半部である。この2点は古墳時代初頭の古式土師器の可能性がある。

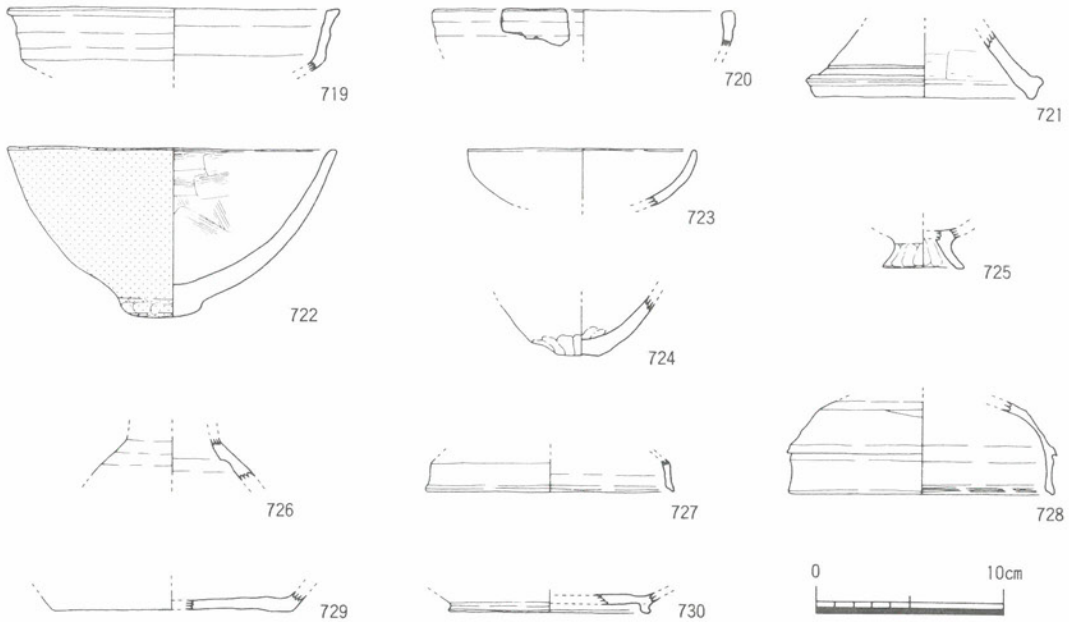
722～724は鉢・椀である。722は突出気味の底部を有し，外面に煤が付着している。

725は脚台で，作りが粗雑であり，製塩土器の脚台の可能性がある。

726～730は須恵器である。726は壺の肩部，727・728は杯あるいは有蓋高杯の蓋である。729・730は杯の底部である。730は強く張り出した高台をもつ。

第62表　ＳＲ01流路Ａ上層出土遺物②観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	調整 外面	調整 内面	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	残存度
719	—	弥生　高杯	(18.0)	——	——	ナデ	ナデ	口縁部・(外)強いナデによる凹線状のもの	淡褐	淡褐	2mm以下の石英・長石・雲母・角閃石	1／12
720	—	弥生　高杯	(16.0)	——	——	ナデ	ナデ	口縁部・端部に面をもつ	淡灰茶褐	淡灰茶褐	1～3mm程度の石英・長石多い	破片
721	123	弥生　高杯	——	11.6	——	ミガキ・ナデ	ケズリ・ヨコナデ	脚部・(外)沈線1条・端部を拡張気味	黄褐	白褐	1mm程度の石英・長石	1／4
722	124	弥生　鉢	16.9	9.0	4.4	縦ナデ・指ナデ?・ナデ・指押さえ	ヨコナデ・板ナデ	調整が著しい・(外)煤付着・二次焼成?	赤褐	赤褐	1～3mm程度の石英・長石	1／1
723	—	弥生　椀	12.0	——	——	ナデ?	ナデ?	調整が著しい・土師器か?	淡橙褐	淡橙褐	1～2mm程度の砂粒	1／3
724	124	弥生　椀	——	2.1	——	ナデ・指押さえ	ナデ	底部・磨滅が進む	淡橙褐	淡橙褐	2mm以下の長石少し	1／1
725	—	弥生　脚台	——	4.2	——	指押さえ	ナデ	製塩土器？・剥離が進む	暗褐	暗褐	1mm以下の砂粒多い	1／2
726	—	須恵器　壺	——	——	——	回転ナデ	回転ナデ	肩部	灰	灰	1mm程度の長石少し	1／6
727	—	須恵器　杯	(13.0)	——	——	回転ナデ	回転ナデ	杯蓋・身の可能性	白灰	白灰	1mm程度の細砂粒	1／8
728	124	須恵器　杯	13.9	——	——	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	杯蓋	青灰	青灰	1mm以下の細砂粒少し	1／4
729	—	須恵器　杯	——	(13.0)	——	回転ナデ	回転ナデ	底部	淡灰	淡灰	緻密	1／6
730	—	須恵器　杯	——	10.8	——	回転ナデ	回転ナデ	底部・貼付高台	淡灰	灰白	1mm以下の細砂粒	1／4



第81図　ＳＲ01流路Ａ上層出土遺物②

731～733はサヌカイト製の石鏃である。いずれも無茎の平基式の石鏃である。

734はサヌカイト製の石錐である。錐部の大半を欠損している。

735はサヌカイト製の石匙である。刃部は細かな調整が施されているが，全体に作りが粗い感じを受ける。

736はサヌカイト製のスクレイパーである。

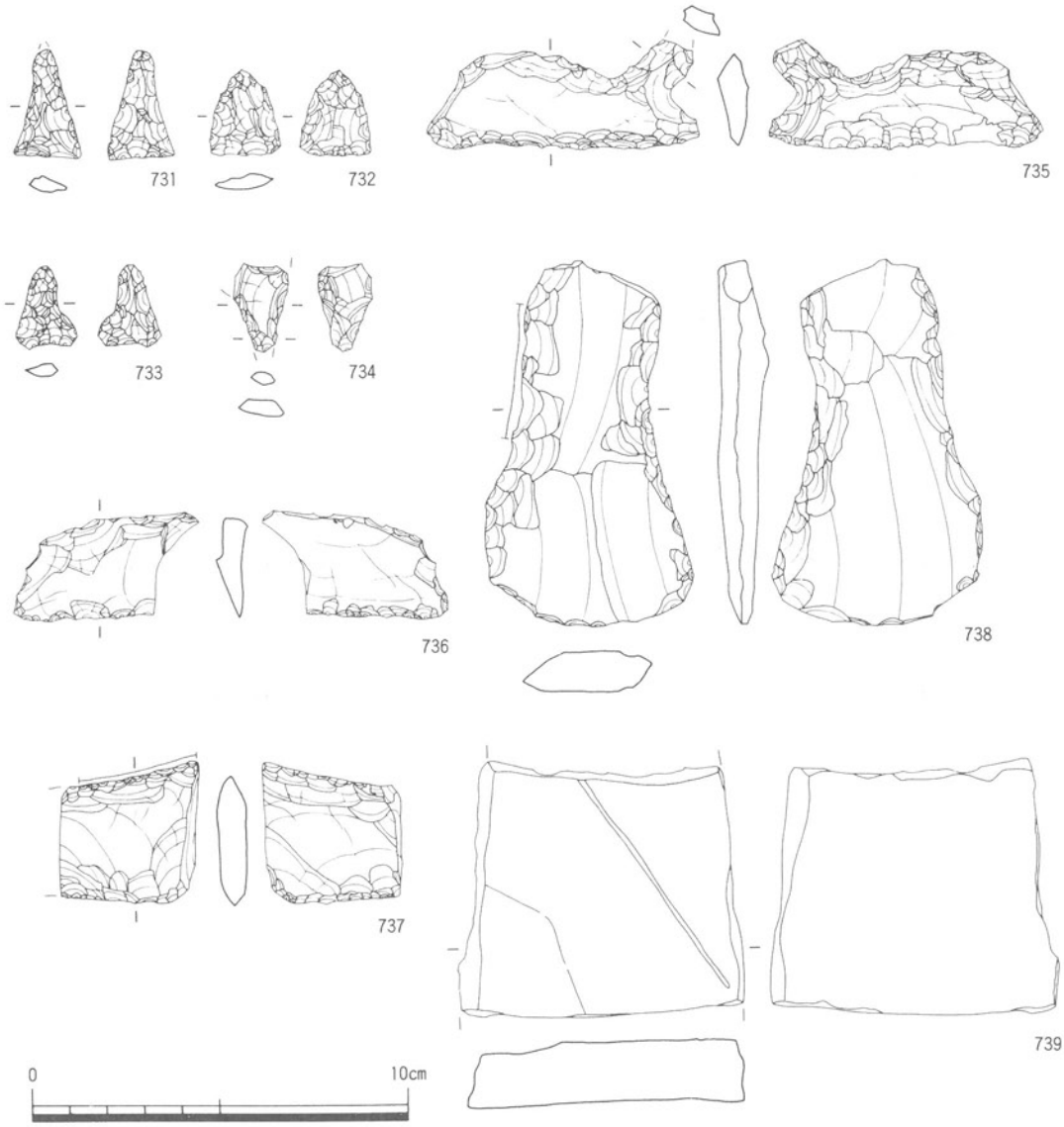
737はサヌカイト製の楔形石器である。

738はほぼ完形の打製石斧である。片側縁が敲打されている。全体に風化が進んでおり，材質は安山岩系の石材を使用している。

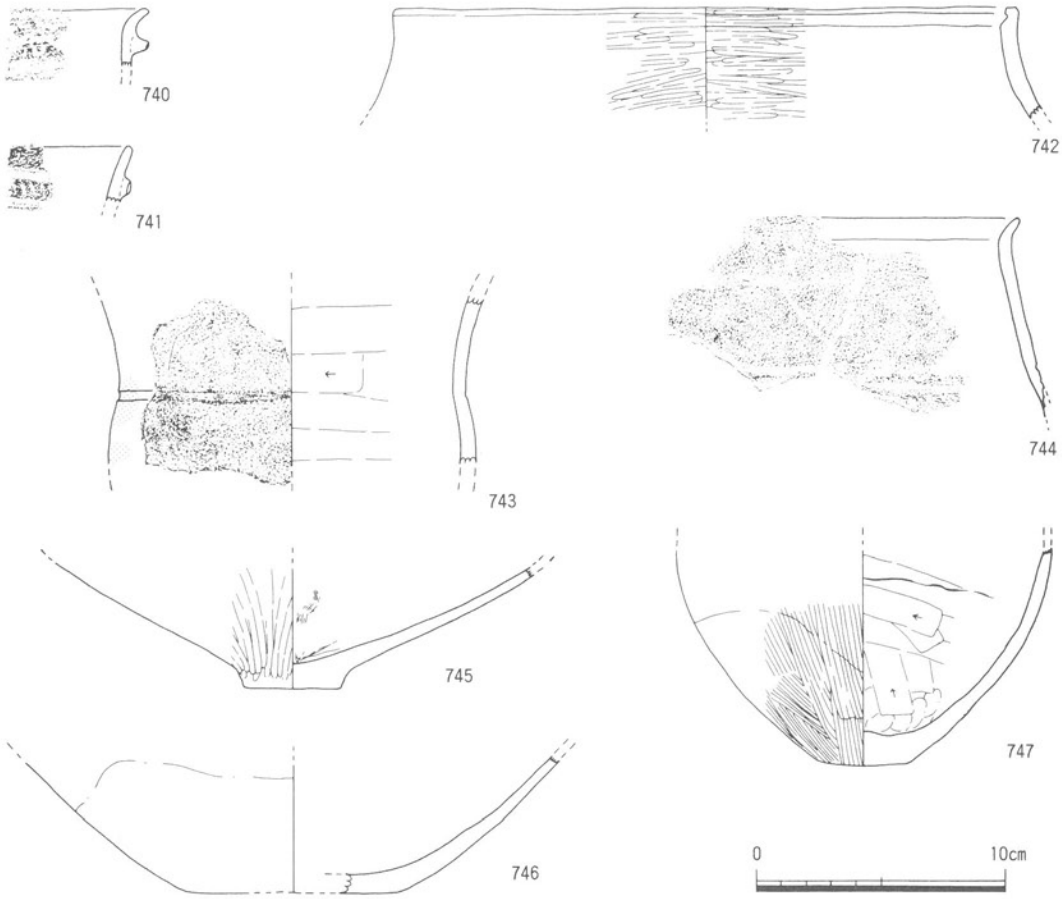
739は安山岩を使用した砥石である。一部に磨滅がみられる。片面には線刻のようなものが残っている。

第63表　ＳＲ01流路Ａ上層出土遺物③観察表

遺物番号	写真図版	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	備考
731	125	石鏃	2．9	1．8	0．4	1．6	サヌカイト	平基式
732	125	石鏃	2．3	2．0	0．4	1．7	サヌカイト	平基式　先端は丸味を帯びる
733	125	石鏃	2．2	1．7	0．3	1．1	サヌカイト	平基式
734	—	石錐	2．4	1．5	0．5	1．8	サヌカイト	頭部は素材の剥片の形状を留める
735	125	石匙	7．4	3．0	0．7	22．0	サヌカイト	
736	125	スクレイパー	5．0	2．9	0．7	10．0	サヌカイト	
737	125	楔形石器	3．8	3．7	0．8	17．1	サヌカイト	
738	126	打製石斧	9．8	5．6	1．1	74．5	安山岩（系）	左側辺に敲打痕あり　風化が進む
739	126	砥石？	7．7	6．9	1．7	196．5	安山岩	一部に磨滅がみられる　片面に線刻？あり



第82図　ＳＲ01流路Ａ上層出土遺物③



第83図　ＳＲ01流路Ａ包含層出土遺物①

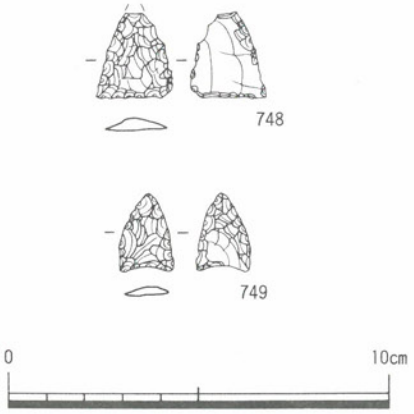
第64表　ＳＲ01包含層出土遺物①観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	その他	色調 外面	内面	胎土	残存度
740	127	縄文　深鉢	―	―	―	ナデ	ナデ	右斜縄文RL(右傾・横・0.8・変・端部刻み)	濁黄褐	濁黄褐	3㎜程度の砂粒	破片
741	127	縄文　深鉢	―	―	―	磨滅のため不明	磨滅のため不明	右斜縄文RL(右傾・横・1.2・変)・撚糸	黒褐	黒褐	1㎜以下の砂粒	破片
742	127	縄文　浅鉢	(25.0)	―	―	ミガキ	ミガキ	黒色磨研・(内)沈線１条	黒	黒	1㎜以下の砂粒少し	１／８
743	127	縄文　深鉢	―	―	―	ナデ?	ナデ風擦過	屈曲部・(外)屈曲の後は沈線1条・炭化物付着	暗茶褐	黒褐	5㎜以下の砂粒	１／８
744	―	(縄文)　壺	―	―	―	磨滅のため不明	磨滅のため不明	撚糸が著しい・無節に沈線3条以上	濁黄褐	濁黄褐	2㎜程度の砂粒少し	破片
745	―	弥生　底部	―	3.9	―	丁寧なタテミガキ・ナデ	ハケのちナデ	雲母土器	茶褐	暗茶褐	1㎜以下の石英・長石・雲母・角閃石多い	１／１
746	―	弥生　底部	―	8.8	―	磨滅のため不明	磨滅のため不明	(外)黒斑	茶褐	濁褐	2㎜以下の石英・長石	１／２
747	128	弥生　底部	―	3.3	―	タタキのちハケ	部所ミガキのち部分ナデ	(外)黒斑	淡白褐	淡白褐	4㎜以下の石英・長石	１／１

ＳＲ01包含層

740～749はＳＲ01流路Ａ上層が堆積したのちに，ＳＲ01全体を覆うように堆積した包含層出土の遺物である。（第83・84図）

740・741は凸帯文土器系の深鉢の口縁部である。口縁端部からやや下がった位置に凸帯をめぐらせ，凸帯上を軽く刻んでいる。740は口縁端部に刻目を施している。742は口縁部が内傾する黒色磨研浅鉢の口縁部である。口縁部内面に沈線を１条めぐらせている。調整は内外面ともに横方向のミガキで仕上げている。743は屈曲型の深鉢の肩部である。頸部と胴部の境は沈線１条をめぐらせている。外面には炭化物が付着している。744は内傾する長い頸部から口縁部が短く外反する壺である。磨滅のため調整はわからないが，頸部の外面には沈線が３条以上めぐらされる。745～746は弥生土器の底部である。745は外面を丁寧に縦方向のヘラミガキ調整している。747は外面を縦方向のハケ調整，内面をヘラケズリ調整している。746・747は外面に黒斑がみられる。748・749はサヌカイト製の石鏃である。いずれも無茎の平基式の石鏃である。



第84図　ＳＲ01流路Ａ包含層出土遺物②

第65表　ＳＲ01包含層出土遺物②観察表

遺物番号	写真図版	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	備考
748	128	石鏃	2．3	2．0	0．3	1．5	サヌカイト	平基式　先端と基部の一部を欠損
749	128	石鏃	2．1	1．4	0．2	0．7	サヌカイト	平基式

ＳＲ01流路Ｂ（第85～93図）……弥生時代前期～古墳時代

流路Ｂは第３微高地西側の縁辺部をほぼ南から北に流下するものである。幅約29m，深さは最深部で1.5mをはかる。埋土は細かく分層することが可能であるが，上・下層の２つに大別して捉えることができる。

・上層　Ｄ３・Ｅ１地区にまたがって分布する。流路Ａの上層と同一の層を含んだ土層で，粘性が強い。下層の上面に位置するシルト層を基盤として堆積している。弥生前期土器・弥生後期土器・古式土師器・須恵器・石器などを含んでいる。

・下層　部分的に砂質土・細砂をラミナ状に含んでいるが，粘性の強い土層である。縄文土器・弥生前期土器・石器・流木などの自然遺物を含んでいる。自然遺物はいちばん下の部分に堆積している黒色粘土層中に集中しており，直径1.7mほどの樹木の根株も含まれていた。この黒色粘土層の下は，流路Ｂの基盤層である淡青灰色細砂が存在している。なお，流路Ａと流路Ｂの底のレベルを比較すると流路Ｂの方が80cmほど低い。

この自然河川の流路Ｂからは土器を中心とした遺物が出土している。土層断面の検討から，この流路Ｂは大きく上・下層の２つに大別することができるが，発掘調査時は厳密に分離できなかったため遺物はほとんど一括して取り上げている。遺物を検討してみると大きく２時期に分けることができ，それぞれ上･下層にほぼ対応している。以下，遺物は下層･上層の順に述べていく。

ＳＲ01流路Ｂ下層

750～862・878・880・882は下層から出土した遺物である。（第85～90図・92図・93図）

弥生土器壺・甕・土製品・石器が出土しているが，下層出土の土器は弥生時代前期の所産と位置付けることができる。

750～769は壺である。750～757は口縁部の破片である。壺の口縁部はいずれも緩やかに外反して，口縁部が大きく開く形態をしている。751・752は頸部外面に２条の沈線をめぐらせている。752・757は２条以上の沈線をめぐらせている。756は沈線を３条めぐらせている。753・755は頸部に凸帯を貼り付けている。758～769は肩部の破片である。肩部は形態から，肩部に段を有するもの（758・760・762）と肩部に沈線をめぐらせるもの（761・763～769）と肩部に凸帯を貼り付けるもの（759）の３つに分けることができる。外面に文様を施すものも認められ，段を有するものでは760が胴部に重弧文を施し，外面に赤色顔料を塗布している。

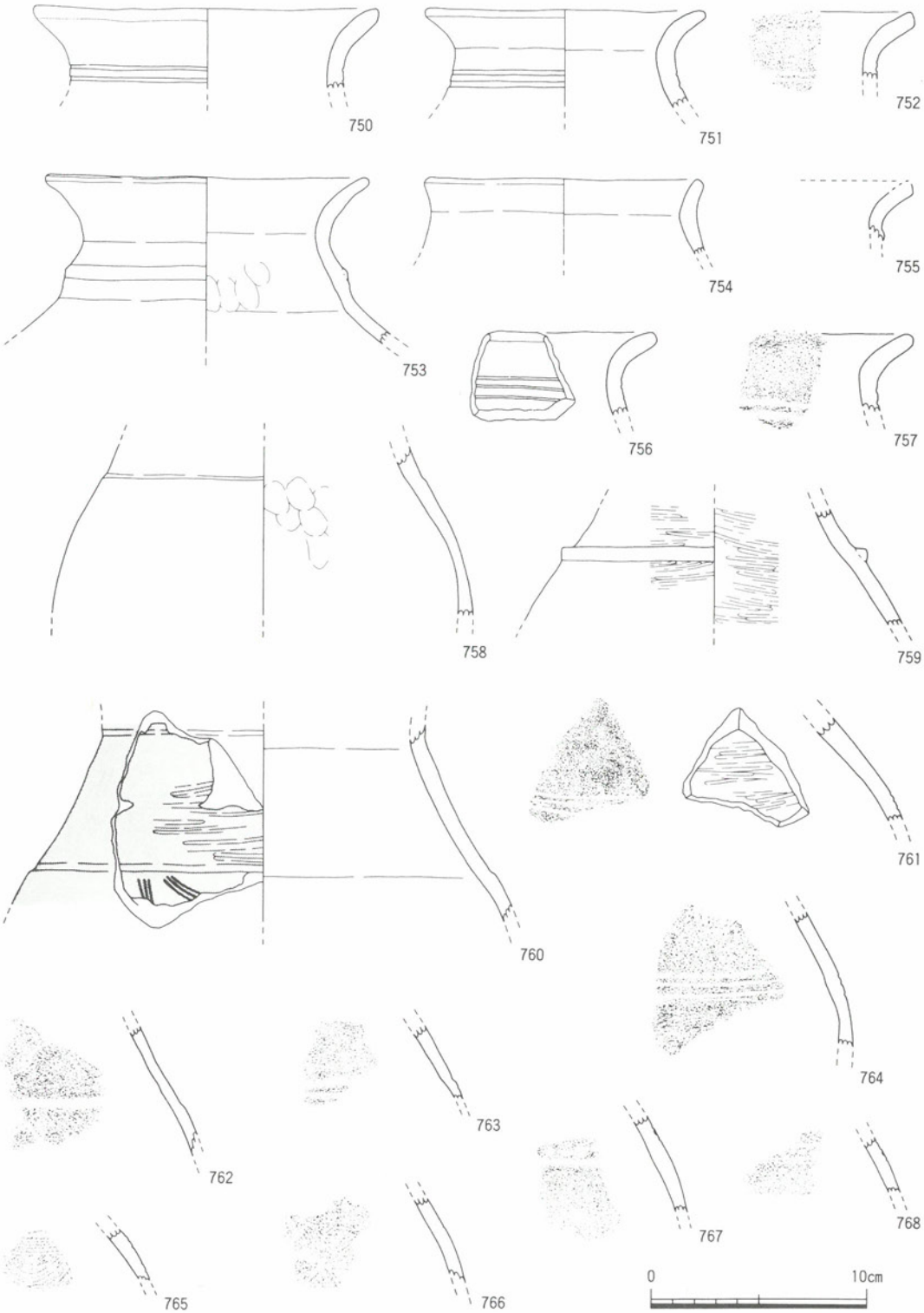
762は木葉文を施している。沈線をめぐらせるものでは765が重弧文を施し，766は木葉文を施し，767は沈線の間に刺突文を施している。768も沈線の間に刺突文をめぐらせ，その下に重弧文を施している。769も沈線の間に刺突文をめぐらせている。

770～818は甕である。770～808は口縁部の破片である。甕の口縁はほとんどが緩やかに屈曲す

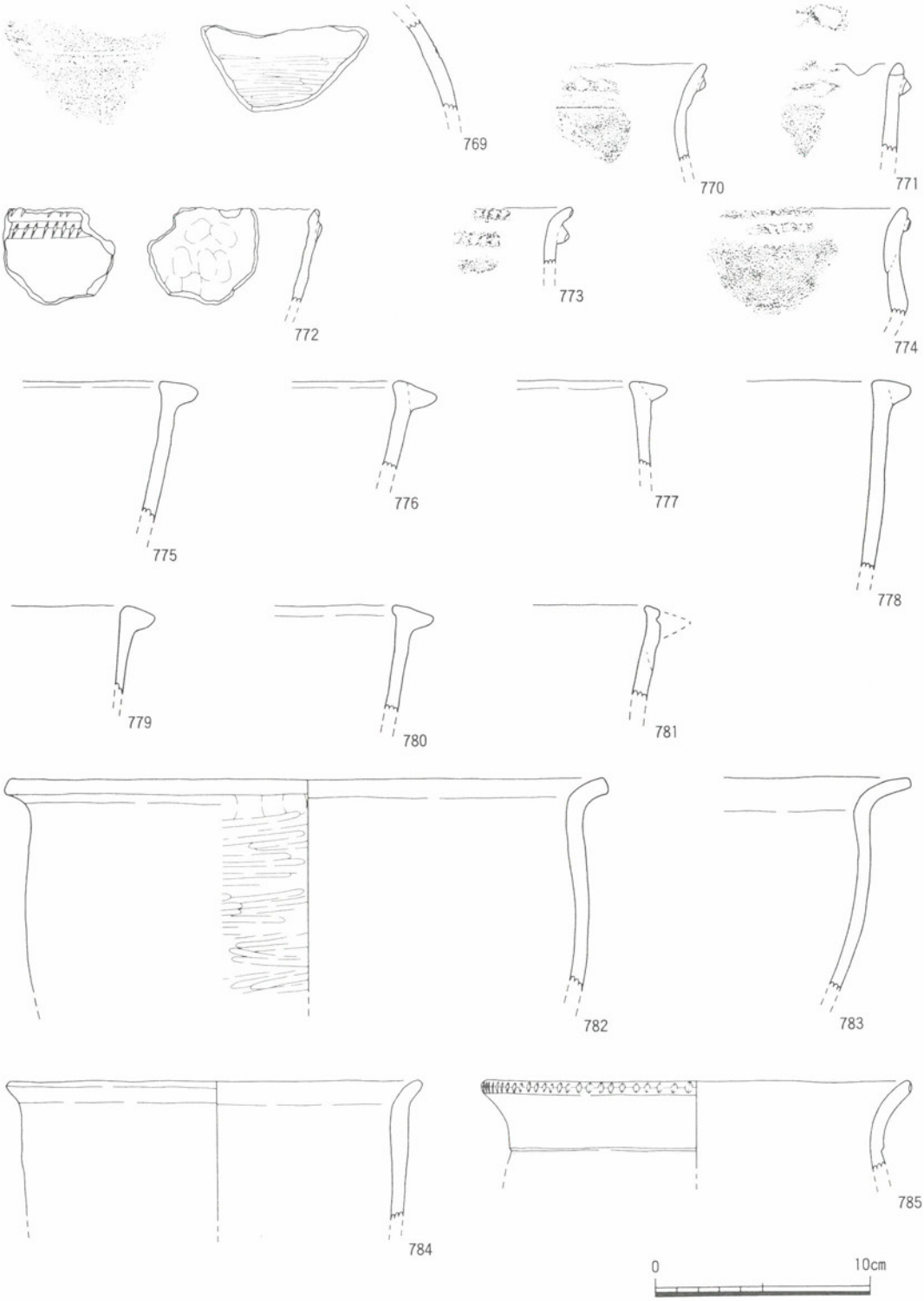
る如意状口縁であるが，逆L字形口縁もみられる。770～774は縄文時代晩期の凸帯文土器の深鉢の流れを引く凸帯文土器系の甕の口縁部である。770・774は屈曲型で，771～773は砲弾型の甕である。凸帯上の刻目は軽めに刻むものがほとんどだが，772はヘラで切るように刻目を施している。771～773は口縁端部に刻目を施しているが，771が端部を上から刻んでいるのに対して772・773は端部の外端を刻んでいる。770は外面に炭化物が付着している。775～781は逆L字型口縁の甕である。いずれも白褐色の色調を呈しており，口縁端部の面は外側に向かって少し下がっている。781は口縁端部の粘土紐が接合面から剝離した破片で，剝離した部分には沈線が1条めぐらされている。粘土紐接合の目印にしたものか，あるいは粘土紐の接合を強固にするためのものであろう。782～808は如意状口縁の甕の口縁部である。782～784は口縁端部に刻目をもたない甕である。782は外面をヘラミガキ調整している。785～805は口縁端部に刻目を施す如意状口縁の甕である。口縁端部に刻目を施す甕は，頸部に段を有するもの（785）と，頸部に沈線をめぐらせるもの（797・801～803・805・808）と，頸部に沈線と刺突文をめぐらせるもの（786・791・793・806・807）と，頸部に文様をもたないもの（787～789・790・792・794～796・798～800・804）にまとめることができる。頸部にめぐらされるヘラ描き沈線は2条以下のものがほとんどで，まだ多条化していないといえる。調整は内外面ともにナデ調整のものが多い。809～818は甕の頸部である。頸部に段を有するもの（809）と，頸部に沈線をめぐらせるもの（811・813～815）と，頸部に沈線と刺突文をめぐらせるもの（810・812・816～818）とに分けることができる。これらの甕のうち外面に炭化物が付着しているもの（786～789・792・805・809）もみられる。

第66表　ＳＲ01流路Ｂ出土遺物①観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	その他	色調 外面	内面	胎土	残存度
750	129	弥生　壺	(15.7)	—	—	磨滅のため不明	磨滅のため不明	(外)頸部に沈線2条	明褐	淡褐	2㎜以下の石英・長石多い	1／14
751	129	弥生　壺	12.6	—	—	ナデ・ミガキ	ナデ	(外)頸部に沈線2条	濁黄褐	淡茶褐	1～3㎜程度の石英・長石多い	1／4
752	—	弥生　壺	—	—	—	ナデ	ナデ	(外)頸部に沈線2条以上	淡褐	淡褐	2～3㎜程度の石英・長石多い	破片
753	129	弥生　壺	15.0	—	—	ナデ・指押さえのちミガキ・ナデ	ナデ・ミガキ	(外)頸部に貼付凸帯	淡褐	淡褐	2㎜以下の石英・長石	1／2
754	129	弥生　壺	(12.5)	—	—	ナデ	ナデ		白褐	白褐	1㎜程度の石英・長石少し	1／12
755	129	弥生　壺	—	—	—	ヨコナデ	磨滅のため不明	(外)頸部に凸帯	淡褐	淡褐～黒	1㎜程度の石英・長石	破片
756	—	弥生　壺	—	—	—	磨滅のため不明	磨滅のため不明	(外)頸部に沈線3条以上	淡橙褐	白褐	2㎜以下の石英・長石	破片
757	—	弥生　壺	—	—	—	ナデ	ナデ	(外)頸部に沈線2条以上	淡褐	淡褐	1～2㎜程度の石英・長石	破片
758	130	弥生　壺	—	—	—	磨滅のため不明	指ナデ？	肩部・(外)段	白褐	白褐	1㎜程度の石英・長石多い	1／6
759	130	弥生　壺	—	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	肩部・(外)貼付凸帯	淡褐	濁褐	1㎜程度の石英・長石	1／8
760	130	弥生　壺	—	—	—	ヘラミガキ	ナデ	黒部・(外)段・重弧文・赤色顔料が遺存	赤茶褐	白褐	1㎜以下の石英・長石	1／12
761	—	弥生　壺	—	—	—	磨滅のため不明	ヘラミガキ	肩部・(外)沈線3条	淡茶褐	淡黒	1㎜以下の石英・長石	破片
762	130	弥生　壺	—	—	—	ナデ	ナデ	肩部・(外)段・木葉文	濁黄褐	濁黄褐	1㎜以下の石英・長石少し	破片
763	—	弥生　壺	—	—	—	ミガキ	ナデ	肩部・(外)沈線3条以上	淡褐	淡褐	2㎜以下の石英・長石	破片
764	130	弥生　壺	—	—	—	ナデ	ナデ	肩部・(外)沈線3条	暗褐	淡褐	2㎜以下の石英・長石	破片
765	130	弥生　壺	—	—	—	ミガキ	ナデ	肩部・(外)沈線3条と重弧文	明淡褐	明淡褐	1㎜程度の砂粒少し	破片
766	130	弥生　壺	—	—	—	ナデ	ナデ	肩部・(外)沈線1条と木葉文	淡褐	淡褐	1㎜程度の砂粒少し	破片
767	—	弥生　壺	—	—	—	ミガキ？	ナデ	肩部・(外)沈線2条の間に刺突文	濁黄褐	黒	2㎜以下の石英・長石	破片
768	—	弥生　壺	—	—	—	ナデ	ナデ	肩部・(外)沈線2条の間に刺突文・重弧文	淡橙褐	淡赤褐	1㎜程度の砂粒少し	破片



第85図　ＳＲ01流路Ｂ出土遺物①



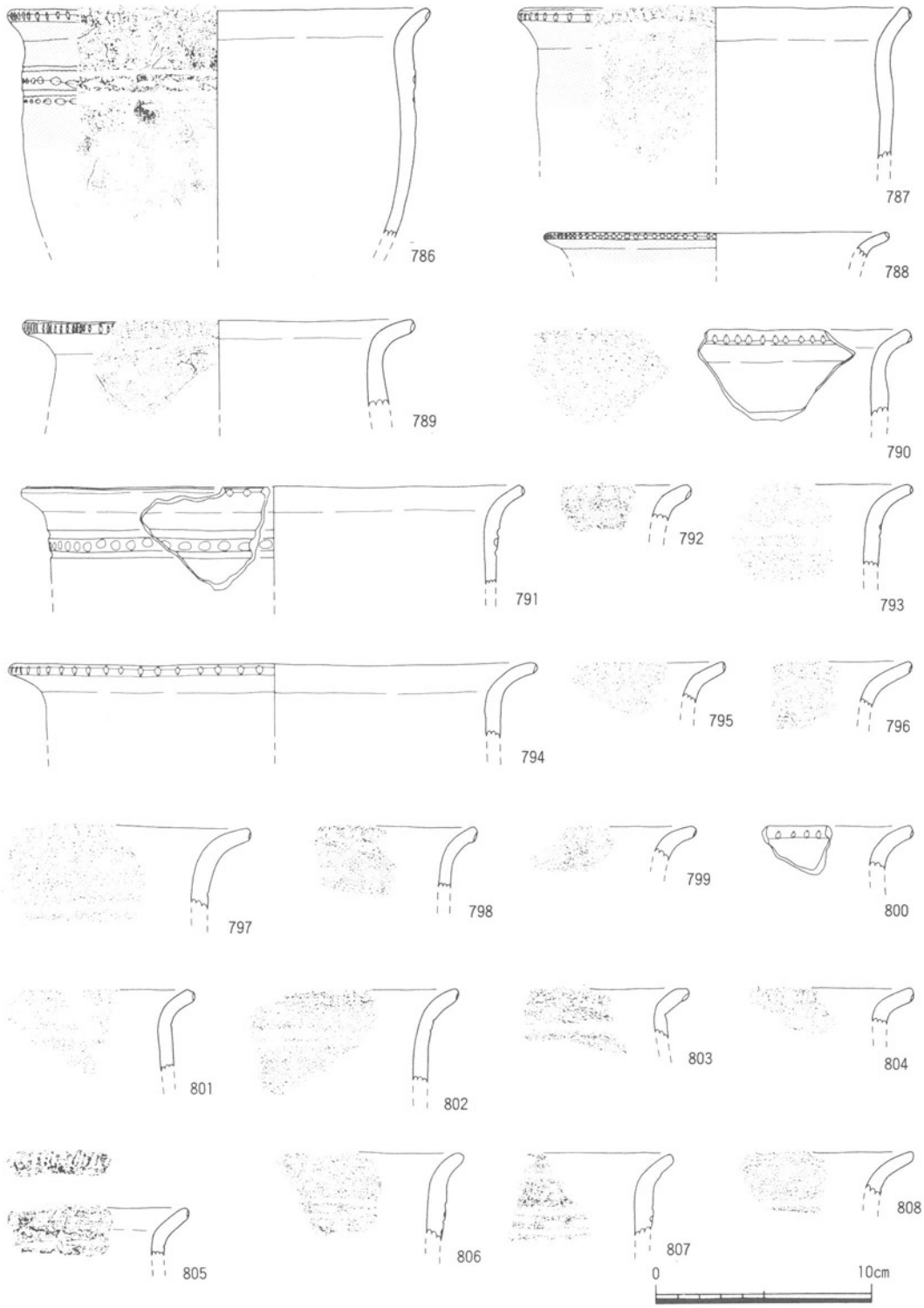
第86図　ＳＲ01流路Ｂ出土遺物②

第67表　ＳＲ01流路Ｂ出土遺物②観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	調整 外面	調整 内面	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	残存度
769	130	弥生　壺	―	―	―	磨滅のため不明	ナデ・ミガキ	肩部・(外)櫛描2条の間に刺突文	濁茶褐	淡黒	2mm以下の石英・長石	破片
770	130	(鉢)　深鉢?	―	―	―	ナデ	ナデ	古墳文系?(三角・樋・0.5・並)炭化物付着	黒	淡黒褐	1mm以下の砂粒	破片
771	130	(鉢)　深鉢?	―	―	―	ナデ	ナデ	古墳文系?(三角・樋・0.6・丸・櫛描刻み)	淡黄褐	淡黄褐	2mm以下の砂粒	破片
772	130	(鉢)　深鉢?	―	―	―	ナデ?	指押さえのちナデ	古墳文系?(上端・新・0.5・丸・櫛描刻)	暗茶褐	暗褐	1mm程度の砂粒	破片
773	130	(鉢)　深鉢?	―	―	―	磨滅のため不明	磨滅のため不明	古墳文系?(三角・樋・0.7・丸・櫛描刻み)	暗橙褐	淡橙褐	3mm以下の砂粒	破片
774	130	(鉢)　深鉢?	―	―	―	ナデ・擦過?	ナデ	古墳文系?(台形・樋・0.3・丸)	濁褐	暗褐	2mm以下の砂粒	破片
775	131	弥生　甕	―	―	―	ナデ	指押さえのちナデ	逆Ｌ字形口縁	白褐	白褐	2mm以下の石英・長石多い	破片
776	131	弥生　甕	―	―	―	ナデ	指押さえのちナデ	逆Ｌ字形口縁	淡褐	濁褐	1～2mm程度の石英・長石多い	破片
777	131	弥生　甕	―	―	―	磨滅のため不明	磨滅のため不明	逆Ｌ字形口縁	白褐	白褐	2mm程度の石英・長石多い	破片
778	131	弥生　甕	―	―	―	磨滅のため不明	磨滅のため不明	逆Ｌ字形口縁	白褐～黒	白褐	1～2mm程度の石英・長石多い	破片
779	131	弥生　甕	―	―	―	剥離のため不明	剥離のため不明	逆Ｌ字形口縁	淡黄褐	白褐	2～3mm程度の石英・長石多い	破片
780	131	弥生　甕	―	―	―	磨滅のため不明	磨滅のため不明	逆Ｌ字形口縁	淡褐	淡褐	3mm以下の石英・長石多い	破片
781	―	弥生　甕	―	―	―	ナデ	ナデ	逆Ｌ字形口縁が剥離・剥離部分に櫛描1条	白褐	白褐	2mm程度の石英長石多い	破片
782	―	弥生　甕	(27.4)	―	―	指押さえのちナデ・ヘラミガキ	磨滅のため不明	(内)磨滅が著しい	明褐	淡褐	2～3mm程度の石英長石多い	1／8
783	131	弥生　甕	―	―	―	磨滅のため不明	板ナデ?	磨滅が著しい	淡褐	茶褐	3mm以下の石英・長石多い	破片
784	131	弥生　甕	18.8	―	―	磨滅のため不明	磨滅のため不明	磨滅が著しい	白褐	白灰	2～3mm程度の石英・長石多い	1／4
785	131	弥生　甕	19.5	―	―	ナデ	ナデ	端部刻み・(外)頸部に段	濁黄褐	淡黄褐	2mm以下の石英・長石多い	1／2

第68表　ＳＲ01流路Ｂ出土遺物③観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	調整 外面	調整 内面	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	残存度
786	132	弥生　甕	19.2	―	―	ヨコナデ?	ヨコナデ・板ナデ	櫛描刻み・(外)櫛描2条と刺突文・炭化物付着	黄褐～暗茶褐	淡灰褐	1～2mm程度の石英・長石	1／4
787	132	弥生　甕	(17.4)	―	―	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	櫛描刻み・(外)炭化物付着	暗茶褐	暗茶褐	1mm以下の石英・長石	1／9
788	132	弥生　甕	(15.6)	―	―	ヨコナデ	ヨコナデ	櫛描刻み・(外)煤付着	黒	濁褐	1mm以下の石英・長石多い	1／8
789	132	弥生　甕	(17.9)	―	―	ナデ	磨滅	櫛描刻み・(外)炭化物付着	黄褐～黒	黄褐～黒	2mm以下の石英・長石多い	1／12
790	―	弥生　甕	―	―	―	磨滅のため不明	磨滅のため不明	端部刻み	淡黄褐	淡黄褐	1mm程度の石英・長石	破片
791	132	弥生　甕	(22.8)	―	―	ヨコナデ	磨滅のため不明	櫛描刻み・(外)頸部に櫛描2条と刺突文	淡褐	赤褐	1mm以下の石英・長石多い	1／12
792	―	弥生　甕	―	―	―	ナデ	ナデ	櫛描刻み・(外)炭化物付着	淡～暗褐	淡～暗褐	2mm以下の石英・長石	破片
793	132	弥生　甕	―	―	―	磨滅のため不明	磨滅のため不明	櫛描刻み・(外)櫛描1条と刺突文	白褐	白褐	1～2mm程度の石英・長石多い	破片
794	132	弥生　甕	(24.4)	―	―	ヨコナデ	ナデ	端部刻み	淡茶褐	濁茶灰	1～3mm程度の石英・長石多い	1／10
795	―	弥生　甕	―	―	―	ナデ?	ナデ?	端部刻み・磨滅が著しい	淡黄褐	淡褐	1mm程度の石英・長石	破片
796	―	弥生　甕	―	―	―	ヨコナデ	磨滅のため不明	端部刻み	淡褐	淡褐	1～2mm程度の石英・長石多い	破片
797	132	弥生　甕	―	―	―	磨滅のため不明	磨滅のため不明	櫛描刻み・(外)頸部に櫛描1条以上	淡黄褐	淡黄褐	1mm程度の石英・長石	破片
798	―	弥生　甕	―	―	―	ナデ	磨滅のため不明	端部刻み	淡黒	淡褐	2mm以下の石英・長石	破片
799	―	弥生　甕	―	―	―	ヨコナデ	磨滅のため不明	端部刻み	淡黄褐	淡黄褐	2mm以下の石英・長石	破片
800	―	弥生　甕	―	―	―	ナデ	ナデ	端部刻み・磨滅が進む	淡茶褐	淡茶褐	2mm程度の石英・長石	破片
801	―	弥生　甕	―	―	―	ヨコナデ	磨滅のため不明	櫛描刻み・(外)頸部に櫛描1条	茶褐	淡褐	3mm以下の石英・長石多い	破片
802	132	弥生　甕	―	―	―	磨滅のため不明	磨滅のため不明	櫛描刻み・(外)頸部に櫛描2条	濁褐	淡褐	2mm以下の石英・長石	破片
803	―	弥生　甕	―	―	―	ヨコナデ	ヨコナデ	櫛描刻み・(外)頸部に櫛描1条	暗褐	暗褐	1mm程度の石英・長石	破片
804	―	弥生　甕	―	―	―	磨滅のため不明	磨滅のため不明	端部刻み	赤褐	橙褐	1mm程度の石英・長石多い	破片
805	―	弥生　甕	―	―	―	ナデ	ナデ	櫛描刻み・(外)櫛描1条・炭化物付着	暗茶褐	暗茶褐	1mm程度の石英・長石	破片
806	―	弥生　甕	―	―	―	ナデ	ナデ	(外)頸部に櫛描2条と刺突文	濁白褐	濁白褐	2mm以下の石英・長石多い	破片
807	―	弥生　甕	―	―	―	ヨコナデ	ナデ	(外)頸部に櫛描2条以上と刺突文	暗褐	淡褐	2mm以下の石英・長石	破片
808	―	弥生　甕	―	―	―	ナデ	ナデ	(外)頸部に櫛描1条以上	淡褐	淡褐	2mm程度の石英・長石	破片



第87図　ＳＲ01流路Ｂ出土遺物③

819～861は弥生土器の底部である。819～834・836～840・859～861は壺の底部，835・841～858は甕の底部である。磨滅が著しいものが多いため調整の不明瞭なものが多いが，壺の底部の調整は比較的丁寧であり，甕の底部は粗雑な調整を施す傾向がみられる。

862は土製の紡錘車である。比較的きめの細かい胎土を用いて作られている。中央に孔が穿たれている。復元で直径4.4cm，孔の直径1.0cm，厚さ1.2cmをはかる。

878・880・882は石器である。878はサヌカイト製のスクレイパーである。880は楔形石器の素材と思われるが，打製穂摘具の可能性もある。材質はサヌカイトである。882は打製石斧である。両面に自然面を残しているが，片面はほとんどが自然面のままである。両側縁が敲打されているが，未製品と思われる。全体に風化が著しい。材質はサヌカイトである。

ＳＲ01流路Ｂ上層

863～877・879・881は上層から出土した遺物である。（第90～93図）

弥生土器・土師器・須恵器・石器が出土しているが，上層出土の土器は弥生時代後期から古墳時代にかけての所産と位置付けることができる。

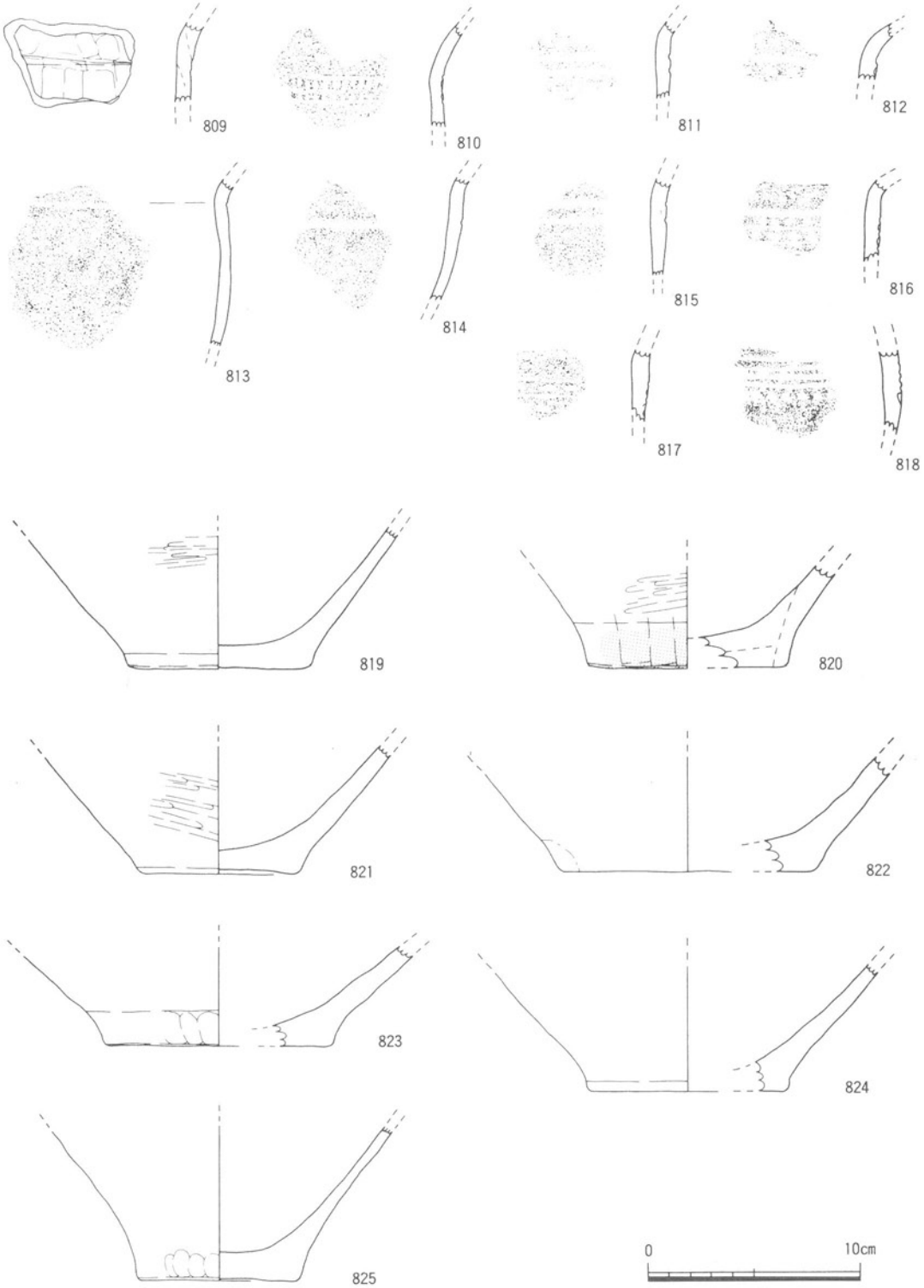
863～866は弥生土器の甕である。いずれも口縁端部をわずかに拡張している特徴をもつ。

867・868は弥生土器の高杯の脚部である。867は大きく開く脚部で，穿孔を施している。調整は外面が縦方向のヘラミガキ，内面がヘラケズリである。868は外面に竹管状の工具痕が残されており，穿孔途中と思われる。調整は外面がハケ，内面はヘラケズリである。

869～872は古式土師器の甕である。いずれも口縁部の破片であるが，肩部から内彎しながら外に開く口縁部である。口縁端部は丸く仕上げているが，871は面をもっている。

第69表　ＳＲ01流路Ｂ出土遺物④観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm)			調整		その他	色調		胎土	残存度
			口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
809	—	弥生　甕	—	—	—	指押さえのちナデ・板ナデ	ナデ	屈曲部・(外)煤付着	黒～明茶褐	濁褐	2㎜程度の石英・長石多い	破片
810	133	弥生　甕	—	—	—	磨滅のため不明	磨滅のため不明	屈曲部・(外)成線3条と刺突文	淡橙褐	淡橙褐	3㎜程度の石英・長石	破片
811	—	弥生　甕	—	—	—	横ナデ	ナデ？	屈曲部・(外)成線2条	淡褐	淡褐	2㎜以下の石英・長石多い	破片
812	—	弥生　甕	—	—	—	磨滅のため不明	磨滅のため不明	屈曲部・(外)成線1条と刺突文	白褐	白褐	2㎜程度の石英・長石	破片
813	—	弥生　甕	—	—	—	ナデ	ナデ	屈曲部・(外)成線1条・(内)黒斑	濁褐	淡褐	2㎜以下の石英・長石多い	破片
814	—	弥生　甕	—	—	—	ナデ	ナデ	屈曲部・(外)成線1条	暗褐	淡褐	2㎜以下の石英・長石多い	破片
815	133	弥生　甕	—	—	—	ナデ？	磨滅のため不明	屈曲部・(外)成線2条	白褐	白褐	2㎜以下の石英・長石	破片
816	133	弥生　甕	—	—	—	丁寧なナデ	ナデ？	屈曲部・(外)成線3条と2列の刺突文	濁褐	淡褐	1～2㎜程度の石英・長石	破片
817	—	弥生　甕	—	—	—	磨滅のため不明	磨滅のため不明	屈曲部・(外)成線2条と刺突文・黒斑	黒	淡褐	3㎜程度の石英・長石多い	破片
818	133	弥生　甕	—	—	—	磨滅のため不明	ナデ	屈曲部・(外)成線4条と刺突文	淡褐	淡褐	3㎜以下の石英・長石多い	破片
819	133	弥生　底部	—	8.7	—	ヘラミガキ・板ナデ	丁寧なナデ	壺・(外)黒斑	濁黄褐	濁黄褐	4㎜程度の石英・長石多い	1／1
820	—	弥生　底部	—	9.2	—	板ナデのちミガキ・板ナデ	板ナデ？	壺・(外)煤付着	淡茶褐	濁褐	3㎜程度の石英・長石	1／3
821	133	弥生　底部	—	7.2	—	ヘラミガキ	丁寧なナデ	壺	濁茶褐	濁茶褐	1～3㎜程度の石英・長石	1／1
822	—	弥生　底部	—	13.4	—	ナデ？	板ナデ？	壺・(外)黒斑	淡黄褐	濁黄褐	1～4㎜程度の石英・長石多い	1／4
823	—	弥生　底部	—	(10.6)	—	磨滅のため不明	磨滅のため不明	壺・磨滅が著しい	白褐	白褐	2㎜程度の石英・長石多い	1／6
824	—	弥生　底部	—	9.0	—	ミガキ？	ヘラミガキ	壺	淡黄褐	赤褐	1～3㎜程度の石英・長石多い	1／4
825	134	弥生　底部	—	7.7	—	ミガキ?・指押さえ・ナデ?	磨滅のため不明	壺	赤褐～黄褐	淡黄褐	1～3㎜程度の石英・長石多い	1／1



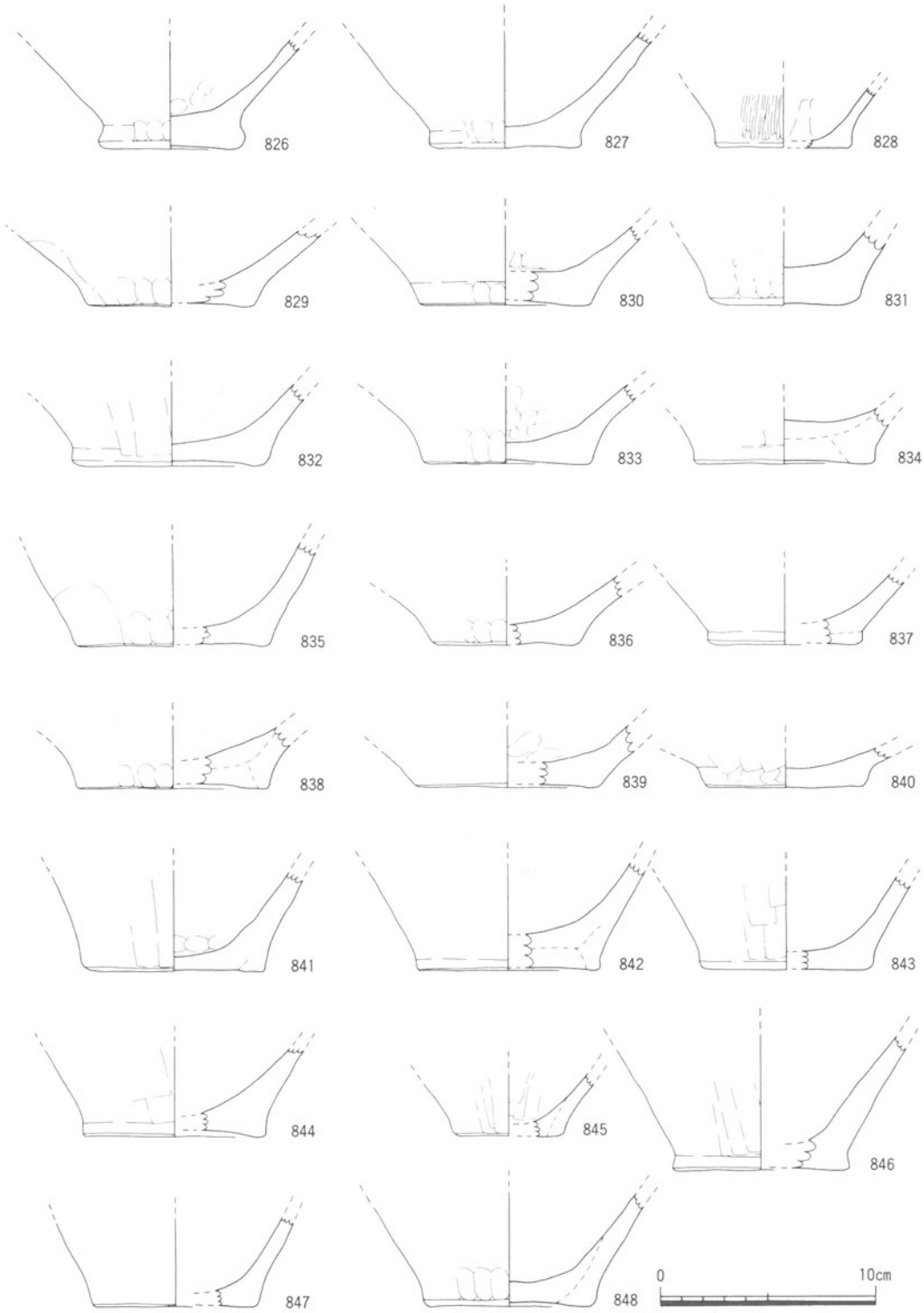
第88図　ＳＲ01流路Ｂ出土遺物④

873～877は須恵器である。873・874は杯身である。ともに受け部を横方向へ突出させ，立ち上がりが長く，口縁端部は内面に小さな段をもっている。875・876は甕である。875は口頸部で，876は肩部である。直接接合はしないが同一個体の可能性もある。877は甑である。口頸部に櫛描き波状文を施し，胴部には沈線と刺突文を施している。

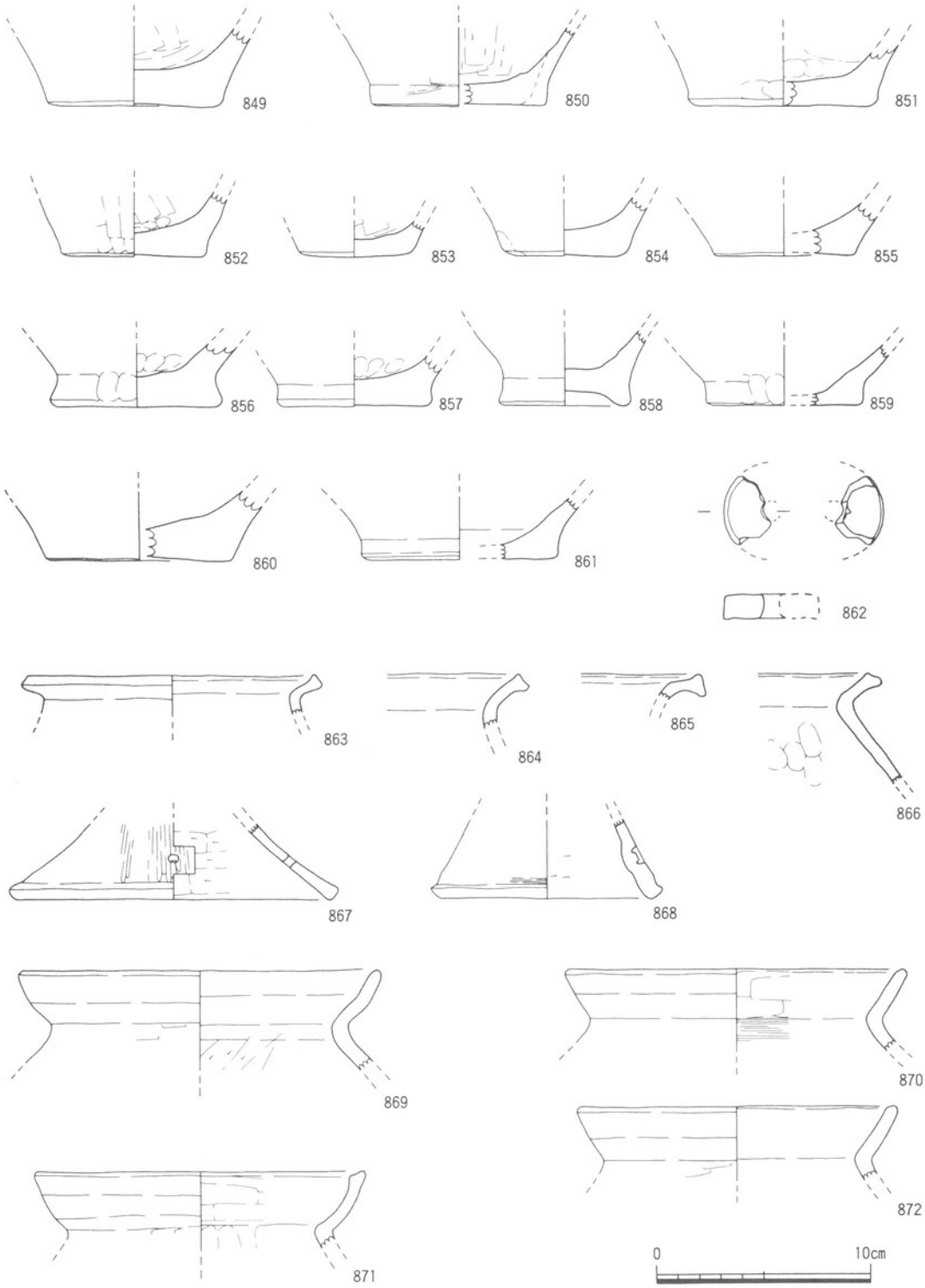
879・881は石器である。879はサヌカイト製の楔形石器である。片面に自然面を残している。打製穂摘具の可能性もある。881はサヌカイト製の打製石斧の先端の破片である。刃部先端の片面に磨滅・削痕がみられる。

第70表　ＳＲ01流路Ｂ出土遺物⑤観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	調整 外面	調整 内面	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	残存度
826	134	弥生　底部	―	7.9	―	ミガキ・指押さえ・板ナデ	ミガキ・指押さえのち丁寧なナデ	壺	濁茶褐	黒	1～3㎜程度の石英・長石多い	1／1
827	134	弥生　底部	―	8.2	―	ミガキ・指押さえ	ナデ？	壺・(内)磨滅が進む	濁褐	淡褐	1～3㎜程度の石英・長石	3／4
828	―	弥生　底部	―	(6.0)	―	ミガキ・粗いミガキ	板ナデ		淡茶褐	淡茶褐	1㎜程度の石英・長石	1／5
829	―	弥生　底部	―	(7.7)	―	磨滅のため不明	磨滅のため不明	壺・(外)黒斑	白褐	白褐	2㎜以下の石英・長石多い	1／8
830	―	弥生　底部	―	8.0	―	磨滅のため不明	板ナデ	壺・(外)磨滅が進む	濁褐	濁黄褐	4㎜以下の石英・長石多い	1／4
831	―	弥生　底部	―	8.2	―	指押さえのち粗いミガキ	ナデ		黄褐	淡褐	1～3㎜程度の石英・長石多い	1／2
832	―	弥生　底部	―	9.2	―	板ナデ・ナデ・板ナデ	磨滅のため不明	(内)黒斑	淡黄褐	淡灰褐	4㎜以下の石英・長石多い	1／1
833	―	弥生　底部	―	7.8	―	磨滅のため不明	磨滅のため不明	磨滅が著しい	濁黄褐	淡黄褐	3㎜以下の石英・長石	1／1
834	―	弥生　底部	―	8.2	―	板ナデ・ナデ	磨滅のため不明		淡褐	淡褐	1㎜程度の石英・長石多い	7／8
835	―	弥生　底部	―	9.0	―	磨滅のため不明	磨滅のため不明	(外)黒斑	黄褐	黄褐	1～2㎜程度の石英・長石多い	1／3
836	―	弥生　底部	―	6.3	―	磨滅のため不明	磨滅のため不明	磨滅・剥離が進む	淡黄褐	淡黄褐	2㎜以下の石英・長石多い	1／4
837	―	弥生　底部	―	(7.2)	―	ナデ？	ナデ？	磨滅が進む	茶褐	淡褐	1㎜程度の石英・長石多い	1／6
838	―	弥生　底部	―	8.6	―	磨滅のため不明	剥離のため不明		淡褐	白褐	2㎜以下の石英・長石多い	1／4
839	―	弥生　底部	―	(7.5)	―	磨滅のため不明	指ナデ		淡黄褐	淡黄褐	2㎜程度の石英・長石	1／6
840	―	弥生　底部	―	6.2	―	板ナデ・指押さえ・板ナデ	丁寧な板ナデ		淡黒褐	濁灰褐	1～3㎜程度の石英・長石	1／3
841	―	弥生　底部	―	8.6	―	板ナデ	ナデ		淡黄褐	淡茶褐	1～2㎜程度の石英・長石多い	1／1
842	135	弥生　底部	―	8.4	―	ナデ？・板ナデ	ナデ	磨滅が進む	淡褐	淡褐	1～2㎜程度の石英・長石	1／3
843	―	弥生　底部	―	7.8	―	板ナデ・粗い板ナデ	磨滅のため不明	(内)磨滅が進む	淡褐	淡褐	1～4㎜程度の石英・長石多い	1／3
844	―	弥生　底部	―	(8.2)	―	板ナデ・ナデ	磨滅のため不明		濁褐	白褐	1～2㎜程度の石英・長石多い	1／4
845	―	弥生　底部	―	4.6	―	板ナデ？・板ナデ	板ナデ？		濁褐	灰褐	1㎜程度の石英・長石少し	1／3
846	―	弥生　底部	―	(7.8)	―	板ナデ	丁寧なナデ		暗茶褐	暗茶褐	5㎜以下の石英・長石多い	1／6
847	―	弥生　底部	―	7.6	―	磨滅のため不明	磨滅のため不明	磨滅が著しい	淡褐	淡褐	1～2㎜程度の石英・長石多い	1／4
848	―	弥生　底部	―	7.5	―	板ナデ？・指押さえのちナデ	磨滅のため不明		濁褐	淡褐	2㎜程度の石英・長石多い	1／3



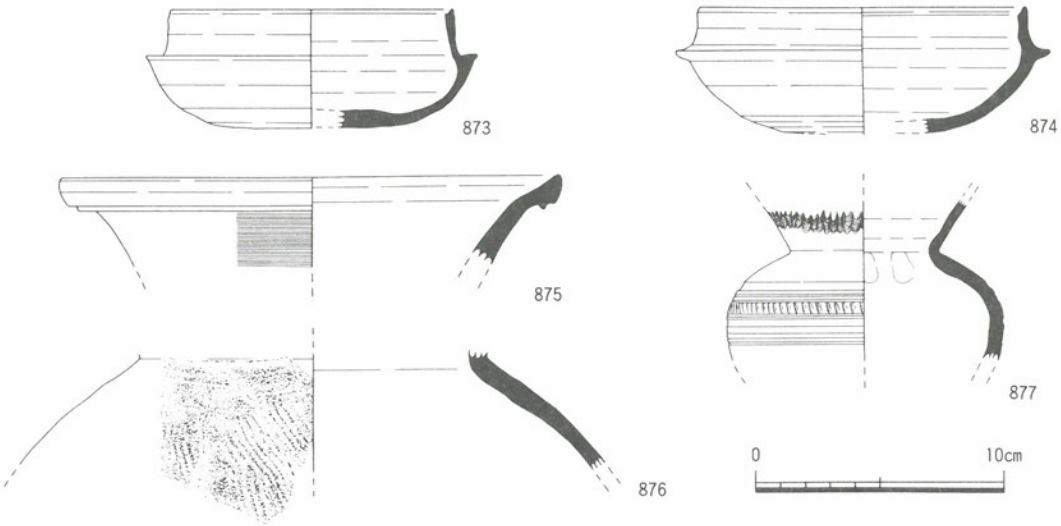
第89図　ＳＲ01流路Ｂ出土遺物⑤



第90図　ＳＲ01流路Ｂ出土遺物⑥

第71表　ＳＲ01流路Ｂ出土遺物⑥観察表

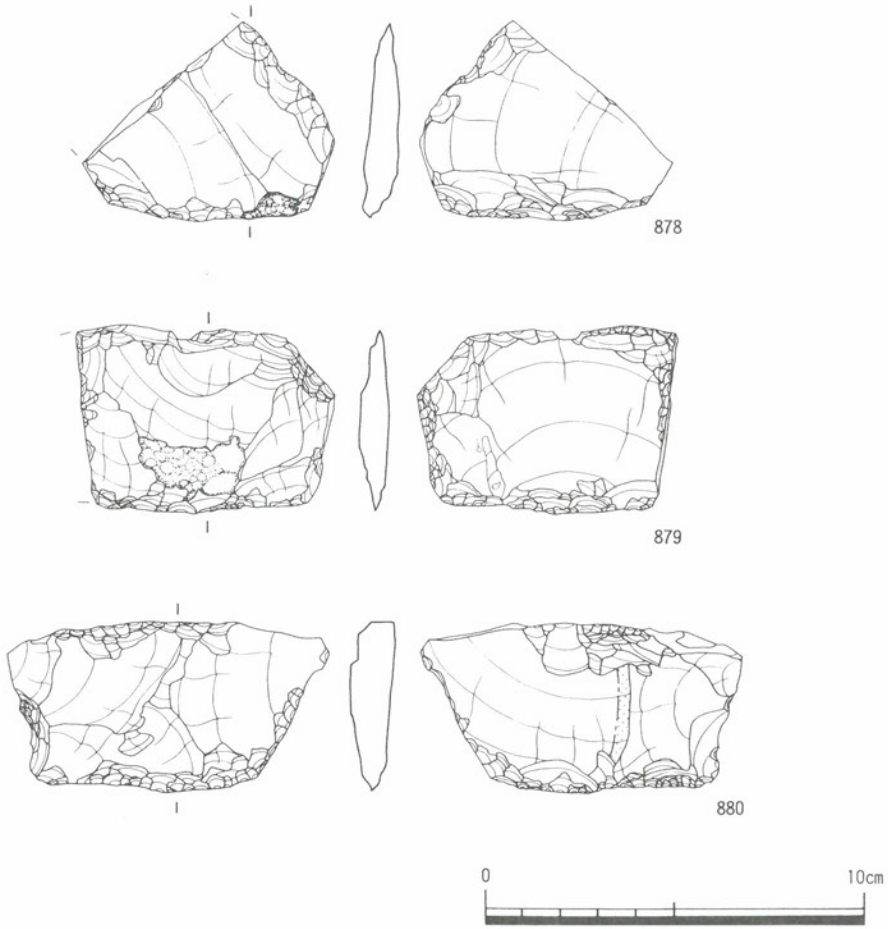
遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	その他	色調 外面	内面	胎土	残存度
849	135	弥生　底部	——	8.2	——	ナデ・板ナデ	板ナデ		濁褐	淡褐	1～3mm程度の石英・長石多い	1／1
850	—	弥生　底部	——	8.1	——	板ナデ・ナデ	ヘラケズリ		濁褐	淡褐	3mm程度の石英・長石多い	1／4
851	—	弥生　底部	——	(8.4)	——	指押さえ・ナデ	指押さえ	(内)黒斑	淡褐	淡褐	2mm程度の石英・長石	1／5
852	135	弥生　底部	——	7.8	——	指押さえのち板ナデ・板ナデ	指押さえのち板ナデ		暗褐～褐	褐	1～3mm程度の石英・長石多い	1／1
853	—	弥生　底部	——	5.3	——	板ナデのちナデ	指押さえのち板ナデ		濁褐	濁褐	1mm程度の石英・長石多い	1／1
854	—	弥生　底部	——	5.8	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	(外)黒斑	白褐	白褐	3mm程度の石英・長石	1／1
855	—	弥生　底部	——	7.7	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	磨滅が著しい	濁褐	淡褐	1～3mm程度の石英・長石多い	1／2
856	—	弥生　底部	——	7.4	——	指押さえ・磨滅	指押さえ	(底)黒斑	白褐	白褐	1mm程度の石英・長石	1／4
857	—	弥生　底部	——	7.3	——	板ナデ？	指押さえのちナデ?	磨滅が進む	淡褐	黒	1～4mm程度の石英・長石多い	3／4
858	135	弥生　底部	——	5.8	——	磨滅のため不明	ナデ	(外)黒斑	濁褐	濁褐	2mm程度の石英・長石多い	1／1
859	—	弥生　底部	——	(7.2)	——	ナデ・指押さえ・ナデ	ナデ？	淡褐	淡褐	淡褐	1mm程度の石英・長石多い	1／6
860	—	弥生　底部	——	8.2	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	磨滅が著しい	白褐	白褐	1mm程度の石英・長石多い	1／4
861	—	弥生　底部	——	9.2	——	板ナデ？	磨滅のため不明		濁白褐	濁白褐	1～3mm程度の石英・長石多い	1／4
862	137	土製紡錘車	——	——	——	ナデ	ナデ	直径(4.4)・孔径(1.0)・厚1.2cm	白褐	白褐	1mm以下の砂粒少し	1／4
863	—	弥生　甕	(13.2)	——	——	ヨコナデ	ヨコナデ		淡黒褐	濁褐	1mm程度の石英・長石・雲母・角閃石	1／12
864	—	弥生　甕	——	——	——	ヨコナデ	ナデ？	磨滅が進む	淡褐	淡褐	1mm以下の石英・長石多い	破片
865	—	弥生　甕	——	——	——	ヨコナデ	ヨコナデ		茶褐	茶褐	1mm以下の石英・長石・雲母・角閃石	破片
866	—	弥生　甕	——	——	——	ヨコナデ・磨滅	ヨコナデ・指押さえ	磨滅が進む	濁茶褐	淡褐	1mm程度の石英・長石・雲母・角閃石	破片
867	137	弥生　高杯	——	(14.5)	——	ミガキ・ヨコナデ	ヘラケズリ	脚部・焼成前の穿孔	淡茶褐	淡茶褐	1mm以下の石英・長石・雲母・角閃石	1／6
868	137	弥生　高杯	——	(9.9)	——	ハケ？	ヘラケズリ	脚部・(外)穿孔途中	明茶褐	明茶褐	1mm程度の石英・長石・雲母	1／8
869	—	土師器　甕	(16.7)	——	——	ヨコナデ・板ナデ	板ナデ・ケズリのちナデ?	磨滅が進む	淡褐	淡褐	1～2mm程度の石英・長石・雲母	1／8
870	—	土師器　甕	(15.5)	——	——	ヨコナデ	板ナデ・ハケ	磨滅が進む	濁黄褐	濁黄褐	1mm程度の石英・長石・雲母・角閃石	1／8
871	—	土師器　甕	15.4	——	——	ヨコナデ・板ナデ	板ナデ・指押さえ		濁黄褐	濁黄褐	1mm程度の石英・長石・雲母	1／4
872	—	土師器　甕	(14.7)	——	——	ヨコナデ・板ナデ	ヨコナデ		淡黄褐	淡黄褐	1mm程度の石英・長石・雲母・角閃石	1／7



第91図　ＳＲ01流路Ｂ出土遺物⑦

第72表　ＳＲ01流路Ｂ出土遺物⑦観察表

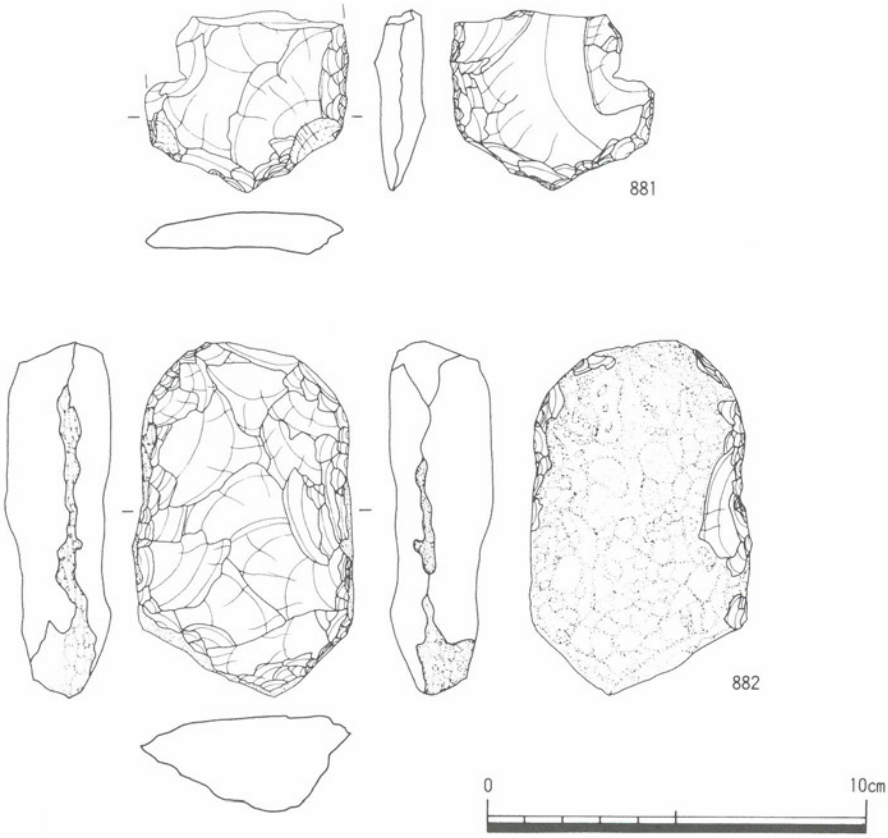
遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	その他	色調 外面	内面	胎土	残存度
873	136	須恵器　杯	11.3	6.2	4.7	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	杯身	青灰	青灰	1mm以下の砂粒少し	1／2
874	136	須恵器　杯	(13.0)	(6.4)	(6.4)	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	杯身	灰青	暗灰	1mm程度の砂粒少し	1／5
875	—	須恵器　甕	(20.0)	——	——	回転ナデ	回転ナデ	口縁～頸部	灰白	灰白	0.5mm程度の砂粒少し	1／16
876	—	須恵器　甕	——	——	——	カキ目のち叩き	回転ナデ	肩部	灰白	灰白	0.5mm程度の砂粒少し	1／6
877	136	須恵器　鉢	——	——	——	回転ナデ	回転ナデのち指押さえ	(ネ)製形に沿う文・製形に沿う線と刺突文	青灰	青灰	0.5mm程度の砂粒少し	1／4



第92図　ＳＲ01流路Ｂ出土遺物⑧

第73表　ＳＲ01流路Ｂ出土遺物⑧観察表

遺物番号	写真図版	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	備考
878	137	スクレイパー	6.8	5.9	0.9	38.9	サヌカイト	
879	137	楔形石器	6.8	5.0	0.8	40.9	サヌカイト	片面に自然面が残る　打製石庖丁の可能性
880	137	楔形石器	8.6	4.5	1.1	47.5	サヌカイト	打製石庖丁の可能性



第93図　ＳＲ01流路Ｂ出土遺物⑨

第74表　ＳＲ01流路Ｂ出土遺物⑨観察表

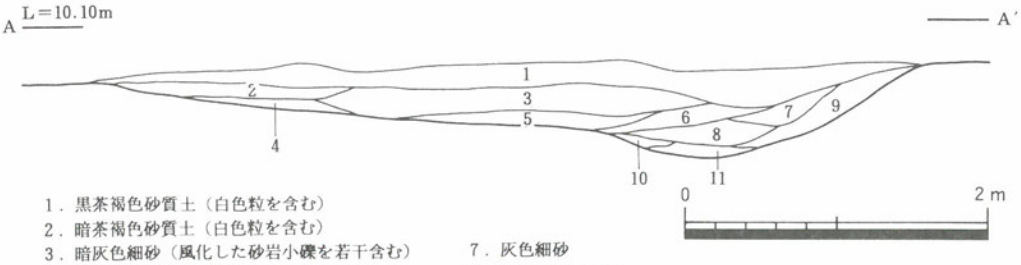
遺物番号	写真図版	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	備考
881	138	打製石斧	4．9	5．4	1．1	34．2	サヌカイト	刃部片面に磨滅・擦痕がみられる
882	138	打製石斧	9．5	5．8	2．5	187．0	サヌカイト	両面に自然面が残る　両側辺に敲打痕あり　風化が著しい

2．弥生時代前期の遺構・遺物

ＳＤ01（第94～100図）

Ｂ地区東半部で検出した溝状遺構である。幅1.9～3.8m，深さ約0.4mをはかる。緩やかに弧を描きながら南西から北東に流れるものである。第１微高地と第２微高地の間の低湿地（ＳＸ01）がある程度埋没したあとで，掘られた溝状遺構である。溝状遺構の底面直上から弥生土器・石庖丁などとともに，少量ではあるが縄文時代晩期の凸帯文土器も出土している。

883～891は縄文土器である。883～887は凸帯文土器の深鉢の口縁部である。凸帯が貼り付けられる位置はさまざまであるが，凸帯上の刻目は軽い刻みである。885は頸部に沈線で文様を施している。888は頸部に文様を施し，胴部凸帯を貼り付けた肩部の破片と思われる。889・890は頸部の破片で，沈線で文様を施している。891は浅鉢の口縁部である。内面に２条の沈線をめぐらせている。



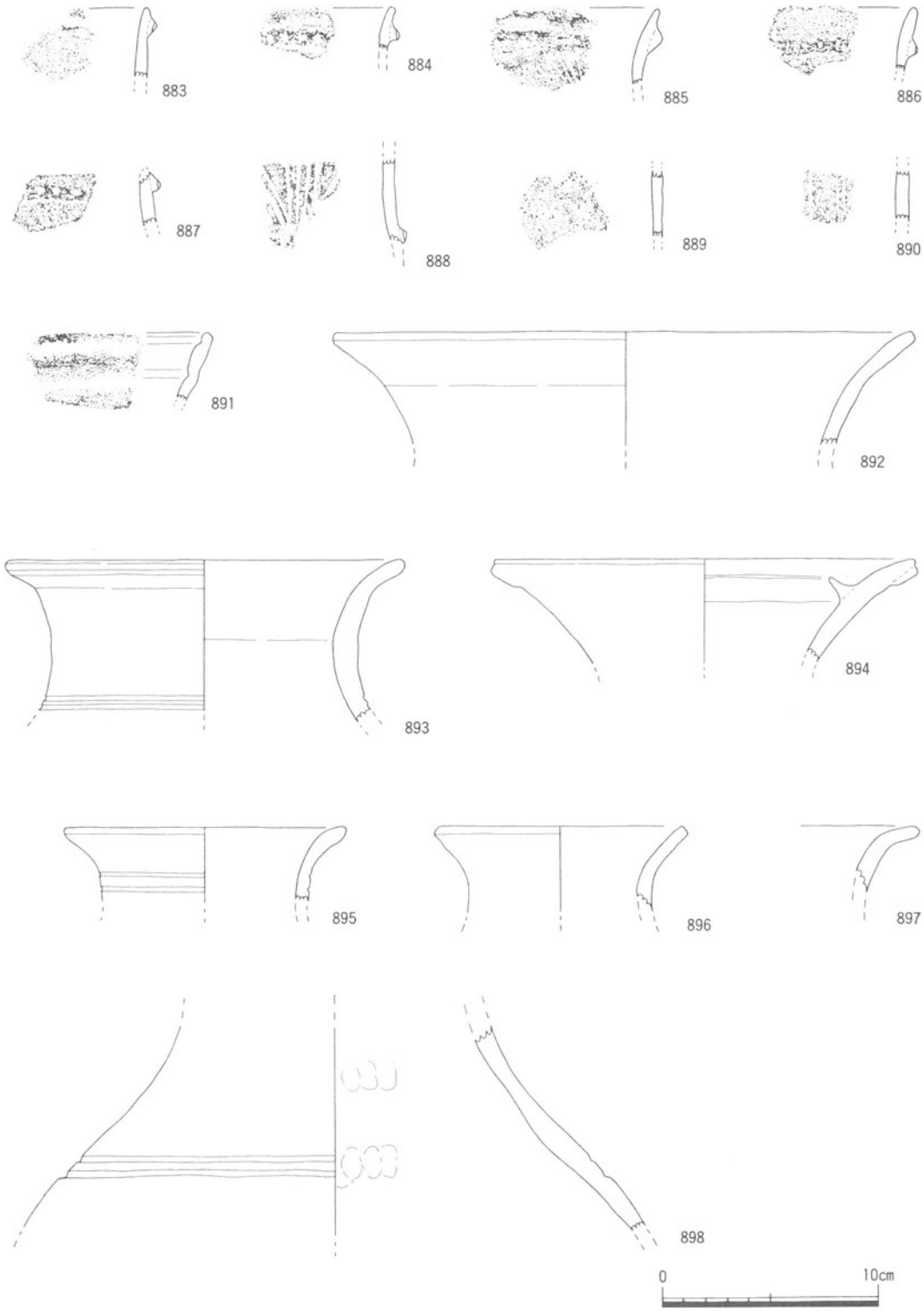
1．黒茶褐色砂質土（白色粒を含む）
2．暗茶褐色砂質土（白色粒を含む）
3．暗灰色細砂（風化した砂岩小礫を若干含む）
4．黄茶褐色粘質土（風化した砂岩小礫を含む）
5．暗茶褐色砂質土（白色粒を含む）
6．暗茶褐色砂質土（風化した砂岩小礫を多く含む）
7．灰色細砂
8．暗茶褐色砂質土（風化した砂岩小礫を含む）
9．暗茶褐色砂質土（風化した砂岩小礫を若干含む）
10．暗茶灰褐色シルト
11．暗黄褐色砂礫土（砂岩を多く含む）

第94図　ＳＤ01土層断面図

第75表　ＳＤ01出土遺物①観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	その他	色調 外面	内面	胎土	残存度
883	139	(縄文) 深鉢	—	—	—	磨滅のため不明	磨滅のため不明	凸帯文系?(上三角・横・0.4・丸・粗雑)	白褐	淡黒	1～3mm程度の砂粒	破片
884	139	(縄文) 深鉢	—	—	—	ナデ	ナデ	凸帯文系?(下三角・斜・0.6・丸・粗雑)	淡黄褐	淡黄褐	1mm程度の砂粒多い	破片
885	139	(縄文) 深鉢	—	—	—	ナデ	ナデ	凸帯文系?(上三角・?・0.8・丸)鋸歯文帯	淡褐	褐	1mm程度の砂粒多い	破片
886	139	(縄文) 深鉢	—	—	—	磨滅のため不明	磨滅のため不明	凸帯文系?(三角・横・1.2・丸)鋸歯文帯	淡黄褐	淡黄褐	1mm以下の砂粒多い	破片
887	139	(縄文) 深鉢	—	—	—	磨滅のため不明	磨滅のため不明	凸帯文系?(下三角・横・丸頂・丸頂)鋸歯文帯	淡黄褐	淡黄褐	1mm以下の砂粒多い	破片
888	139	(縄文) 深鉢	—	—	—	ナデ	ナデ	凸帯文系?・鋸歯凸帯?・鋸歯にヘラ描文	灰茶褐	灰茶褐	1mm以下の砂粒	破片
889	—	(縄文) 深鉢	—	—	—	ナデ?	ナデ	凸帯文系?・鋸歯・鋸歯にヘラ描文	淡褐	淡褐	1mm以下の砂粒多い	破片
890	—	(縄文) 深鉢	—	—	—	ナデ?	ナデ?	凸帯文系?・鋸歯・鋸歯にヘラ描文	濁茶褐	濁茶褐	1mm以下の砂粒	破片
891	139	縄文 浅鉢	—	—	—	ナデ・ケズリ風調整	ナデ	(内)沈線２条	黒褐	黒褐	1mm以下の砂粒	破片
892	—	弥生 壺	(26.6)	—	—	ナデ	ナデ	磨滅が進む	淡褐	淡褐	2mm以下の石英・長石	1／12
893	139	弥生 壺	(18.0)	—	—	ミガキ	ナデ	(外)肩部に沈線2条・磨滅が進む	橙褐	淡橙褐	1mm程度の石英・長石	1／10
894	139	弥生 壺	19.4	—	—	磨滅のため不明	磨滅のため不明	(外)端部に粘土紐貼付・(内)粘土紐貼付	暗赤褐	暗橙褐	5mm以下の石英・長石多い	1／4
895	139	弥生 壺	(13.0)	—	—	ナデ	ナデ	(外)頸部に沈線2条・磨滅が進む	淡黄白	淡黄白	5mm程度の石英・長石多い	1／8
896	—	弥生 壺	(11.0)	—	—	磨滅のため不明	磨滅のため不明	磨滅が著しい	白褐	淡橙褐	2mm以下の石英・長石多い	1／4
897	—	弥生 壺	—	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	磨滅が進む	淡褐	淡褐	1mm以下の石英・長石	破片
898	140	弥生 壺	—	—	—	ナデ	指押さえのちナデ	肩部・(外)沈線2条・磨滅が進む	橙褐	淡白褐	4mm程度の石英・長石多い	1／4

第95図　ＳＤ01遺物出土状況平面図



第96図　ＳＤ01出土遺物①

892～911は弥生土器の壺である。892～897は口縁部である。壺の口縁は大きく外反しながら外に向かって開く形態をしており，893・895は頸部にヘラ描き沈線を２条めぐらせている。894は口縁部内面と外面にそれぞれ粘土紐を貼り付けて文様を描いている。898～905は肩部・胴部である。898～903は外面に２～４条の沈線をめぐらせている。904は肩部に貼付凸帯を施している。いずれも調整は丁寧で，ヘラミガキ調整が多い。905・906は直接接合はしなかったが，同一個体である。906～911は壺の底部である。

912～927は弥生土器の甕である。912～920・922は口縁部である。912は口縁端部外面に軽い刻目を施し，頸部には沈線３条と沈線間に刺突文２列を施している。915は口縁端部外面に刻目を施し頸部には沈線を３条めぐらせている。920・922は口縁端部に刻目をもたないが，頸部に沈線を２条めぐらせている。916は凸帯文土器系の甕と思われる。外面に凸帯をめぐらせるが，磨滅が著しく刻目はわからない。916を除いて口縁部はすべて如意状口縁であり，逆Ｌ字型口縁はみられない。921・923～925は肩部である。921・924は頸部に２条の沈線を，923は３条の沈線をめぐらせている。925は４条の沈線と沈線間に２列の竹管文を施している。926・927は甕の底部である。

928はミニチュアの壺である。頸部に２条の沈線をめぐらせている。調整は外面の口縁部が指押さえ，胴部が横方向のヘラミガキ，底部が板ナデで，内面は指押さえ・指ナデである。

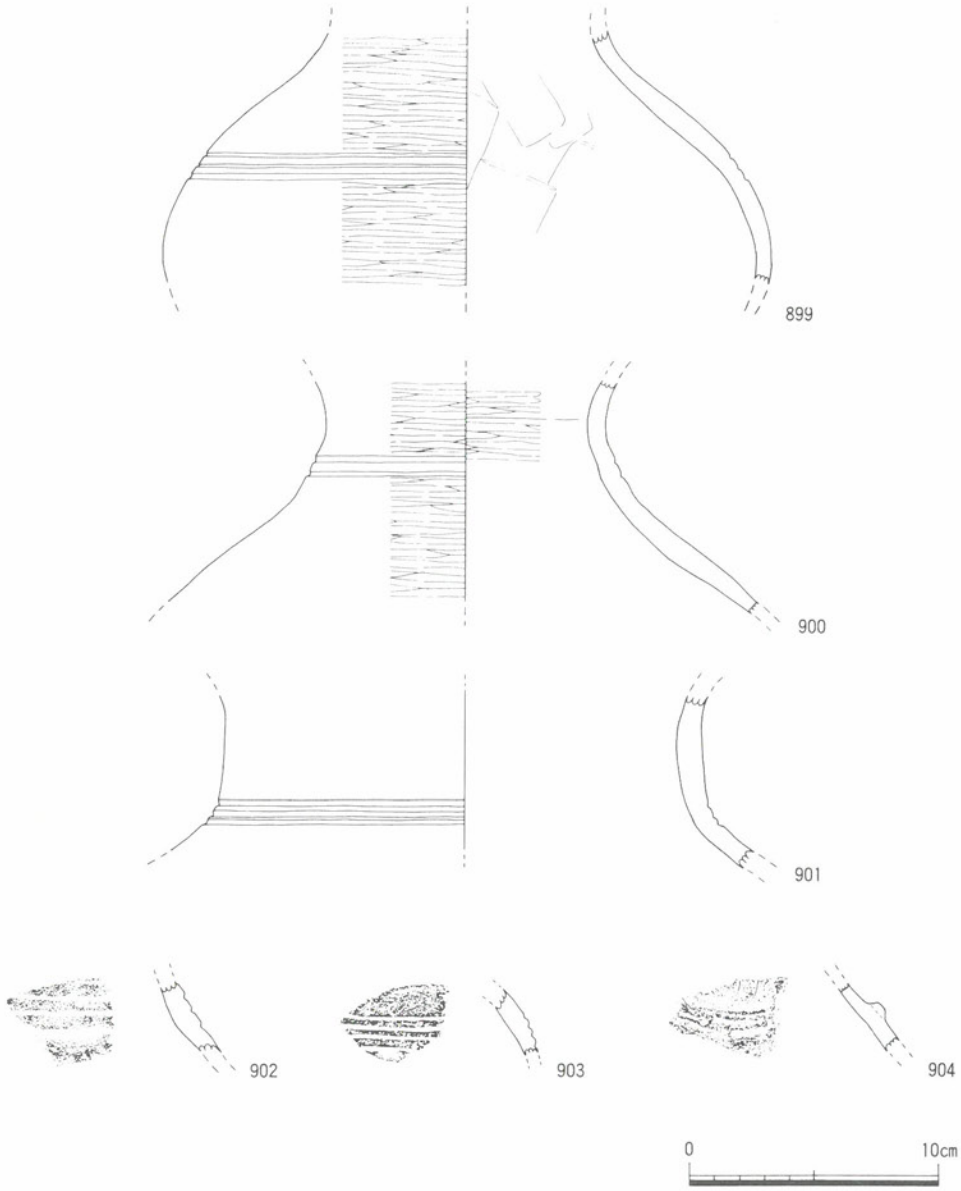
929～932は石器である。929・930はサヌカイト製の石鏃である。929は無茎の凹基式で，930は尖基式の石鏃である。931は磨製の柱状片刃石斧である。刃幅2.0cmと小さいものである。基部は抉りの部分で破損している。932はサヌカイト製の打製石庖丁である。縁辺部は丁寧に調整を施しており，片側縁は敲打している。短辺の両側縁に抉りを作り出しているが，片方は破損して作り直したためか，いびつな形をしている。

第76表　ＳＤ01出土遺物②観察表

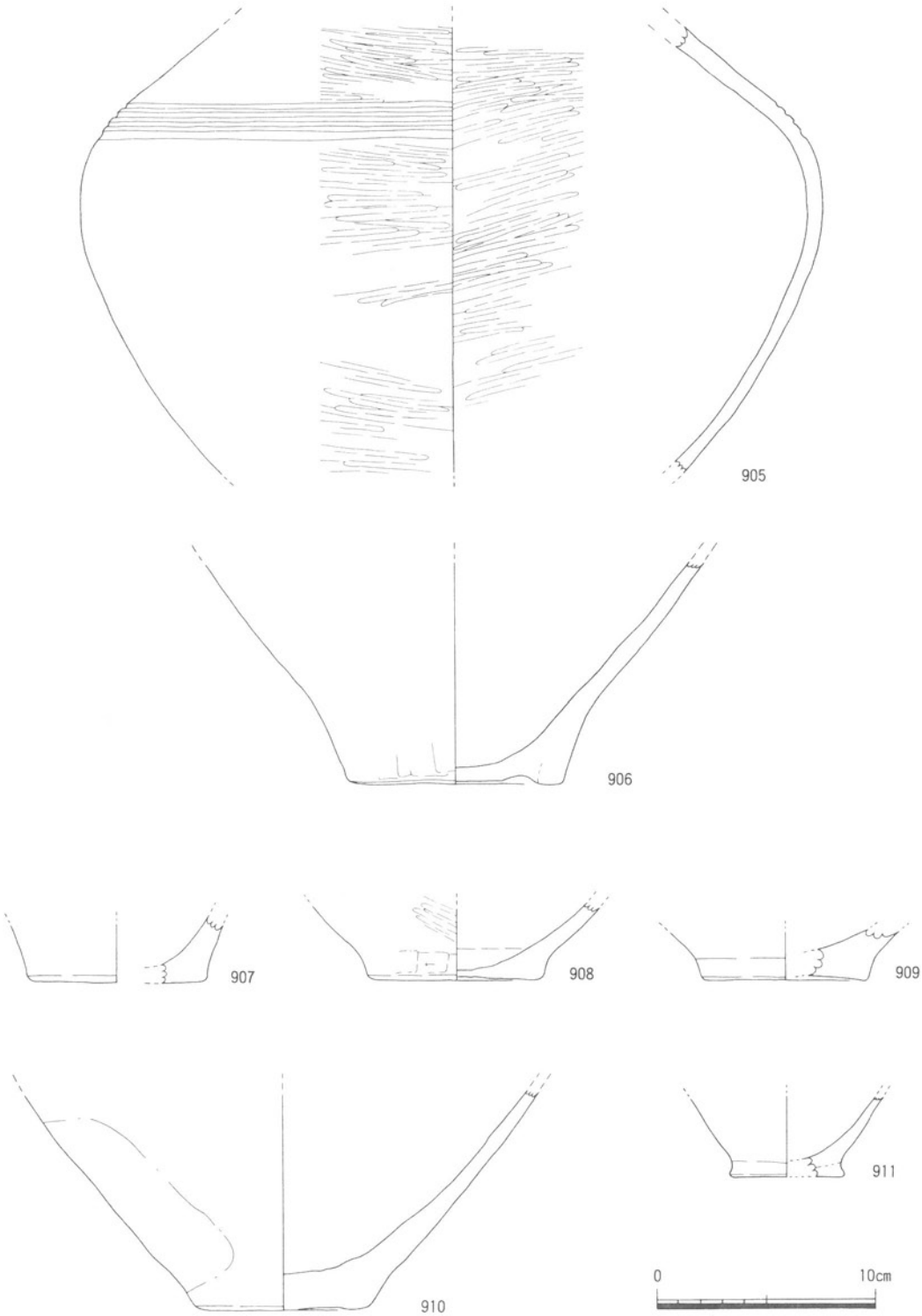
遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	その他	色調 外面	内面	胎土	残存度
899	140	弥生　壺	―	―	―	ヘラミガキ	板ナデ	肩～胴部・(外)沈線3条・(内)調	淡褐	淡褐	5mm程度の石英・長石多い	1／2
900	140	弥生　壺	―	―	―	ヘラミガキ	ヘラミガキ	肩部・(外)沈線２条	淡褐	淡褐	5mm程度の石英・長石多い	1／3
901	―	弥生　壺	―	―	―	ヘラミガキ	ヘラミガキ	肩部・(外)沈線３条	淡茶褐	淡茶褐	5mm程度の石英・長石	1／4
902	142	弥生　壺	―	―	―	磨滅のため不明	ナデ	肩部・(外)沈線３条	淡褐	淡褐	1～3mm程度の石英・長石多い	破片
903	142	弥生　壺	―	―	―	ヘラミガキ	ナデ	肩部・(外)沈線４条	黒	淡白褐	1～3mm程度の石英・長石多い	破片
904	142	弥生　壺	―	―	―	磨滅のため不明	磨滅のため不明	肩部・(外)貼付凸帯１条	淡褐	淡褐	1mm程度の石英・長石	破片

第77表　ＳＤ01出土遺物③観察表

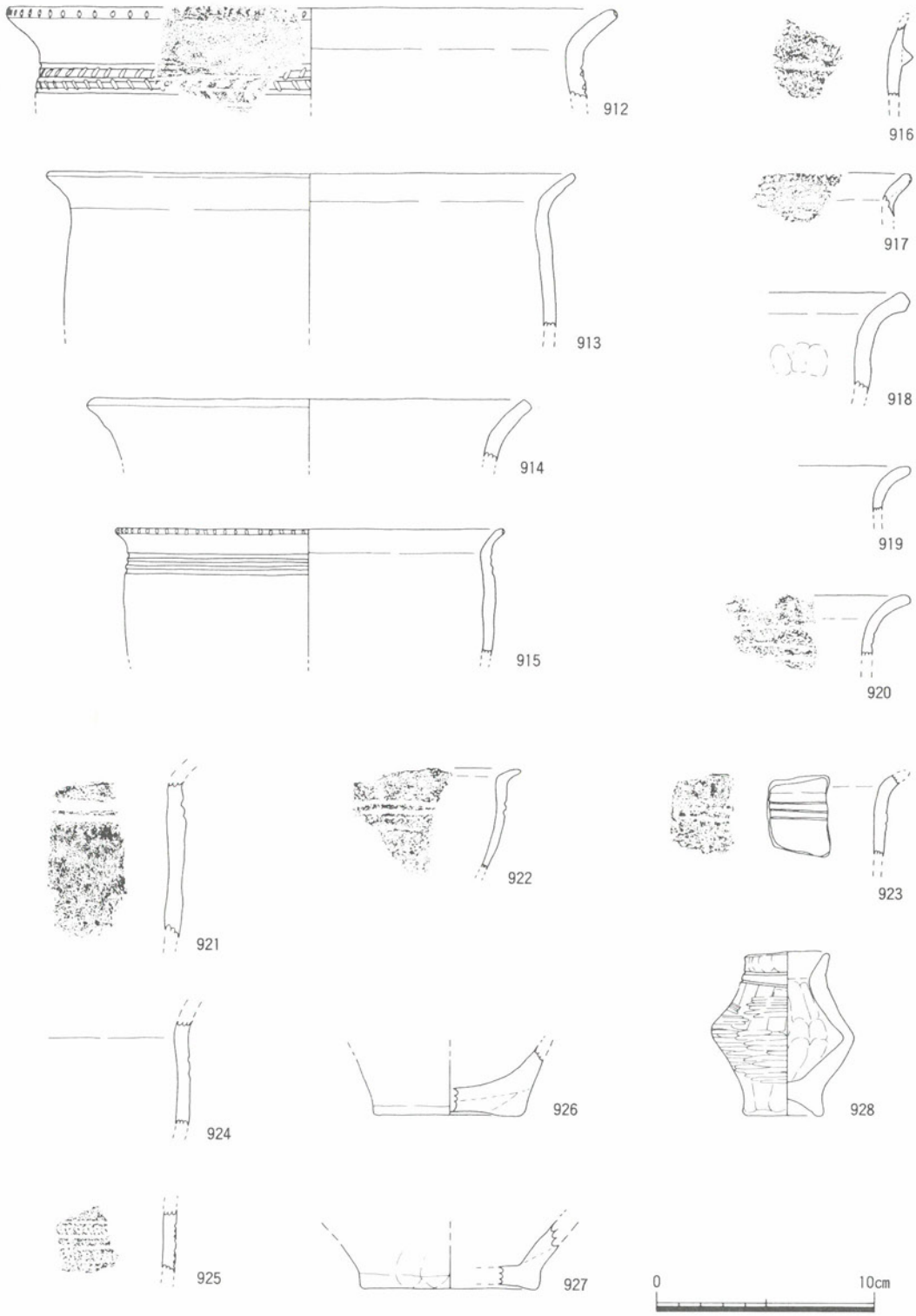
遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	その他	色調 外面	内面	胎土	残存度
905	141	弥生　壺	―	―	―	ヘラミガキ	ヘラミガキ	肩～胴下部・(外)沈線4条・黒斑	白褐	白褐	2mm程度の石英・長石	1／2
906	141	弥生　壺	―	10.0	―	指ナデ・ケズリのちナデ	ナデ？	底部・黒斑が著し・905と同一個体	白褐	白褐	2mm程度の石英・長石	1／2
907	―	弥生　底部	―	(7.8)	―	板ナデ	磨滅	壺・磨滅が著しい	橙褐	橙褐	2mm程度の石英・長石多い	1／5
908	142	弥生　底部	―	7.8	―	ヘラミガキ・指ナデ	剥離のため不明	壺・剥離が進む	淡黄褐	黄白褐	2mm程度の石英・長石多い	1／1
909	―	弥生　底部	―	7.6	―	磨滅のため不明	磨滅のため不明	壺・磨滅が著しい	橙褐	橙褐	3mm程度の石英・長石多い	1／3
910	―	弥生　底部	―	8.0	―	ヘラミガキ・ナデ・指ナデ	磨滅のため不明	壺・(外)黒斑	灰茶褐	灰茶褐	4mm程度の石英・長石多い	1／1
911	―	弥生　底部	―	5.2	―	磨滅のため不明	磨滅のため不明	壺・磨滅が著しい	淡灰茶	淡黄白	4mm程度の石英・長石	1／4



第97図　ＳＤ01出土遺物②



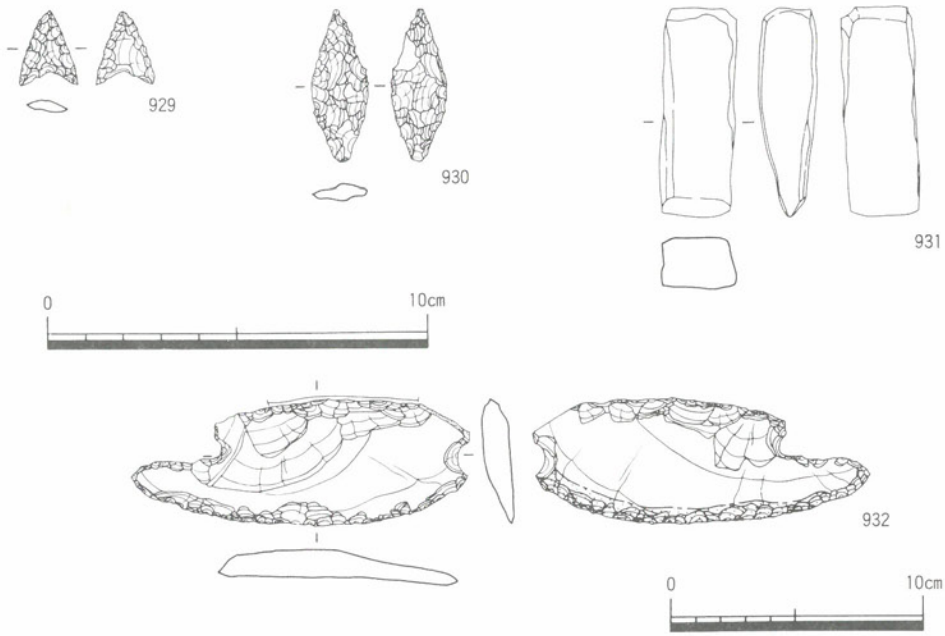
第98図　ＳＤ01出土遺物③



第99図　ＳＤ01出土遺物④

第78表　ＳＤ01出土遺物④観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	その他	色調 外面	内面	胎土	残存度
912	142	弥生　甕	(27.6)	——	——	ナデ	ナデ	(外)櫛原押み・頸部に沈線3条と刺突文	茶褐	淡褐	4mm程度の石英・長石多い	1／16
913	142	弥生　甕	(24.0)	——	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明		淡褐	淡褐	1～4mm程度の石英・長石多い	1／6
914	—	弥生　甕	(20.0)	——	——	ナデ	ナデ		淡黄褐	淡褐	1～3mm程度の石英・長石多い	1／16
915	142	弥生　甕	(17.8)	——	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	(外)櫛原押み・頸部に沈線3条	暗褐	淡灰褐	1～4mm程度の石英・長石多い	1／10
916	142	弥生　甕	——	——	——	ナデ	磨滅のため不明	古墳文系?・鉄鏃が刺さる(矢柏不明)	淡褐	黄褐	1mm程度の砂粒	破片
917	—	弥生　甕	——	——	——	ナデ	ナデ	端部刻み・磨滅が著しい	濁茶褐	濁茶褐	1mm程度の石英・長石多い	破片
918	—	弥生　甕	——	——	——	指押さえのちナデ	ナデ・指押さえ	磨滅が著しい	淡褐	淡褐	1～4mm程度の石英・長石多い	破片
919	—	弥生　甕	——	——	——	ナデ	磨滅のため不明		淡茶褐	淡茶褐	1～3mm程度の石英・長石多い	破片
920	—	弥生　甕	——	——	——	ナデ	ナデ	(外)頸部に沈線２条以上	淡褐	淡褐	1～3mm程度の石英・長石多い	破片
921	—	弥生　甕	——	——	——	ナデ	ナデ	胴部・(外)沈線２条	茶褐	黄褐	1～2mm程度の石英多い	破片
922	—	弥生　甕	——	——	——	指押さえのちナデ	ナデ	(外)頸部に沈線２条	淡橙褐	淡橙褐	1～3mm程度の石英・長石多い	破片
923	—	弥生　甕	——	——	——	ナデ	ナデ	鉄鏃が刺む・(外)頸部に沈線3条	淡褐	淡褐	1mm程度の石英・長石多い	破片
924	—	弥生　甕	——	——	——	ナデ?	ナデ?	肩部・磨滅が著しい	淡橙白	淡橙白	2mm程度の石英・長石多い	破片
925	142	弥生　甕	——	——	——	ナデ?	ナデ	頸部・(外)沈線4条と刺突文2列	淡茶褐	淡茶褐	1～5mm程度の石英・長石多い	破片
926	—	弥生　底部	——	7.0	——	板ナデ	ナデ	甕?	赤茶褐	淡褐	1～5mm程度の石英・長石多い	1／3
927	—	弥生　底部	——	(8.0)	——	指押さえのちナデ	指押さえのちナデ	甕・剥離が進む	赤茶褐	黒褐	1～3mm程度の石英・長石多い	1／8
928	141	弥生　壺	4.0	3.6	7.6	指押さえ・番ナデ・ヘラミガキ	指押さえ	ミニチュア	黒褐	黒褐	2mm程度の石英・長石少し	1／1



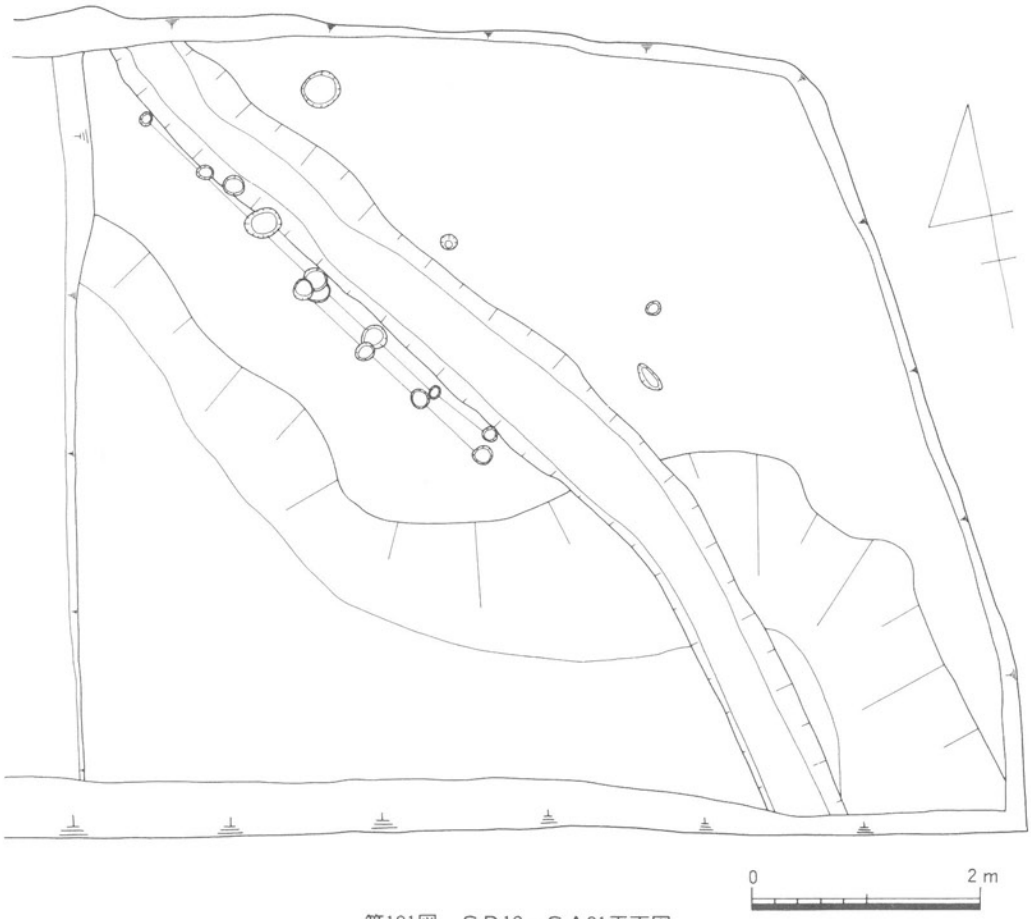
第100図　ＳＤ01出土遺物⑤

第79表　ＳＤ01出土遺物⑤観察表

遺物番号	写真図版	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	備考
929	143	石鏃	2．0	1．5	0．3	0．6	サヌカイト	凹基式
930	143	石鏃	4．1	1．5	0．5	2．2	サヌカイト	尖基式
931	143	柱状片刃石斧	5．6	2．0	1．4	32．5	結晶片岩	
932	143	打製石庖丁	13．3	5．0	1．1	75．3	サヌカイト	両短辺に抉りを入れる　長側辺の片方に敲打痕あり

ＳＤ12（第101図）

Ｅ１地区東端部で検出した溝状遺構である。自然河川ＳＲ01の東岸に位置し，ちょうど第３微高地の西辺部にあたる。幅0.7～1.0m，深さ0.1～0.3mをはかるが，深いのは調査区南壁付近だけで全体に遺存状況は悪い。埋土は灰紫色粘質土の単一埋土で，自然河川ＳＲ01の下層がほぼ全体に堆積した段階で作られている。弥生土器細片がわずかに出土しており，胎土から弥生時代前期と判断できる。



第101図　ＳＤ12・ＳＡ01平面図

ＳＡ01（第101図）

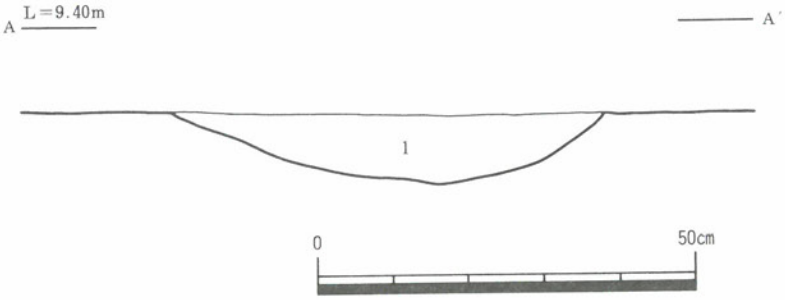
Ｅ１地区東端部で検出した柵列である。自然河川ＳＲ01の東岸に位置し，溝状遺構ＳＤ12に接するように作られている[1]。13個の柱穴から構成されているがこの中には時間的先後関係のあるものも見うけられ，長短２本の柵列を復元した。長いほうを柵列ＳＡ01ａ，短いほうを柵列ＳＡ

01ｂと呼称する。柵列ＳＡ01ａは，柱穴ＳＰ01から柱穴ＳＰ09までの９個で構成されるもので，柱穴の間隔は芯心距離で70～80cmとほぼ等間隔で並んでいる[2]。柵列ＳＡ01ｂは柱穴ＳＰ10から柱穴ＳＰ13までの４個で構成されるもので，その間隔は芯心距離で70～80cmとほぼ等間隔で並んでいる。柱穴から遺物は出土していないが，溝状遺構ＳＤ12との時間的先後関係も認められないことから弥生時代前期の年代が想定できる。

ＳＤ14（第102・103図）

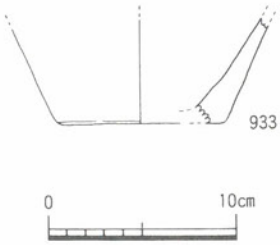
Ｇ１地区西半部で検出した溝状遺構である。幅約0.3～0.8ｍ，深さ約0.1ｍをはかる。ほぼ南から北に向かって流下するものである。第３微高地上に位置する。埋土は単一埋土で，弥生時代前期の壺底部と甕底部が出土している。

933は壺の底部である。磨滅が著しく調整は不明である。



１．暗灰褐色砂質土（茶色がかる，中砂を多く含む）

第102図　ＳＤ14土層断面図



第103図　ＳＤ14出土遺物

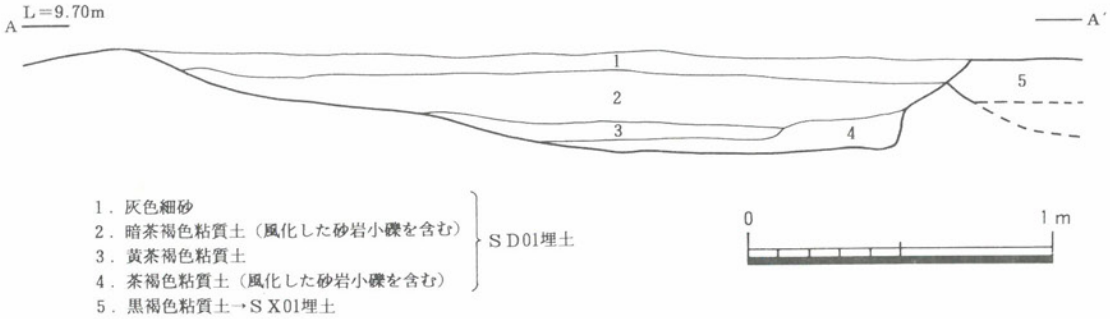
第80表　ＳＤ14出土遺物観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm)			調整		その他	色調		胎土	残存度
			口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
933	—	弥生　底部	——	(8.6)	——	ナデ？	ナデ？	磨滅が著しい	淡橙褐	淡橙褐	1～4m粗度の石英・長石多い	1／8

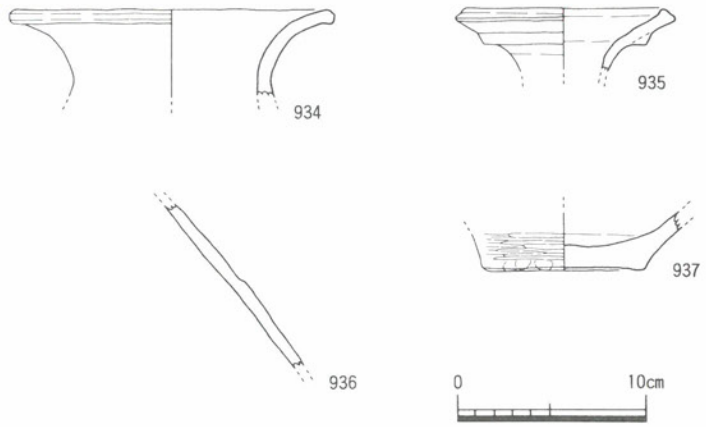
ＳＸ01（第104～106図）

Ｂ地区東半部で検出した落ち込み状の遺構である。幅6.8～12.0ｍ，深さ約0.6～0.3ｍをはかり，北へ向かうほど幅も狭くなり浅くなる。北端付近で北方向と東方向に分岐している。埋土は大きく２つに大別することができ，上層は粘性の強い粘質土，下層は砂質土が堆積している。また，この部分は基盤層である明黄褐色粘土層が大きな凹みを形成しており，自然河川であった可能性もある。この落ち込み状遺構が埋没したあとで，溝状遺構ＳＤ01が掘られている。下層から遺物は出土していないが，上層からは弥生前期土器が出土している。

934・935は壺の口縁部である。935は口頸部外面に貼付凸帯をめぐらせている。936は段をもつ壺の肩部である。937は壺の底部である。外面に黒斑がみられる。938～940はサヌカイト製の石鏃である。938は無茎の平基式，939・940は有茎の凸基式の石鏃である。941はサヌカイト製の打製石庖丁と思われる。縁辺部は丁寧に調整が施され，片側縁は敲打されている。楔形石器の可能性もある。



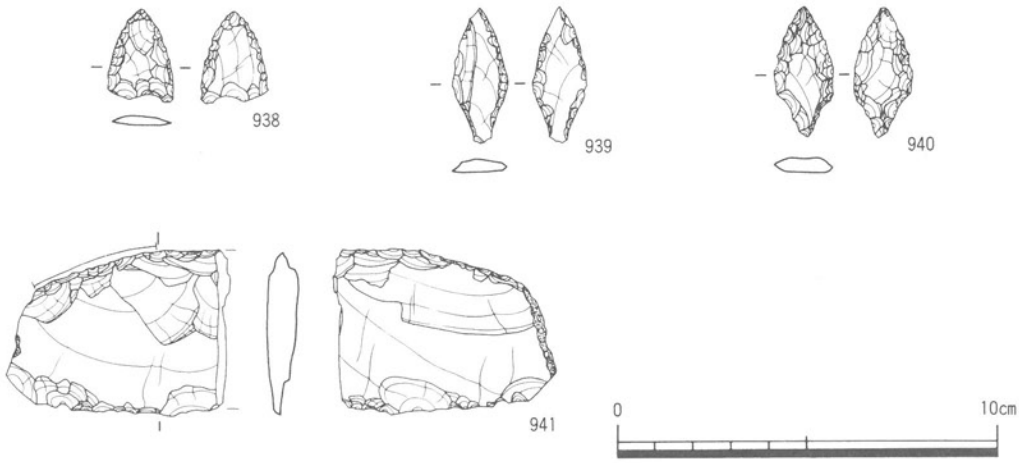
第104図　ＳＤ01・ＳＸ01土層断面図



第105図　ＳＸ01出土遺物①

第81表　ＳＸ01出土遺物①観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm)			調整		その他	色調		胎土	残存度
			口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
934	144	弥生　壺	19.2	——	——	ナデ	ヘラミガキ	剥離が進む	黄褐	黄褐	3㎜程度の石英・長石多い	1／4
935	144	弥生　壺	10.4	——	——	ナデ	剥離のため不明	剥離が進む・(外)頸部に貼付凸帯1条	黄白褐	黄白褐	1㎜以下の細砂粒	1／4
936	144	弥生　壺	——	——	——	ナデ	ナデ	肩部・(外)段	橙褐	暗橙褐	1～3㎜程度の石英・長石多い	破片
937	—	弥生　底部	——	8.0	——	ヘラミガキ・板ナデ	ナデ	壺・(外)黒斑	褐～赤褐	褐	1～3㎜程度の石英・長石多い	1／1



第106図　ＳＸ01出土遺物②

第82表　ＳＸ01出土遺物②観察表

遺物番号	写真図版	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	備考
938	144	石鏃	2．4	1．8	0．3	1．2	サヌカイト	平基式
939	144	石鏃	3．6	1．5	0．3	1．5	サヌカイト	凸基式
940	144	石鏃	3．5	1．6	0．4	2．4	サヌカイト	尖基式
941	144	打製石庖丁	5．9	4．4	0．8	29．9	サヌカイト	長側辺の一方に敲打痕あり　楔形石器の可能性あり

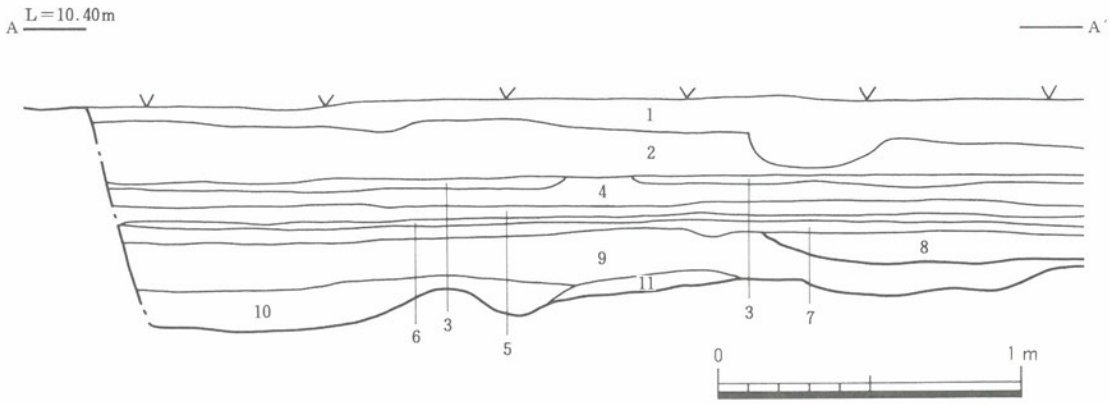
ＳＸ02（第107～109図）……弥生時代前期～後期

Ｄ１地区西端で検出した落ち込み状の遺構である。落ち込みの高低差は約10～30cm程度で北へ向かうほど大きくなる。基盤層は暗灰黄色粘質土で，その直上に堆積している暗黒褐色粘質土層から弥生前期土器が出土している。その上に遺物の出土していない暗灰色粘質土があり，この落ち込みはわずかな凹みを残してほとんど埋没したらしい。このわずかな凹み部分に堆積した黒褐色粘質土からは，弥生後期土器が出土している。

弥生前期の土器は，943の壺の底部，944の甕の底部がある。いずれも磨滅が著しい。弥生後期の土器は，942の壺，945・946の甕，947・948の高杯がある。942は長頸壺の頸部である。口縁端部を摘みあげている。外面の調整は縦ハケ，内面は指押さえである。946は口縁端部を上方に拡張し，凹線を施している。胴部には刺突文をめぐらせている。調整は外面が縦ハケで，内面のヘラ

ケズリは頸部内面から少し下がった位置まで及んでいる。948は高杯の脚部である。端部を拡張している。調整は外面がナデ，内面がヘラケズリである。杯部の底は円盤充塡法を採用している。

949・950は石器である。949はサヌカイト製の円基式の石鏃である。950はサヌカイト製の打製石斧で，基部が残存している。両側縁は敲打されている。両面に自然面が残る。この２点の石器は，下層の暗黒褐色粘質土から出土しており，弥生時代前期の所産と位置付けられる。

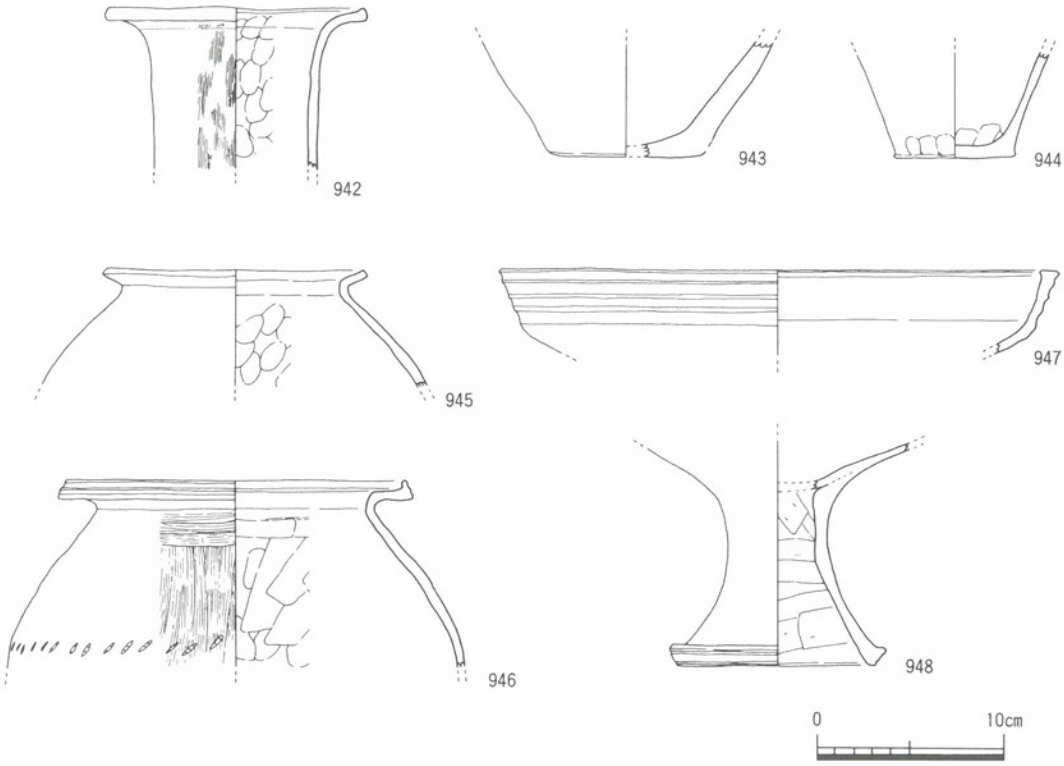


1．花崗土（宅地用盛土）
2．暗灰色粘質土（耕作土）
3．淡灰色粘質土（床土）
4．淡黄灰色粘質土（床土）
5．淡黄橙色粘質土
6．茶色粘質土
7．灰褐色粘質土（マンガンを含む）
8．黒褐色粘質土
9．暗灰色粘質土
10．暗黒褐色粘質土
11．暗灰褐色粘質土

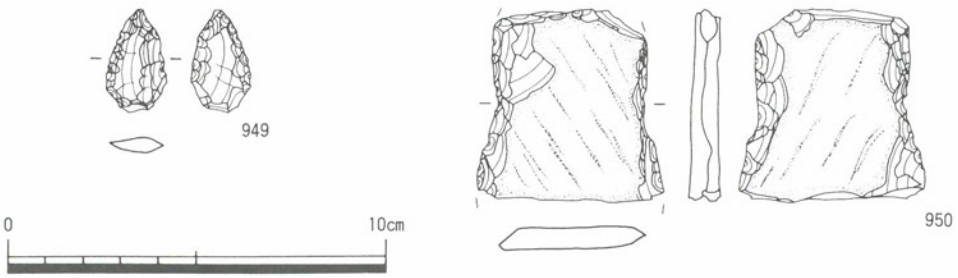
第107図　ＳＸ02土層断面図

第83表　ＳＸ02出土遺物①観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm)			調整		その他	色調		胎土	残存度
			口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
942	145	弥生　壺	13.5	——	——	ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ・指押さえ	長頸壺・口縁～頸部	暗茶褐	暗茶褐	1㎜程度の石英・長石・雲母・角閃石	1／2
943	146	弥生　底部	——	8.4	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	壺・磨滅が著しい	淡橙褐	淡橙褐	5㎜以下の石英・長石多い	1／4
944	—	弥生　底部	——	6.4	——	ナデ	ナデ	磨滅が著しい	暗灰褐	暗灰褐	5㎜程度の石英・長石多い	1／1
945	145	弥生　甕	(13.6)	——	——	磨滅のため不明	ヨコナデ・指ナデ	磨滅が著しい	淡赤褐～黒褐	暗赤褐～黒褐	2㎜程度の石英・長石・雲母・角閃石多い	1／8
946	145	弥生　甕	(18.0)	——	——	ヨコナデ・ヨコハケ・タテハケ	ヨコナデ・板ナデのちナデ	端部拡張・凹線・(外)前部に刺突文	淡褐	淡褐	1㎜以下の石英・長石・雲母	1／6
947	—	弥生　高杯	(28.0)	——	——	剥離のため不明	剥離のため不明	杯部・端部面取り・(外)凹線4条	暗橙褐	淡黒褐	1～5㎜程度の石英・長石多い	1／16
948	145	弥生　高杯	——	10.5	——	ナデ？・ヨコナデ	ヘラケズリ	脚部・端部拡張・(外)黒斑	淡橙褐	淡橙褐	2㎜以下の石英・長石多い	1／1



第108図　ＳＸ02出土遺物①



第109図　ＳＸ02出土遺物②

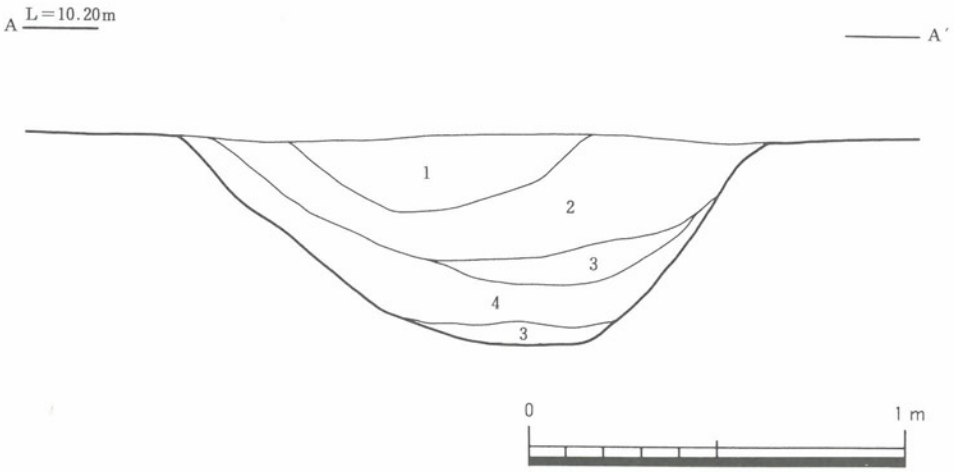
第84表　ＳＸ02出土遺物②観察表

遺物番号	写真図版	器　種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	材　質	備　　考
949	146	石鏃	2．7	1．6	1．4	1．9	サヌカイト	尖基式？
950	146	打製石斧	5．1	4．9	0．6	36．8	サヌカイト	頭部を欠損　両面に自然面が残る

3．弥生時代後期の遺構・遺物

ＳＤ02（第110図）

Ｃ２・Ｃ３地区にまたがって検出した溝状遺構である。幅約１ｍ，深さ0.6ｍをはかる。緩やかに蛇行しながら南から北に向かって流下するが，途中で溝状遺構ＳＤ03と分岐する。低湿地に位置し，両端とも調査区外に続いている。この溝状遺構は明黄褐色粘土層を基盤層としている。埋土は粘質土と砂質土が互層になっており，水が流れたり淀んだりしていたらしい。微量の弥生後期の土器細片とサヌカイト片が出土している。



1．暗茶褐色混砂粘質土　　3．茶褐色混砂粘質土
2．灰色中砂　　4．淡灰褐色混砂粘質土

第110図　ＳＤ02土層断面図

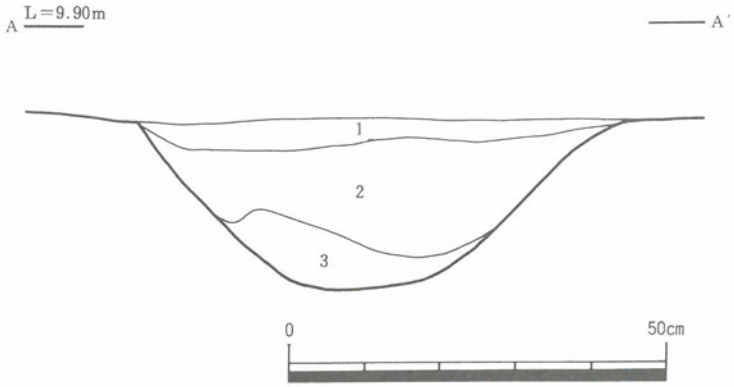
ＳＤ03

Ｃ２・Ｃ５地区にまたがって検出した溝状遺構で，幅約0.7ｍ、深さ約0.4ｍをはかる。Ｃ２地区の中央付近で溝状遺構ＳＤ02から分岐し，西から東に向かって流下するが東端は調査区外へ続いている。堆積状況は溝状遺構ＳＤ02とほぼ同様の状況を示しており，遺物は出土していないが溝状遺構ＳＤ02同様，弥生時代後期の年代が想定される。

ＳＤ04（第111図）

Ｄ１地区のほぼ中央を真っすぐ横切る溝状遺構である。幅約0.5～0.7ｍ，深さ0.2ｍをはかる。南西から北東に向かって直線的に流下する。Ｄ１地区の南西隅付近で溝状遺構ＳＤ06に壊されて，北東隅付近では溝状遺構ＳＤ05を壊している。第２微高地上に位置する。埋土は上から灰褐色粘質土，礫を少量含んだ黒褐色粘質土，風化した砂岩を含んだ灰褐色粘質土の３層である。最

上層から弥生後期土器片がわずかに出土している。

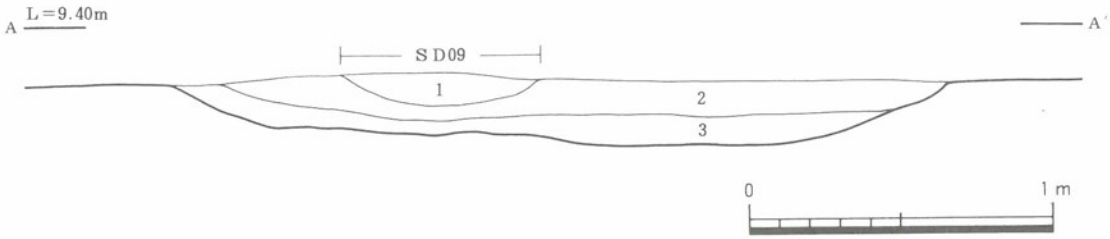


1．灰褐色粘質土（3より褐色が強い）
2．黒褐色粘質土（礫を含む）
3．灰褐色粘質土（風化砂岩を含む）

第111図　ＳＤ04土層断面図

ＳＸ03（第112～123図）……弥生時代後期～古墳時代初頭

Ｄ２地区南半部で検出した溝状遺構とそれによって区画された部分からなる性格不明遺構である。第２微高地上で自然河川ＳＲ01のすぐ西岸に位置する。溝状遺構は三日月状に弧を描くもので，幅2.1～4.5m，深さ0.2～0.4mをはかる。南西部分で溝状遺構ＳＤ12を壊し，西側で溝状遺構ＳＤ09に，中央部分で溝状遺構ＳＤ07によって壊される。溝状遺構の部分は自然河川ＳＲ01とつながっていない。埋土は色調・砂粒の大きさなどで上層の黒褐色混細砂粘質土と下層の黒色粘質土に一応，分層することができたが，その違いはわずかなものであり，また，細砂などの間層をはさんでいないため明確に分離できるわけではない。弥生時代後期の土器・古墳時代初頭の古式土師器などが出土しているが，遺物の出土状況を見ても，埋土の分離はできない状況を呈している。出土遺物から，弥生時代後期前半に溝状遺構が掘られ，その後ゆっくり埋土が堆積し，古墳時代初頭には完全に埋没したことがわかる。

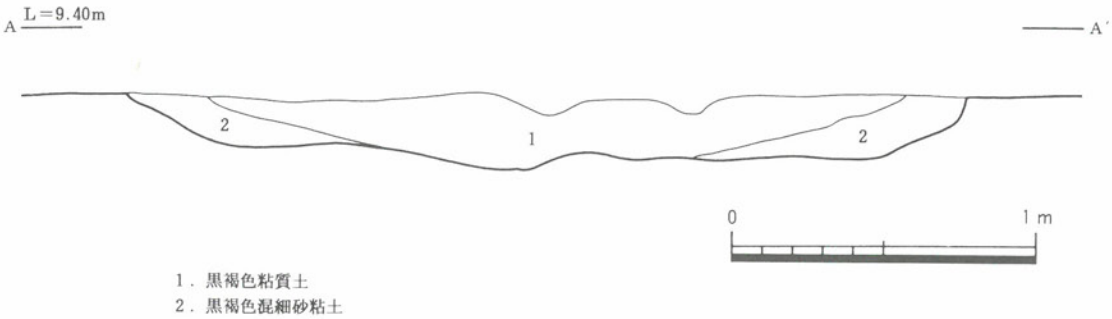


1．黄褐色砂質土（砂・小礫を含む）→ＳＤ19
2．黒褐色混細砂粘質土（小礫を含む）
3．黒色粘質土（小礫を含む）

第112図　ＳＸ03土層断面図①

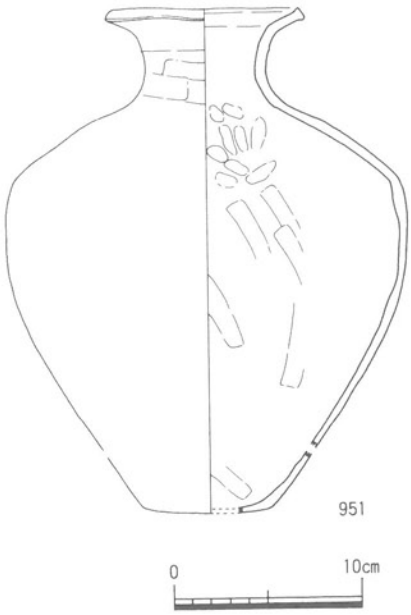
溝状遺構で区画された部分は，南部と北東部の２箇所に突出部を有する円形を呈する。溝状遺構で区画されている西側の部分は整った円形を呈しているが，自然河川ＳＲ01に面している部分は，緩やかな弧状を呈しており，全体としては不正円形を呈している。築造当初の姿をとどめていると考えられる西側の弧を使って復元すると，直径は13mをはかることになる。溝状遺構を含めた直径は17.2～21.0mに復元される。先述したように，溝状遺構の部分の両端は自然河川ＳＲ01とはつながっておらず，この部分が突出部分にあたる。南側突出部は幅2.3～4.8m，長さ3.6mをはかり，方向はＳ23°Ｗを示す。北東側突出部は幅2.7～4.4m，長さ4.5mをはかり，Ｎ63°Ｅを示す。南側突出部をはさんで溝状遺構と自然河川ＳＲ01から出土した弥生時代後期の壺形土器の口縁部で，直接接合できる資料があり，さらに突出部を含めた全体が基盤層を削り出して作っていることなどから，この突出部が築造当初から存在したことがわかる。

この遺構の性格であるが，溝状遺構を含めて「円形周溝墓」[3]であった可能性が強い。遺構上面の削平が著しかったため主体部などの埋葬施設は検出されなかった。しかし，出土遺物に穿孔された土器が存在すること，器種構成のうち供献土器である壺と高杯の比率が高いことなど，祭祀性の強い土器が多く見られること[4]や，突出部もつ形態などが「円形周溝墓」の可能性を示唆するといえよう[5]。



第113図　ＳＸ03土層断面図②

このＳＸ03の溝状遺構からは，弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土器が多量に出土している。（第114図）本来は弥生土器と古式土師器を分離し，各器種ごとにまとめて報告すべきところではあるが，先述したように発掘調査時には層位で分離することができず，一括して取り上げているため，ここでは器種ごとにまとめて報告し，時期についてはその都度記載することにする。（第115～123図）



第114図　ＳＸ03出土遺物①

第85表　ＳＸ03出土遺物①観察表

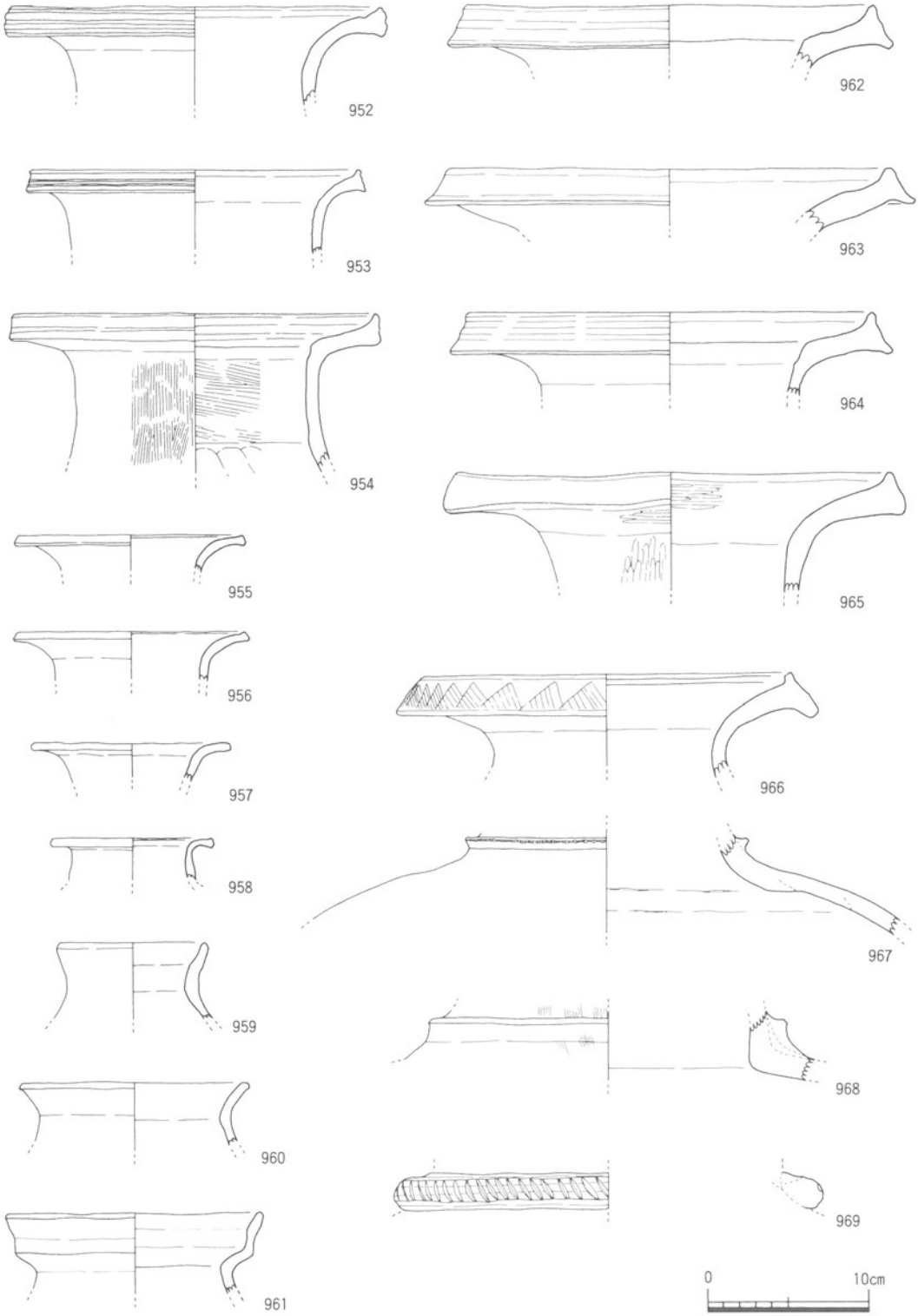
遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	その他	色調 外面	内面	胎土	残存度
951	147	弥生　壺	19.6	13.3	55.3	ヨコナデ	ヨコナデ・指ナデ・板ナデ・指ナデ	外面の磨滅が著しい	淡茶褐	淡茶褐	1㎜程度の石英・長石・角閃石多い	1／2

951～990は壺である。951は全体の器形がわかる大型の壺である。倒卵形の胴部で肩が強く張り，胴部最大径は肩部に位置している。口頸部は大きく外反しており，口縁端部を摘みあげてい

第86表　ＳＸ03出土遺物②観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	その他	色調 外面	内面	胎土	残存度
952	147	弥生　壺	(22.6)	―	―	ナデ	ナデ	(外)端部拡張・凹線3条・(内)凹線	淡灰褐	淡灰褐	3㎜程度の石英・長石	1／5
953	147	弥生　壺	(20.0)	―	―	ヨコナデ	ヨコナデ	(外)端部拡張・凹線3条	淡黄褐	淡黄褐	3㎜程度の石英・長石・雲母・角閃石	1／10
954	147	弥生　壺	22.1	―	―	ヨコナデ・タテハケ	ヨコナデ・ヨコハケ・指ナデ	(外)端部拡張・凹線	茶褐	茶褐	1㎜程度の石英・長石・雲母・角閃石	1／1
955	―	弥生　壺	(13.8)	―	―	剥離のため不明	剥離のため不明	剥離が著しい	茶褐	茶褐	1㎜程度の石英・長石・雲母・角閃石	1／8
956	―	弥生　壺	(13.8)	―	―	ナデ	ナデ		茶褐	茶褐	2㎜程度の石英・長石・雲母・角閃石	1／12
957	―	弥生　壺	(12.2)	―	―	ナデ	ナデ		淡褐	淡赤褐	2㎜程度の石英・長石・雲母	1／6
958	148	弥生　壺	10.0	―	―	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	端部わずかに肥厚	暗茶褐～暗褐	暗茶褐～暗褐	1㎜以下の石英・長石・雲母・角閃石	1／2
959	―	弥生　壺	(8.8)	―	―	ナデ	ナデ	磨滅が進む	淡橙褐	淡橙褐	1㎜程度の石英・長石	1／6
960	―	弥生　壺	13.8	―	―	ナデ	ナデ・ハケ	磨滅が進む	淡橙褐	淡橙褐	2㎜程度の石英・長石	1／4
961	148	弥生　壺	15.6	―	―	ヨコナデ	ヨコナデ	二重口縁	暗～濁褐	濁～淡褐	1㎜以下の石英・長石・雲母・角閃石	1／4
962	148	弥生　壺	24.8	―	―	ヨコナデ	ヨコナデ	端部拡張・凹線２条	淡茶褐	淡茶褐	3㎜程度の石英・長石・雲母・角閃石	1／4
963	148	弥生　壺	27.0	―	―	ナデ	ナデ	端部拡張・凹線？	茶褐	茶褐	3㎜以下の石英・長石・雲母・角閃石	1／3
964	―	弥生　壺	(24.5)	―	―	ヨコナデ	ヨコナデ	端部拡張・凹線	茶褐	茶褐	2㎜程度の石英・長石・雲母・角閃石	1／6
965	148	弥生　壺	26.2	―	―	ヘラミガキ(ヨコ・タテ)	ヘラミガキ	口頸部・端部拡張	茶褐	茶褐	2～4㎜程度の石英・長石・雲母・角閃石	1／1
966	148	弥生　壺	22.7	―	―	ナデ	ナデ	口縁端部拡張・鋸歯文	淡褐	淡褐	1～2㎜程度の石英・長石・雲母・角閃石	3／4
967	148	弥生　壺	―	―	―	磨滅のため不明	磨滅のため不明	肩部・頸部に凸帯・刻目・966と同一個体	淡灰褐	淡灰褐	3㎜程度の石英・長石・雲母	1／4
968	―	弥生　壺	―	―	―	ヨコナデのちハケ	ナデ？	肩部凸帯・磨滅が進む	淡茶褐	淡灰褐	3㎜以下の石英・長石・雲母・角閃石	1／5
969	―	弥生　壺	―	―	―	ナデ	剥離のため不明	肩部凸帯・刻目	濁褐	濁黄褐	3㎜以下の石英・長石・雲母・角閃石	1／1

第115図　ＳＸ03遺物出土状況平面図

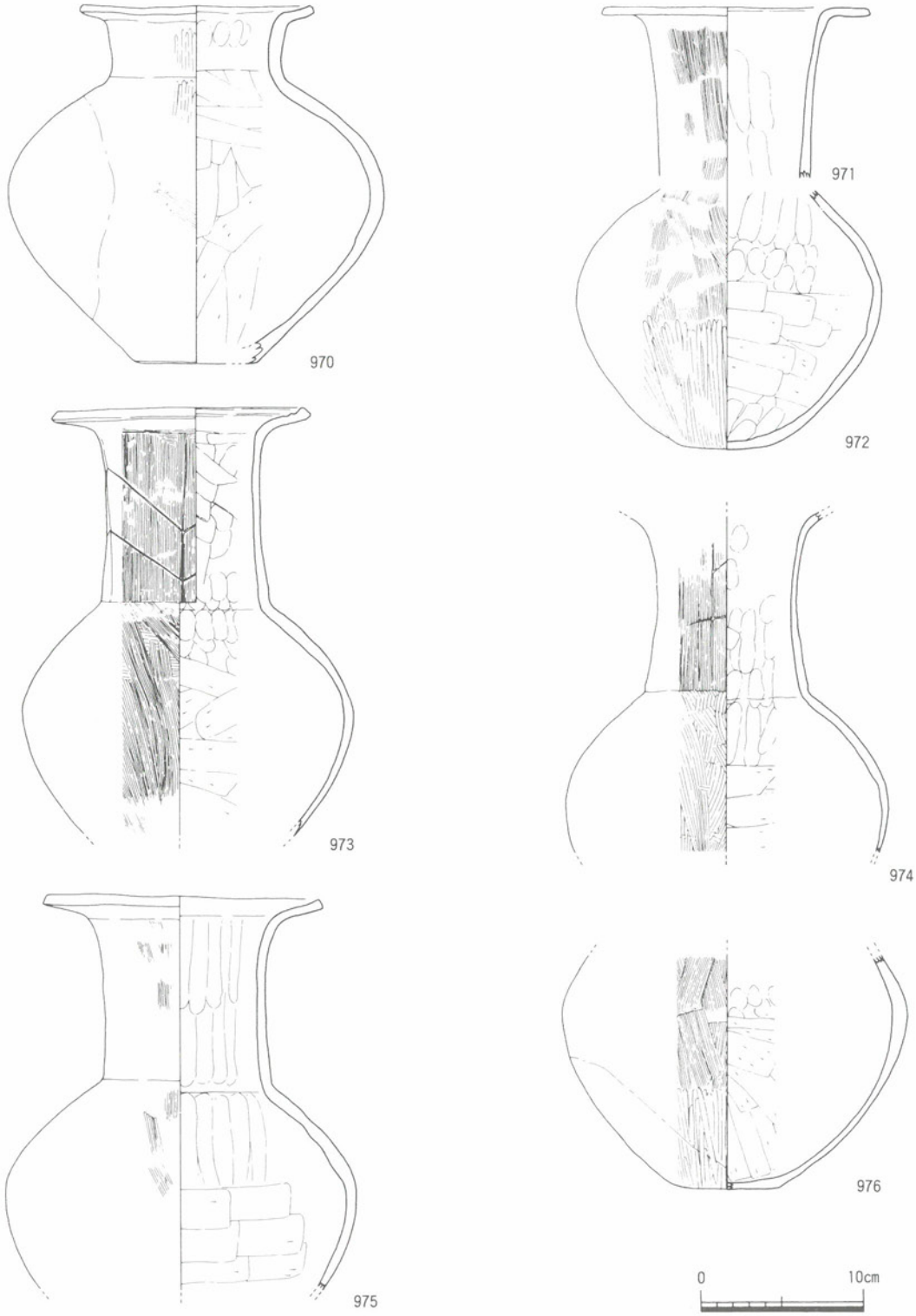


第116図　ＳＸ03出土遺物②

る。底部は平底である。952～954・970・978は中型の広口壺の口縁部である。いずれも口縁端部を拡張気味に肥厚させ，凹線をめぐらせている。954は直立する頸部から屈曲して大きく外へ開く口縁部をもつ。頸部の外面は縦ハケ調整，内面は横ハケ調整である。970は全体の器形がわかるもので，胴部は扁平な球形を呈し，胴部最大径は胴部のほぼ中位にある。頸部はやや外傾気味に直立し，屈曲しながら大きく開く口縁部をもつ。外面に黒斑がみられる。955～958は小型の広口壺の口縁部である。頸部は直立気味で緩やかに外反する口縁部のものが多いが，958は直立する頸部から屈曲して外へ開く口縁をもち，端部が肥厚している。961は二重口縁の壺の口縁である。962～965は大型の広口壺の口縁部であるが，器台の口縁部の可能性もある。いずれも口縁端部を上下に拡張し，退化した凹線を施している。966・977は直接接合しないが同一個体の壺である。966は口縁端部を上下に拡張し，端面に鋸歯文を配している。967は頸部に凸帯を貼り付け，凸帯上を軽く刻んでいる。968も頸部に凸帯を貼り付けている。969は頸部に貼り付けた凸帯が剝離したもので凸帯上をヘラで切るように刻んでいる。971～977・979は長頸壺である。971は口頸部で，長くのびたやや外開きの頸部から強く屈曲してほぼ水平に開く口縁部をもつ。972はやや扁球形の胴部である。971・972は直接接合しないが同一個体の可能性がある。973～975はやや偏球形の胴部から直立する長い頸部がつづき，大きく開く口縁部をもつ。973は口縁端部をわずかに肥厚させている。973・974は頸部に浅く細い沈線で記号のような文様を描いている。976は扁球形の胴部である。小さめの平底をしている。この971～977の長頸壺の基本的な調整は，外面の頸部・胴部上半が縦ハケ，胴部下半が縦方向のヘラミガキであり，内面の頸部・胴部上半は指ナデ，胴部下半がヘラケズリである。また，これらは法量がほぼ統一されており，規格性をもって製作された可能性が強い。いずれも胎土中に雲母と角閃石を含んでいる。977はやや短めの頸部から緩やかに外反して外へ開く口縁部をもつ長頸壺の口縁である。頸部には強くナデることで生じた凹線状のものがめぐる。979は胴部である。おそらく977のような口頸部をもつものと思われる。外面の調整は縦ハケ，内面は頸部付近が指ナデで，胴部はヘラケズリである。980～982は細頸壺である。981はソロバン玉形を呈する胴部である。外面の胴部上半は横方向のヘラミガキ，胴部下半は縦方向のヘラミガキで，内面の胴部上半は指ナデ，胴部下半は削り風の板ナデ調整である。983～987は小型の壺である。986はソロバン玉形の胴部に細頸壺の頸部が短くなったような

第87表　ＳＸ03出土遺物③観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	調整 外面	調整 内面	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	残存度
970	149	弥生　壺	13.8	7.6	22.0	ミガキ	ナデ・指ナデ・ヘラケズリ	(外)黒斑	濁褐	淡黒灰	5㎜程度の石英・長石	1／2
971	—	弥生　壺	(16.5)	——	——	ナデ・タテハケ	ナデ・指ナデのちヨコナデ	接頸部・口縁～頸部	茶褐	茶褐	2㎜程度の石英・長石・雲母・角閃石	1／6
972	149	弥生　壺	——	5.5	——	タテハケ・ヘラミガキ	指ナデ・指押さえ・ヘラケズリ	接頸部胴部・(外)黒斑・丸底気味の平底	茶褐	茶褐	2㎜以下の石英・長石・雲母・角閃石	1／3
973	150	弥生　壺	14.8	——	——	ヨコナデ・タテハケ	ヨコナデ・指ナデ・ヘラケズリ	接頸部・(外)頸部に沈線文	茶褐	茶褐	1～3㎜程度の石英・長石・雲母・角閃石	3／4
974	150	弥生　壺	——	——	——	タテハケ	指ナデ・ヘラケズリ	接頸部・(外)黒斑・頸部に沈線文	明茶褐	明茶褐	1～3㎜程度の石英・長石・雲母・角閃石	1／3
975	150	弥生　壺	16.8	——	——	ヨコナデ・タテハケ	指ナデ・ヘラケズリ	接頸部・器壁の調整が著しい	淡茶褐	淡茶褐	1～2㎜程度の石英・長石・雲母・角閃石	3／4
976	—	弥生　壺	——	——	——	タテハケ・ヘラミガキ	ナデ・指押さえ・ヘラケズリ	接頸部胴部～底部・(外)黒斑	茶褐	茶褐	1～2㎜程度の石英・長石・雲母・角閃石	2／3



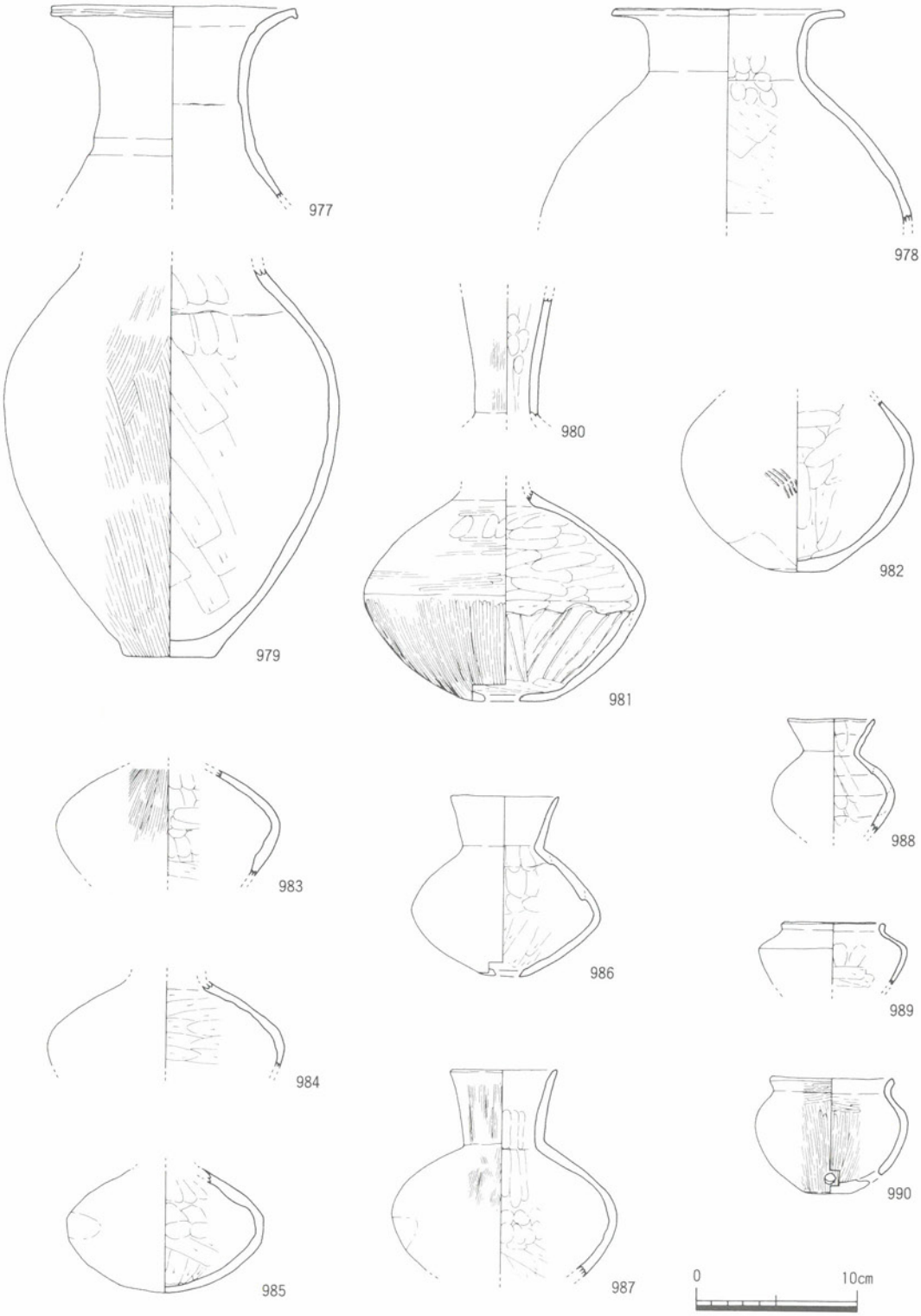
第117図　ＳＸ03出土遺物③

口頸部をもつ。底部は小さな平坦面をもった丸底気味の底部である。焼成後の穿孔が穿たれている。983～985は口頸部を欠損するが，986・987のような短く立ち上がる口頸部をもつと思われる。988～990はミニチュア土器の壺である。988はソロバン玉形の胴部に大きく開く口頸部をもつもので，986をさらに小さくしたような感じを受ける。989・990は短頸壺である。988は強く張った肩部をもち，口縁部が短く直立する。内面は粘土紐の接合痕が明瞭に残っており，その幅は約2.3cm程をはかる。990は扁球形の胴部からやや外へ開く短い口頸部をもつ。胴部下半に穿孔が穿たれている。ミニチュアの鉢の可能性もある。これらのミニチュア土器は非常に丁寧に作られており，胎土中に雲母と角閃石を含んでいる。991～996は壺の底部である。

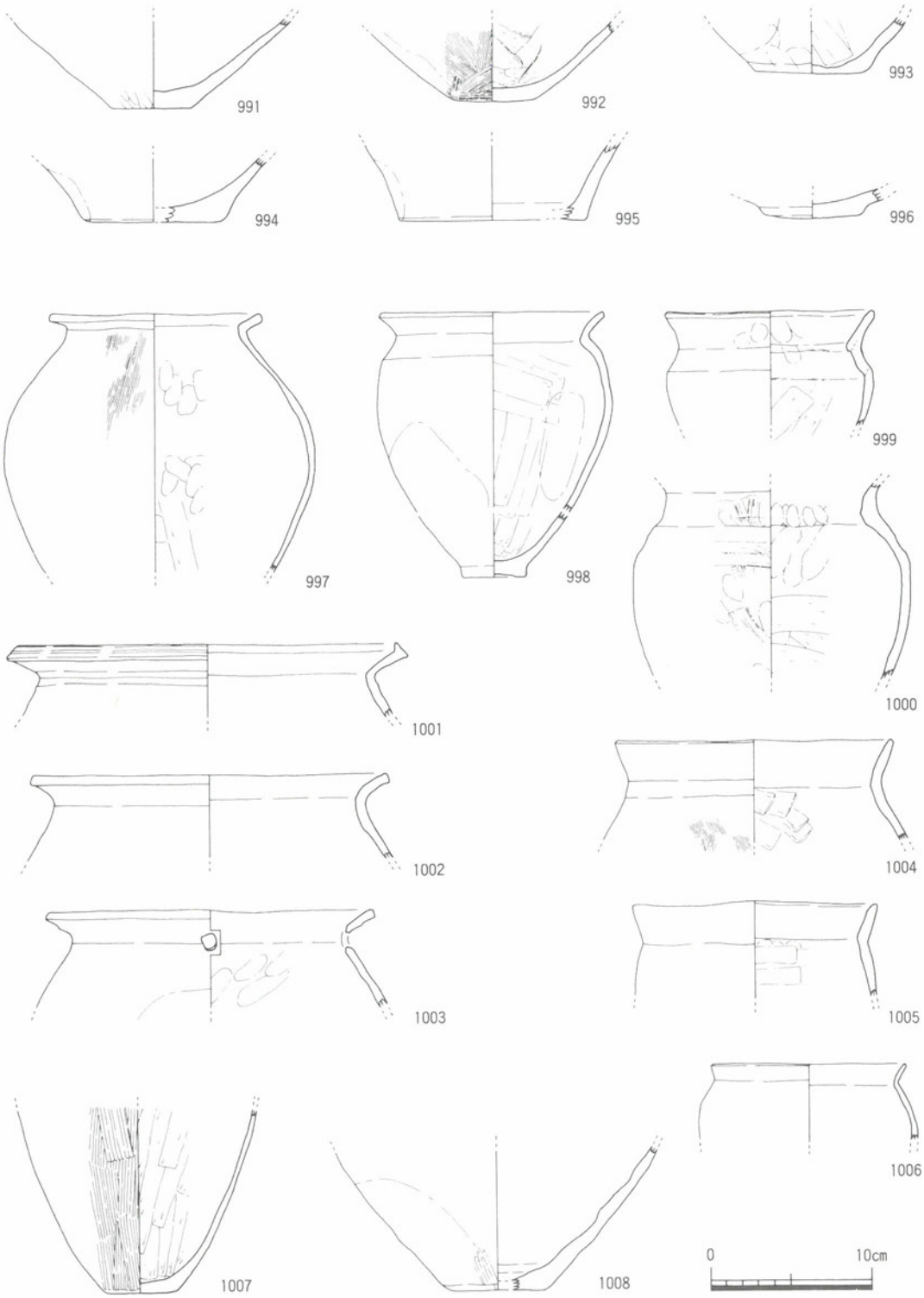
997～1026は甕である。997～1008は弥生土器であり．1009～1026は古式土師器である。997・1001～1003は倒卵形を呈する胴部から鋭く屈曲する口縁部をもつもので，胴部最大径は胴部中位付近にある。1001は口縁端部を上方に拡張し，退化した凹線を施している。1003は屈曲部に穿孔を穿っている。998は肩部から稜をもって強く屈曲する口縁部をもつもので，胴部最大径は肩部付近にある。底部はやや突出した平底である。調整は外面がナデ調整で，内面は口縁部がナデ，胴部がヘラケズリである。1000は胴部で998と同様の器形を呈するが，肩部が少し張っている。1004～1006は998の屈曲が退化して弱まったものと思われる。1007・1008は甕の底部である。平底であり，1007の調整は外面が縦ハケ，内面がヘラケズリ調整である。1009～1021は古式土師器の甕の口縁部である。ゆるやかに内彎しながら立ち上がる口縁部で，端部が面をもつもの（1009・1010・1015・1016）と，端部が丸くおわるもの（1011～1014・1017～1021）に分けることができる。1022は球形の胴部から大きく直線的に開く口縁部をもつ甕である。底部は丸底である。外面の頸部と底部に指押さえの痕跡を残しており，作りも粗雑な感じを強く受ける。1023～1025は粗雑な作りの丸底である。いずれも1022のような器形をもつものであろう。1026は丸底の破片であるが，内面に粘土紐の接合の痕跡を明瞭にとどめている。

第88表　ＳＸ03出土遺物④観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	その他	色調 外面	内面	胎土	残存度
977	151	弥生　壺	15.0	——	——	ナデ・ハケ	磨滅のため不明	広頸壺口縁～頸部・内面の磨滅が著しい	濁白褐	濁白褐	1～4mm程度の石英・長石	1／1
978	—	弥生　壺	13.8	——	——	ヨコナデ?・ハケ?	ヨコナデ?・ヘラケズリ・指ナデ	磨滅が著しい	灰白褐	灰白褐	1～5mm程度の石英・長石	2／3
979	151	弥生　壺	——	5.4	——	タテハケ	指ナデ・ヘラケズリ	広頸壺頸部～底部・(外)黒斑	淡茶褐	淡褐	1～5mm程度の石英・長石多い	1／2
980	—	弥生　壺	——	——	——	タテハケ	絞りのち指押さえ	細頸壺頸部	茶褐	茶褐	1mm程度の石英・長石・雲母・角閃石	1／2
981	149	弥生　壺	——	5.4	——	ヘラミガキ(横・縦)・カキトリ	指ナデ・ケズリ風のナデ	細頸壺胴部・底部に焼成後の穿孔	明褐	淡黒灰	1mm程度の石英・長石・雲母・角閃石	1／1
982	151	弥生　壺	——	3.2	——	タタキのちナデ	指押さえ・ケズリのちナデ	細頸壺?の胴部・(外)黒斑	明白褐	白褐	2mm以下の石英・長石	1／4
983	151	弥生　壺	——	——	——	タテハケ	指押さえ・指ナデ	細頸壺胴部・(内)黒斑	濁褐	濁褐	2mm程度の石英・長石・雲母・角閃石	1／2
984	—	弥生　壺	——	——	——	タテハケ	ヨコナデ・指ナデ	細頸壺胴部・調整が著む	暗茶褐	暗茶褐	1～2mm程度の石英・長石・雲母・角閃石	1／4
985	151	弥生　壺	——	——	——	ヘラミガキ？	指ナデ・指押さえ・板ナデ	細頸壺胴部・調整が著しい	赤茶褐	暗茶褐	1～2mm程度の石英・長石・雲母・角閃石	1／4
986	152	弥生　壺	6.7	3.2	11.1	剥離のため不明	ナデ・指押さえ・ナデ・板ナデ	小型の壺・調整が著しい・(底)焼成後の穿孔	淡褐	淡褐	1～3mm程度の石英・長石多い	1／1
987	149	弥生　壺	6.3	——	——	ヨコナデ・タテハケ	ヨコナデ・指ナデ・指押さえ・板ナデ	小型の壺・磨滅調整が著む・(外)黒斑	明褐	明褐	1mm程度の石英・長石・雲母・角閃石	3／4
988	152	弥生　壺	5.3	——	——	ハケ	指ナデ	ミニチュア・粘土紐の幅2.3mmほど	濁褐	濁褐	1～2mm程度の石英・長石・雲母・角閃石	3／4
989	152	弥生　壺	6.1	——	——	ナデ	ナデ・指押さえ・ケズリ	ミニチュア短頸壺	茶褐	茶褐	1mm程度の石英・長石・雲母・角閃石	1／3
990	152	弥生　壺？	7.5	3.0	6.8	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ミニチュア・鉢の可能性・(底)焼成前の穿孔	濁褐	濁褐	1mm程度の石英・長石・雲母・角閃石	2／3



第118図　ＳＸ03出土遺物④



第119図　ＳＸ03出土遺物⑤

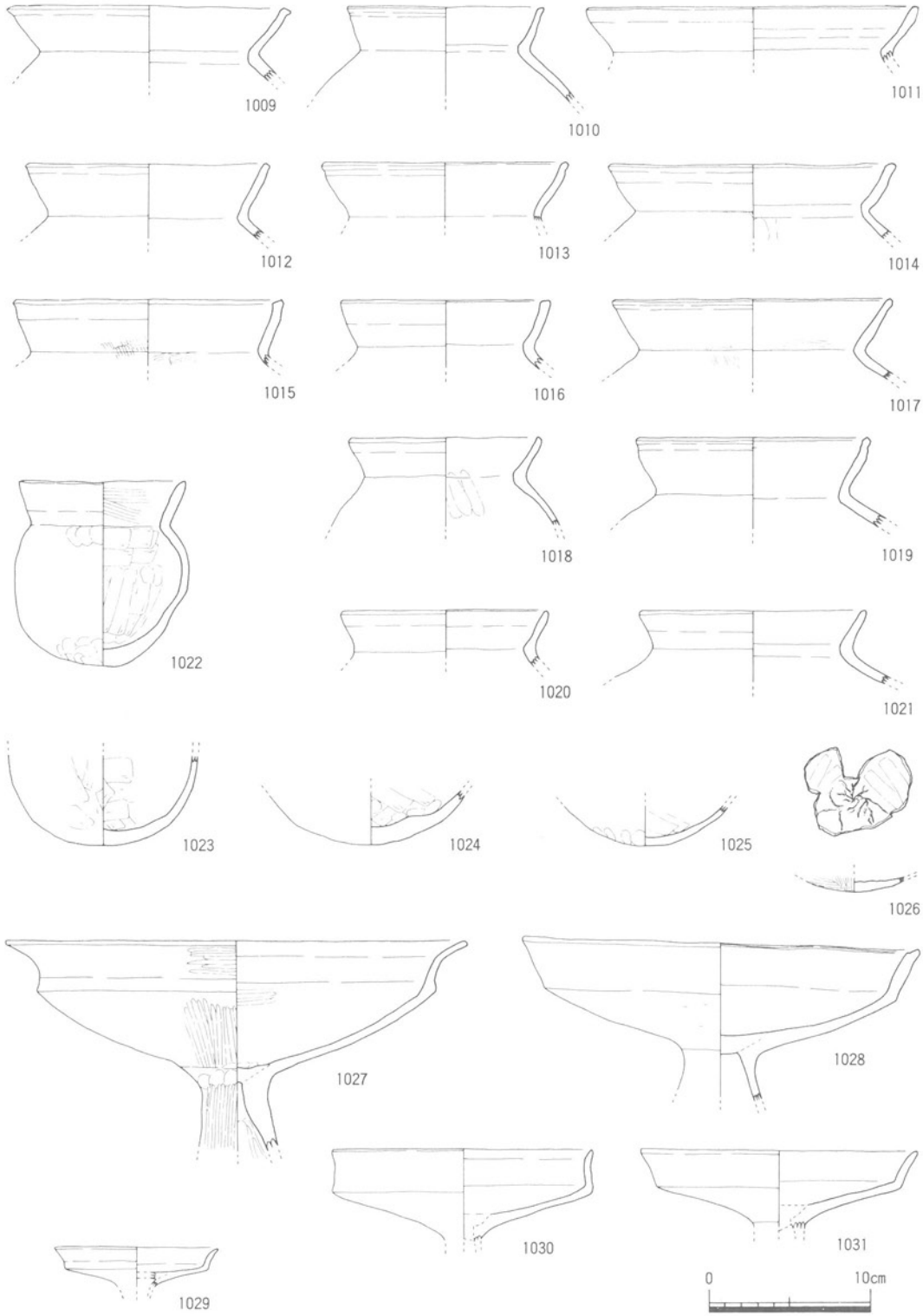
第89表　ＳＸ03出土遺物⑤観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	調整 外面	調整 内面	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	残存度
991	152	弥生 底部	—	5.0	—	ミガキ？・ナデ？	ナデ	壺・磨滅が進む	黒褐	淡褐	1～3mm程度の石英・長石・雲母	1／1
992	—	弥生 底部	—	5.2	—	ハケ	ヘラケズリ	壺・(外)黒斑	明褐	濁褐	3mm程度の石英・長石・雲母	1／1
993	—	弥生 底部	—	6.8	—	指押さえのちナデ	指押さえのち板ナデ	(外)黒斑	淡褐	黒	1～3mm程度の石英・長石	2／3
994	—	弥生 底部	—	8.6	—	磨滅のため不明	磨滅のため不明	(外)黒斑・磨滅が著しい	白褐	淡橙褐	1mm程度の石英・長石	1／2
995	—	弥生 底部	—	(11.6)	—	磨滅のため不明	ナデ？	(外)黒斑	淡褐	淡褐	1～3mm程度の石英・長石	1／6
996	—	弥生 底部	—	6.0	—	磨滅のため不明	磨滅のため不明	磨滅が著しい	淡黄褐	明茶褐	1～4mm程度の石英・長石	1／1
997	153	弥生 甕	13.0	—	—	ヨコナデ・タテハケ	板ナデ・指押さえ・ヘラケズリ	磨滅が著しい	茶褐	茶褐	2mm程度の石英・長石・雲母・角閃石	1／2
998	153	弥生 甕	13.7	3.8	16.3	ナデ	ナデ・ヘラケズリ	(内・外)黒斑	淡褐	淡褐	1～5mm程度の石英・長石多い	1／1
999	154	弥生 甕	(12.6)	—	—	ヨコナデ・板ナデ・ヘラケズリ	指ナデのちナデ・板ナデ	粗雑な作り	黄褐	黄褐	1～7mm程度の石英・長石多い	1／8
1000	154	弥生 甕	—	—	—	指押さえのち板ナデ	指ナデのちナデ	粗雑な作り	濁黄褐	濁黄褐	1～5mm程度の石英・長石多い	1／3
1001	—	弥生 甕	(23.6)	—	—	ヨコナデ・ナデ	ナデ	端部拡張・退化凹線2条・磨滅が進む	濁褐	濁黄褐	3mm程度の石英・長石・雲母	1／8
1002	—	弥生 甕	11.5	—	—	磨滅のため不明	磨滅のため不明	磨滅が著しい	白褐	白褐	1～3mm程度の石英・長石	1／4
1003	154	弥生 甕	(19.8)	—	—	ナデ？	指ナデ	磨滅が著しい・略成形の厚石・(外)黒斑	淡褐	淡褐	3mm程度の石英・長石多い	1／7
1004	—	弥生 甕	(17.0)	—	—	ナデ・板ナデ・ハケ	ナデ・板ナデ	磨滅が著しい	濁橙褐	濁橙褐	3mm程度の石英・長石少し	1／5
1005	154	弥生 甕	15.0	—	—	ナデ	ナデ・指押さえのちナデ		茶褐	茶褐	1～5mm程度の石英・長石多い	2／3
1006	—	弥生 甕？	12.1	—	—	磨滅のため不明	磨滅のため不明	磨滅が著しい	淡白褐	淡灰褐	1～3mm程度の石英・長石	1／2
1007	154	弥生 底部	—	4.6	—	ハケ・板ナデ	ヘラケズリ		暗茶灰褐	淡灰褐	1～3mm程度の石英・長石多い	1／2
1008	—	弥生 底部	—	6.0	—	ヘラミガキ・板ナデ	板ナデ？	剥離が進む・(外)黒斑	茶～黒褐	淡黒褐	1mm程度の石英・長石多い	1／4

第90表　ＳＸ03出土遺物⑥観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	調整 外面	調整 内面	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	残存度
1009	—	土師器 甕	16.3	—	—	ナデ	ナデ？	剥離が著しい	茶褐	淡褐	1～5mm程度の石英・長石・雲母	1／4
1010	—	土師器 甕	12.0	—	—	剥離のため不明	剥離のため不明	剥離が進む	暗橙褐	暗橙褐	2mm程度の石英・長石・角閃石	1／2
1011	—	土師器 甕	(20.0)	—	—	ナデ	ナデ		茶褐	茶褐	1～3mm程度の石英・長石・角閃石	1／8
1012	—	土師器 甕	14.6	—	—	ナデ	ナデ		暗褐	淡褐	1mm程度の石英・長石・雲母・角閃石	1／4
1013	—	土師器 甕	14.8	—	—	ナデ・強いナデ	ナデ	(外)端部付近に強いナデによる凹線状のもの	淡茶褐	淡赤褐	1～2mm程度の石英・長石	1／4
1014	—	土師器 甕	(17.1)	—	—	ヨコナデ・ハケ？	ヨコナデ・指押さえ	磨滅が進む	淡黒灰	淡褐	1mm程度の石英・長石・角閃石	1／6
1015	155	土師器 甕	16.6	—	—	ナデ・ハケ	ナデ・ハケ		淡褐	淡褐	1～2mm程度の石英・長石・角閃石	1／2
1016	—	土師器 甕	(12.6)	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	磨滅が進む	淡黄褐	淡黄褐	1mm程度の石英・長石	1／8
1017	—	土師器 甕	(16.8)	—	—	ヨコナデ・ハケ？	ヨコナデ・板ナデ	磨滅が進む	濁黄褐	濁黄褐	1～4mm程度の石英・長石・雲母	1／5
1018	—	土師器 甕	12.0	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ・指ナデ	剥離が著しい	淡黒褐	淡赤褐	1mm以下の石英・長石・雲母	1／4
1019	—	土師器 甕	(14.0)	—	—	ヨコナデ・指ナデ	指ナデ	(外)端部付近に強いナデによる凹線状のもの	橙褐	橙褐	1mm程度の石英・長石	1／6
1020	—	土師器 甕	(12.5)	—	—	磨滅のため不明	ナデ・指ナデ	磨滅が著しい	赤褐	淡橙褐	1～3mm程度の石英・長石・角閃石	1／5
1021	—	土師器 甕	13.8	—	—	ヨコナデ	ナデ	磨滅が著しい・(外)黒斑	淡橙褐	淡橙褐	3mm程度の石英・長石少し	1／4
1022	155	土師器 甕	10.2	4.9	11.3	ナデ・指押さえ	ハケ・板ナデ・指押さえ	手づくねに近い丸底・粗雑な作り	淡灰茶褐	淡灰茶褐	4mm以下の石英・長石多い	1／1
1023	155	土師器 底部	—	2.0	—	ヘラケズリのちナデ	ヘラケズリ	底部・わずかな平坦面をもつ丸底	橙褐	濁褐	3mm程度の石英・長石・角閃石	1／1
1024	—	土師器 底部	—	?	—	剥離のため不明	指押さえのちナデ		淡赤褐	暗褐	5mm程度の石英・長石多い	1／1
1025	155	土師器 底部	—	2.1	—	指押さえ	板ナデ	わずかな平坦面をもつ丸底	淡赤褐	淡赤褐	1～3mm程度の石英・長石	1／1
1026	155	土師器 底部	—	?	—	ミガキ	板ナデ	(内)粘土紐の接合痕が明瞭に残る	茶褐	茶褐	1mm程度の石英・長石・雲母・角閃石	破片
1027	156	弥生 高杯	28.2	—	—	ミガキ・ナデ・ミガキ・指押さえ	ミガキ?・指押さえ	杯部・円盤充填法・(内)黒斑	暗茶褐	暗茶褐	1～7mm程度の石英・長石	1／1
1028	156	弥生 高杯	24.1	—	—	ナデ・ヘラケズリ	ナデ・ヘラミガキ	杯部・円盤充填法・(内)端部沈線1条	茶褐	茶褐	2mm程度の石英・長石・雲母・角閃石	1／2
1029	—	弥生 高杯	10.0	—	—	磨滅のため不明	磨滅のため不明	杯部・磨滅が著しい	茶褐	茶褐	1mm程度の石英・長石・雲母・角閃石	1／3
1030	—	弥生 高杯	16.0	—	—	磨滅のため不明	磨滅のため不明	杯部・円盤充填法	明茶褐	明茶褐	1～3mm程度の石英・長石・角閃石	1／3
1031	—	弥生 高杯	17.0	—	—	磨滅のため不明	磨滅のため不明	杯部・円盤充填法	明茶褐	明茶褐	2mm程度の石英・長石・角閃石	1／3

1027～1049は高杯である。1027は脚部を欠損しているが，杯部上半が短く大きく外反するものである。調整は外面の杯部上半が横方向のヘラミガキ，下半が縦方向のヘラミガキ，内面は分割ミガキを施している。円盤充填法を採用している。1028～1031は杯部上半が屈曲して立ち上がるものである。1028も脚部を欠損しているが，外面の杯部上半はナデ，下半はヘラケズリ，内面は



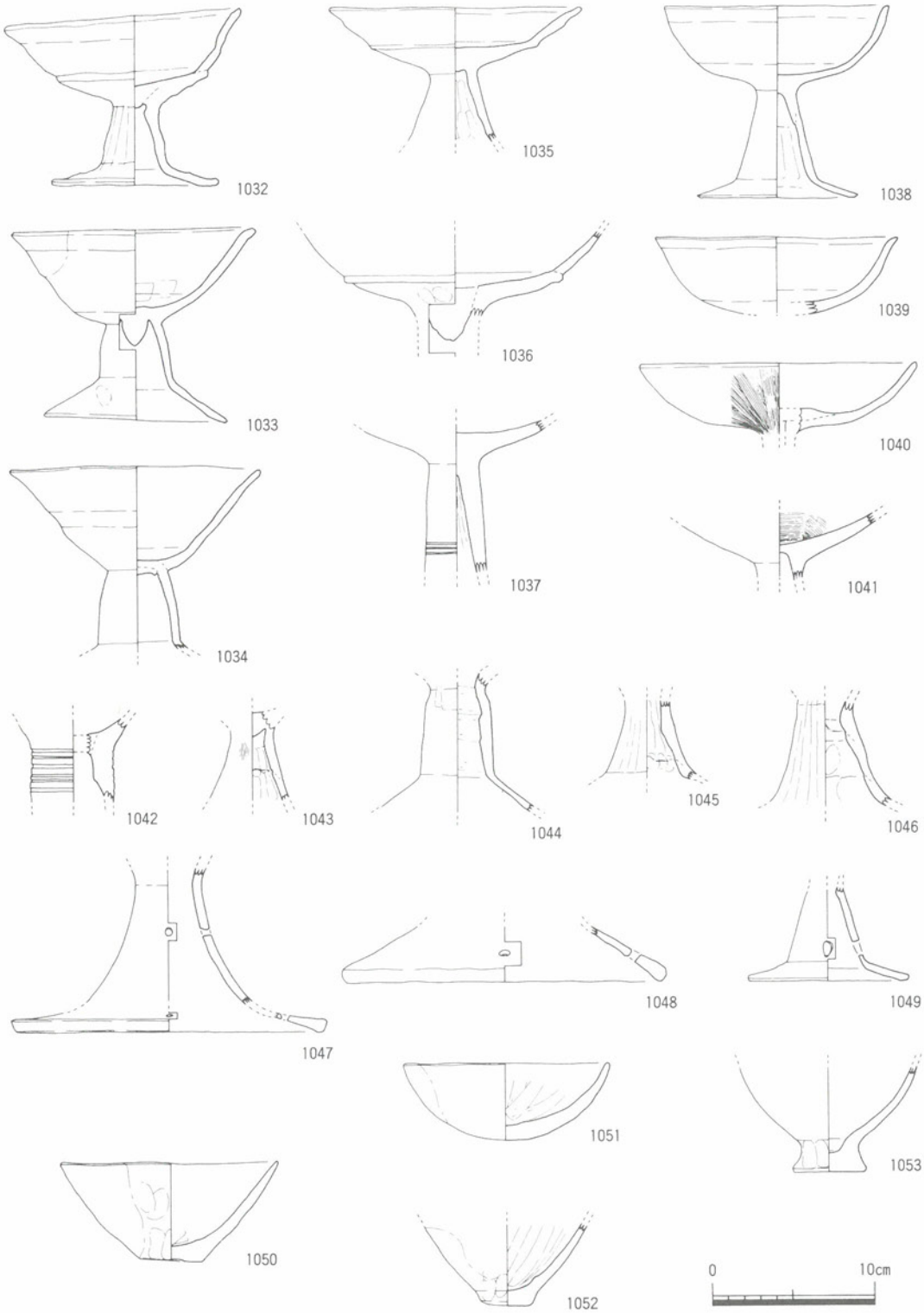
第120図　ＳＸ03出土遺物⑥

ヘラミガキ調整を施している。円盤充填法を採用している。1030は杯部上半がほぼ直立するものである。1032・1035・1036は屈曲部に段をもち，内彎しながら外上方へ開く杯部をもつものである。1032はほぼ完形で，杯部との接合点から広がりながら垂下し，屈曲しながら低く広がる脚部をもっている。1033・1034は脚部との接合点から低く外上方に延び，屈曲して外上方にわずかに内彎しながらのびる杯部に，接合点から広がりながら垂下し，屈曲して低く広がる脚部をもつものである。口縁端部がわずかに外反している。1033は杯部と脚部の接合に円盤充填法を採用しているのに対して，1034は脚部差し込み法を採用している。1034の杯部は杯部の中位で外面に緩やかな段をもっている。1038～1041は椀形の杯部に，接合点から広がりながら垂下し，屈曲して低く広がる脚部をもつものである。1040は杯部内面に分割ミガキ調整を施している。1037・1042～1049は高杯の脚部の破片である。1037は杯部下半と脚部上半の破片であるが，脚部は長くのびている。脚部の中位付近に沈線が３条めぐらされている。1042は脚部接合点付近の破片であるが，沈線が６条めぐらされている。1043～1049は接合点から広がりながら垂下し，屈曲して広がる脚部である。1047は明瞭な屈曲をもたず，緩やかに外反して開く脚部である。脚部の中位と下位の２箇所に穿孔が残る。1048・1049も穿孔を穿つ。

1050～1053は鉢である。1050は完形の鉢で，胴部はわずかに内彎しながら外上方へ開く。底部は平底である。外面に黒斑がみられる。1052も口縁端部を欠損しているが，同様の器形の鉢と思われる。1051は内彎する鉢で底部は丸底である。外面に黒斑がみられる。1053は台付鉢の底部と思われる。

第91表　ＳＸ03出土遺物⑦観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	その他	色調 外面	内面	胎土	残存度
1032	156	弥生　高杯	14.4	10.2	10.4	ナデ・板ナデ	ナデ・指ナデ・ケズリ?・ナデ?	完形	濁黄褐	濁黄褐	1ml程度の石英・長石・雲母・角閃石	1／1
1033	156	弥生　高杯	15.1	11.2	11.6	ナデ	ナデ・板ナデ	完形・磨滅が著しい	黄褐	暗茶褐	1～3mm程度の石英・長石多い	1／1
1034	157	弥生　高杯	15.2	——	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	脚部を欠損・磨滅が著しい	濁黄褐	濁黄褐	1～4mm程度の石英・長石	3／4
1035	157	弥生　高杯	15.3	——	——	ナデ	板ナデ・指押さえ	脚部を欠損	濁褐	赤茶褐	2mm程度の石英・長石・角閃石	3／4
1036	157	弥生　高杯	——	——	——	ヨコナデ・指押さえのちナデ	磨滅のため不明	杯部・磨滅が著しい	濁褐	濁黄褐	1～3mm程度の石英・長石・雲母	1／2
1037	157	弥生　高杯	——	——	——	剥離のため不明	絞りのちナデ	脚部・(外)沈線３条	淡橙褐	淡橙褐	2mm程度の石英・長石	1／3
1038	158	弥生　高杯	13.8	9.9	11.8	磨滅のため不明	ケズリ？	杯部内外面に黒斑、磨滅剥離が著しい	茶褐	茶褐	1mm程度の石英・長石・雲母	1／2
1039	158	弥生　高杯	14.7	——	——	タテハケ・ヘラミガキ	ナデ・指押さえ・ヘラケズリ	杯部	淡橙褐	褐～暗黒褐	2mm程度の石英・長石・雲母	1／2
1040	—	弥生　高杯	16.8	——	——	ヨコナデ・ハケ	磨滅のため不明	杯部・円盤充填法？	赤褐	黄褐	1mm程度の石英・長石・角閃石	1／4
1041	—	弥生　高杯	——	——	——	磨滅のため不明	分割ミガキ	杯部下半	濁褐	濁褐	1mm程度の石英・長石・雲母・角閃石	1／2
1042	158	弥生　高杯	——	——	——	ナデ	指ナデ・指押さえ	脚部・円盤充填法・(外)沈線6条	赤茶褐	暗茶褐	1～8mm程度の石英・長石	1／2
1043	—	弥生　高杯	——	——	——	ハケ？	指押さえ	脚部・磨滅が著しい	暗褐	橙褐	1～2mm程度の石英・長石	1／2
1044	—	弥生　高杯	——	——	——	板ナデ	ナデ?・ケズリ・指ナデ	脚部	濁黄褐	濁黄褐	1～4mm程度の石英・長石	1／3
1045	—	弥生　高杯	——	——	——	板ナデ？	指ナデ・指押さえ・ナデ	脚部	茶褐	茶褐	3mm程度の石英・長石・雲母	1／2
1046	158	弥生　高杯	——	——	——	板ナデのちナデ	指ナデ	脚部	黄褐	黄褐	1～3mm程度の石英・長石・角閃石	1／2
1047	—	弥生　高杯	——	(18.0)	——	磨滅のため不明	磨滅のため不明	脚部・焼成前の穿孔６個	赤茶褐	赤茶褐	1～4mm程度の石英・長石・雲母・角閃石	1／5
1048	—	弥生　高杯	——	19.8	——	ハケ？・ナデ	ヘラケズリ	脚部	茶褐	茶褐	1mm程度の石英・長石・雲母	1／2
1049	158	弥生　高杯	——	9.9	——	ナデ	ナデ	脚部・焼成前の穿孔	黄褐	黄褐	1～3mm程度の石英・長石・雲母・角閃石	1／2
1050	—	弥生　鉢	13.2	3.9	6.0	ナデのち板ナデ	板ナデ	完形・(外)黒斑	濁白褐	濁白褐	1mm程度の石英・長石多い	1／1
1051	—	弥生　鉢	11.9	——	4.7	磨滅のため不明	板ナデ	剥離が著しい	赤褐	灰茶褐	5mm程度の石英・長石多い	2／3
1052	—	弥生　底部	——	3.2	——	ナデ・指押さえのちナデ	板ナデ	鉢か甕・(外)黒斑	淡白褐	淡白褐	1～3mm程度の石英・長石	1／3
1053	158	弥生　脚台	——	4.4	——	ナデ・指押さえのちナデ	ナデ	鉢・磨滅が進む	淡橙白	淡橙白	1～2mm程度の石英・長石	1／2

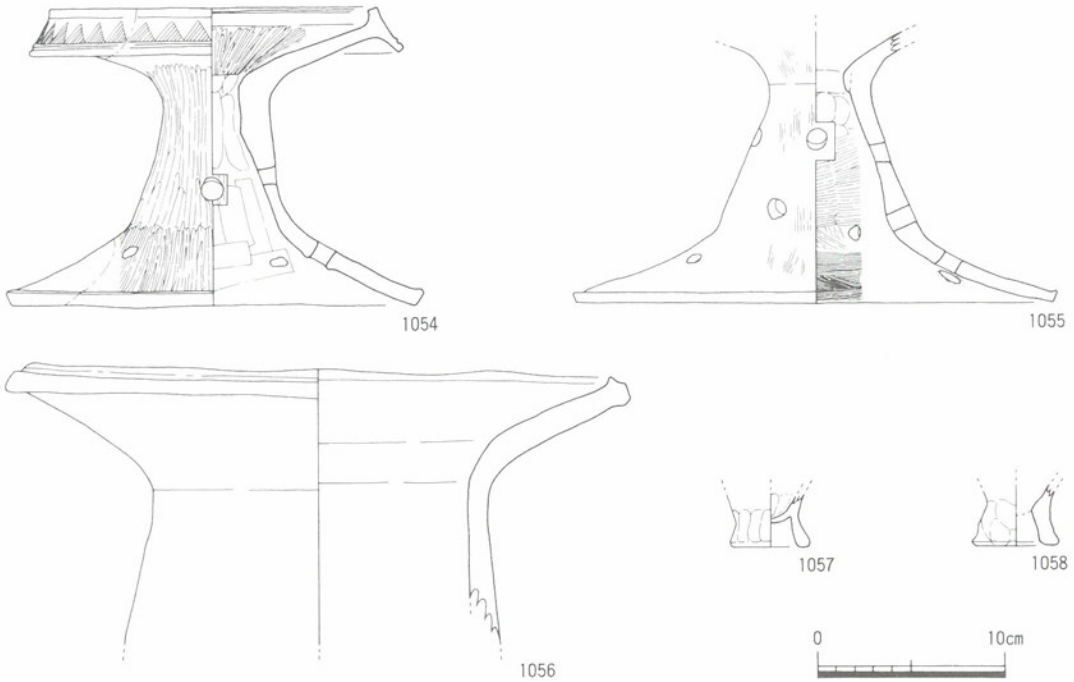


第121図　ＳＸ03出土遺物⑦

1054～1056は器台である。1054はほぼ完形の器台である。口縁端部を上下に拡張し鋸歯文を配している。中位のくびれが比較的強く，脚部は屈曲して低く外へ開いている。調整は外面が縦方向のヘラミガキ，内面がヘラミガキと指ナデと板ナデである。脚部には上下２段に穿孔が施されている。1055は器台の脚部である。中位のくびれは強く，屈曲して低く外へ開く脚部である。外面の調整は縦ハケ，内面は横ハケを施している。上中下３段に穿孔を施している。1056は大型の器台の上半部であると思われる。やや外開き気味の脚部上半から大きく外へ開く口縁部をもつ。口縁端部をわずかに肥厚させ，凹線をめぐらせている。

1057・1058は脚台である。どちらも製塩土器の脚部の可能性が強い。

1059～1063は石器である。1059・1060はサヌカイト製の石鏃である。1059は基部がわずかに凹んでいるが無茎の平基式の石鏃である。1060は無茎の凹基式の石鏃である。1061はサヌカイト製の石錐である。錐部下半を欠損している。1062は打製石斧である。片側縁が敲打されている。片面に自然面が残る。両面に磨滅がみられる。材質はサヌカイトである。1063は安山岩を利用した

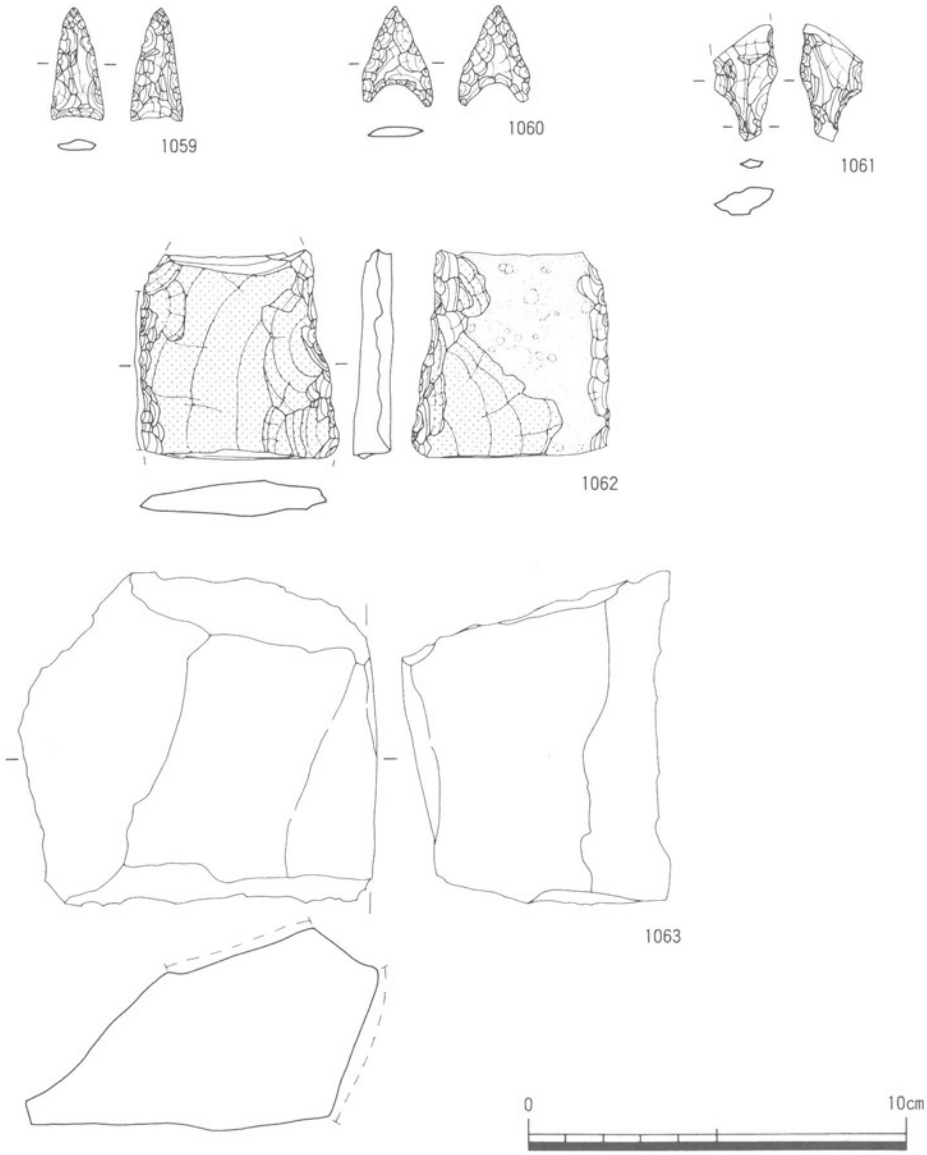


第122図　ＳＸ03出土遺物⑧

第92表　ＳＸ03出土遺物⑧観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	その他	色調 外面	内面	胎土	残存度
1054	159	弥生 器台	17.5	21.5	15.8	ヨコナデ・指ナデ	ヨコナデ・ヘラミガキ・指ナデ	完形・口縁端部肥厚・鋸歯文・凹線に穿孔	淡橙褐	淡橙褐	2㎜程度の石英・長石	1／1
1055	159	弥生 器台	—	25.3	—	ハケ・ナデ	ナデ?・指ナデ・ハケ・ナデ	脚部・穿孔	淡橙褐	淡橙褐	1～4㎜程度の石英・長石	3／4
1056	—	弥生 器台	30.9	—	—	ミガキ・ナデ	剥離のため不明	口縁部・磨滅が著しい	茶褐	茶褐	1～2㎜程度の石英・長石・雲母・角閃石	1／3
1057	159	弥生 脚台	—	4.1	—	指ナデ	指ナデ	製塩土器の可能性	黄褐	黄褐	1㎜程度の石英・長石多い	1／1
1058	159	弥生 脚台	—	3.8	—	指押さえ・ナデ	ナデ	製塩土器の可能性	茶褐	茶褐	1～2㎜程度の石英・長石多い	1／1

砥石である。



第123図　ＳＸ03出土遺物⑨

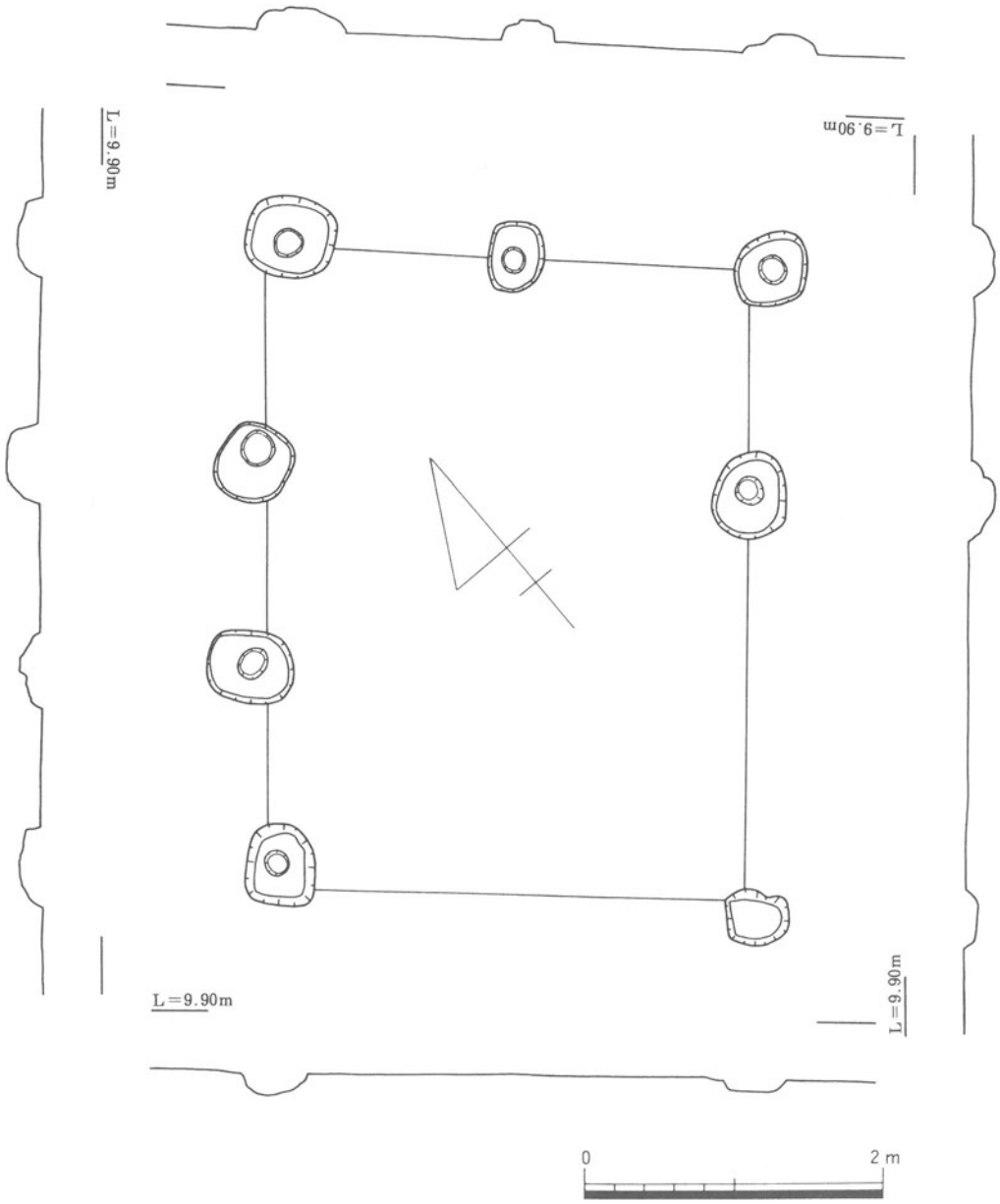
第93表　ＳＸ03出土遺物⑨観察表

遺物番号	写真図版	器　種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	材　質	備　　考
1059	160	石鏃	3．0	1．4	0．3	1．2	サヌカイト	平基式
1060	160	石鏃	2．7	1．8	0．3	1．0	サヌカイト	凹基式
1061	160	石錐	3．1	1．7	0．7	3．3	サヌカイト	錐部下半を欠損
1062	160	打製石斧	5．5	5．2	0．9	40．3	サヌカイト	頭部を欠損　左側辺に敲打痕　片面に自然面が残る　両面に磨滅あり
1063	160	砥石	9．5	8．9	5．1	557．8	安山岩	

4．古代の遺構・遺物

ＳＢ01（第124図）

Ｆ１地区の南西部で検出した桁行３間，梁間２間の掘立柱建物跡である。第３微高地上に位置し，北側と東側は柱穴がすべて残っているが，南側と西側はそれぞれ柱穴が１つずつ失われている。柱穴の掘り方は不整円形を呈しており，直径0.5m程度のものがほとんどである。南西の柱穴（ＳＰ08）を除いたすべての柱穴に，直径20cm程度の柱痕が残されている。北側の柱穴の間隔

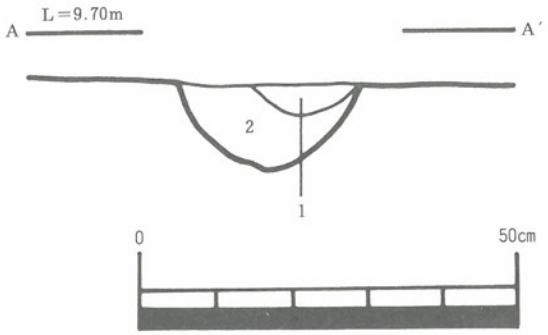


第124図　ＳＢ01平・断面図

は，柱痕の芯心距離ではかると約1.4mでほぼ等間隔になっている。東側の柱穴も約1.6mでほぼ等間隔になっている。この掘立柱建物の主軸は北より81°東へ振れている。北東隅の柱穴（ＳＰ04）と南東隅の柱穴（ＳＰ06）の掘り方の埋土から土師器細片がわずかに出土している。

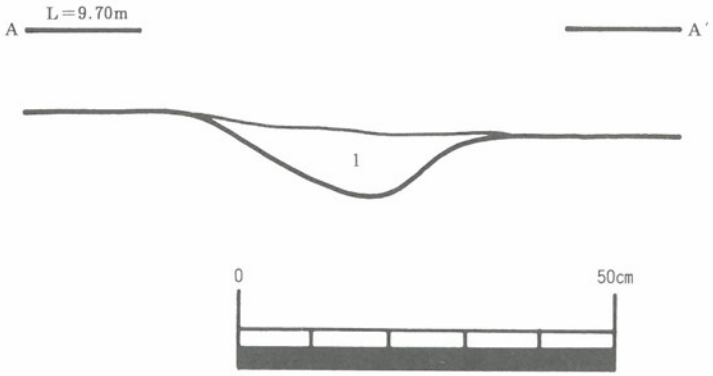
ＳＤ07（第125～127図）

Ｄ２地区で検出した溝状遺構である。調査区をほぼ南北方向で縦断する。第２微高地上に位置し，「円形周溝状遺構」ＳＸ03・溝状遺構ＳＤ09・10・08を壊す。幅0.3m，深さ約0.1mをはかる。北半部分はＮ18°Ｅの方向をもつが，南半部分はＮ８°Ｗの方向をもつものとほぼ東の方向をもつものの２条が存在する。いずれも緩やかに弧を描いている。Ｎ８°Ｗの溝状遺構をＳＤ07ａ，ほぼ東の方向をもつ溝状遺構をＳＤ07ｂと呼称し説明する。溝状遺構ＳＤ07ａは灰茶色混細砂粘土の単一埋土を有し，溝状遺構ＳＤ07ｂは黄褐色粘質土の単一埋土を有する。溝状遺構ＳＤ07ａは溝状遺構ＳＤ07ｂを壊しており溝状遺構ＳＤ07ｂのほうが先行するが，両者の時間差はわずかなものと考えられる。溝状遺構ＳＤ07ａからは須恵器片・サヌカイト片がわずかに出土しているが，溝



1．灰茶色混細砂粘土
2．黄褐色粘土

第125図　ＳＤ07土層断面図①

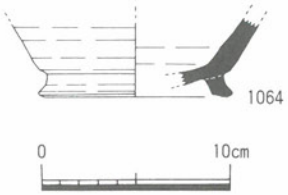


1．暗茶灰色粘土

第126図　ＳＤ07土層断面図②

状遺構ＳＤ07ｂからは遺物は出土していない。溝状遺構ＳＤ07ａは須恵器の壺底部から，８～９世紀の年代が想定される。Ｄ２地区で検出した溝状遺構ＳＤ07～ＳＤ10は，時間的先後関係から溝状遺構ＳＤ09・10→ＳＤ08→ＳＤ07という順序で作られていったことがわかる[6]。

1064は須恵器の底部である。壺の底部と思われる。断面が台形を呈する高台が貼り付けられている。外面には自然釉が付着している。



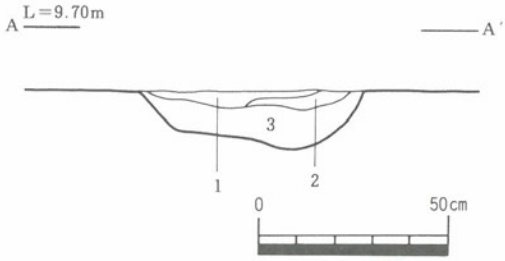
第127図　ＳＤ07出土遺物

第94表　ＳＤ07出土遺物観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	その他	色調 外面	内面	胎土	残存度
1064	161	須恵器 底部	——	(10.2)	——	回転ナデ	回転ナデのちナデ	高台・自然釉付着	白灰	白灰	1mm程の砂粒少し	1／5

ＳＤ08（第128図）

Ｄ２地区を東西方向に横切る溝状遺構である。第２微高地上に位置し，幅0.7～0.5ｍをはかる。埋土は上から暗灰色粘質土・暗灰色混細砂粘質土・灰色細砂の３層で，この溝状遺構が作られた当初は流れがあったことがわかる。わずかに土師器細片・サヌカイト片が出土しており，Ｄ２地区西端では自然木が溝状遺構の底から出土している。



1．暗灰色粘土
2．灰黄色細砂
3．暗灰色混細砂粘土

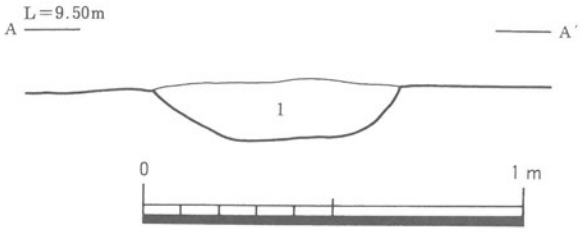
第128図　ＳＤ08土層断面図

ＳＤ09・10

Ｄ２地区で検出した溝状遺構である。遺構の遺存状態は悪く，本来は連続する１条の溝状遺構であったが分断された状態で検出したため，別々の遺構番号を付けた。以下の説明は１条の溝状遺構として取り扱う。第２微高地上に位置し，緩やかに弧を描きながら南から北東に向かって流れる。幅0.4～0.8ｍ，深さ0.1ｍをはかる。埋土は灰黄色粘質土の単一埋土である。埋土中からわずかに土師器細片と須恵器細片が出土している。

ＳＤ15（第129・130図）

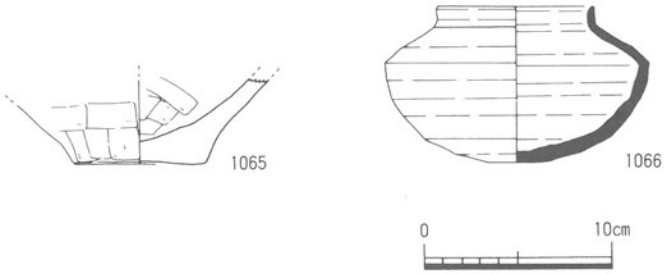
Ｇ１地区とＧ２地区にまたがって検出した溝状遺構である。第３微高地上に位置し，幅0.3～1.0ｍをはかる。緩やかに蛇行しているがN36°Wの方向をもち，南東から北西に向かって流れる。埋土は単一埋土である。Ｇ２地区西側付近で溝状遺構ＳＤ16によって壊され，南東隅付近で溝状遺構ＳＤ18と合流する。弥生土器・須恵器の短頸壺・土師器細片・須恵器細片が出土しているが，弥生前期土器の底部は混入したものと考えられる。出土した須恵器の短頸壺から，８～９世紀の年代が想定される。



1．暗灰褐色粘質土（鉄分を多く含む）

第129図　ＳＤ15土層断面図

1065は弥生土器の底部である。壺の底部と思われる。外面に黒斑がみられる。1066は須恵器の短頸壺である。張り出した肩部から短い口縁部が直立している。口縁部と底部に他の製品の一部が熔着している。



第130図　ＳＤ15出土遺物

第95表　ＳＤ15出土遺物観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	その他	色調 外面	内面	胎土	残存度
1065	161	弥生　底部	―	6.9	―	板ナデ	板ナデ	(外)黒斑	淡白褐	暗灰	3～7mの石英・長石多い	1／1
1066	161	須恵器　壺	8.4	3.0	8.2	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ・指ナデ	(外)肩部と底部付近に他の製品の一部が熔着	灰褐	淡灰褐	1mm以下の細砂粒少し	1／2

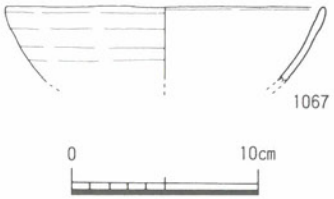
ＳＤ17

Ｇ２地区東南隅付近で検出した溝状遺構である。南東から北西に流れ，先述した溝状遺構ＳＤ15と合流する。遺物は出土していないが，土層断面観察から溝状遺構ＳＤ15と同時期に機能していたことがわかる。

5．中世の遺構・遺物

ＳＢ02（第131・132図）

Ｆ３地区のほぼ中央南寄りの部分で検出した桁行３間，梁間２間の掘立柱建物跡である。第３微高地上に位置し，西方に廂をもっている。北側の柱穴が１つ失われている以外はすべて残っている。柱穴の掘り方は直径15～20cmの円形を呈しており，すべてに柱痕が残っている。南側の柱穴の間隔は，東から順に1.4m・1.8m・1.2mの間隔であり，等間隔にはなっていない。また，南側の柱穴は一直線に並んでおらずへの字形に折れている。西側・東側については約1.4mでほぼ等間隔になっている。この掘立柱建物の主軸は北より108°東に振れている。西方に付属する廂は，掘立柱建物跡から0.8m離れた位置に，約1.4m間隔で並ぶ３個の柱穴で構成されている。この掘立柱建物跡の東方と北方には柱穴が存在する。東方には柱穴ＳＰ13が，主軸方向と平行する柱穴ＳＰ02・05・11をつないだ直線の延長上に位置し，北方には柱穴ＳＰ08の付近に柱穴ＳＰ16が存在する。さらに，東側の柱穴の延長上で北２mに柱穴ＳＰ19が位置している。これらの柱穴の存在から，この掘立柱建物は北方と東方にも廂が付けられていた可能性もあるが，遺存状況の悪さなどから判断しがたい。したがって，建物自体としては西方に廂をもった３間×２間の掘立柱建物と認識しておきたい。また，この掘立柱建物跡の北側には，同様の埋土をもった柱穴が散在しており，この掘立柱建物跡ＳＢ02以外にも掘立柱建物が存在していた可能性もある。1067は柱穴から出土した土師質土器の椀である。



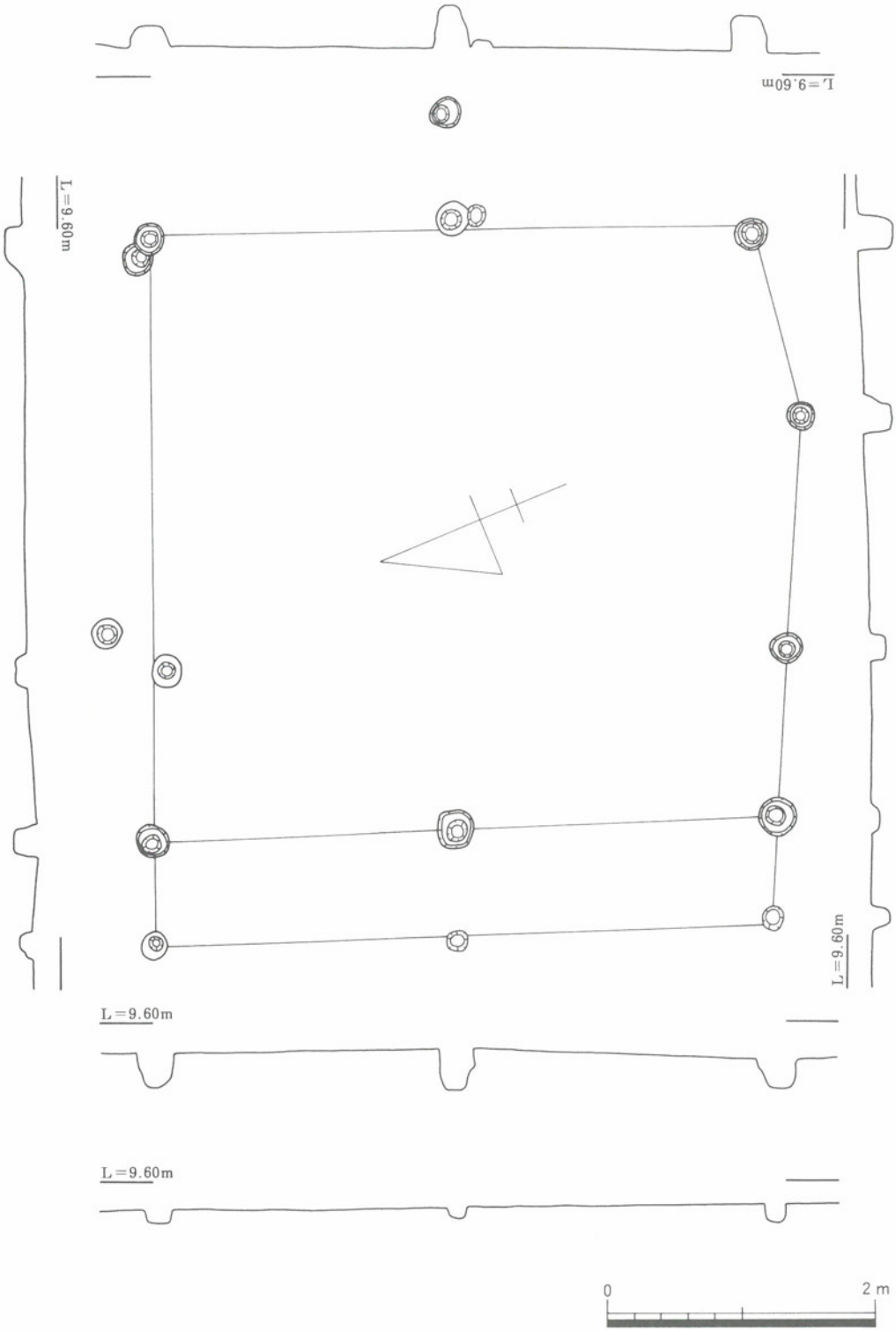
第131図　ＳＢ02出土遺物

第96表　ＳＢ02出土遺物観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm)			調整		その他	色調		胎土	残存度
			口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
1067	—	土師質土器 椀	(17.0)	——	——	回転ナデ	回転ナデ	底部欠損	淡白褐	淡白褐	1mの程度の細砂粒少し	1／6

ＳＡ02

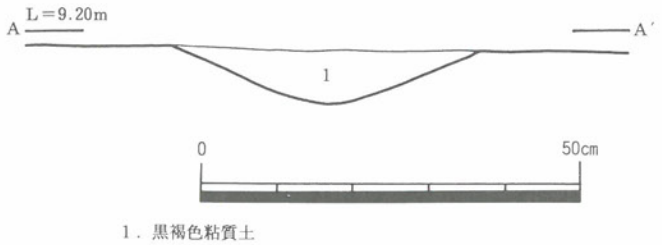
Ｆ３地区の北東隅付近で検出した柵列である。第３微高地上に位置し，２mの等間隔で並ぶ３個の柱穴で構成されている。柱穴は直径20cm程度で，遺存状態は悪い。北より110°東に振った方向をもつ。Ｆ３調査区の北壁から約1.5mのところで検出されているため，柱穴の列が北方に続いて東西２間の掘立柱建物になることも考えられるが，調査区外に当たっており発掘調査をして確認することができなかった。したがって，現在のところは柵列と認識しておきたい。柱穴から遺物は出土していないが，先述した掘立柱建物跡ＳＢ02の柱穴の埋土と同じ埋土をもつことや，掘立柱建物跡ＳＢ02の主軸方向と同じ方向をもつことなどから，掘立柱建物跡ＳＢ02と同様の年代が想定される。



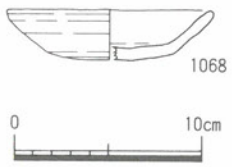
第132図　ＳＢ02平・断面図

ＳＤ06（第133・134図）

Ｄ１地区で検出した溝状遺構である。第２微高地上に位置しており，弥生時代前期と後期の土器を出土した落ち込み状遺構ＳＸ02の上層の埋土である黒褐色粘質土を，基盤層として作られている。ほぼ南北方向を示すが，調査区南西隅付近で大きく屈曲して南東－北西方向を示す。調査区南西隅付近で弥生時代後期の溝状遺構ＳＤ04を壊すが，調査区中央付近では土坑ＳＫ05に壊される。幅0.2～0.4m，深さ0.1mをはかる。土師質土器の杯（1068）が１点出土している。



第133図　ＳＤ06土層断面図



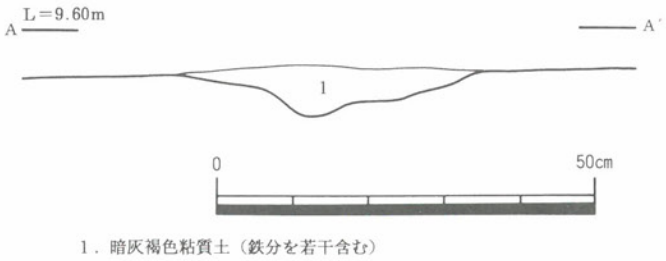
第134図　ＳＤ06出土遺物

第97表　ＳＤ06出土遺物観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	その他	色調 外面	内面	胎土	残存度
1068	—	土師器　杯	(10.8)	(6.8)	(2.6)	回転ナデ・ヘラきり	回転ナデ	底部を欠損	淡橙白	淡黄白	1mの礫の細粒少し	1／8

ＳＤ13（第135図）

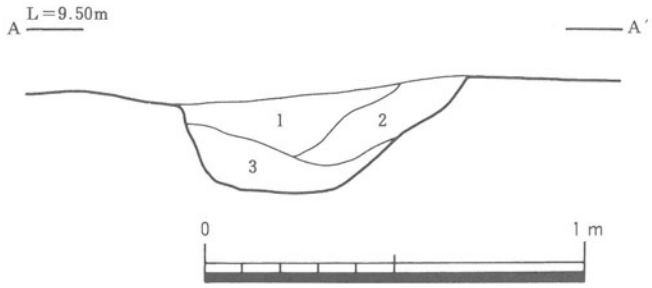
Ｆ２地区で検出した溝状遺構である。第３微高地上に位置している。幅0.2～0.7m，深さ約0.1mをはかる。埋土は鉄分を少し含んだ暗灰褐色粘質土の単一埋土である。この溝状遺構は北方では調査区外へ続いていくが，東方では東隣のＦ３地区において検出されず，調査区間で再び屈曲して調査区外へ続いているものと思われる。検出した部分では，Ｎ109°Ｅの方向からほぼ直角にＬ字状に屈曲してＮ19°Ｅの方向をもつ。この方向は先述した掘立柱建物跡ＳＢ02・柵列ＳＡ02と同じ方向であり，年代も両者と同様の年代が想定できる。埋土からわずかではあるが土師質土器片が出土していることも，この年代を示している。



第135図　ＳＤ13土層断面図

ＳＤ16（第136・137図）

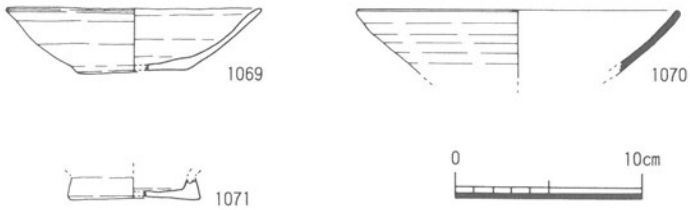
Ｇ２地区の西側部分で，調査区の壁面に沿うように検出した溝状遺構である。第３微高地上に位置し，途中で溝状遺構ＳＤ15を壊しながら，ほぼ南から北に向かって流れる。埋土は上から暗灰褐色粘質土・灰褐色シルト・暗灰褐色砂質土の３層で，幅0.7～1.1mをはかる。出土した遺物としては土師器･須恵器がある。また,南端付近で微量の獣骨片を検出している。



1．暗灰褐色粘質土（マンガン・鉄分を含む）
2．灰褐色シルト（マンガン・鉄分を含む）
3．暗灰褐色砂質土（マンガン・鉄分を含む）

第136図　ＳＤ16土層断面図

1069～1071は土師器の杯である。1069はほぼ完形に復元できた杯で，底部はヘラ切りされている。1071は円盤状高台である。底部はヘラ切りされている。



第137図　ＳＤ16出土遺物

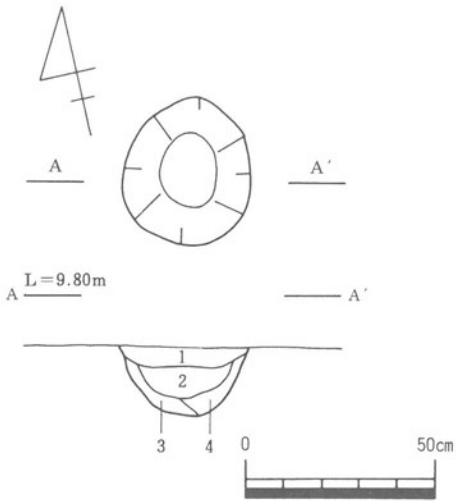
第98表　ＳＤ16出土遺物観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	その他	色調 外面	内面	胎土	残存度
1069	161	土師器 杯	13.4	6.3	3.4	回転ナデ・ヘラきりのちナデ	回転ナデ		橙褐	橙褐	1～3mm程度の砂粒少し	1／1
1070	161	須恵器 杯	(17.0)	—	—	回転ナデ	回転ナデ	底部欠損	淡灰	淡灰	1mm程度の砂粒少し	1／8
1071	161	土師器 底部	—	7.0	—	ナデ・ヘラきり	指ナデ	円盤状高台	淡褐	淡褐	1～2mm程度の砂粒少し	1／2

6．時期不明の遺構

ＳＫ01（第138図）

Ｂ地区東半部で検出した土坑である。平面形は不整円形を呈しており，長径0.7m・短径0.6m，深さ約0.2mをはかる。溝状遺構ＳＤ01と同様に，Ｂ地区東半部で検出した落ち込み状遺構がある程度埋没した後で掘られたものである。埋土は上から暗茶褐色粘質土・暗灰茶褐色質土の２層で，ともに炭化物を多く含んでいる。埋土から遺物は出土していない。炭化物以外には焼土など焼成の痕跡を示すものは検出できなかったことから，この土坑での焼成行為は行なわれなかったものと考えたい。



1．暗茶灰褐色粘質土（炭化物を多量に含む）
2．暗灰茶褐色粘質土（マンガン・炭化物を多量に含む）
3．暗茶褐色粘質土（マンガンを含む）
4．茶褐色粘質土（マンガンを含む）

第138図　ＳＫ01平・断面図

ＳＫ02（第139図）

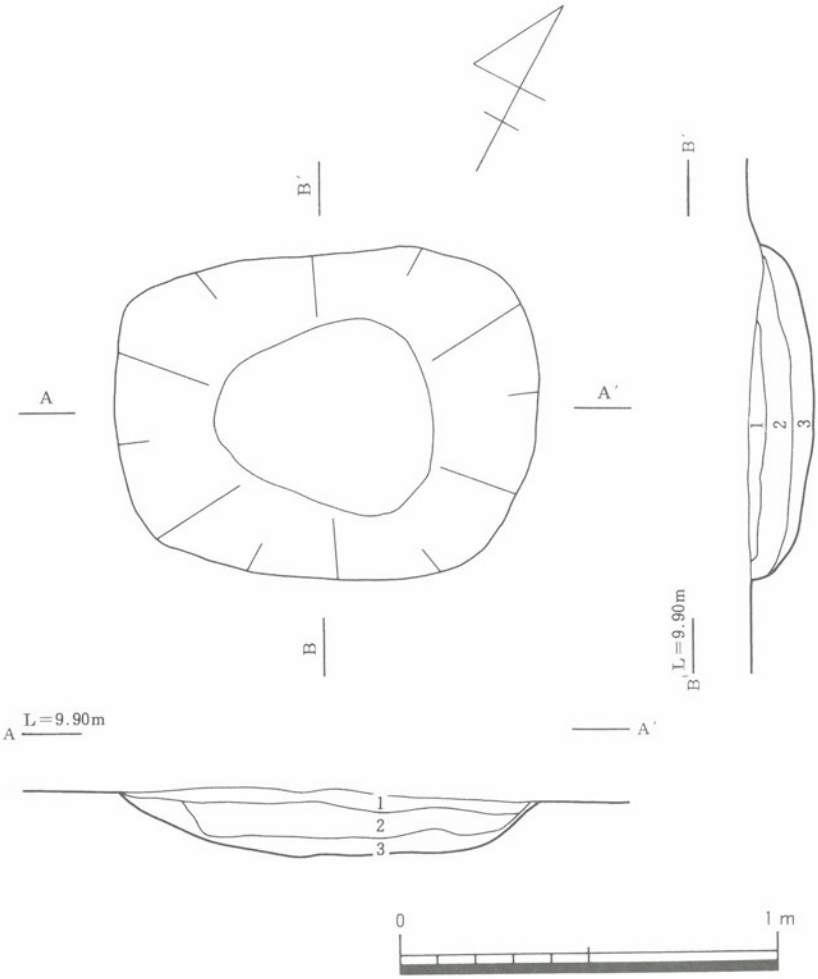
Ｄ１地区の中央部付近で，溝状遺構ＳＤ05のすぐ北側で検出した土坑である。平面は隅丸方形を呈しており，0.9×1.1mの規模で深さは0.2mをはかる。埋土は上から灰褐色粘質土・風化した砂岩を含んだ暗灰褐色粘質土・風化した砂岩を含んだ暗灰黄色粘質土の３層である。遺物は出土していない。

ＳＫ03（第140図）

Ｄ１地区の中央部付近で，土坑ＳＫ02の東側で検出した土坑である。平面は隅丸長方形を呈しており，0.7～1.4mの規模で深さは0.2mをはかる。埋土は土坑ＳＫ02と同じく，上から灰褐色粘質土・風化した砂岩を含む暗灰褐色粘質土・風化した砂岩を含む暗灰黄色粘質土の３層である。遺物は出土していない。

ＳＫ04（第141図）

Ｄ１地区の中央部付近で，土坑ＳＫ03の東側で検出した土坑である。平面は楕円形を呈し，長径1.1m，短径0.8m，深さ0.2mをはかる。埋土は上から風化した砂岩を含む灰褐色粘質土・風化した砂岩を含む暗灰褐色粘質土の２層である。遺物は出土していない。

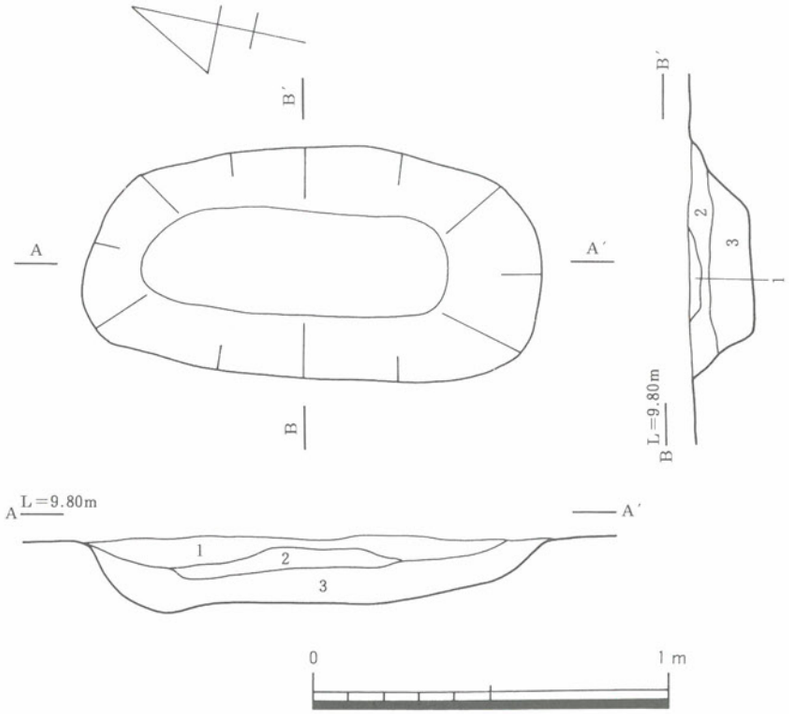


1．灰褐色粘質土（褐色が強い）
2．暗灰褐色粘質土（風化した砂岩礫を含む）
3．暗灰黄色粘質土（風化した砂岩礫・礫を含む）

第139図　ＳＫ02平・断面図

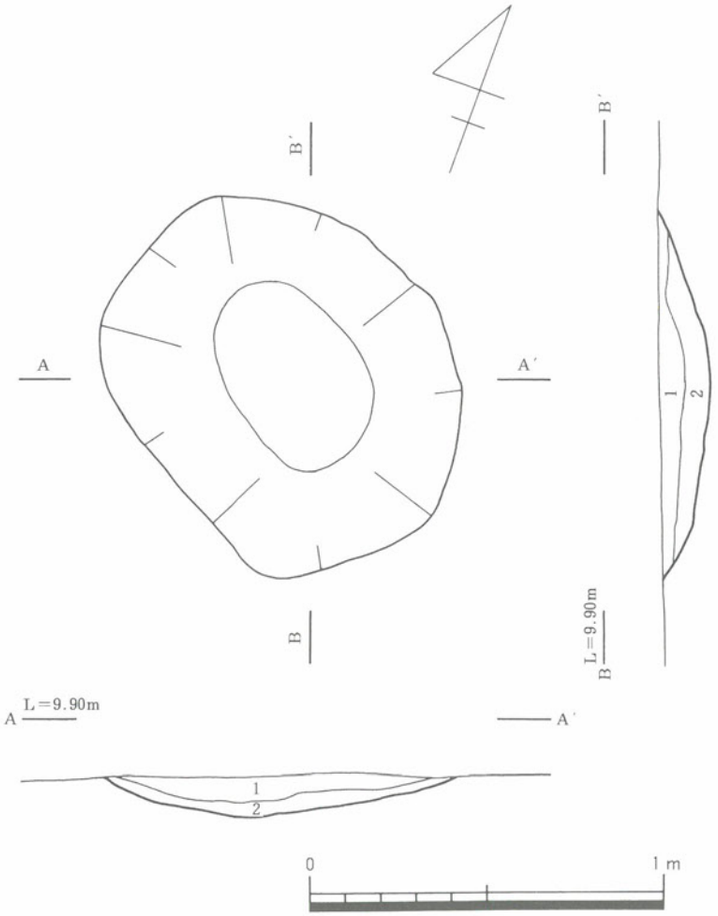
ＳＫ05（第142図）

Ｄ１地区西半部の中央付近で検出した土坑である。第２微高地上に位置し，平面は楕円形を呈し，長径1.3m，短径0.9m，深さ0.1mをはかる。埋土は単一埋土で，溝状遺構ＳＤ06を壊して作られている。遺物は出土していない。



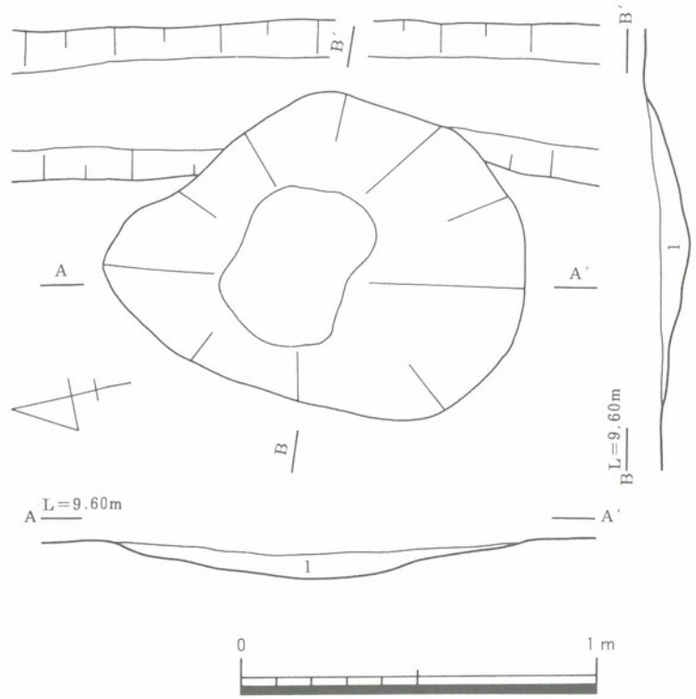
1．灰褐色粘質土（褐色土が強い）
2．明灰褐色粘質土（風化砂岩を含む）
3．明灰褐色粘質土（礫・風化砂岩を含む）

第140図　ＳＫ03平・断面図



1．灰褐色粘質土（風化した砂岩礫・礫を含む）
2．暗灰褐色粘質土

第141図　ＳＫ04平・断面図

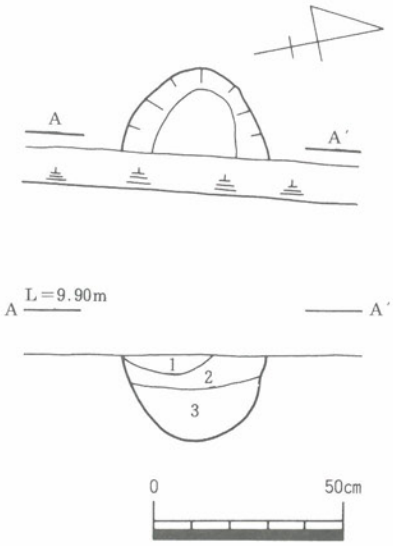


1．黒褐色粘質土

第142図　ＳＫ05平・断面図

ＳＫ06（第143図）

Ｄ１地区の東壁にかかって検出した土坑である。第２微高地上に位置する。西半分を検出しており，東半分は調査区外へ続く。平面は円形を呈していると考えられ，直径0.4m，深さ0.2mをはかる。埋土は上から淡褐色粘質土・淡黒褐色粘質土・暗灰褐色粘質土の３層からなるが，土坑の中央部分に褐色粘質土が入る。この褐色粘質土の部分が柱痕であるならば，本遺構は土坑ではなく，直径７cm程の柱痕をもった柱穴と言える。しかし，全体を発掘調査していないためここでは土坑と考えておく。遺物は出土していない。

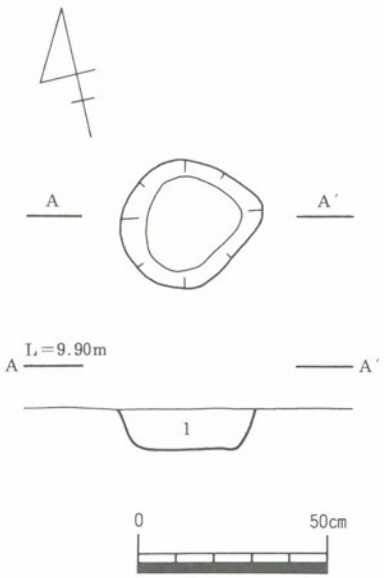


1．淡褐色粘質土（風化した砂岩を含む）
2．淡黒褐色粘質土（風化した砂岩を含む）
3．暗灰褐色粘質土（風化した砂岩を含む）

第143図　ＳＫ06平・断面図

ＳＫ07（第144図）

Ｄ１地区東半部で，土坑ＳＫ06の西側で検出した土坑である。第２微高地上に位置する。平面は円形を呈し，直径0.4m，深さ0.1mをはかる。埋土は灰褐色粘質土の単一土層である。遺物は出土していない。

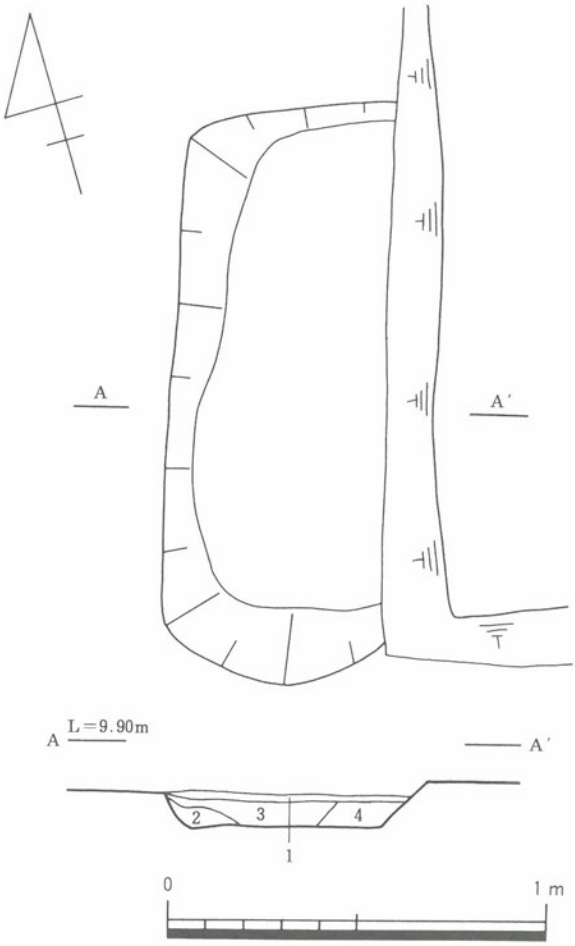


1．灰褐色粘質土

第144図　ＳＫ07平・断面図

ＳＫ08（第145図）

Ｄ１地区北東隅付近で，土坑ＳＫ04の東側で検出した土坑である。現在も使用されている電柱があるため，島状に掘り残した部分に一部がかかっている。このために全体を発掘調査できなかったが，平面形は南北方向に長い隅丸長方形を呈する。長径1.5m，短径0.5m以上，深さ0.2mの規模をもつ。埋土は上から灰褐色粘質土・灰色粘質土・灰黄色粘質土の３層でいずれの土層にも風化した砂岩を含んでいる。底面は平坦になっている。遺物は出土していない。

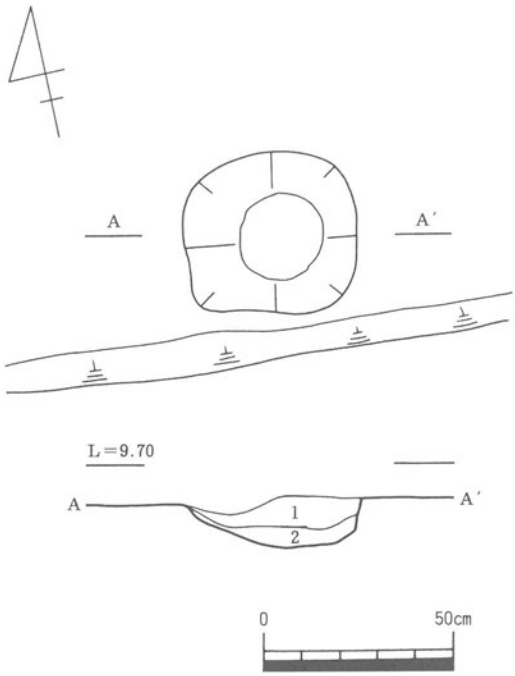


1．灰褐色粘質土（砂利・風化した砂岩を含む）
2．灰色粘質土（砂利・風化した砂岩を含む）
3．灰黄色粘質土（やや砂質，風化した砂岩を含む）
4．灰色粘質土（３より砂質が強い，風化した砂岩・礫を含む）

第145図　ＳＫ08平・断面図

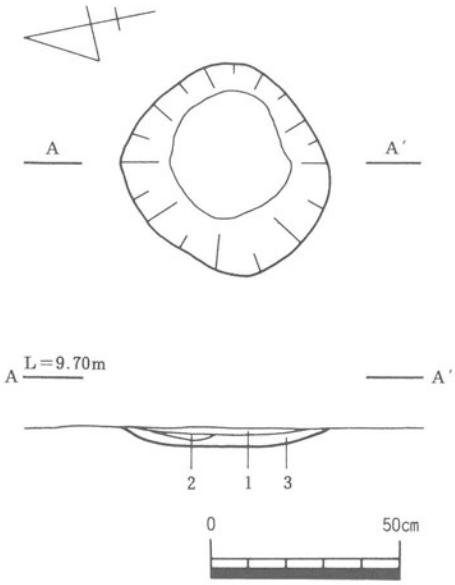
ＳＫ09（第146図）

Ｆ２地区南半部で検出した土坑である。第３微高地上に位置し，平面は円形を呈しており直径0.6m，深さ約0.1mをはかる。埋土は３層で，上から暗黒灰色粘質土・暗灰褐色粘土・淡灰褐色砂質土である。遺物は出土していない。



1．黒灰褐色砂質土
2．明灰黄褐色砂質土（鉄分を含む）

第147図　ＳＫ10平・断面図



1．暗黒灰褐色粘質土（鉄分を含む）
2．暗灰褐色粘土
3．淡灰褐色砂質土（鉄分を含む）

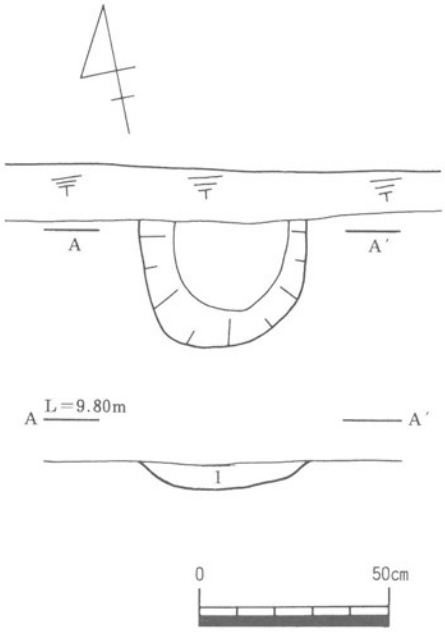
第146図　ＳＫ09平・断面図

ＳＫ10（第147図）

Ｆ２地区の南壁の付近で検出した土坑である。第３微高地上に位置する。平面は隅丸方形を呈し，一辺0.5m，深さ約0.1mをはかる。埋土は上から黒灰色砂質土・明灰黄褐色砂質土の２層からなる。遺物は出土していない。

ＳＫ11（第148図）

Ｆ２地区西南隅付近において，北壁にかかって検出した土坑である。第３微高地上に位置し，北半分は調査区外に続く。わずかに楕円形を呈しており，直径0.4m，深さ約0.1mをはかる。埋土は灰褐色粘質土の単一埋土である。遺物は出土していない。

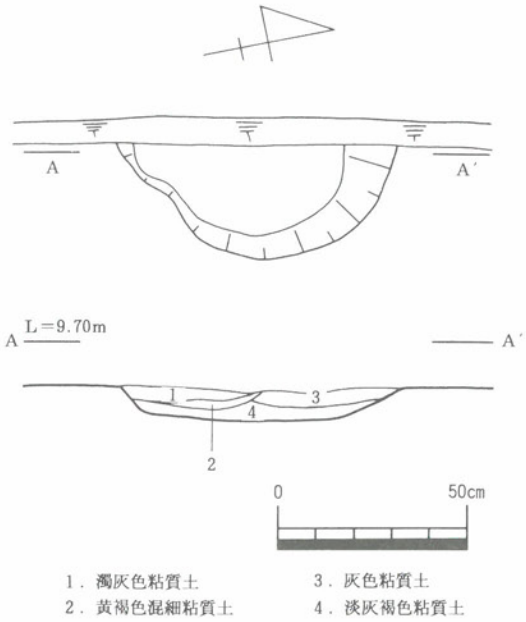


1．茶混灰褐色粘質土
（マンガン・鉄分を若干含む）

第148図　ＳＫ11平・断面図

ＳＫ12（第149図）

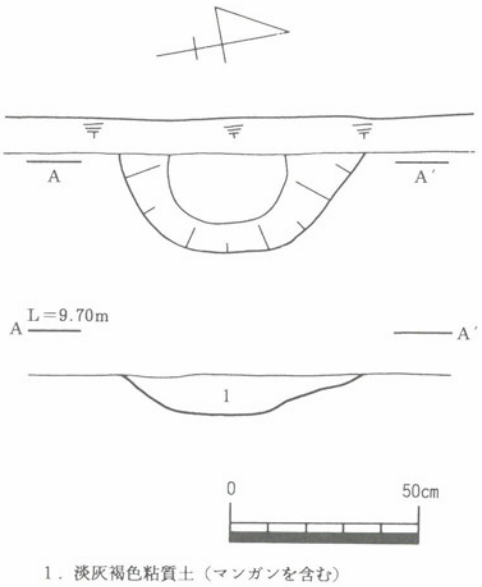
Ｆ２地区北西隅付近において，西壁にかかって検出した土坑である。第３微高地上に位置し，西半分は調査区外である。平面は円形を呈しており直径0.6m，深さ約0.1mをはかる。埋土は４層からなり，遺物は出土していない。



第149図　ＳＫ12平・断面図

ＳＫ13（第150図）

Ｆ２地区西半部で西壁にかかって検出した土坑である。第３微高地上に位置する。東半分を検出し，西半分は調査区外である。平面は円形を呈しており，直径0.4m，深さ0.1mをはかる。単一埋土をもち，遺物は出土していない。



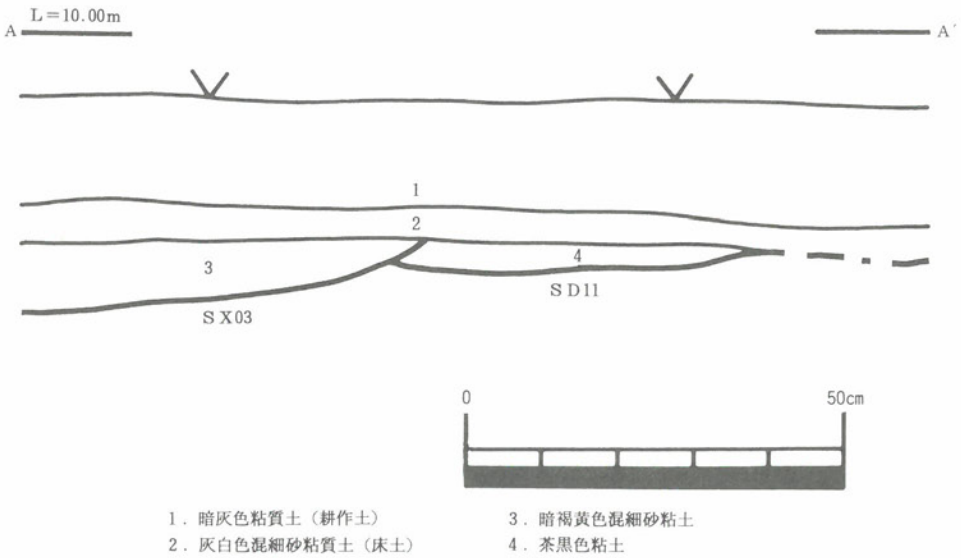
第150図　ＳＫ13平・断面図

ＳＤ05

Ｄ１地区の中央部やや北寄りで検出した溝状遺構である。第２微高地上に位置し，幅0.5～0.6ｍ，深さ0.6ｍ，検出長5.4ｍをはかる。方角はN71°Wを示し，東端で溝状遺構ＳＤ04に壊されている。遺物は出土していない。

ＳＤ11（第151図）

Ｄ２地区南西隅付近で検出した溝状遺構である。南西－北東の方角をもち，南西部分は調査区外へ続いているが，北東部分は弥生時代後期の「円形周溝状遺構」ＳＸ03の溝に壊されている。幅0.7ｍ，深さ約0.1ｍをはかる。埋土は茶黒色粘土の単一埋土で，遺物は出土していない。弥生時代前期の溝状遺構の可能性がある。



第151図　ＳＤ11・ＳＸ03土層断面図

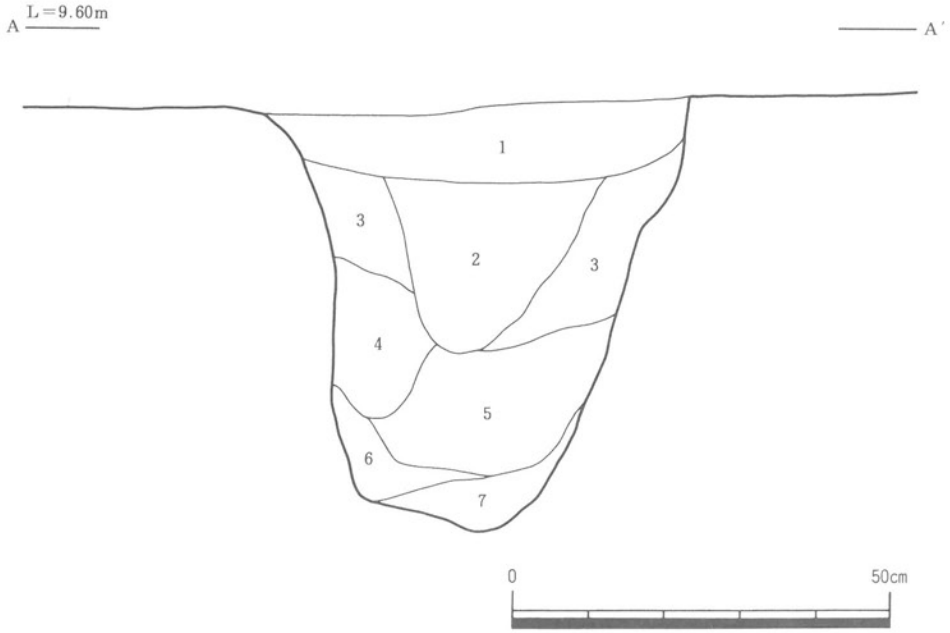
ＳＤ18（第152図）

Ｇ２地区のほぼ中央で検出した溝状遺構である。第３微高地上に位置し，緩やかに蛇行しながらほぼ南から北に向かい，Ｎ６°Ｅの方角をもって流下している。この溝状遺構は淡黄褐色粘質土を基盤層として掘られている。埋土は７層に区分できるが，断面の観察の結果，大きく２つのまとまりとしてとらえることができ，この溝状遺構が最低２回掘られたことがうかがえる。

下層の溝状遺構は，断面が逆台形を呈し，規模は幅約0.5m，深さ約0.6mをはかる。埋土は上から茶褐色粘質土・明灰色粘質土・暗灰茶褐色粘質土・暗灰褐色粘質土・暗灰色シルトの５層である。遺物は出土していない。

上層の溝状遺構は，断面が皿状を呈し，さらに中央が１段掘り凹められている。現状で幅0.6m，深さ約0.3mの規模である。埋土は上位から灰黄褐色粘質土・淡茶灰褐色粘質土の２層である。遺物は出土していない。

この溝状遺構ＳＤ18は，同じＧ２地区で検出した３条の溝状遺構ＳＤ19～21とほぼ平行している。

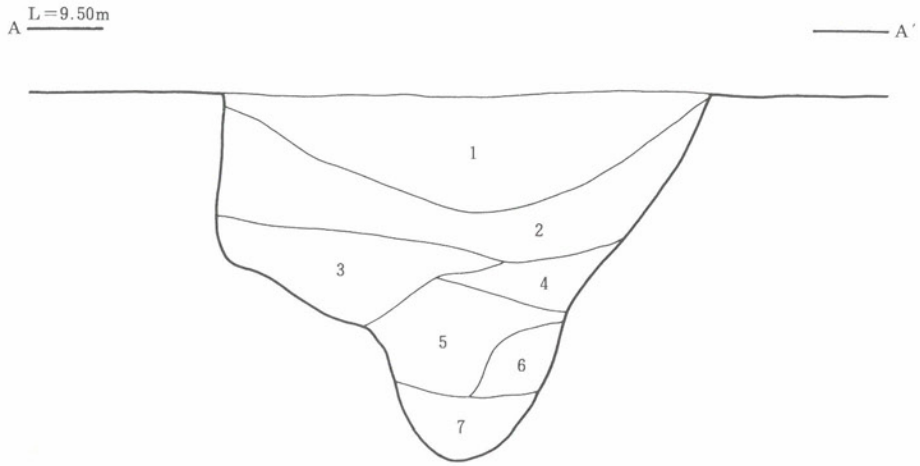


1．灰黄褐色粘質土（鉄分・マンガンを含む）
2．淡灰褐色粘質土（鉄分・マンガンを含む）
3．茶灰褐色粘質土（マンガンを含む）
4．明灰色粘質土（鉄分，マンガンを含む）
5．暗灰茶褐色粘質土（鉄分を多く含む）
6．暗灰褐色粘質土（鉄分を含む，茶色がかる）
7．暗灰色シルト（最下部に黒色粒を含む）

第152図　ＳＤ18土層断面図

ＳＤ19（第153図）

Ｇ２地区中央部で，溝状遺構ＳＤ18のすぐ東側で検出した溝状遺構である。第３微高地上に位置し，ほぼ南から北へ向かい，Ｎ７°Ｅの方角をもって流下している。幅0.7～0.8m，深さ0.5mの規模をはかる。溝状遺構ＳＤ18・20・21と平行しており，ＳＤ18と同様に淡黄褐色粘質土を基盤層として掘られている。埋土は７層に区分することができる。上の方の層から土器細片がわずかに出土しているが，時期を決定するにはいたらない。

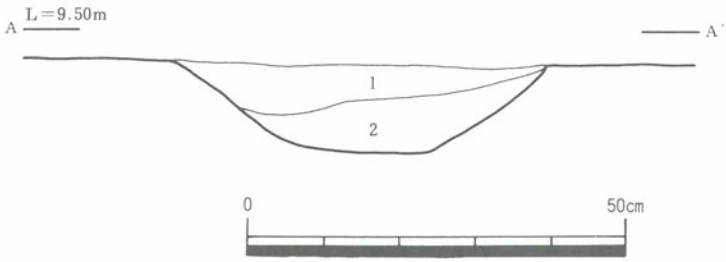


1．灰黄褐色粘質土（鉄分・マンガンを含む）
2．淡灰褐色粘質土（鉄分・マンガンを含む）
3．暗灰褐色粘質土（やや砂混，鉄分・マンガンを含む）
4．暗灰褐色粘質土（やや砂混，鉄分を若干含む）
5．暗灰茶褐色粘質土（鉄分を多く含む）
6．明黄灰褐色粘質土（鉄分・マンガンを含む）
7．黒褐色粘質土

第153図　ＳＤ19土層断面図

ＳＤ20（第154図）

Ｇ２地区東半部で検出した溝状遺構である。第３微高地に位置し，幅約0.5m，深さ0.1mの規模である。埋土は上から黄灰褐色粘質土・暗灰褐色粘質土の２層である。ほぼ南から北に向かい，Ｎ10°Ｅの方角をもって流下してい



1．黄灰褐色粘質土（鉄分・マンガンを含む）
2．暗灰褐色粘質土（黄褐色粘質土粒，鉄分・マンガンを含む）

第154図　ＳＤ20土層断面図

る。溝状遺構ＳＤ18・19・21と平行しており，遺物は出土していない。

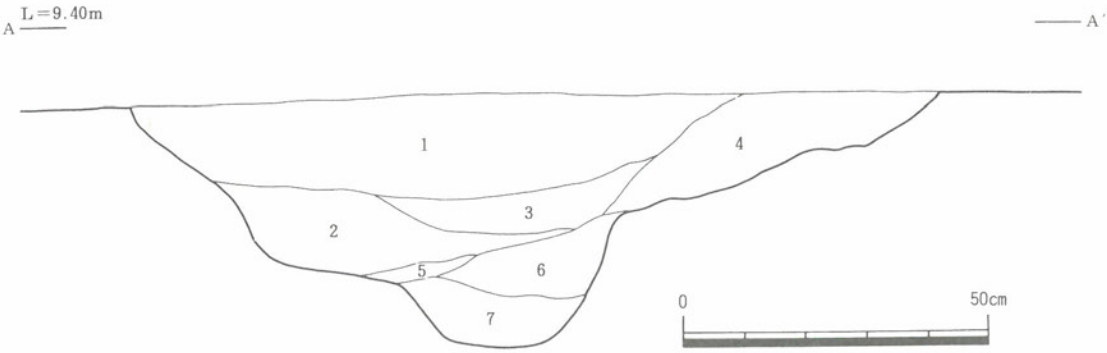
ＳＤ21（第155図）

Ｇ２地区東半部で検出した溝状遺構である。第３微高地上に位置し，ほぼ南から北へ向かってＮ８°Ｅの方角をもって流下している。埋土は７層に区分できるが，断面の観察から大きく２つにまとめることができ，この溝状遺構が最低２回掘られたことがうかがえる。

下層の溝状遺構は，断面の形状が浅い皿状を呈し，さらに中央部分が１段掘り凹められる。幅1.4～1.9m，深さ0.4mの規模である。埋土は上から灰褐色粘質土・灰茶褐色粘質土・黒茶褐色粘質土の３層である。

上層の溝状遺構は，断面の形状が皿状を呈し，現状で幅約１ｍ，深さ0.3mをはかる。埋土は上から暗灰褐色粘質土・黒茶褐色粘質土・黒茶褐色粘質土・暗灰褐色中砂の４層である。

埋土から弥生土器・土師器・須恵器の細片が出土しているが，調査の際に上層・下層を分けて発掘調査しなかったため，この溝状遺構の年代ははっきりしない。



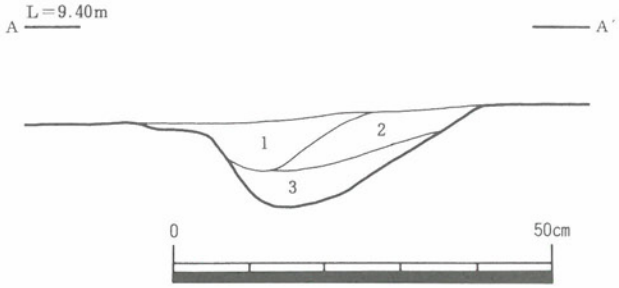
1．暗灰褐色粘質土（マンガンを多く含む，鉄分を若干含む）
2．暗茶褐色粘質土（マンガンをやや多く含む）
3．黒茶褐色粘土（マンガンをやや多く含む）
4．灰褐色粘質土（マンガンを多く含む，鉄分を若干含む）
5．暗灰褐色中砂
6．灰茶褐色粘質土（マンガンを多く含む，鉄分を若干含む）
7．黒茶褐色粘土（マンガンを多く含む，鉄分を含む）

第155図　ＳＤ21土層断面図

ＳＤ22（第156図）

Ｇ３地区西半部で検出した溝状遺構である。第３微高地上に位置しＮ30°Ｅの方角をもって，南西から北東へ向かって流下している。規模は幅0.3～0.7m，深さ0.1mをはかる。埋土は上から暗黒茶褐色粘質土・灰黄褐色粘質土・灰褐色粘質土の３層である。遺物は出土していない。

この溝状遺構ＳＤ22は，同じＧ３地区で検出した３条の溝状遺構ＳＤ23～25とほぼ平行している。

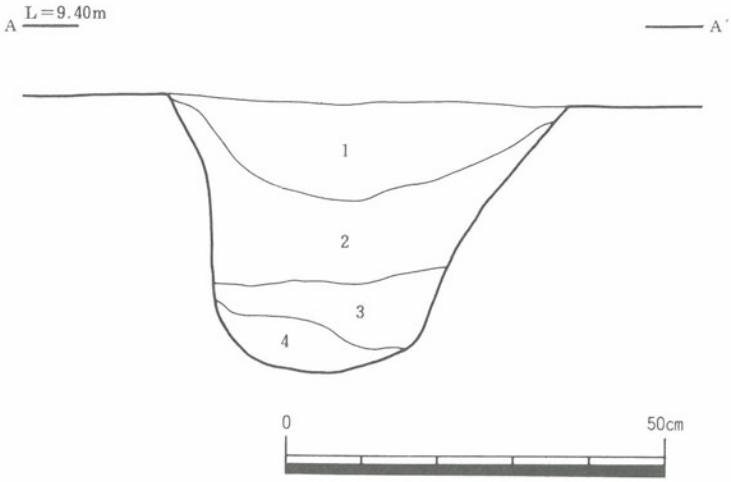


1．暗黒茶褐色粘質土（鉄分・マンガンを含む）
2．灰黄褐色粘質土（鉄分・マンガンを含む）
3．灰褐色粘質土（鉄分・マンガンを含む）

第156図　ＳＤ22土層断面図

ＳＤ23（第157図）

Ｇ３地区中央部で検出した溝状遺構である。第３微高地上に位置し，緩やかに蛇行しながら南西から北西へ向かって流下している。方角はＮ37°Ｅを示し，規模は幅0.6～0.7ｍ，深さ0.4ｍである。埋土は上から暗灰茶褐色粘質土・灰褐色粘質土・炭化物を含んだ暗茶灰褐色粘質土・暗灰色細砂を含んだ暗茶灰褐色粘質土の４層である。遺物は下位から土器細片がわずかに出土している。溝状遺構ＳＤ22･24･25とほぼ平行している。



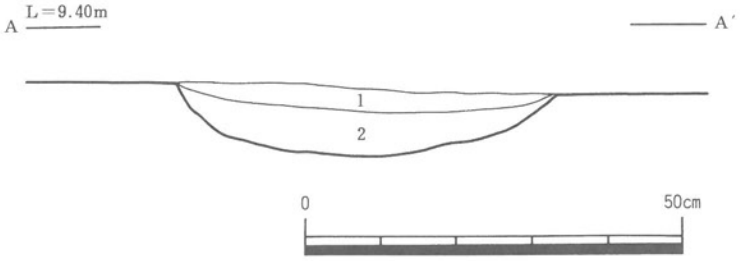
1．暗灰茶褐色粘質土（鉄分・マンガンを含む）
2．灰褐色粘質土（鉄分・マンガンを含む）
3．暗茶灰褐色粘質土（鉄分・マンガン・炭化物を含む）
4．暗茶灰褐色粘質土（鉄分・マンガンを含む）

第157図　ＳＤ23土層断面図

ＳＤ24（第158図）

Ｇ３地区中央部で，溝状遺構ＳＤ23のすぐ東側で検出した溝状遺構である。第３微高地上に位置し，Ｎ36°Ｅの方角をもち，南西から北東へ向かって流下する。幅0.4～0.7ｍ，深さ0.1ｍをはかる。埋土は上から黒茶褐色粘質土・暗灰茶褐色粘質土の２層である。遺物は出土していないた

め年代はわからないが，調査区北壁付近で溝状遺構ＳＤ23に壊されており，溝状遺構ＳＤ24がＳＤ23に先行して掘られたことがわかる。



1．黒茶褐色粘質土（マンガン・鉄分を含む）
2．暗灰茶褐色粘質土（マンガン・鉄分を含む）

第158図　ＳＤ24土層断面図

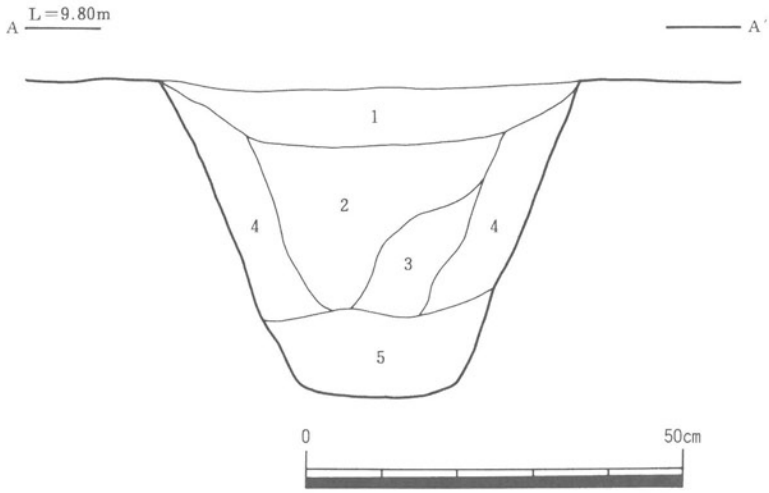
ＳＤ25（第159図）

Ｇ３地区の東半部で検出された溝状遺構である。第３微高地上に位置し，Ｎ29°Ｅの方角をもち，南西から北東へ向かって流下している。埋土は５層に区分できるが，断面の観察の結果，大きく２つのまとまりとしてとらえることができ，この溝状遺構が最低２回は掘られたことがわかる。

下層の溝状遺構は，断面が逆台形を呈し，幅0.6m，深さ0.4mの規模である。埋土は上から明黄灰褐色粘質土・灰褐色粘質土の２層である。遺物は出土していない。

上層の溝状遺構は，断面が浅い皿状を呈し，さらに中央が逆台形に掘り凹められている。埋土は上から黒茶褐色粘質土・暗灰茶褐色粘質土・茶灰褐色粘質土の３層である。中位の層から土師器細片が出土している。

この溝状遺構ＳＤ25は，溝状遺構ＳＤ22・23・24とほぼ平行している。

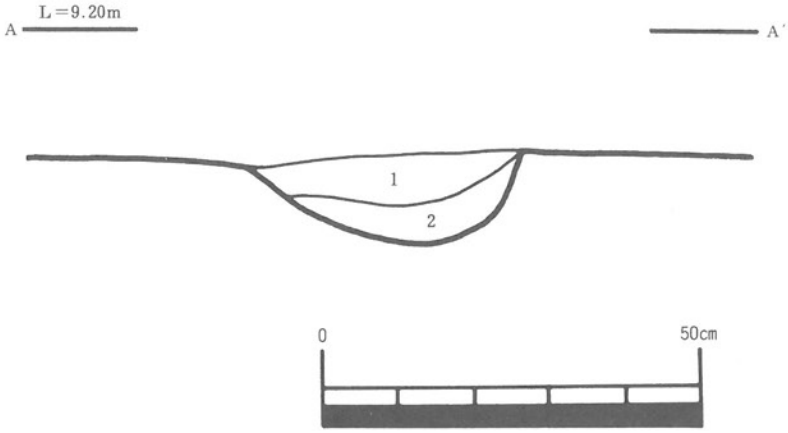


1．黒茶褐色粘質土（鉄分を多く含む，マンガンを含む）
2．暗灰茶褐色粘質土（鉄分を多く含む，マンガンを含む）
3．茶灰褐色粘質土（鉄分・マンガンを含む）
4．明黄茶灰褐色粘質土（鉄分・マンガンを含む）
5．灰褐色粘質土（鉄分・マンガンを含む）

第159図　ＳＤ25土層断面図

ＳＤ26（第160図）

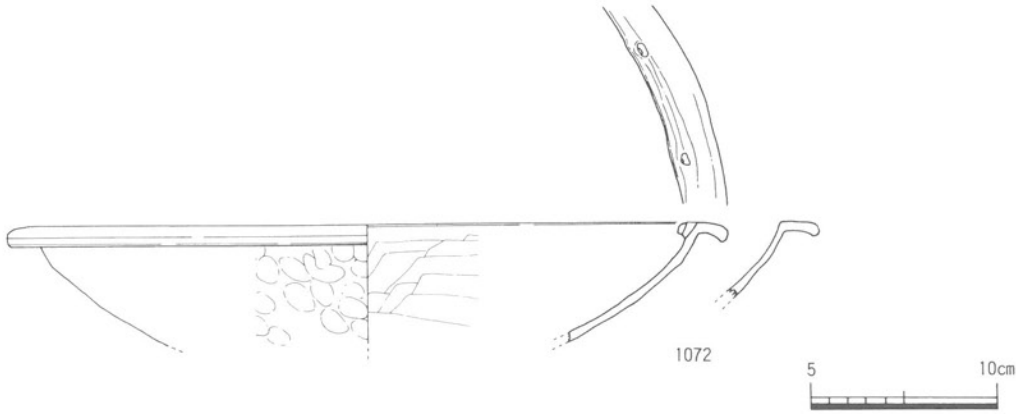
Ｇ３地区北東隅付近で検出した溝状遺構である。第３微高地上に位置し，Ｎ86°Ｅの方角，すなわちほぼ東西を向いているが，流れの方向は判断できない。規模は幅0.3～0.4ｍ，深さ約0.1ｍである。埋土は上から暗茶褐色粘質土・灰褐色粘質土の２層で，西端を溝状遺構ＳＤ24に壊されており，東端を溝状遺構ＳＤ25に壊されている。遺物は出土していない。



1．暗茶褐色粘質土（マンガン・鉄分を多く含む）
2．灰褐色粘質土（マンガン・鉄分を含む）

第160図　ＳＤ26土層断面図

７．包含層出土の遺物（第161～163図）

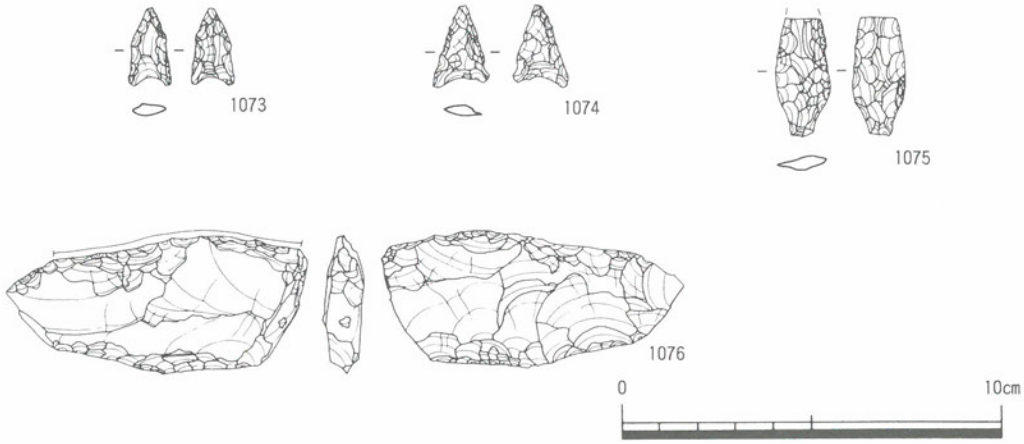


第161図　包含層出土遺物①

第99表　包含層出土遺物①観察表

遺物番号	写真図版	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	調整 外面	調整 内面	その他	色調 外面	色調 内面	胎土	残存度
1072	—	焙烙	35.0	——	——	ヨコナデ・指押さえのちナデ	板ナデ	内型使用	黒褐	黒褐	精緻	1／3

1072はＣ２地区の包含層から出土した焙烙である。製作時に内型を使用したらしく，外面に指頭圧痕が顕著にみられる。口縁部は水平に折り曲げられており，口縁部内面の２箇所に穿孔が残る。



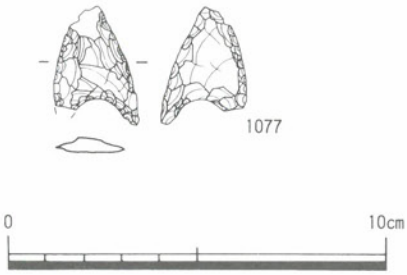
第162図　包含層出土遺物②

第100表 包含層出土遺物②観察表

遺物番号	写真図版	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	備考
1073	162	石鏃	2．1	1．2	0．3	0．6	サヌカイト	凹基式
1074	162	石鏃	2．2	1．5	0．3	0．6	サヌカイト	凹基式
1075	162	石鏃	3．2	1．4	0．4	1．8	サヌカイト	尖基式　先端を欠損
1076	162	楔形石器	8．1	3．7	1．0	33．1	サヌカイト	楔形石器の素材　長側辺の一方に敲打痕あり

1073～1076はＣ地区の包含層から出土した石器である。1073・1074は無茎の凹基式の石鏃である。1075は有茎の凸基式の石鏃である。材質はサヌカイトを利用している。1076はサヌカイト製の楔形石器の素材と思われる。片側縁が敲打されている。

1077はＦ１地区の包含層から出土した石鏃である。先端と基部の一端を欠損するが，無茎の凹基式の石鏃である。材質はサヌカイトを利用している。



第163図　包含層出土遺物③

第101表 包含層出土遺物③観察表

遺物番号	写真図版	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	備考
1077	162	石鏃	3．2	2．2	0．4	2．2	サヌカイト	平基式

註

1　この柵列の柱穴の底がほぼ平坦であることから，杭ではなく柱材を打ち込んでいたことが観察できる。柱材の間隔も開いていることから，自然河川および溝状遺構の護岸施設というよりも，淀みをなしていた自然河川への転落を防止するための安全設備的な性格をもっていたのであろう。

2　柵列ＳＡ01ａのうち柱穴ＳＰ06はＳＰ05に壊されており，実際は８個の柱穴によって構成されていたらしい。この柱穴のうちＳＰ03はＳＰ02と20cm，ＳＰ04とでは45cmと等間隔には並んでいない。柱穴ＳＰ02とＳＰ04の間隔は70cmと等間隔である。このことからＳＰ03は後から作られた可能性が強いといえる。

3　円形周溝墓である可能性はきわめて強いが，削平のため埋葬施設の有無が確認できず墓と断定しきれないことから，「円形周溝墓」とカッコ書きで使用するものである。

4　出土した土器片83点の器種構成を比較してみると，壺44.6％・高杯28.9％・甕19.3％・その他7.2％となる。壺と高杯をあわせると全体の73.5％を占める。また，数量はわずかであるが器台も出土している。

5　この遺構が「円形周溝墓」であるならば，突出部はいわゆる陸橋部にあたることになり，当遺跡の「円形周溝墓」は２箇所の陸橋部を有することになる。弥生時代後期の円形周溝墓は近畿地方をはじめとして検出例が増加しており，陸橋部をもつものも検出されているが，陸橋部を２箇所に有する例は管見では知らない。

　また，本遺跡の「円形周溝墓」は突出部をはさんで西側にはしっかりした溝状遺構が巡らされているが，東側は自然河川となっている。調査当時は，２つの陸橋部ともに自然河川側の立ち上がりがしっかり残っていることを根拠に，東側にもしっかりした溝状遺構が存在していたのが河川の流れによって削られたと考えていた。しかし，その後の河川の土層断面観察によると弥生時代後期から古墳時代初頭にかけては流れが淀んでいた状況が復元できることから，自然河川がある程度埋没していたところへ，陸橋をはさんで両側に溝状遺構を有する「円形周溝墓」を築いたが，東側の溝状遺構は不安定な地盤のため残らなかったと考えたい。何故にこのような不安定な場所に占地しなければならなかったのかということも，積極的に「円形周溝墓」と言い切らない理由の一つでもある。

6　これらの溝状遺構に先行する遺構としてＳＸ03の「円形周溝状遺構」があるが，溝状遺構との時間的先後関係から溝状遺構ＳＤ07・ＳＤ09が作られた段階で，すでに「円形周溝状遺構」ＳＸ03の上部は削平が進んでいたことが考えられる。

第４章　自然科学調査の成果

第１節　林・坊城遺跡自然河川出土木材の樹種

林・坊城遺跡の発掘調査の結果，調査区中央で検出した自然河川（ＳＲ01）内の流路（流路Ａ）から，縄文時代晩期の凸帯文土器とともに多数の木製品や自然木が出土した。また，弥生時代後期の溝状遺構からも若干の自然木が出土している。今回の分析調査では，自然河川（ＳＲ01）を中心に遺構から検出された木製品や自然木について材同定を行ない，その樹種を明らかにすると共に，用途ごとの樹種構成について検討する。分析に用いた試料は木製品や自然木など合計49点である（第102表）[1]。

１．方法

材は剃刀の刃を用いて，試料の横断面（木口）・放射断面（柾目）・接線断面（板目）の３断面の徒手切片を作製し，ガム・クローラルで封入し，生物顕微鏡で観察・同定した。

炭化材は，試料を乾燥させたのち，横断面（木口）・放射断面（柾目）・接線断面（板目）の３断面を作製し，走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）で観察・同定した。

２．結果

同定結果を表102に示す。№13と№22は樹皮であった。また，試料中には劣化が激しく，同定不可能な試料や類似種とした試料もあるが，37点の資料が以下に示す15種類に同定された。同定根拠とした主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質を以下に記す。なお，一般的な性質については「木の辞典　第１巻～第17巻」（平井，1979～1982）を参考にした。

・モミ属の一種（*Abies* sp.）マツ科

早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで，晩材部の幅は薄く，年輪界は明瞭。樹脂細胞はないが，傷害樹脂道が認められることがある。放射仮道管はなく，放射柔細胞の壁は粗く，末端壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で１～４個。放射組織は単列，１～20細胞高。

モミ属には，モミ（*Abies firma*），ウラジロモミ（*A. homolepis*），アオモリトドマツ（*A. mariesii*），シラベ（*A. veitchii*），アカトドマツ（*A. sachalinensis*）の５種があり，アカトドマツを除く４種はいずれも日本特産種である。モミは本州（秋田・岩手県以南）・四国・九州の低地～山地に，ウラジロモミは本州中部（福島県以南）・紀伊半島・四国の山地～亜高山帯に，ア

オモリトドマツは本州（福島県以北）の亜高山～高山帯に，シラベは本州中部（福島県以南）・奈良県・四国に，アカトドマツは北海道に分布する常緑高木である。モミを除いては山地～高山・寒冷地に生育する。モミの材はやや軽軟で，強度は小さく，割裂性は大きい。加工は容易で，保存性は低い。棺や卒塔婆など葬祭具に用いられるほか，建具・器具・家具・建築材など各種の用途が知られている。

・ツガ属の一種（*Tsuga* sp.）マツ科

早材部から晩材部への移行は急で，年輪界は明瞭。樹脂細胞があり，樹脂道はないが，傷害樹脂道が認められることがある。放射組織は仮道管と柔細胞よりなり，柔細胞壁は滑らかで，じゅず状末端壁をもつ。分野壁孔はヒノキ型で１～４個。放射組織は単列，１～20細胞高。

ツガ属には，ツガ（*Tsuga sieboldii*）とコメツガ（*T. diversifolia*）の２種がある。ツガは本州（福島県以南）・四国・九州に分布するが，日本海側には少なく，モミ（*Abies firma*）と混生し，尾根筋や傾斜地に生育することが多い。コメツガは本州・四国・九州に分布するが，西日本には少なく，亜高山帯の代表的樹種の１つである。ツガの材はやや重硬で，強度・割裂性は大きく，加工は容易ではなく，保存性は中程度である。建築・土木・装飾・建具・器具・家具材など各種の用途がある。また樹皮はタンニン原料となる。

・マツ科の一種（*Pinaceae* sp.）

早材部から晩材部への移行は緩やかで，年輪界は明瞭。３年にわたる組織を観察したところ，中央の１年に限って晩材部に正常樹脂道が２箇所認められた。また，観察した範囲では板目面に水平樹脂道は確認できなかった。放射仮道管は観察した範囲では認められず，放射柔細胞にはじゅず状末端壁が確認できる。分野壁孔はスギ型で１～４個。放射組織は単列，１～８細胞高。

日本産針葉樹材の内，正常樹脂道を持つのはマツ科のカラマツ属（*Larix*），マツ属（*Pinus*），トウヒ属（*Picea*），トガサワラ属（*Piseudotsuga*）の４属に含まれる樹種である。この中でじゅず状末端壁を持つのはカラマツ属とトウヒ属の２属であるが，この２属の材はいずれも放射仮道管，水平樹脂道をもっている。また，カラマツ，トウヒ属以外にじゅず状末端壁を持つ樹種としてモミ属（*Abies*）とツガ属（*Tsuga*）があるが，この２種は傷害樹脂道が現われることはあっても，正常樹脂道が現われることはない。

以上のことから今回の試料は，カラマツ，トウヒ属，モミ属，ツガ属のいずれかであると考えられるが，樹種の特定には至らなかった。この４種はいずれもマツ科に含まれる属なので今回はマツ科の一種とした。

・コウヤマキ（*Sciadopitys verticillata*）コウヤマキ科

早材部から晩材部への移行は緩やかで，年輪界は明瞭。樹脂細胞・樹脂道はない。放射仮道管はなく，放射柔細胞の壁は滑らか，分野壁孔は窓状。放射組織は単列，1～5（10）細胞高。

コウヤマキは，1科1属1種の日本特産の常緑高木である。自生地は本州（福島県以南）・四国・九州に点在し，また植栽される。材はやや軽軟で割裂性は大きく，加工は容易，保存性は中程度であるが耐水性がある。各種樽桶類・土木・舟材・棺材などの用途がある。

・マキ属類似種（cf. *Podocarpus* sp.）マキ科

早材部から晩材部への移行は緩やかで，年輪界は明瞭。樹脂細胞は早・晩材部の別なく散在し，樹脂道はない。放射仮道管はなく，放射柔細胞の壁は滑らか，分野壁孔はヒノキ型で1～2個。放射組織は単列，1～10細胞高。

マキ属には，イヌマキ（*Podocarpus macrophyllus.*）とナギ（*P. nagi*）の2種がある。イヌマキは本州（房総半島以西）・四国・九州・琉球に分布し，ナギの自生地は本州から琉球に点在するが，神社などに植栽される常緑高木である。材はやや重硬で，加工性は中程度，割裂性は大きく，保存性・耐水性が高い。建築・土木・器具・薪炭材などの用途がある。

・カヤ（*Torreya nucifera*）イチイ科

早材部から晩材部への移行はやや急で，晩材部の幅は薄く，年輪界は明瞭。樹脂細胞，樹脂道はない。放射仮道管はなく，放射柔細胞の壁は滑らか，分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で1～4個。放射組織は単列，1～10細胞高。仮道管内壁には対をなしたらせん肥厚が認められる。

カヤは，本州（岩手・山形県以南）・四国・九州の常緑広葉樹林中に点生する常緑高木で，樹高25～30mにもなるが生長は極めて遅い。庭木として植栽されることも多く，いくつかの変・品種がある。その材は針葉樹としては重い方で，強度は中程度，割裂性は大きく，加工は容易，保存性特に耐水性に優れる。建築・各種桶類・木地・器具・家具材など各種の用途が知られ，碁盤としては最高級品とされる。種子は食用となるほか，搾油（食用・燈用・頭髪用）されたり，駆虫薬としても使われた。

・ハンノキ属の一種（*Alnus* sp.）カバノキ科

散孔材で，管孔は放射方向に2～4個が複合または単独，横断面では楕円形，管壁は薄い。道管は階段穿孔を有し，段（bar）数は10～30，壁孔は密に対列状に配列，放射組織との間では網目状となる。放射組織は同性，単列，1～30細胞高のものと集合組織よりなる。柔組織は短接線状～散在状。年輪界はやや不明瞭。

ハンノキ属は国内に約10種が自生し，ハンノキ（*Alnus japonica*）の仲間（＝ハンノキ亜属）とヤシャブシ（*A. firma*）やミヤマハンノキ（*A. maximowiczii*）の仲間（＝ヤシャブシ亜属）

に分けられる。後者についてはミヤマハンノキ属（*Duschekia*）として独立させる見解もある。いずれも根に根瘤菌が共生しているため痩地でもよく生育する。材はやや軽軟～やや重硬で，加工は容易，薪炭材や各種器具材などとして用いられるほか，炭が黒色火薬の原料となる種類もある。また樹皮や果実を染料とすることもある。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種

（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris* sp.）ブナ科

環孔材で孔圏部は１～３列，孔圏外で急激に管径を減じた後，漸減しながら放射状に配列する。大道管は管壁は厚く，横断面では円形，小道管は管壁は中庸～厚く，横断面では角張った円形，ともに単独。単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列，放射組織との間では柵状となる。放射組織は同性，単列，１～20細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。柔細胞はしばしば結晶を含む。年輪界は明瞭。

クヌギ節は，コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で，果実（いわゆるドングリ）が２年目に熟するグループで，クヌギ（*Quercus acutissima*）とアベマキ（*Q. variabilis*）の２種がある。クヌギは本州（岩手・山形県以南）・四国・九州に，アベマキは本州（山形・静岡県以西）・四国・九州（北部）に分布するが，中国地方に多い。クヌギは樹高15mになる高木で，材は重硬である。古くから薪炭材として利用され，人里近くに萌芽林として造林されることも多く，薪炭材としては国産材中第一の重要材である。このほかに器具・杭材，楫材などの用途が知られる。樹皮・果実はタンニン原料となり，果実は染料・飼料ともなった。アベマキはクヌギによく似た高木で，樹皮のコルク層が発達して厚くなる。材質はクヌギに似るが，さらに重い。用途もクヌギと同様であるが，樹皮が厚いため薪材には向かず，炭材としてもクヌギ・コナラより劣るとされる。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種

（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus* sp.）ブナ科

環孔材で孔圏部は１～２列，孔圏外で急激に管径を減じた後，漸減しながら火炎状に配列する。大道管は管壁は厚く，横断面では円形～楕円形，小道管は管壁は中庸～薄く，横断面では多角形，ともに単独。単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列，放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性，単列，１～20細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。柔細胞はしばしば結晶を含む。年輪界は明瞭。

コナラ節は，コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で，果実（いわゆるドングリ）が１年目に熟するグループで，モンゴリナラ（*Quercus mongolica*）とその変種ミズナラ（*Q. mongolica* var. *grosseserrata*），コナラ（*Q. serrata*），ナラガシワ（*Q. aliena*），カシワ（*Q. dentata*）といくつかの変・品種を含む。モンゴリナラは北海道・本州（丹波地方以北）に，ミズナラ・カシワは北

海道・本州・四国・九州に，ナラガシワは本州（岩手・秋田県以南）・四国・九州に分布する。コナラは樹高20mになる高木で，古くから薪炭材として利用され，植栽されることも多かった。材は重硬で，加工は困難，器具・機械・樽材などの用途が知られ，薪炭材としてはクヌギ（*Q. acutissima*）に次ぐ優良材である。枝葉を緑肥としたり，虫えいを染料とすることもある。

・コナラ属アカガシ亜属の一種（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp.）ブナ科

放射孔材で，管壁厚は中庸～厚く，横断面では楕円形，単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列，放射組織との間では柵状となる。放射組織は同性，単列，1～15細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は短接線状および散在状。柔細胞はしばしば結晶を含む。年輪界は不明瞭。

アカガシ亜属（カシ類）には，アカガシ（*Quercus acuta*），イチイガシ（*Q. gilva*），アラカシ（*Q. glauca*）など7種があるが，果実の構造からコナラ亜属に分類される常緑低木～小高木のウバメガシ（*Q. phyllyraeoides*）も，材構造上はカシ類と類似する。カシ類は，暖温帯常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要な構成種であり，主として西南日本に分布する。このうち最も高緯度地域にまで分布するのがアカガシで，宮城・新潟県が北限である。材は重硬・強靱で，器具・機械・建築・薪炭材などに用いられる。また種子は食用となる。

・クリ（*Castanea crenata*）ブナ科

環孔材で孔圏部は1～4列，孔圏外で急激に管径を減じた後，漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独，横断面では円形～楕円形，小道管は単独および2～3個が斜（放射）方向に複合，横断面では角張った楕円形～多角形，ともに管壁は薄い。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列，放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性，単列，1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し，また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で。強度は大きく，加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材，樽木や海苔粗朶などの用途が知られている。樹皮からはタンニンが採られ，果実は食用となる。各地の遺跡からの出土例の多い樹種の一つである。

・ミズキ属の一種（*Cornus* sp.）ミズキ科

散孔材で管壁は薄く，横断面では角張った楕円形，単独。道管は階段穿孔を有し，段の数は，20～50，壁孔は対列～交互状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型，1～5細胞幅，1～30細胞高。柔組織は散在状。年輪界はやや不明瞭。

ミズキ属には，ミズキ（*Cornus controversa*）・クマノミズキ（*C. brachypoda*）と，ヤマボウ

シ（*C. kousa*），サンシュユ（*C. officinalis*）がある。それぞれミズキ節・ヤマボウシ節・サンシュユ節と区分する説のほか，後二者を*Benthamidia japonica*（ヤマボウシ），*Macrocarpium officinale*（サンシュユ）とミズキ属とは別属とする見解もある。狭義のミズキ属のうち，ミズキは，北海道・本州・四国・九州の丘陵地・平地に普通にみられ，クマノミズキは本州・四国・九州に自生するいずれも落葉高木である。ミズキの材はやや重硬で，加工は容易，旋作・木地・器具・薪炭材などに用いられる。クマノミズキの材はミズキより硬く，細工物にはあまり適さないが，炭材としてはミズキより優れている。

・アオキ（*Aucuba japonica*）ミズキ科

散孔材で管壁は薄く，横断面では多角形，単独，稀に複合する。道管は階段穿孔を有し，段数は20～30。放射組織は大型で異性Ⅱ型，1～5細胞幅，鞘細胞が認められる。柔組織はほとんど目立たない。年輪界は不明瞭。

アオキは日本特産種で，全土の林内に普通の常緑低木で，また植栽される。材の用途は特に知られていないが，葉を飼料や民間薬とすることがある。

3．考察

ここでは，今回の同定試料を土木材，農具，用途不明品，自然木の4つに用途を大きく分類する（第103表）。今回の同定試料は縄文時代晩期のものがほとんどであるが，ここでの考察では島地・伊東（1988）による弥生時代以降の木製品の樹種構成に関する研究成果に基づいて，以下に各用途ごとに樹種構成の特徴を述べる。

A　土木材

土木材としたのは板材と杭材である。板材は合計14点（第103表）あり，不明広葉樹を含めて7種類が使用されていた。この中で，最も多かったのは不明広葉樹の8点（№33～35，38・40・41，46，49）で，他は各1点ずつであった。不明広葉樹とした試料は全て同じ樹種で，横断面はヤマモガシに類似するが，いずれも保存状態が悪く同定には至らなかった。しかし，今回同定を行なった板材の約半数が同種と考えられる不明広葉樹で占められていることは，縄文時代晩期の板材の用材に特定樹種の選択があったと思われる。今後は同時期の試料について同定を重ね，樹種名を明らかにすることが課題となろう。

また，№48の板材は，農具の部材（先端部）の可能性もあるとされる。樹種はアカガシ亜属であった。これまでの調査事例から，アカガシ亜属は農具に用いられる樹種として最も一般的であることが知られている。それを踏まえれば，今回の試料が農具の部材（先端部）であった可能性は十分考えられる。これについては，今後試料の加工状態や形態分類などについて，考古学的知

見からも慎重に調査を行なう必要があろう。

杭材は，クヌギ節２点（№19,28），コナラ節１点（№51）であった。島地・伊東（1988）によると，杭材に使用されている樹種は種類が豊富である。杭材として使用する材は，遠方から運んでくるというよりは，近辺で入手可能なものを使用すると考えられ，その樹種は比較的周辺植生を反映しているものと考えられる。今回は３点のみの同定であり周辺植生を考えることは困難であるが，少なくともクヌギ節，コナラ節が比較的近くに生育していたと考えられる。

B　農具

農具としたのは鍬・柄・農具の部材（農具先端）の３種類で，№62の石斧柄とされる試料は，ここでは柄として一括した。鍬は１点（№58）で，樹種はアカガシ亜属であった。島地・伊東（1988）によると，遺跡から出土した鍬，鋤の90％以上はアカガシ亜属であり，鍬，鋤の用材としてアカガシ亜属がごく一般的に用いられていたと推定される。香川県内では下川津遺跡（弥生時代～古墳時代）において鍬，鋤類の材同定を行なっているが，その樹種はアカガシ亜属が最も多く，他にはヤブツバキ，ケヤキ等が同定されている（島地・林，1990；能城・鈴木，1990）。これらから，本地域では縄文時代晩期にもアカガシ亜属が鍬などの農具の用材として適するものとされていたと考えられる。

柄は６点で，樹種はカヤ（類似種を含む）２点（№52,62），アカガシ亜属３点（№36,53,59），アオキ類似種１点（№60）であった。このうち，アカガシ亜属は鍬・鋤と同様に柄としても高率で検出されている（島地・伊東，1988）。№60のアオキは類似種なので確実なことは言えないが，強度があり，柄として適当な径や長さが得られることなどから選択されたものかもしれない。２点検出されたカヤは，柄に使用されている針葉樹の中では最も多く出土している樹種である。特に石斧の柄に検出例が多く，№62は適材適所の好例と言えるかもしれない。下川津遺跡では，柄に使用されている樹種が豊富であり，樹種選択が行なわれたものと身近にあった木材を利用したものが混在していることが推定されている（能城・鈴木，1990）。本遺跡の同定結果でも，分析点数に対して樹種が多いとも思えるが，いずれも類例が比較的多い樹種であることから，ある程度の樹種選択が行なわれた結果と思われる。

農具の部材（農具先端）は２点（№63,65）で，カヤ類似種とクヌギ節であった。クヌギ節は，関東地方ではしばしばアカガシ亜属の代用品として用いられることがある樹種である。カヤの例はあまり知られておらず，材の強度がアカガシ亜属やクヌギ節よりも劣ることを考えると，クヌギ節やアカガシ亜属の農具とは違う目的に使用されていた可能性もある。

C　用途不明品

加工木，棒状，炭化材が含まれる。いずれも用途が明確でないため考察は控える。なお，№54

・55，№56・57は，それぞれ同一個体である可能性が指摘されているが，樹種はそれぞれ同じであった。特に，№56・57の各試料は組織の劣化等がよく似ていた。したがって，これらは同一個体である可能性が大きい。

D　自然木

ここでは枝，樹皮，植物遺体が含まれる。樹皮と植物遺体とされる試料についてはそのほとんどが樹種を特定できず，唯一樹皮とともに材が残存していた№12がモミ属に同定できた。枝は10点あり，ハンノキ属が６点（№７・21・23・24・26・29）で最も多く，他はコナラ節（№25），クリ（№20），ヤマグワ類似種（№18），ミズキ属類似種（№27）が各１点であった。なお，ハンノキ属の６点のうち№23・24は検出状況から同一個体の可能性がある。同定された種や属，節は現在の川辺林等でもみることができ，縄文時代晩期の自然河川（ＳＲ01）沿いにこれらの樹種が生育していたと推定される。

４．まとめ

自然河川（ＳＲ01）から出土した材は，縄文時代晩期に属する凸帯文土器と共伴して出土したことから，同時代時期に相当するとされる。四国地方や中国地方では，木製品をはじめとする木材の同定報告事例が他地域と比較して少ない。また，本地域における樹種同定事例では弥生時代以降のものがほとんどであるため，今回のように縄文時代晩期の木製品については，現在のところ資料の蓄積段階である。島地・伊東（1990）などによるこれまでの弥生時代以降の農具の樹種同定事例に従えば，今回の木製品はほぼ同様の樹種構成が確認された。今後，類例の同定事例を蓄積する他に，花粉分析などにより縄文時代以降の本地域周辺の古植生を明らかにし，比較・検討を行なうことも，用材選択を推定する上で重要であろう。

註　№２は炭化材である。また，樹枝とされる№23・24，加工木とされる№54・55および№56・57の各試料は，出土状況などから同一個体と考えられている。

〈引用文献〉

平井信二（1979～1982）木の辞典　第１巻～第17巻　かなえ書房

能城修一・鈴木三男（1990）報告２　昭和63年度調査の分析委託結果「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡　第２分冊」P.533～567　香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団

島地　謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧　P.296　雄山閣

島地　謙・林　昭三（1990）報告２　昭和61年度調査の分析委託結果「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡　第２分冊」P.520～532　香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団

第102表 林・坊城遺跡から出土した木材の樹種

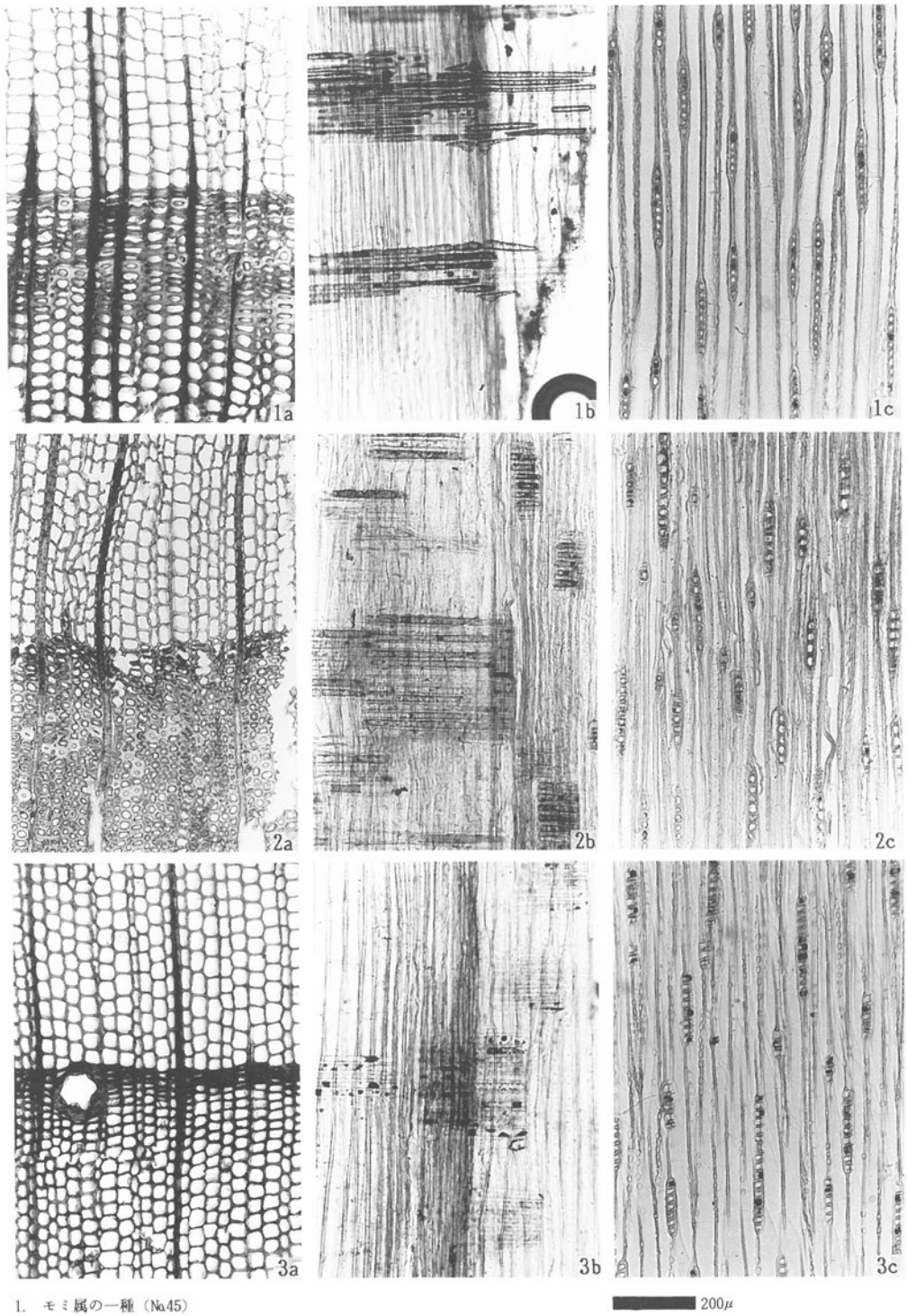
No.	検出遺構	用途	樹種名
1	SR01流路A 下層	土木材 板材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
2	SR01流路A 下層	用途不明 炭化材	ヒノキ科の一種
7	SR01流路B 下層	自然木 枝	ハンノキ属の一種
12	SR01流路A 下層	自然木 樹皮	モミ属の一種
13	SR01流路A 下層	自然木 樹皮	樹皮
18	SR01流路A 下層	自然木 枝	ヤマグワ類似種
19	SR01流路A 下層	土木材 杭材？	コナラ属コナラ亜属クヌギ節類似種
20	SR01流路A 下層	自然木 枝	クリ
21	SR01流路A 下層	自然木 枝	ハンノキ属の一種
22	SR01流路A 下層	自然木 樹皮	樹皮
23	SR01流路A 下層	自然木 枝	ハンノキ属の一種
24	SR01流路A 下層	自然木 枝	ハンノキ属の一種
25	SR01流路A 下層	自然木 枝	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
26	SR01流路A 下層	自然木 枝	ハンノキ属の一種
27	SR01流路A 下層	自然木 枝	ミズキ属類似種
28	SR01流路A 下層	土木材 杭材？	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
29	SR01流路A 下層	自然木 枝	ハンノキ属の一種
30	SR01流路A 下層	自然木 植物遺体	不明
33	SR01流路A 下層	土木材 板材	広葉樹
34	SR01流路A 下層	土木材 板材	広葉樹（No.33と同一種）
35	SR01流路A 下層	土木材 板材	広葉樹（No.33と同一種）
36	SR01流路A 下層	農具 柄	コナラ属アカガシ亜属の一種
37	SR01流路A 下層	土木材 板材	モミ属類似種
38	SR01流路A 下層	土木材 板材	広葉樹（No.33と同一種）
40	SR01流路A 下層	土木材 板材	広葉樹（No.33と同一種）
41	SR01流路A 下層	土木材 板材	広葉樹（No.33と同一種）
42	SR01流路A 下層	土木材 板材	ツガ属の一種
43	SR01流路A 下層	土木材 板材	マツ科の一種
45	SR01流路A 下層	用途不明 棒状	モミ属の一種
46	SR01流路A 下層	土木材 板材	広葉樹（No.33と同一種）
47	SR01流路A 下層	用途不明 棒状	コウヤマキ
48	SR01流路A 下層	土木材 板材 農具先端？	コナラ属アカガシ亜属の一種
49	SR01流路A 下層	土木材 板材	広葉樹（No.33と同一種）
50	SR01流路A 下層	土木材 板材	ヒノキ科の一種
51	SR01流路A 下層	土木材 杭材？	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
52	SR01流路A 下層	農具 柄？	カヤ
53	SR01流路A 下層	農具 柄？	コナラ属アカガシ亜属の一種
54	SR01流路A 下層	用途不明 加工木	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
55	SR01流路A 下層	用途不明 加工木	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
56	SD02	用途不明 加工木	マキ属類似種
57	SD02	用途不明 加工木	マキ属類似種
58	SR01流路A 下層	農具 鍬	コナラ属アカガシ亜属の一種
59	SR01流路A 下層	農具 柄	コナラ属アカガシ亜属の一種
60	SR01流路A 下層	農具 柄	アオキ類似種
62	SR01流路A 下層	農具 石斧柄	カヤ類似種
63	SR01流路A 下層	農具 農具先端	カヤ類似種
64	SR01流路A 下層	用途不明 加工木	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
65	SR01流路A 下層	農具 農具先端	コナラ属コナラ亜属クヌギ節類似種
66	SR01流路A 下層	用途不明 加工木	針葉樹

第103表 林・坊城遺跡出土木材の用途別樹種構成

用途 / 樹種名	土木材		農具			用途不明			自然木			合計
	板材	杭材	鍬	柄	農具先端	加工木	棒状	炭化材	枝	樹皮	植物遺体	
モミ属※	1						1			1		3
ツガ属	1											1
マツ科	1											1
コウヤマキ							1					1
ヒノキ科	1							1				2
マキ属※						2						2
カヤ※				2	1							3
ハンノキ属※									6			6
クヌギ節	1	2			1	3						7
コナラ節		1							1			2
アカガシ亜属	1		1	3								5
クリ									1			1
ヤマグワ※									1			1
アオキ※				1								1
ミズキ属※									1			1
不明	8					1					1	10
樹皮										2		2
合計	14	3	1	6	2	6	2	1	10	3	1	49

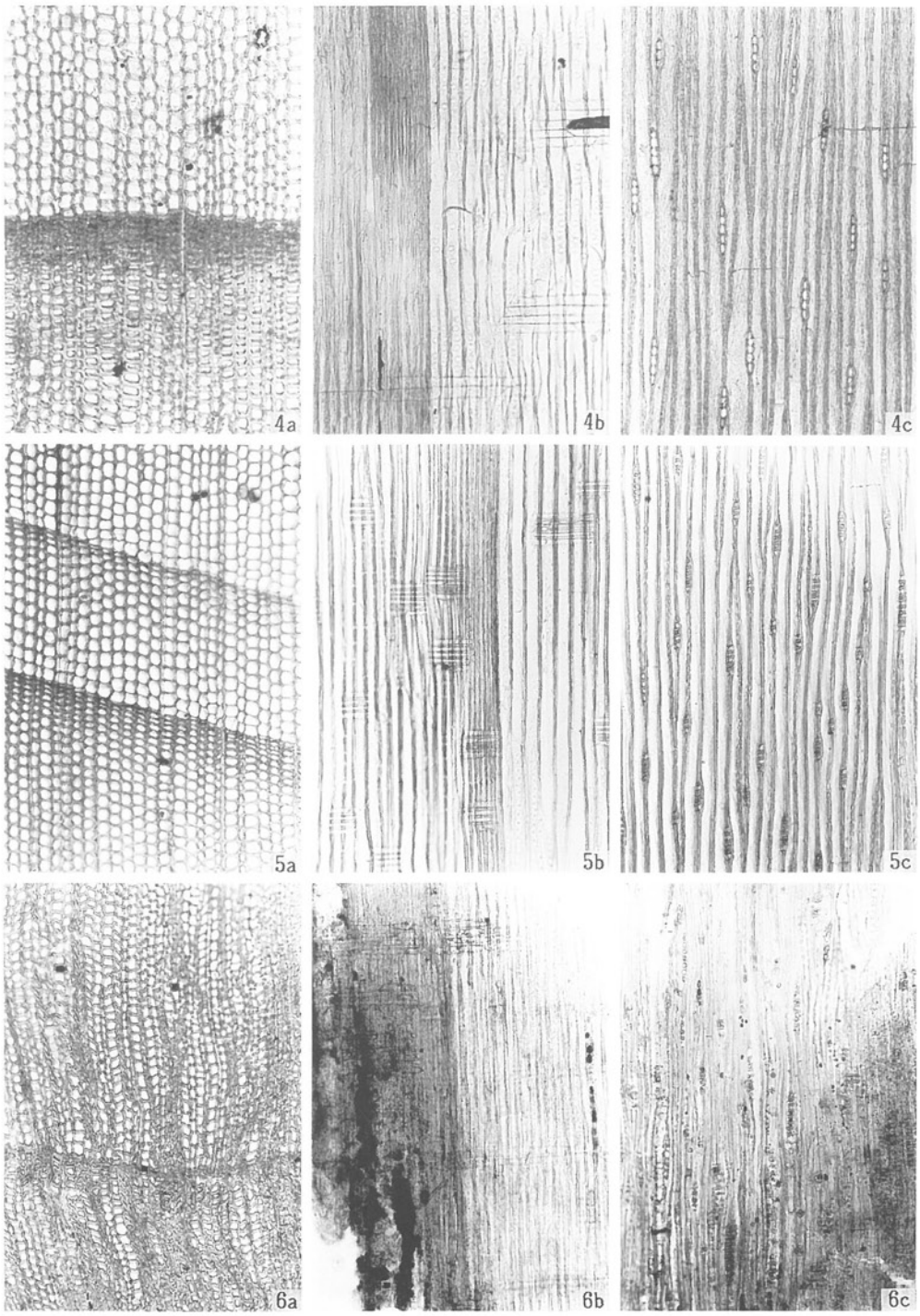
・ 試料点数は今回分析に出した点数である
・ ※は類似種または類似種を含む樹種
・ No.48は板材として数えている

第164図　材の顕微鏡写真①



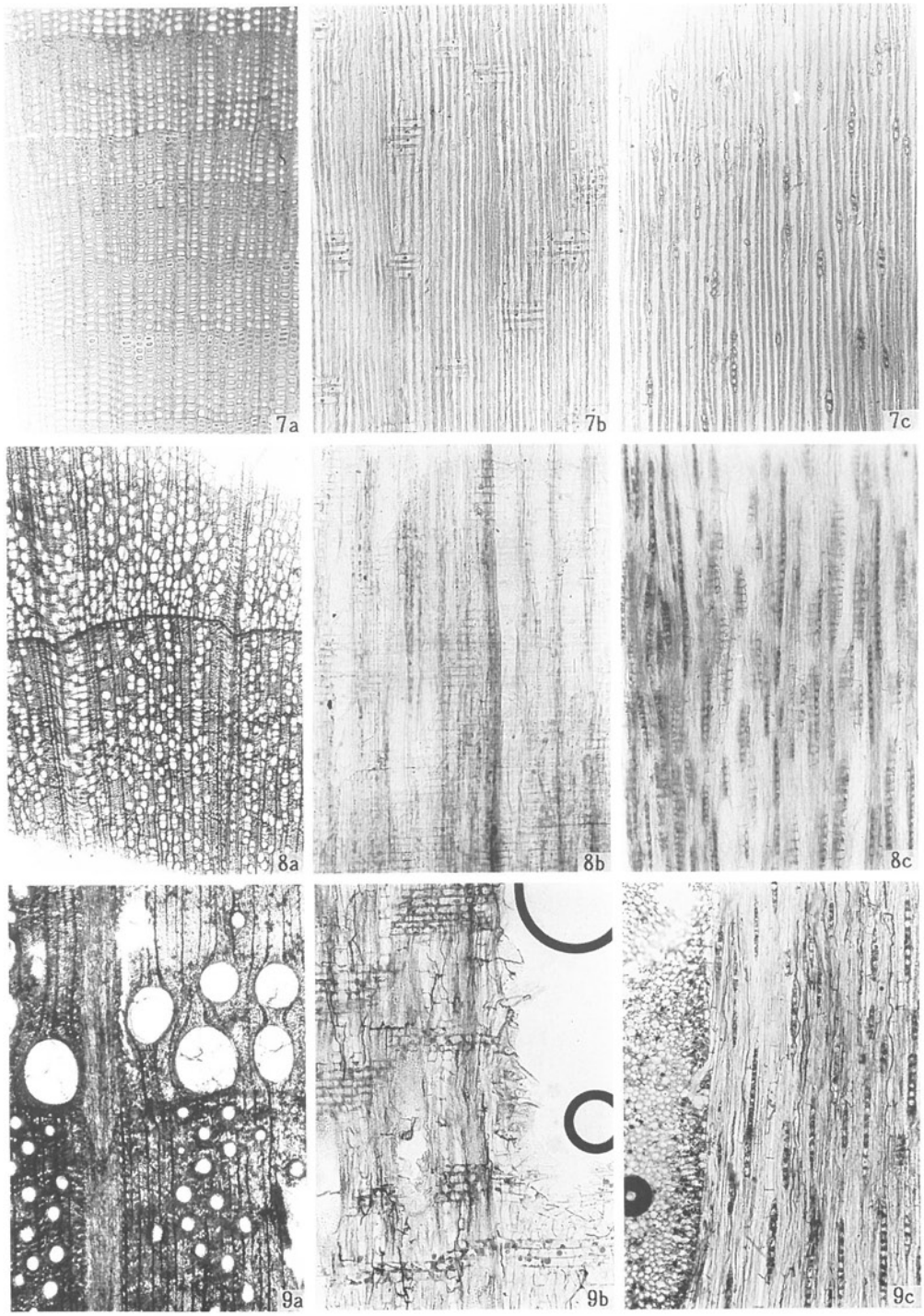
1.　モミ属の一種（No.45）
2.　ツガ属の一種（No.42）
3.　マツ科の一種（No.43）
　a：横断面，b：放射断面，c：接線断面

第165図　材の顕微鏡写真②



4.　コウヤマキ（No.47）
5.　ヒノキ科の一種（No.50）
6.　マキ属類似種（No.56）
　a：横断面，b：放射断面，c：接線断面

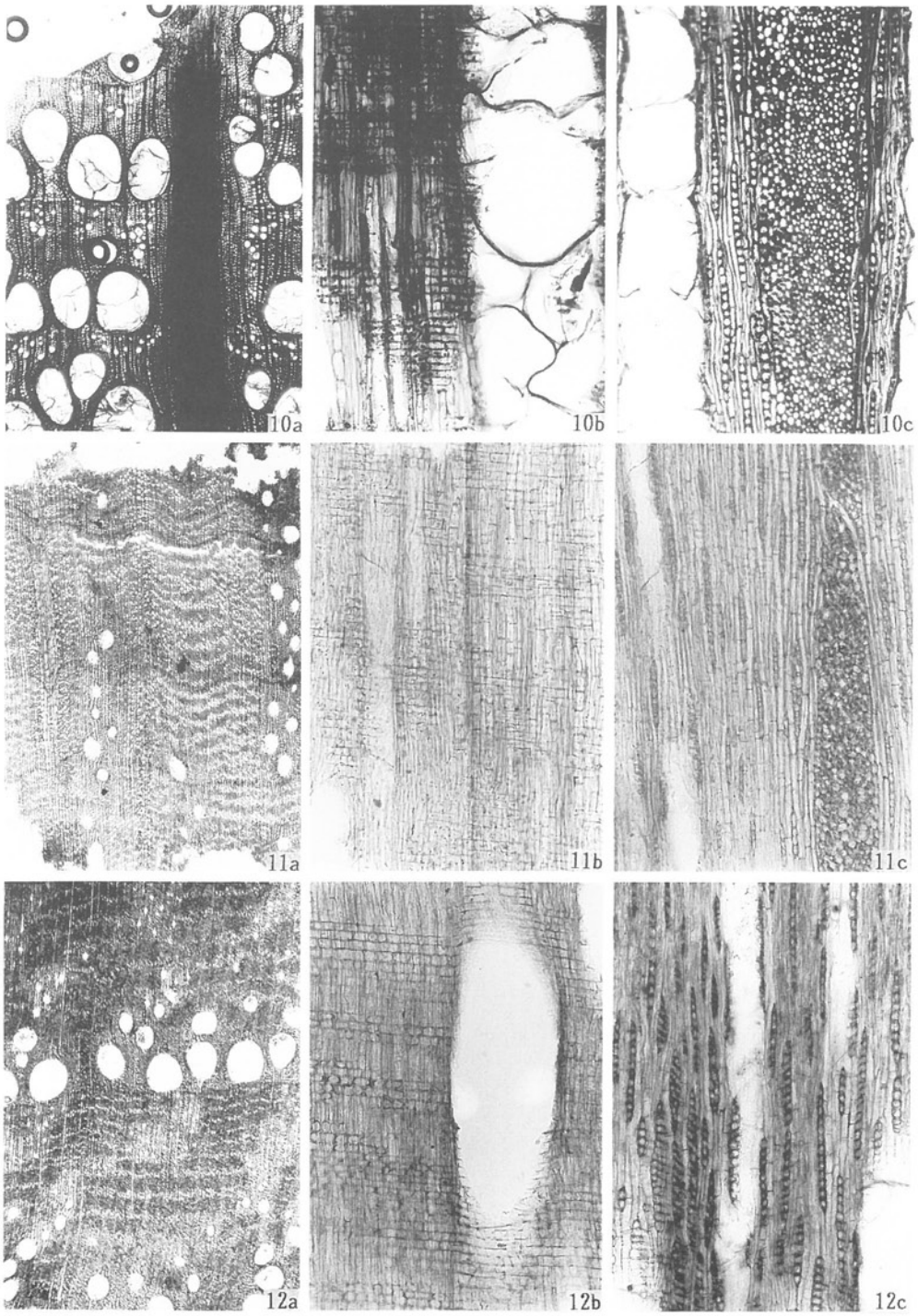
第166図　材の顕微鏡写真③



7.　カヤ類似種（№62）
8.　ハンノキ属の一種（№26）
9.　コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種（№28）
　a：横断面，b：放射断面，c：接線断面

200μ：8 a，9 a
200μ：7 a－c，8 b－c，9 b－c

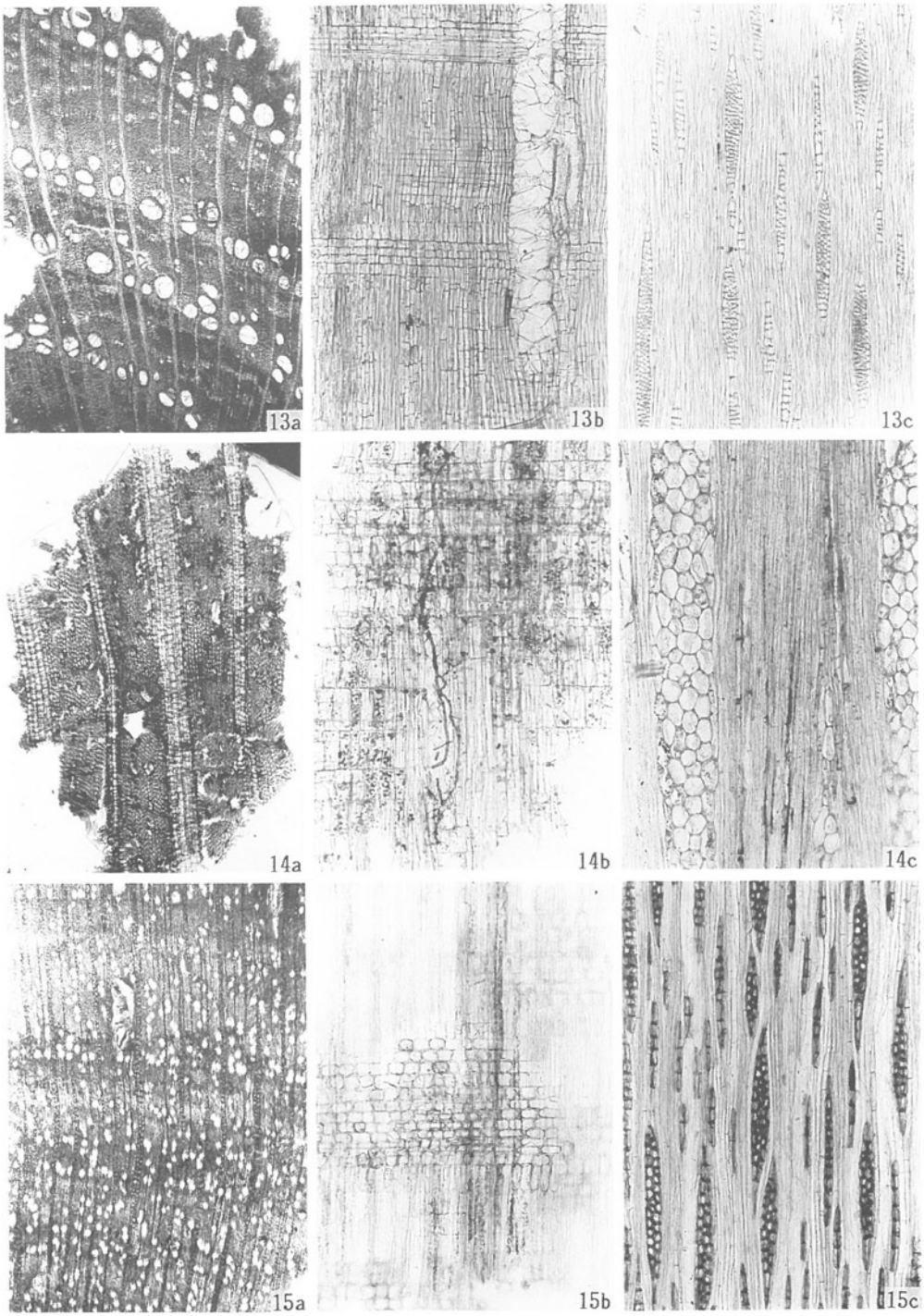
第167図　材の顕微鏡写真④



10.　コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種（No.25）
11.　コナラ属アカガシ亜属の一種（No.36）
12.　クリ（No.20）
　a：横断面，b：放射断面，c：接線断面

200μ：a
200μ：b，c

第168図　材の顕微鏡写真⑤



200μ：a
200μ：b，c

13.　ヤマグワ類似種（No.18）
14.　アオキ類似種（No.60）
15.　ミズキ属類似種（No.37）
　a：横断面，b：放射断面，c：接線断面

第２節　花粉分析とプラント・オパール分析

林・坊城遺跡の調査区のほぼ中央で埋没自然河川（ＳＲ01）を検出した。この自然河川は河川域の幅が約80ｍと広く，比較的ゆっくりと埋没していったことが調査の結果から判明している。本遺跡では畦畔状遺構など稲作を積極的に示唆する遺構は検出されなかったものの，自然河川内の流路からは縄文時代晩期の凸帯文土器とともに木製農耕具が出土しており，当時またはそれ以降に，本遺跡周辺で稲作が行なわれていた可能性がある。また，この自然河川の埋土は粘性の強い土層であり，花粉などが比較的良好な状態で遺存していることが推定できた。

そこで本遺跡の古環境の復元と稲作の消長を検討することを目的として，花粉分析とプラント・オパール分析を行なった。土壌試料は自然河川内の２本の流路（流路Ａ・流路Ｂ）のそれぞれ南壁土層断面で採取している（第164図参照　なお各地点の土層柱状図は第165・166図に示している）。また，流路Ａの下層の埋土を水洗選別して検出した種実化石の同定も併せて行なった。

Ａ　花粉分析

１．分析方法

湿重約10ｇの試料について，HF処理，重液分離（ZnBr2：比重2.2），アセトリシス処理，KOH処理の順に物理・化学処理を施し，花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し，光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら，出現する種類（Taxa）の同定・計数を行なう。

結果は，同定・計数結果の一覧表と花粉化石群集の層位分布図として示す。なお，図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは，種類間の区別が困難なものである。また層位分布図中の各種類の出現率は，木本花粉が木本花粉総数，草本花粉・シダ類胞子が総花粉・胞子数から不明花粉を除いた数を基数として百分率で算出してある。

２．結果

⑴　ＳＲ01流路Ａ南壁

花粉分析結果を第104表・第167図に示す。花粉化石は全試料から比較的多く検出される。化石の保存状態は，６～２層（試料番号４～２）で悪く，他の試料では良好である。

花粉化石群集は，層位的には３層（試料番号３）・２層（試料番号２）の間の層準を境として急激に変化する。３層（試料番号３）までは，木本花粉ではアカガシ亜属が高率に出現し，次いでコナラ亜属が高率に出現する。このほかにスギ属，モミ属，ツガ属，クリ属－シイノキ属などを伴う。このうちツガ属は上位に向けて漸増傾向を示す。草本花粉ではイネ科が上位に向けて増加傾向を示し，19層（試料番号９）で高率に出現するようになる。このほかにヨモギ属，カヤツ

リグサ科や水生植物のガマ属，オモダカ属，ヒルムシロ属，ミクリ属，サジオモダカ属などを伴う。

2層（試料番号2）・1層（試料番号1）になると針葉樹のマツ属が増加し，逆にアカガシ亜属・コナラ亜属が減少する。草本花粉は種類数が減少し，水生植物もほとんど産出しなくなる。栽培植物のソバ属が2層（試料番号2）からわずかに出現する。

(2) ＳＲ01流路Ｂ南壁

花粉分析結果を第104表・第167図に示す。花粉化石は全試料から比較的多産する。化石の保存状態は，7層（試料番号14）・5層（試料番号13）では悪く，他の試料では良好である。

花粉化石群集は，層位的には8層（試料番号15）・7層（試料番号14）の間の層準を境として変化する。8層（試料番号15）までは木本花粉ではアカガシ亜属が最も高率に出現し，次いでコナラ亜属が高率に出現する。このほかにスギ属・ツガ属・モミ属・クリ属－シイノキ属などを伴う。草本花粉ではイネ科が上位に向けて増加傾向を示す。このほかにオモダカ属・ミズアオイ属など水生植物の種類を伴う。

7層（試料番号14）になると，針葉樹のマツ属が増加傾向を示し，5層（試料番号13）で優占する。草本花粉ではイネ科が高率に出現するようになる。水生植物の種類が下位より連続して出現する。栽培植物のソバ属が5層（試料番号13）からわずかに出現する。

3．花粉分析からの考察

(1) 花粉化石群集の比較

広域的な植生を反映していると考えられるスギ属・アカガシ亜属・コナラ亜属などの風媒花の主要木本花粉を中心に，流路Ａと流路Ｂの花粉化石群集の層位的変化を比較していく。

流路Ａと流路Ｂの主要木本花粉の層位的変化は類似している。すなわち，下位よりコナラ亜属・アカガシ亜属が高率に出現する花粉化石群集から，マツ属が高率に出現する花粉化石群集へ変遷しており，それぞれの群集が認められる層位は生層序学的に対比される。

このような生層序学的な対比は，遺物の出土状況から推定される両地点の堆積層の時代性による層序対比とは食い違いが生じている。すなわち，両地点において花粉化石群集が変化する層位は，流路Ａでは弥生時代後期～古墳時代初頭とされる埋積物の上位，流路Ｂでは弥生時代後期～古墳時代初頭とされる埋積物の下位である。この原因としては①自然河川埋積物の堆積時期と遺物の示す時代性が必ずしも一致するとは言えないこと，②両地点とも花粉化石群集が変化する層位前後の花粉化石の保存が悪く，これらの層位における花粉化石の組成が偏っている恐れがあり，変化する層準を確実に把握できなかったこと，③上層から攪乱などにより上層の花粉化石が落ち込み，組成が歪曲されたこと，④主要木本花粉としたものが局所的に生育していたものに由

来しており，組成が偏ったために層位的な変化を確実に把握できなかったことなどの要因が考えられる。いずれにしても，花粉化石群集は少なくとも縄文時代晩期以降の時期に上記のような変遷をたどったものと考えられる。

(2) 花粉化石群集から推定される森林植生および低地の古環境

本地域における縄文時代晩期以降の森林植生は，上記の花粉化石群集の層位的変化から，カシ林期，マツ林期と順に変化したことが推定される。各森林期の植生および当時の低地の環境について述べる。なお，本遺跡の立地を考えると，花粉化石群集が反映している植生は比較的広い範囲を想定しておく必要がある。

・カシ林期（流路Ａ20～３層，流路Ｂ28～８層）

本時期は，アカガシ亜属・コナラ亜属を主体とし，ヤマモモ属・クマシデ属－アサダ属・クリ属－シイノキ属などから構成される森林植生が成立していた。また，ヤマモモ属は暖温帯に分布するヤマモモに由来するものと思われる。これらのことから，当時の森林植生はカシ類・ナラ類を主体とする暖温帯性の森林であったと考えられる。

一方，花粉化石群集において比較的多産しているスギ属・モミ属・ツガ属などの針葉樹の種類も，当時の植生を構成する要素であったと考えられる。当時これらの針葉樹がどこに分布していたのかは不明であるが，これらの針葉樹の種類が暖温帯から冷温帯にかけての推移帯に成立する中間温帯林の構成要素を含むことから，後背山地に分布していた可能性がある。この時期の森林植生に関する資料は，丸亀平野東端に立地する下川津遺跡（坂出市川津町所在）でも得られており，同様な花粉化石群集および森林植生が推定されている。このことは縄文時代晩期以降の時期に，両平野地域において，同様な暖温帯性の森林植生が存在していたことを示唆する。

一方，この時期の河川内およびその堆積域近辺には，ガマ属・ヒルムシロ属・ミクリ属・オモダカ属・サジオモダカ属などの水生植物の種類が生育する水湿地が存在したと推定できる。

・マツ林期（流路Ａ２・１層，流路Ｂ７・５層）

本時期になると周辺の森林植生は急激に変化する。前時期に卓越していたアカガシ亜属などの広葉樹の種類は急激に分布を狭め，マツ属を主体とする植生へ変化したと考えられる。この急激な変化は，マツ属花粉化石の形態が陽樹である複維管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）に類似するものであること，マツ属の出現と同時に栽培植物のソバ属花粉化石が検出されることから，人間の活動が活発になり，カシ類・ナラ類などの森林が破壊され，二次林としてのマツ林が分布拡大したことを示唆するものと考えられる。このような植生の変化は，上記した下川津遺跡でも認められている。同遺跡のマツ林への変化する時期は，平安時代頃と考えられている。林・坊城遺跡の場合には，出土遺物などから弥生時代以降と推定される。

B　植物珪酸体（プラント・オパール）分析

1．分析方法

試料約５ｇについて，過酸化水素水と塩酸による有機物と鉄分の除去，超音波処理による資料の分散，沈降法による粘土分の除去，重液分離（臭化亜鉛：比重2.3）を順に行ない，植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡し易い濃度に希釈したのち，カバーガラス上に滴下し，乾燥させる。これを，プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

検鏡は光学顕微鏡下で，出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来する植物珪酸体（以下，短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来する植物珪酸体（以下，機動細胞珪酸体と呼ぶ）を，近藤・佐瀬（1986）の分類を参考にして同定・計数する。

結果は，検出された植物珪酸体の種類と個数を一覧表で示す。また，短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体ごとに，それぞれの総数を基数とする百分率を算出し，植物珪酸体組成の層位的変化図を作成する。

2．結果

結果を第105表と第168図に示す。植物珪酸体は全試料から多数検出される。構成比では，短細胞珪酸体が占める割合が高く，機動細胞珪酸体より著しく検出個数が多い。保存状態は，短細胞珪酸体で良好であるが，機動細胞珪酸体は，表面に多数の小孔（溶食痕）が認められ，不良である。以下に，分析調査地点ごとの植物珪酸体組成の層位的変化を述べる。

(1)　ＳＲ01流路Ａ南壁

20～１層（試料番号12～１）では，植物珪酸体組成の層位的変化は認められず，タケ亜科の機動細胞・短細胞珪酸体が高率に産出し，ヨシ属・コブナグサ属・イチゴツナギ亜科などが随伴ないし稀に産出する。19～１層（試料番号11～１）では，栽培植物のイネ属が連続して検出され，上位ほど出現率が増加する傾向を示す。

(2)　ＳＲ01流路Ｂ南壁

29～５層（試料番号18～13）では，流路Ａと同様に植物珪酸体組成の層位的変化は認められない。タケ亜科の機動細胞・短細胞珪酸体が高率に産出し，ヨシ属・コブナグサ属・イチゴツナギ亜科などを随伴ないし稀に産出する。栽培植物のイネ属は各層から検出される。その出現率は，流路Ａの弥生時代前期とされる15層，弥生時代後期～古墳時代初頭とされる６層と比較して，短細胞珪酸体が低率であるが，機動細胞珪酸体は高い。

3．植物珪酸体分析からの考察

流路Ａでは，栽培植物のイネ属は縄文時代晩期とされる19層から上位の層準までほぼ連続して検出された。その出現率は19層で低く，21～１層でタケ亜科に次いで高い値を示す。

現水田耕作土中のイネ属植物珪酸体の出現率に関する研究成果として，近藤（1988）の調査例がある。それによれば，イナワラ堆肥連用（８年間，500kg/10ａ/年）の現水田耕作土のイネ属機動細胞植物珪酸体の出現率は16％を示すとしている。この値と今回の分析結果を比較すると，１層・３層・６層・15層・21層で高く，２層・４層・19層で低い。また，各層からは機動細胞珪酸体とともに短細胞珪酸体が検出されている。

一方，流路Ｂでは，栽培植物のイネ属は28～５層から連続して検出された。出現率は全般的に流路Ａよりも高く，先述した現水田耕作土のイナワラ堆肥連用の値と比較しても高い。

以上のように，縄文時代晩期とされる黒色粘質土（流路Ａ19層，流路Ｂ28層）から上位に向けて連続して栽培植物のイネ属が検出されていることから，本遺跡周辺においてイネの栽培が行なわれていたと推測される。しかし今回の発掘調査において，自然河川内に相当する時期の畦畔などは検出されていないことから，同河川内で稲作が行なわれていたと断定するには疑問が残る。

また，イネ科草本植生については，流路Ａ・流路Ｂにおいて，植物珪酸体組成の層位的変化は認められず，いずれの層準においてもタケ亜科が高率に出現し，ヨシ属・コブナグサ属・イチゴツナギ亜科などが随伴ないし稀に出現した。このことから，イネ科草本植物相は時代的に大きく変化しなかったことが考えられる。

４．種実同定の方法

試料を肉眼ないし実体顕微鏡下で観察し，種類（Taxa）の同定を行なった。また，水洗選別試料については0.5㎜の篩にかけ，１㎜以上の種実化石を拾いだし，実体顕微鏡下で観察し，同定を行なった。

５．種実同定の結果

同定結果を一覧表として第106表に示す。検出された種類は33種類である。各種類の形態的特徴を以下に述べる。

・コナラ属（*Quercus* sp.）ブナ科　堅果

堅果が検出された。黒褐色。側面観は円形，上面観は円形。長さ11㎜，幅10㎜程度。表面は滑らかである。

・アカガシ亜属（*Cyclobalanopsis* sp.）ブナ科　堅果

堅果が検出された。黒褐色。側面観は楕円形，上面観は円形。長さ18㎜，幅10㎜程度。先端部に

は同心円状の横輪がある。

・ムクノキ（*Aphananthe aspera*（Thunb.）Planch.）ニレ科　核

核の破片が検出された。灰黒色。形状は本来は球形で先端が尖るが欠けている。大きさは欠けているため不明である。表面には多数のいぼ状の突起が密に配列し，ざらつく。

・トチノキ（*Aesculus turbinata* Blume）トチノキ科トチノキ属　種子

多くの種皮片が得られた。茶褐色～黒色。光沢のある黒い部分と光沢のない部分とが存在するものをトチノキの種皮とした。種皮はやや薄いが硬い。

・ブドウ属（*Vitis* sp.）

種子の破片が検出された。黒褐色。側面観は卵形，上面観は本来は楕円形であるが欠けている。長さ3.8㎜程度。側面には「さじ状」のへそと，反対の側面には本来は２つの穴があるが欠けている。

・ヒルムシロ属（*Potamogeton* sp.）ヒルムシロ科　種子

種子が多数検出された。茶褐色～暗褐色。側面観は広卵形，上面観は楕円形。長さ3.5㎜，幅2.2㎜程度。先端は花柱が宿存しており，尖っている。背面部分には稜がありはずれやすい。表面はざらついている。

・ヘラオモダカ（*Alisma canaliculatum* A. Br. et Bouche）オモダカ科　果実

果実が検出された。褐色。側面観は楕円形，上面観は扁平な扇形。長さ2.2㎜，幅1.3㎜程度。背面部分には１本の深い溝がある。果皮はやわらかい。

・イネ（*Oryza sativa* Linne）イネ科　穎

穎の破片が検出された。淡褐色。長さ7.0㎜，横軸2.3㎜程度。穎の表面には微細な顆粒状突起が密に配列する。

・イヌビエ属（*Echinochola* sp.）イネ科　穎・穎果

穎と果実が検出された。穎は淡褐色。側面観は楕円形，上面観は片凸レンズ形。長さ4.0㎜，幅2.1㎜程度。表面は平滑で光沢がある。穎果は暗褐色。側面観は楕円形，上面観は片凸レンズ形。長さ4.0㎜，幅2.0㎜程度。表面は平滑である。小穂の形状が不明であることからイヌビエ属とする。

・スゲ属A（*Carex* sp. A）カヤツリグサ科　果実

果実が検出された。黒褐色。側面観は先端が尖る広卵形，上面観は扁平形。長さ2.0㎜，幅1.5㎜程度。表面には微細な網目模様が散在する。

・スゲ属B（*Carex* sp. B）カヤツリグサ科　果実

果実が検出された。黒褐色。側面観は円形に近い楕円形，上面観は扁平な楕円形。長さ1.5㎜，幅1.5㎜程度。果皮はやわらかい。表面はざらつき，最外層には網目模様がある。

・スゲ属C（*Carex* sp. C）カヤツリグサ科　果実

果実が検出された。黄茶褐色。側面観は楕円形，上面観は三稜形。長さ2.4㎜，幅1.7㎜程度。表面には微細な網目模様が存在する。

・ホタルイ属A（*Scirpus* sp. A）カヤツリグサ科　果実

果実が検出された。黒色でやや光沢がある。側面観は広倒卵形で上端はやや尖り，上側面観は両凸レンズ形。長さ2.0㎜，幅1.5㎜程度。表面には横軸方向によわい平行な横しわがある。基部から針状の刺針を上方に向かってもつ。

・ホタルイ属B（*Scirpus* sp. B）カヤツリグサ科　果実

果実が検出された。黒色で光沢がある。側面観は広倒卵形，上面観は三角形。長さ2.0㎜，幅1.7㎜程度。表面には細かい凹凸があり，横軸方向に平行な横しわがある。刺針状の花被が数本存在し，基部から刺針を上方に向かってもつ。

・ホタルイ属C（*Scirpus* sp. C）カヤツリグサ科　果実

果実が検出された。黒色でやや光沢がある。側面観は先端部で尖る倒卵形，上面観は三角形。長さ2.0㎜，幅1.5㎜程度。大きさは2㎜程度の広倒卵形。表面には細かい凹凸がある。

・ホタルイ属（*Scirpus* sp.）カヤツリグサ科　果実

果実の破片や保存の悪いものが検出された。

・カナムグラ（*Humulus scandens*（Lour.）Merrill）クワ科　種子

種子の破片が検出された。灰色。側面観は本来は円形，上面観は本来は扁平な楕円形であるが欠けている。大きさは欠けている部分が多く不明である。種皮は薄く光沢がありやや硬い。表面は細かく不規則な凹凸がありざらつく。

・ギシギシ属（*Rumex* sp.）タデ科　果実

果実が検出された。黒褐色～褐色。側面観は卵形で上端はやや尖り，上面観は三稜形でそれぞれの稜はひれ状になる。長さ2.5㎜，幅1.5㎜程度。表面はざらつく。

・ミゾソバ（*Polygonum Thunbergii* Sieb. et Zucc）タデ科タデ属　果実

果実の破片が検出された。褐色～淡褐色。側面観は両端が尖る卵形，上面観は三角形であるが，押しつぶされて変形している。長さ3.1㎜，幅2.0㎜程度。基部に果柄である小突起がある。果皮は薄くやわらかい。表面は網目模様。

・タデ属A（*Polygonum* sp. A）タデ科　果実

果実が検出された。黒褐色。側面観は楕円形で上端はやや尖り，上面観は三稜形。長さ2.8㎜，幅1.9㎜程度。表面は滑らかに近いが，微細な模様が存在する。

・タデ属B（*Polygonum* sp. B）タデ科　果実

果実が検出された。黒色で鈍い光沢がある。側面観は楕円形で上端はやや尖り，上面観は扁平な楕円形でやや丸みをもつ。長さ2.8㎜，幅3.5㎜程度。表面は滑らかである。

・タデ属C（*Polygonum* sp. C）タデ科　果実

果実が検出された。黒褐色。側面観は先端がやや尖る卵形，上面観は三稜形。長さ2.5㎜，幅1.5㎜程度。表面は滑らかに近いが，微細な模様が存在する。

・タデ属D（*Polygonum* sp. D）タデ科　果実

果実が検出された。黒褐色。側面観は両端がやや尖る楕円形，上面観は楕円形。長さ3.2㎜，幅2.0㎜程度。表面は滑らかに近いが，微細な模様が存在する。

・タデ科（*Polygonaceae* sp.）果実

果実の破片および保存状態の悪いものが検出された。

・カラマツソウ属（*Thrictrum* sp.）キンポウゲ科　果実

果実が検出された。側面観は長倒卵形，上面観は楕円形。長さ3.4㎜，幅2.5㎜程度。表面には長軸方向に隆起線が数本走る。

・キンポウゲ科（*Ranunculaceae* sp.）果実

果実が検出された。側面観は円形に近い楕円形，上面観は扁平形。長さ2.1㎜，幅1.8㎜程度。表面に微細な模様が存在する。

・キケマン属（*Corydalis* sp.）ケシ科　種子

種子が検出された。黒色で鈍い光沢がある。側面観は円形，上面観は扁平な楕円形。長さ1.4㎜程度。

・オトギリソウ属（*Hypericum* sp.）種子

種子が検出された。黒色～黒褐色。円柱状楕円形。長さ1.0㎜，幅0.5㎜程度。表面に横長の網目が発達する。種皮は堅い。

・イヌコウジュ属（*Mosla* sp.）シソ科　果実

果実が検出された。茶褐色～黒褐色。円形に近い楕円形。大きさは1.5㎜程度。先端に「へそ」がみられる。表面全体には，粗い亀甲状の網目模様がある。

・メハジキ（*Leonurus japonicus* Houttuyn）シソ科　果実

果実が検出された。褐色～暗褐色。側面観は楕円形，上面観は一面が凸レンズ，残りの二面が平面の三角形。長さ2.2㎜，幅1.5㎜程度。表面はざらつく。

・ウリ科（*Cucurbitaceae* sp.）種子

種子の破片が検出された。暗褐色。側面観は本来は楕円形であるが欠けている。上面観は扁平形。長さは欠けているため不明。幅は5.0㎜程度。表面はざらつく。

・キク科A（*Compositae* sp. A）果実

果実が検出された。暗褐色。側面観は針形，上面観は狭倒卵形でやや扁平。長さ2.0㎜，幅0.8㎜程度。表面に数本の弱い隆線が走る。

・キク科近似種（cf. *Compositae* sp.）果実

果実が検出された。暗褐色。側面観は狭倒卵形，上面観はやや扁平形。長さ2.6㎜，幅1.2㎜程度。表面に数本の弱い隆線が走る。

6．植物珪酸体分析からの考察

木本植物では，高木のコナラ属，アカガシ亜属，ムクノキ，トチノキ，ツル性植物のブドウ属

が産出した。これらの種類は，当時の周辺の森林植生を構成する要素と考えられる。

草本植物では，水生植物のホタルイ属・スゲ属などのカヤツリグサ科やヒルムシロ属が多産した。このほかに水生植物のヘラオモダカや水域のすぐそばに生育するミゾソバが産出した。これらの種類は，当時の河川内もしくは河川近辺に生育していたものと考えられ，この時期の河川内はある程度水深のある水域であったと推定される。また，栽培植物のイネの穎が１粒であるが産出した。このことは栽培植物のイネが当時の河川周辺に存在したことを示唆する。また，栽培植物を含むイヌビエ属の穎と穎果が検出された。これが栽培植物に由来するかは不明であるが，イネとの同層・同試料は縄文時代晩期の栽培植物を検討する上で興味深い結果である。

７．花粉化石群集・植物珪酸体組成・種実化石から推定される古環境

今回の分析調査では，縄文時代晩期に形成されたと考えられる自然河川（ＳＲ01）の埋積物を中心にして花粉分析・植物珪酸体分析・種実同定を行なった。各分析結果については先述したとおりであるが，ここでは，木製品・自然木の材同定結果も含めて，自然科学分析調査成果をまとめて，本地域における森林植生，低地の古環境，農耕に関する総合解析を行なう。

(1) 森林植生

本地域における縄文時代晩期以降の森林植生に関しては，花粉化石群集の層位的変化に基づき，カシ林期・マツ林期の２時期に区分した。このうち，カシ林期に関しては，流路Ａにおいて縄文時代晩期とされる黒色粘質土から花粉化石以外にも種実化石や木製品・自然木など当時の植生を検討する上で有効な情報が得られている。

黒色粘質土から出土した木本植物に由来する化石は，花粉化石がモミ属・ツガ属・マツ属・スギ属など針葉樹６種類とアカガシ亜属・コナラ亜属をはじめとする広葉樹16種類である。種実化石では，アカガシ亜属・コナラ属・トチノキ・ムクノキ・ブドウ属の５種類が同定された。また，出土した木製品・自然木の樹種では，モミ属・ツガ属・マツ科・コウヤマキ・ヒノキ科・カヤ類似種の針葉樹６種類，ハンノキ属・クヌギ節・コナラ節・アカガシ亜属・クリ・ヤマグワ類似種・アオキ類似種・ミズキ属類似種の広葉樹８種類に同定されている。これら産出した樹種構成は，各化石間において調和的である。照葉樹林の主要構成種であるアカガシ亜属は花粉・種実・材のいずれでも産出しており，当時の植生が暖温帯性の森林であったことを示す。ただし，これらの種類がどのような群落を形成していたのかは不明であり，今後の研究成果に期待する部分が大きい。また，これらの樹種のうち，クルミ・アカガシ亜属・コナラ亜属・トチノキなどは可食植物もあり，当時は食用として利用されていた可能性もある。

このような森林植生は，古くとも弥生時代以降の時期になると変化した。すなわち，カシ類・ナラ類などは分布を狭め，マツ類が分布域を拡大した。この植生変化の原因については不明な点

が多いが，後述するように，弥生時代以降は稲作など人間の活動が活発になることを考えると，人間の植生干渉に起因するものと思われ，今日みられるようなアカマツの二次林が分布拡大したものと思われる。

(2) 低地の環境

縄文時代晩期とされる黒色粘質土（流路A19層，流路B28層）からは，ガマ属・ヒルムシロ属・ミクリ属・サジオモダカ・オモダカ属・ミズアオイ属などの水生植物の植物化石が多産した。これら水生植物の主な生育地は，ヒルムシロ属が池や河川の流水中，それ以外の種類は低湿地や池や河川の縁の比較的水深の浅い場所である。これらの種類は当時の河川内およびその堆積域に生育していたものと考えられ，河川内にはこれらの水生植物が生育する水湿地であったことが推定される。この水域のすぐそばにはミゾソバ・ヨモギ属などが生育しており，植物珪酸体分析で多産したタケ亜科などは微高地上に生育していたものと思われる。

弥生時代～古墳時代（流路A15～6層，流路B25～5層）になると，河川内には砂・シルトの細屑物の供給が増加する。この時期の河川内の堆積域には，オモダカ属などの水生植物が生育する水湿地が存在したと推定される。これらの堆積層からは栽培植物のイネ属の植物珪酸体が高率に出現していることから，この時期に本遺跡周辺で稲作が行なわれていた可能性がある。しかし，今回の発掘調査では水田跡が検出されなかったため，詳細は不明である。

(3) 縄文時代晩期の稲作について

今回の分析調査で注目すべき結果として，縄文時代晩期とされる諸手鍬などの木製農耕具が出土した黒色粘質土層（下層）から栽培植物とされるイネ属の種実化石（イネ穎の破片）およびイネ属の植物珪酸体が検出されたことである。

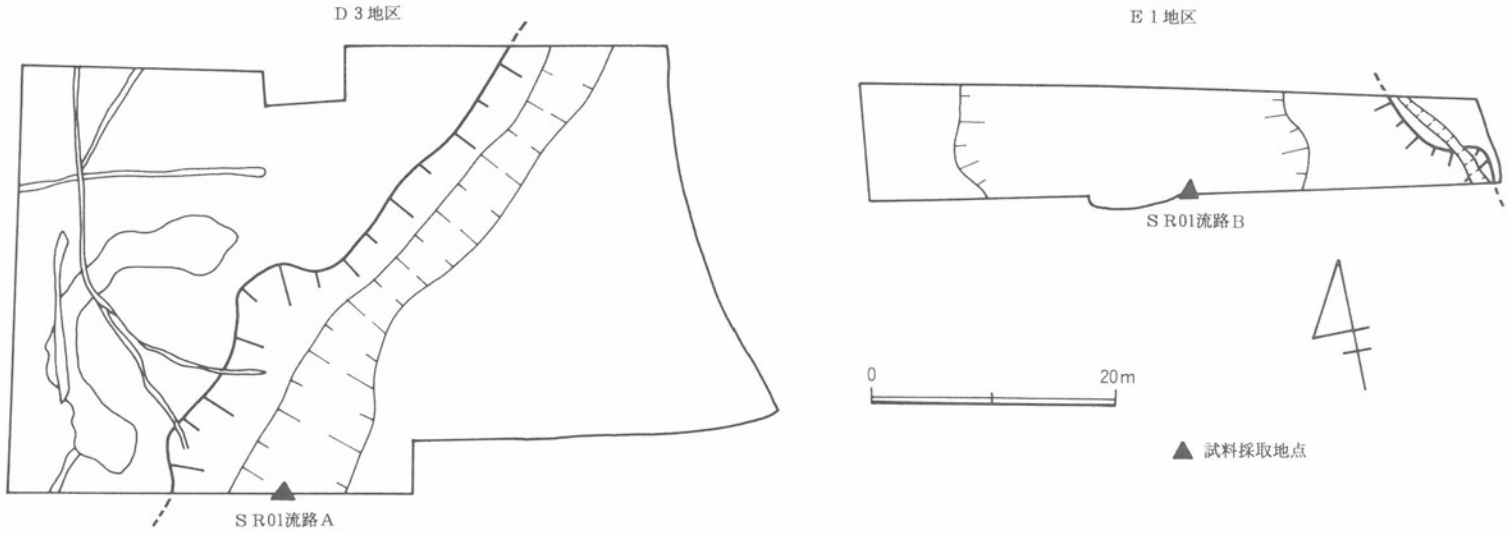
黒色粘質土中から産出した栽培植物のイネ属に由来する植物化石は，イネ属の葉部に形成される植物珪酸体とイネの穎である。本層の堆積環境は層相および花粉化石群集により水湿地のような環境下で堆積したことが推定されており，これらの植物化石は本層堆積時に取り込まれていたものである可能性が強い。黒色粘質土の堆積年代は，伴出遺物から縄文時代晩期と推定されている。縄文時代晩期における栽培植物のイネの存在は，とくに九州地方において多くの遺跡で確認されている。例えば，熊本県上南部遺跡の縄文時代晩期前葉に位置付けられる土器胎土中からイネのプラント・オパールが検出された事例，唐津市菜畑遺跡における縄文時代晩期後半（山ノ寺式期）の炭化米の検出事例などがある。

高松平野を含む讃岐平野地域では，縄文時代晩期のイネに由来する化石の出現に関する報告事例は皆無に等しい。また，弥生時代前期の水田跡については，近年の発掘調査において検出されるケースが増加しているが，縄文時代晩期の水田跡についてはこれまでに検出されていない。こ

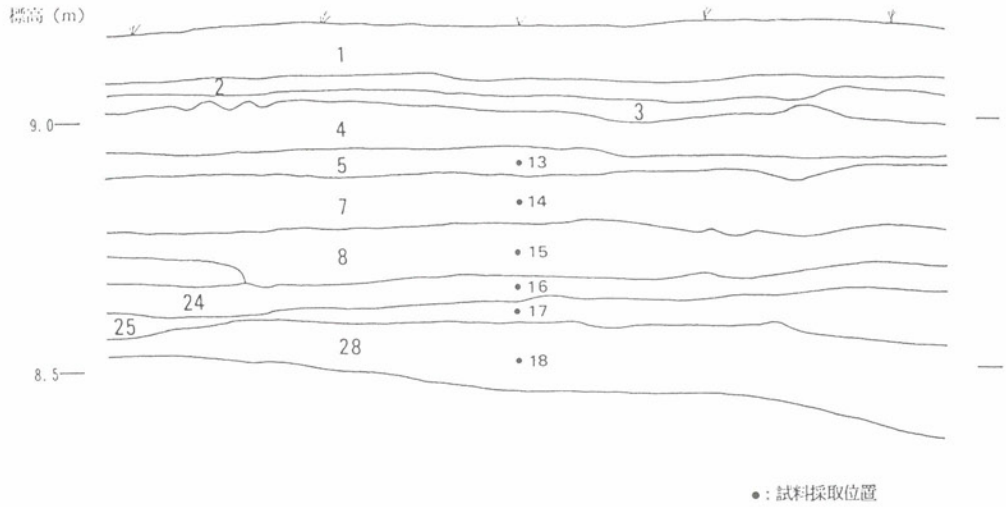
のような状況のなかで，今回の分析結果のみから縄文時代晩期に稲作が存在したことを判断することは難しい。また，これには①集水域である河川内の埋積物は上流域からの流れ込みなどにより再堆積し，それに伴って遺物や微化石が移動すること，②したがって，河川の形成された時代や時期決定が難しいこと，③河川の下層に埋積する縄文時代晩期とされる黒色粘質土中では，土壌学的一般に水田耕作が行なわれにくいことなどの諸要因が考えられ，今後，堆積物や堆積物中の流木あるいは木製品などについて放射性炭素年代測定を行ない，出土遺物との比較・検討や珪藻分析を応用した河川内の水域環境の推定，土壌理化学分析を応用した河川埋積物の土壌学的解析などを行ない，その上でイネの年代観について再検討することが必要である。

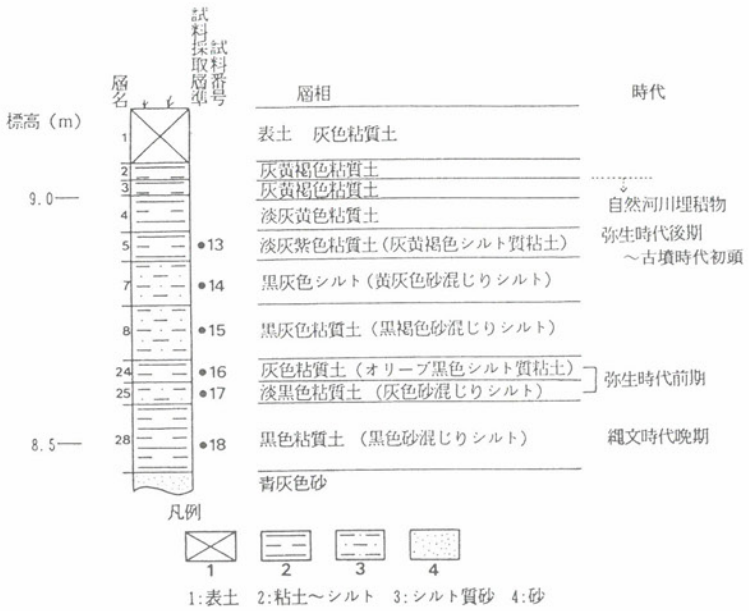
また，本層中からは栽培植物のヒエを含むイヌビエ属の穎と穎果が検出された。このイヌビエ属が栽培種のヒエであるとすれば，ヒエとイネが同時に存在したことになる。藤原（1990）は，弥生時代中期の水田土壌のプラント・オパール分析結果において，イネとともにキビ属（イヌビエの系統）のプラント・オパールが多産することから，当時の稲作がイネとヒエを同時に栽培していたと推定している。今回の分析結果は，そのような傾向と調和的であるようにも見られるが，上記したように縄文時代晩期の稲作に関する資料が少なく，埋積物の年代学的な検討を含めて今後の課題とされる。

上記してきたように，縄文時代晩期の稲作の存在については，考古学的にも課題が多い。今後は，周辺地域を発掘調査する際に現地調査を実施し，土層断面観察や記載を行ない，自然堆積層や遺構内埋積物など試料採取地点を複数設定し，植物珪酸体分析・イネ属同定などを様々な自然科学的手法を応用して，本地域における地形発達過程を明らかにし，さらに発掘調査成果との総合的な解析を行なうことにより，本遺跡周辺地域の稲作の消長や縄文時代晩期の稲作の様態および生産性などに関する検討が行なわれなければならないであろう。

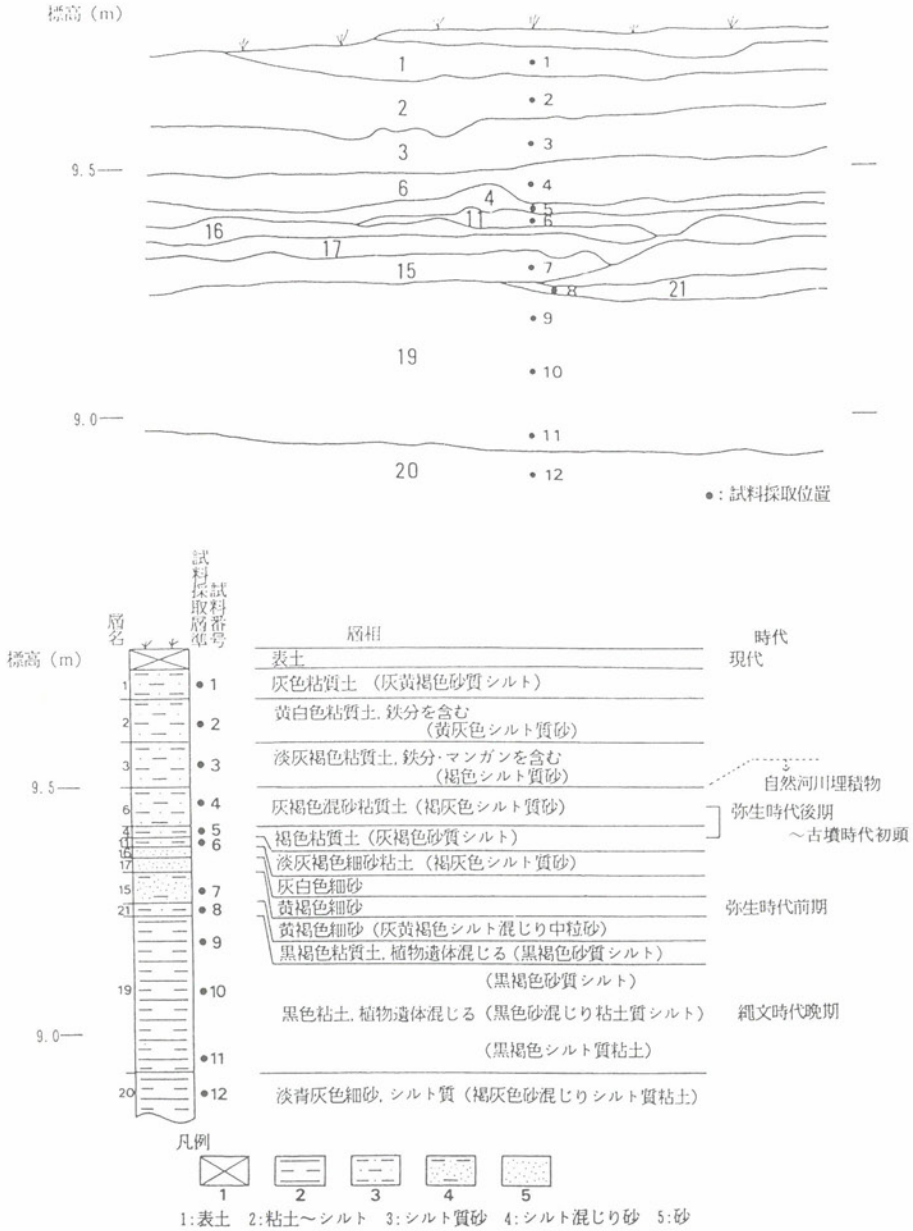


第169図　試料採取位置図





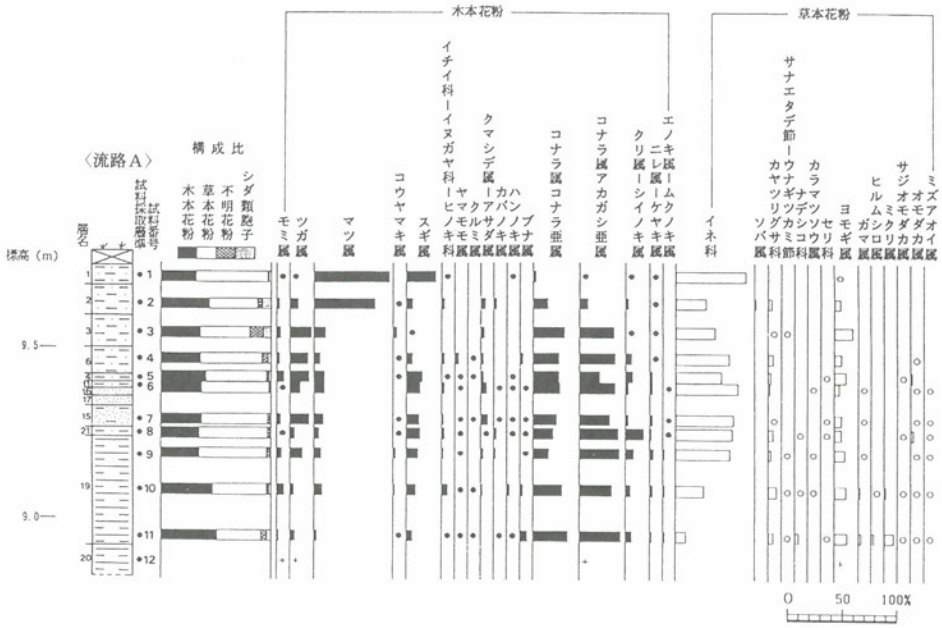
第170図　ＳＲ01流路Ａ南壁土層断面図および試料採取位置模式柱状図



第171図　ＳＲ01流路Ｂ南壁土層断面図および試料採取位置模式柱状図

第104表 花粉分析結果

地点	SR01流路A												SR01流路B					
種類（Taxa） 試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
木本花粉																		
マキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2	-	-	-	-	-	-	-
モミ属	1	2	4	3	20	3	9	2	12	18	3	1	4	12	5	4	10	6
ツガ属	2	8	25	20	51	28	53	12	33	10	10	1	33	46	20	17	14	15
トウヒ属	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属	235	61	13	6	27	30	26	12	18	22	6	-	215	78	20	13	4	11
コウヤマキ属	-	1	4	1	3	-	1	1	5	4	1	-	-	8	3	4	4	3
スギ属	91	6	1	6	43	39	34	35	28	27	13	-	18	28	42	16	17	17
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	2	2	-	2	3	7	4	7	4	16	2	-	1	3	8	12	8	2
ヤナギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤマモモ属	-	-	-	4	2	1	2	3	1	3	2	-	1	-	1	-	1	-
サワグルミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	2	-	1	-	-	-
クルミ属	-	-	-	1	1	-	1	-	-	2	2	-	-	-	3	-	1	1
クマシデ属－アサダ属	-	4	4	3	7	17	18	1	5	4	-	-	13	10	15	2	-	1
カバノキ属	-	2	-	-	-	1	2	6	3	-	1	-	3	11	2	2	-	-
ハンノキ属	3	-	-	-	3	2	2	2	-	8	2	-	4	3	5	6	5	12
ブナ属	-	-	-	2	-	2	3	2	1	5	14	-	1	-	6	3	1	2
コナラ属コナラ亜属	6	14	37	28	70	79	66	55	42	85	78	-	6	21	52	20	39	52
コナラ属アカガシ亜属	2	8	42	39	54	104	86	106	105	95	92	1	27	66	91	55	65	81
クリ属－シイノキ属	2	2	1	6	18	7	5	48	21	14	13	-	-	7	22	20	14	9
ニレ属－ケヤキ属	1	1	1	1	6	8	5	4	8	6	3	-	7	9	6	2	2	2
エノキ属－ムクノキ属	-	-	-	-	-	1	2	3	3	4	3	-	-	-	1	1	1	1
シラキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トチノキ属	-	-	1	-	-	-	-	1	1	1	1	-	-	-	-	1	-	-
ブドウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ハイノキ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トリネコ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
草本花粉																		
ガマ属	-	-	-	-	-	1	1	-	2	10	10	-	-	1	4	-	-	-
ヒルムシロ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	11	-	-	-	-	-	-	-
ミクリ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9	35	-	-	-	-	-	-	-
サジオモダカ属	-	-	-	-	1	-	-	1	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-
オモダカ属	-	-	-	1	10	5	5	15	7	2	1	-	1	10	12	3	4	6
イネ科	670	65	115	158	304	488	443	440	399	169	42	-	379	356	268	91	64	58
カヤツリグサ科	-	6	2	12	15	12	8	31	13	47	16	-	8	4	45	13	19	13
ミズアオイ属	-	-	-	-	-	1	1	2	3	4	1	-	1	1	5	-	1	1
クワ科	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	-	-	1	-	-	-	-	-	6	1	4	-	1	1	2	-	-	2
ソバ属	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
アカザ科	3	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ナデシコ科	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	12	-	-	-	-	-	-	-
カラマツソウ属	-	-	-	-	-	1	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
キンポウゲ科	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	3	-	-	1
アブラナ科	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ワレモコウ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
マメ科	1	-	-	-	-	-	-	-	-	3	2	-	-	-	1	-	-	1
ミソハギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
アリノトウグサ属	-	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
セリ科	-	-	-	-	1	-	5	4	-	-	3	-	-	1	4	1	-	5
オオバコ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ゴキヅル属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	8	13	52	20	72	35	50	55	71	69	49	1	15	30	51	25	22	72
オナモミ属	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-
他のキク亜科	2	5	1	1	1	-	2	-	7	8	1	-	1	-	-	3	5	2
タンポポ亜科	1	9	1	-	3	-	-	1	-	4	-	-	1	1	1	-	-	2
不明花粉	16	11	45	18	16	12	15	14	26	17	26	-	15	16	12	16	7	12
シダ類胞子																		
ミズワラビ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シダ類胞子	25	21	26	11	16	5	12	5	12	17	19	3	9	12	12	45	80	14
合計																		
木本花粉	345	111	134	123	308	329	320	301	294	326	248	3	335	302	304	179	186	215
草本花粉	691	107	172	192	409	544	516	552	513	333	189	1	410	405	400	136	115	164
不明花粉	16	11	45	18	16	12	15	14	26	17	26	0	15	16	12	16	7	12
シダ類胞子	25	21	26	12	16	5	12	5	12	17	19	3	9	12	12	45	80	14
総花粉・胞子	1077	250	377	345	749	890	863	872	845	693	482	7	769	735	728	376	388	405



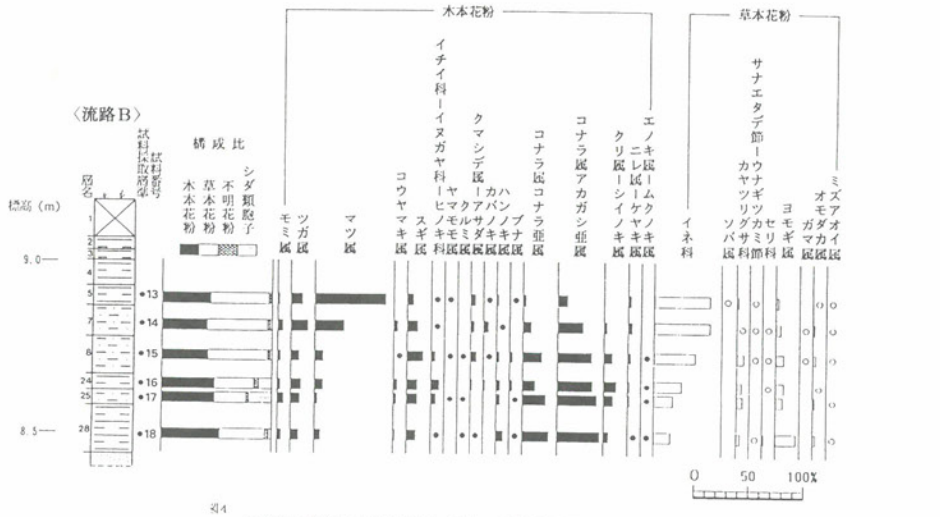


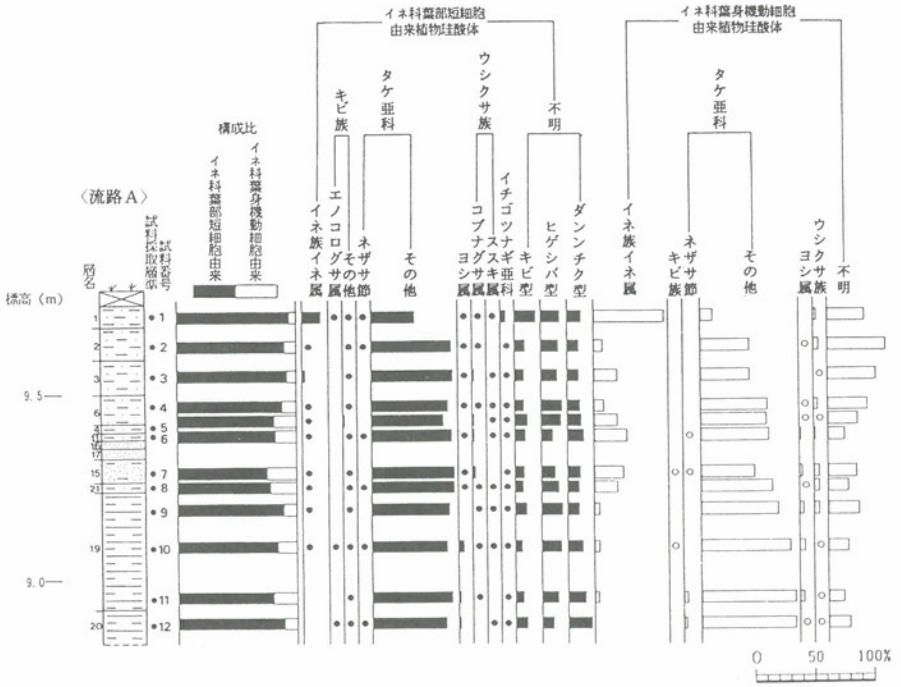
図4

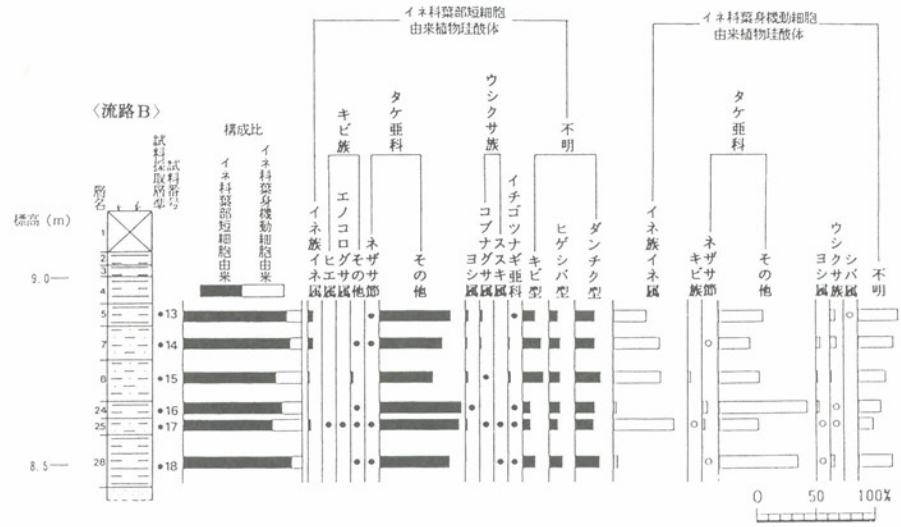
出現率は、木本花粉は木本花粉総数、草本・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で産出した。なお、● ○ は1％未満、+は木本花粉100個体未満の試料において出現した種類（Taxa）を示す。

第172図　ＳＲ01流路Ａおよび流路Ｂ花粉化石の産状

第105表 植物珪酸体分析結果

地点	SR01流路A												SR01流路B					
種類（Taxa）　試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
イネ科葉部短細胞珪酸体																		
イネ族イネ属	262	5	19	6	2	1	1	2	1	3	-	-	29	43	6	-	6	-
キビ族ヒエ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
キビ族エノコログサ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	1	-
キビ族（その他）	4	1	3	8	5	4	3	1	3	2	1	1	-	6	12	5	2	8
タケ亜科ネザサ節	4	2	-	-	-	2	-	1	-	1	-	1	1	1	-	-	1	3
タケ亜科（その他）	598	641	799	549	265	429	309	316	562	436	310	526	455	495	252	404	252	632
ヨシ属	12	1	10	4	-	5	4	4	-	25	5	10	12	11	13	4	4	-
ウシクサ族コブナグサ属	16	7	13	8	6	7	8	4	4	1	1	-	13	12	5	-	3	-
ウシクサ族ススキ属	2	-	2	1	1	1	-	1	1	2	-	1	-	-	-	-	2	1
イチゴツナギ亜科（その他）	71	4	3	3	4	4	4	3	3	1	2	3	6	12	10	1	1	2
不明キビ型	281	77	81	58	43	55	33	26	80	38	26	78	77	142	99	36	23	106
不明ヒゲシバ型	259	135	159	145	73	58	49	66	149	113	62	75	53	85	50	52	26	121
不明ダンチク型	181	91	107	89	51	85	45	40	80	84	64	165	127	152	121	95	58	221
イネ科葉身機動細胞珪酸体																		
イネ族イネ属	60	8	21	10	21	39	36	25	5	5	3	-	30	42	61	2	64	3
キビ族	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	3	-	1	-
タケ亜科ネザサ節	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	4	2	-	1	-	5	3	1
タケ亜科（その他）	10	43	43	66	59	82	69	77	72	101	90	86	41	29	54	93	42	71
ヨシ属	-	1	-	1	1	2	3	1	3	6	3	1	-	3	2	2	1	1
ウシクサ族	2	4	1	3	1	2	7	5	4	1	1	1	4	6	2	1	1	3
シバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
不明	32	51	43	39	27	20	37	22	29	23	15	20	35	31	35	23	15	29
合計																		
イネ科葉部短細胞珪酸体	1691	964	1196	871	450	651	456	464	883	707	471	861	773	959	568	597	380	1094
イネ科葉身機動細胞珪酸体	104	107	108	119	109	146	156	130	113	137	116	110	111	112	157	126	127	108
検出個数	1795	1071	1304	990	559	797	612	594	996	844	587	971	884	1071	725	723	507	1202
組織片																		
イネ属類珪酸体	6	1	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
イネ属短細胞列	3	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-





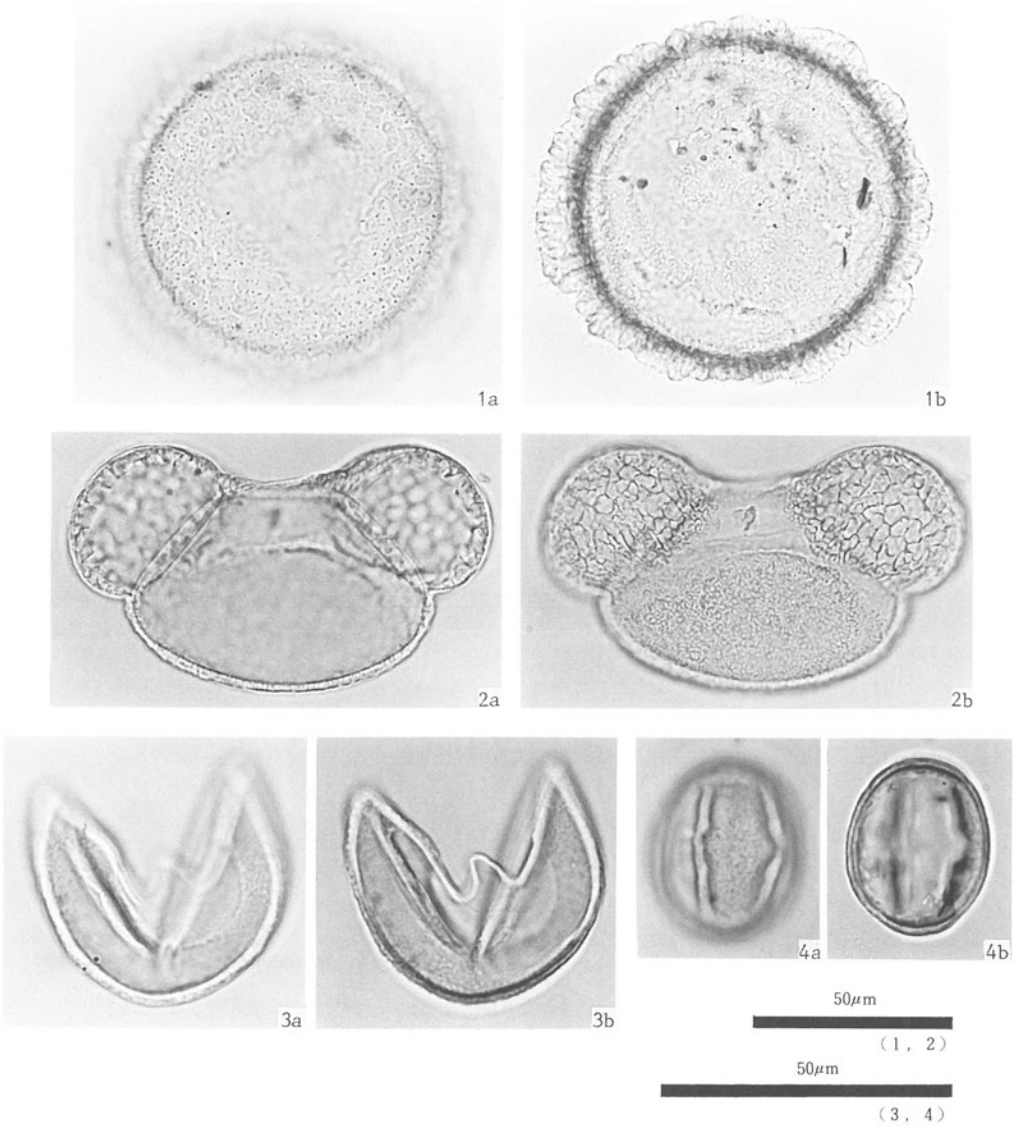
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体はイネ科葉部短細胞珪酸体総数、イネ科葉身機動細胞珪酸体はイネ科葉身機動細胞珪酸体総数をそれぞれ基数として百分率で算出した。なお、●○は1％未満、+はイネ科葉部短細胞珪酸体総数が200個体未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体総数が100個体未満の試料において出現した種類を示す。

第173図　ＳＲ01流路Ａおよび流路Ｂ植物珪酸体組成の層位分布

第106表 種実同定結果

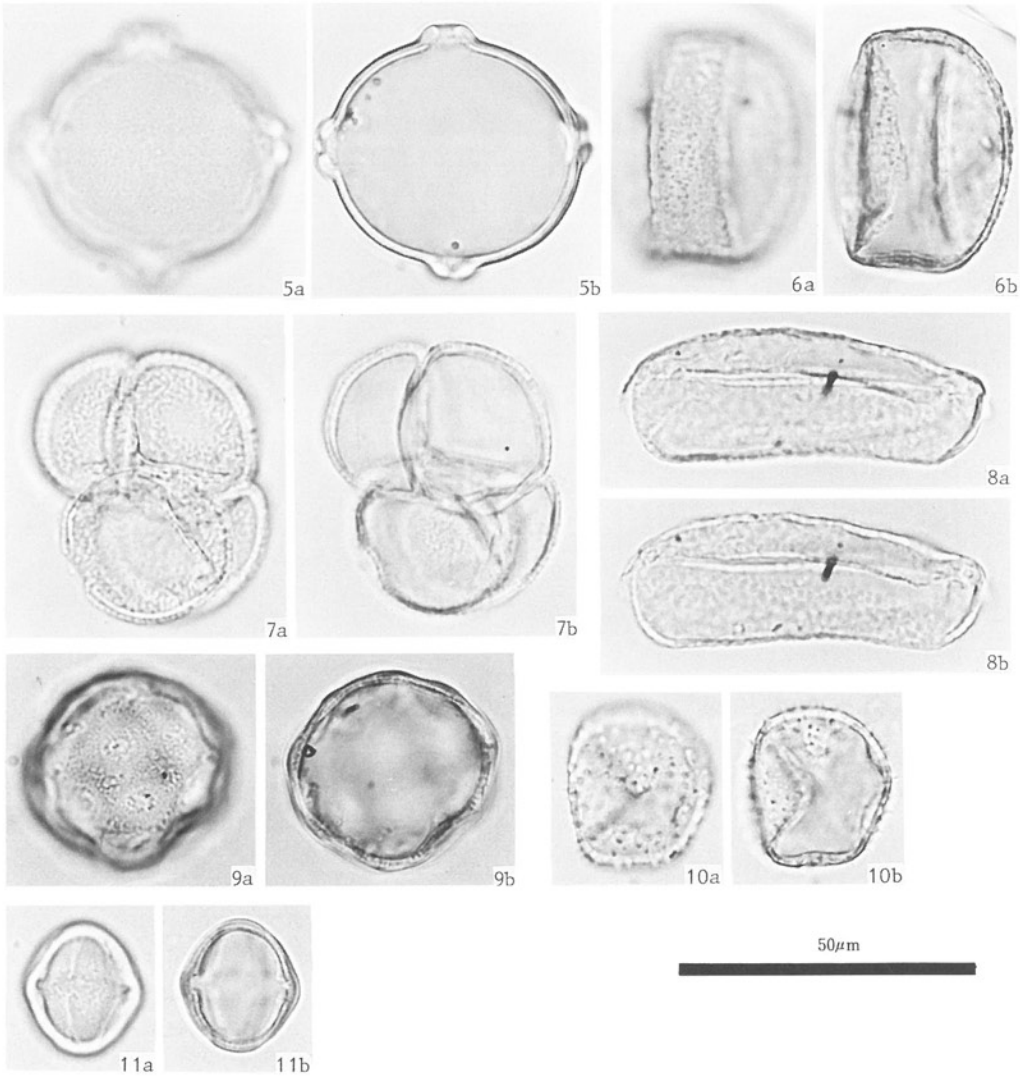
試料番号			3	4	5	6	8	9	10	11	14	15	16	17	31	32	39	44	合計
種類名	部位	状態																	
木本植物																			
コナラ属	堅果	完形				2				1	1		1					1	6
アカガシ亜属	堅果	完形												1			1		2
ムクノキ	核	破片														1			1
トチノキ	種子	破片	1	1	1		1	1				1							6
ブドウ属	種子	破片														1			1
草本植物																			
ヒルムシロ属	種子	完形														65			65
		破片													2	5			7
ヘラオモダカ	果実	完形														18			18
イネ	穎	破片														1			1
ヒエ属	穎果	完形														1			1
	穎	完形														1			1
スゲ属A	果実	完形													2	11			13
		破片														2			2
スゲ属B	果実	完形													1	1			2
		破片														2			2
スゲ属C	果実	完形														14			14
		破片														6			6
ホタルイ属A	果実	完形													3	11			14
		破片													4	1			5
ホタルイ属B	果実	完形														3			3
ホタルイ属C	果実	完形														7			7
		破片														1			1
ホタルイ属	果実	完形													1				1
		破片													6	3			9
カナムグラ	種子	破片														1			1
ギシギシ属	果実	完形													2				2
		破片													1				1
ミゾソバ	果実	破片													2	2			4
タデ属A	果実	完形														1			1
		破片														1			1
タデ属B	果実	完形														3			3
タデ属C	果実	完形														1			1
		破片														3			3
タデ属D	果実	完形														1			1
タデ科	果実	破片													5	1			6
カラマツソウ属	果実	完形														16			16
キンポウゲ科	果実	完形													4				4
		破片													1				1
キケマン属	種子	破片													2				2
オトギリソウ属	種子	完形														1			1
イヌコウジュ属	果実	破片													4	3			7
メハジキ	果実	完形													2				2
ウリ科	種子	破片														1			1
キク科A	果実	完形														1			1
キク科近似種	果実	完形														1			1
不明									1						1	12			14
合計			1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	43	204	1	1	262

第174図　花粉化石の顕微鏡写真①



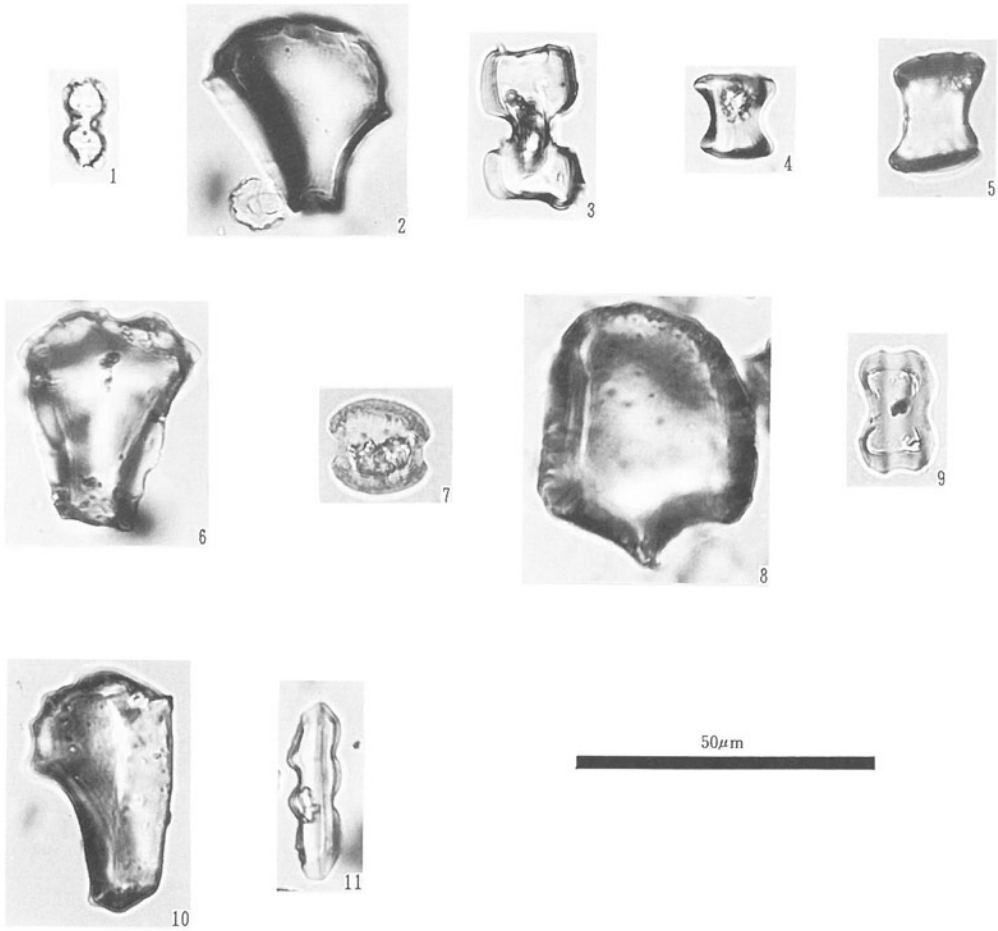
1. ツガ属（E１地区：試料番号15）　2. マツ属（E１地区：試料番号15）
3. スギ属（E１地区：試料番号15）　4. コナラ属アカガシ亜属（E１地区：試料番号15）

第175図　花粉化石の顕微鏡写真②



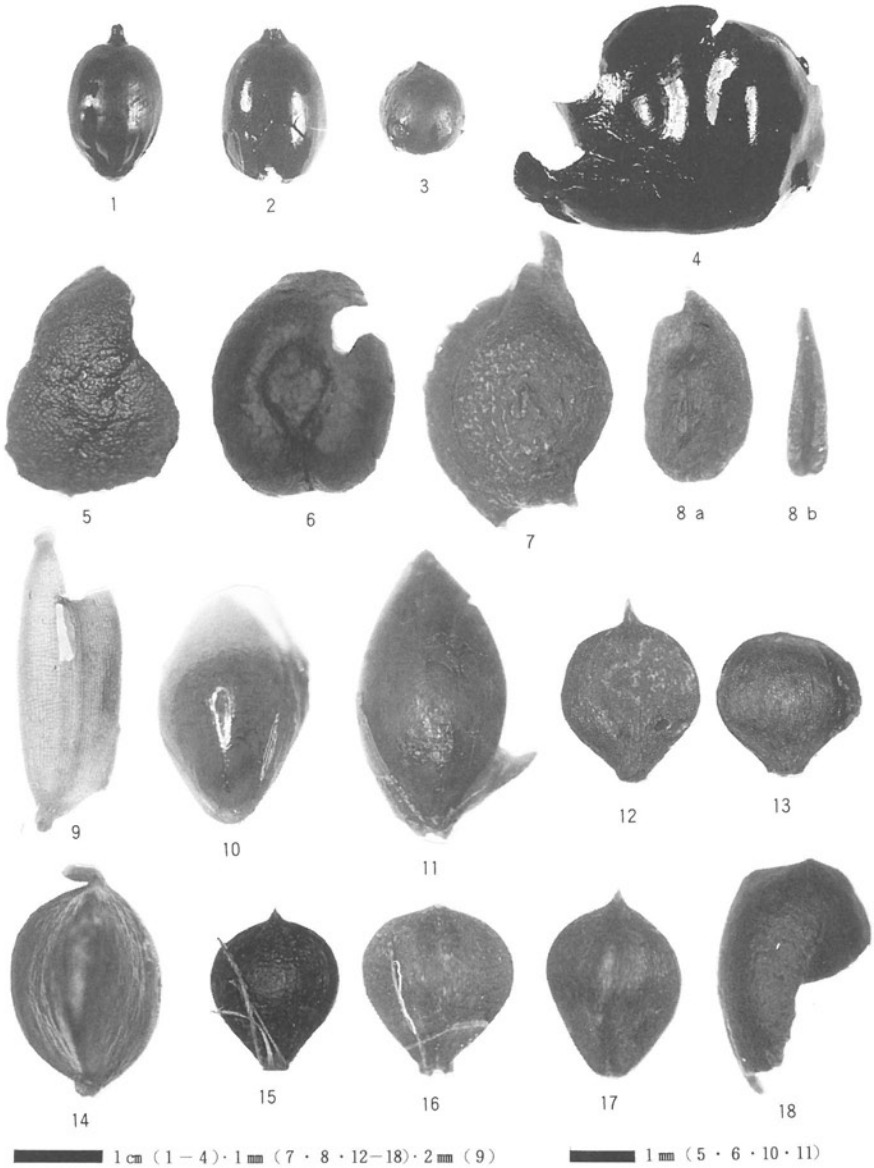
5. クマシデ属－アサダ属（Ｅ１地区：試料番号15）
6. コナラ属コナラ亜属（Ｅ１地区：試料番号15）
7. ガマ属（Ｅ１地区：試料番号15）
8. ミズアオイ属（Ｅ１地区：試料番号15）
9. サジオモダカ属（Ｅ１地区：試料番号15）
10. オモダカ属（Ｅ１地区：試料番号15）
11. ワレモコウ属（Ｅ１地区：試料番号15）

第176図　植物珪酸体の顕微鏡写真



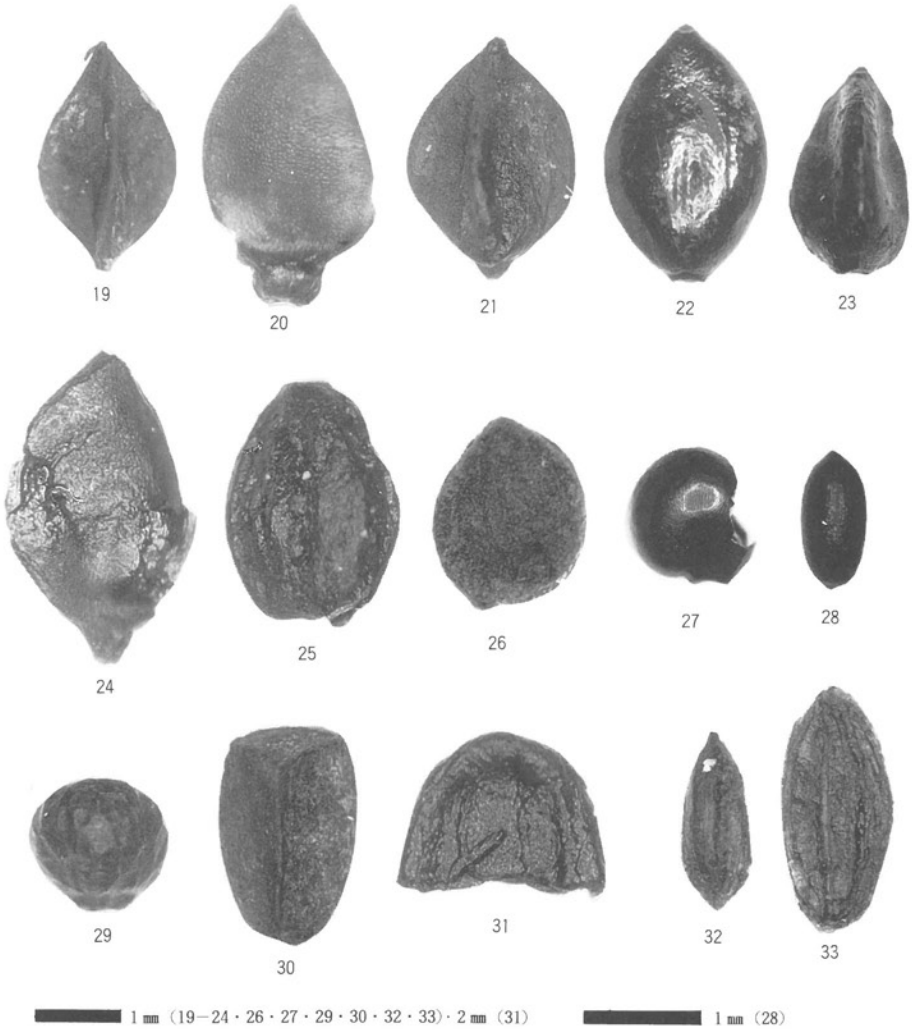
1. イネ属：短細胞珪酸体由来（Ｅ１地区：試料番号17）
2. イネ属：機動細胞珪酸体由来（Ｄ３地区：試料番号１）
3. キビ属：短細胞珪酸体由来（Ｅ１地区：試料番号17）
4. ネザサ節：短細胞珪酸体由来（Ｅ１地区：試料番号17）
5. タケ亜科：短細胞珪酸体由来（Ｄ３地区：試料番号６）
6. タケ亜科：機動細胞珪酸体由来（Ｄ３地区：試料番号３）
7. ヨシ属：短細胞珪酸体由来（Ｄ３地区：試料番号10）
8. ヨシ属：機動細胞珪酸体由来（Ｅ１地区：試料番号16）
9. コブナグサ属：短細胞珪酸体由来（Ｄ３地区：試料番号３）
10. ウシクサ属：機動細胞珪酸体由来（Ｄ３地区：試料番号５）
11. イチゴツナギ亜科：短細胞珪酸体由来（Ｅ１地区：試料番号16）

第177図　種実化石①



1. アカガシ亜属：堅果（D３地区：試料番号17）
2. アカガシ亜属：堅果（D３地区：試料番号39）
3. コナラ属：堅果（D３地区：試料番号11）
4. トチノキ：種子（D３地区：試料番号８）
5. ムクノキ：核（D３地区：試料番号32）
6. ブドウ属：種子（D３地区：試料番号32）
7. ヒルムシロ：種子（D３地区：試料番号32）
8. ヘラオモダカ：果実（D３地区：試料番号32）
9. イネ：穎（D３地区：試料番号32）
10. イヌビエ属：穎（D３地区：試料番号32）
11. イヌビエ属：穎果（D３地区：試料番号32）
12. スゲ属A：果実（D３地区：試料番号32）
13. スゲ属B：果実（D３地区：試料番号32）
14. スゲ属C：果実（D３地区：試料番号32）
15. ホタルイ属A：果実（D３地区：試料番号31）
16. ホタルイ属B：果実（D３地区：試料番号32）
17. ホタルイ属C：果実（D３地区：試料番号32）
18. カナムグラ：種子（D３地区：試料番号32）

第178図　種実化石②



19.　ギシギシ属：果実（Ｄ３地区：試料番号31）
20.　ミゾソバ：果実（Ｄ３地区：試料番号32）
21.　タデ属Ａ：果実（Ｄ３地区：試料番号32）
22.　タデ属Ｂ：果実（Ｄ３地区：試料番号32）
23.　タデ属Ｃ：果実（Ｄ３地区：試料番号32）
24.　タデ属Ｄ：果実（Ｄ３地区：試料番号32）
25.　カラマツソウ属：果実（Ｄ３地区：試料番号32）
26.　キンポウゲ科：果実（Ｄ３地区：試料番号32）
27.　キケマン属：種子（Ｄ３地区：試料番号31）
28.　オトギリソウ属：種子（Ｄ３地区：試料番号32）
29.　イヌコウジュ属：果実（Ｄ３地区：試料番号31）
30.　メハジキ：果実（Ｄ３地区：試料番号31）
31.　ウリ科：種子（Ｄ３地区：試料番号32）
32.　キク科Ａ：果実（Ｄ３地区：試料番号32）
33.　キク科近似種：果実（Ｄ３地区：試料番号32）

第３節　凸帯文土器付着の赤色顔料物質の微量化学分析

武庫川女子大学薬学部
安田博幸・森　眞由美

林・坊城遺跡の自然河川の流路（ＳＲ01流路Ａ）から縄文時代晩期の凸帯文土器が出土した。この土器群の中には，赤色顔料の塗布されていた痕跡をとどめるものが見られる。これらは壺と浅鉢である。今回，それらの赤色顔料について，化学分析による鑑定を依頼されたので，筆者らの常法[1]とするろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による微量化学分析を行ない，所見を得たので報告する。

試料の外観および分析用試料の採取

試料１　「林・坊城Ｄ３地区　ＳＲ01流路Ａ　下層（黒色粘土）」と記載のある土器片より，鋼針を用いて剝離・採取した赤色顔料物質0.1mgを分析試料とする。

試料２　「林・坊城Ｄ３地区　ＳＲ01流路Ａ　下層（黒色粘土）」と記載のある土器片より，鋼針を用いて剝離・採取した赤色顔料物質0.1mgを分析試料とする。

試料検液の作製

上記の分析用試料のそれぞれをガラス尖形管に移し，濃硝酸１滴と濃塩酸３滴を加え，加温し，酸可溶性成分を溶解させたのち，適当量の蒸留水を加えて遠心分離器にかけ，酸不溶性成分から分離した上澄液を加熱濃縮して，ろ紙クロマトグラフ用の試料検液とする。試料検液の番号は，試料番号にそれぞれ対応させる。

ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による呈色反応からの赤色顔料成分の確認

東洋ろ紙№51B（２cm×40cm）を使用し，ブタノール硝塩酸を展開溶媒として，試料検液と対照の鉄イオン（Fe^{3+}）と水銀イオン（Hg^{2+}）の標準液を同条件下で展開した。

展開の終わったろ紙を風乾してから縦に二分し，その一方は検出試薬として１％ジフェニルカルバジドのエタノール溶液を噴霧してからアンモニア蒸気に曝し，もう一方は検出試薬として0.05％ジチゾンのクロロホルム溶液を噴霧して，それらの際に，ろ紙上に発現するそれぞれの呈色スポットの位置（Rf値で表現する）と色調を検した。

上記試料検液ならびに対照イオンの標準液について得られたろ紙上のスポットのRf値と色調は，下記の表107，表108のとおりである。

(1) ジフェニルカルバジド・アンモニアによる検出：（Hg^{2+}は紫色，Fe^{3+}は紫褐色のスポットとして検出される。）

第107表 ジフェニルカルバジドによる呈色スポットのＲｆ値と色調

試　料	Rf値（色調）
試料検液１	0.13（紫褐色）
試料検液２	0.13（紫褐色）
Fe^{3+}標準液	0.14（紫褐色）
Hg^{2+}標準液	0.90（紫　色）

(2) ジチゾンによる検出：（Hg^{2+}は橙色スポットとして検出され，Fe^{3+}は反応陰性のため呈色せず。）

第108表 ジチゾンによる呈色スポットのＲｆ値と色調

試　料	Rf値（色調）
試料検液１	呈色スポット発現せず
試料検液２	呈色スポット発現せず
Fe^{3+}標準液	呈色スポット発現せず
Hg^{2+}標準液	0.90（橙　色）

判定

上記の結果のように，林・坊城遺跡出土の土器片表面に付着していた赤色顔料物質は，水銀朱（HgS）ではなく，ベンガラ系成分（Fe_2O_3）であると判定する。

1991年７月分析

註１　安田博幸（1986）「古代赤色顔料と漆喰の材料化学」
「斎藤　忠編集　日本考古学論集１　考古学の基本的諸問題」吉川弘文館P.389～407
安田博幸（1984）［古代赤色顔料と漆喰の材質ならび技法の伝流に関する二，三の考察」
「橿原考古学研究所論集　第７」吉川弘文館P.449～471